
真剣で私に恋しなさい！～暦の五月～

ナマクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！〜暦の五月〜

【Nコード】

N4163N

【作者名】

ナマクラ

【あらすじ】

これは、とある厄介なサガを持った少年、皐月薫の物語。かけがえのない仲間達と共に学生生活を過ごしながら、時々護衛業をこなす彼は生まれ持ったサガをどうにかする事ができるのか？……・とか言いつつも楽しく過ごす物語である。

この物語は、オリ主が百代に次いで強いです。マジ恋なのに男が強いとか嫌だ！という方は読まないほうがいいかもしれませんのでご注意ください。

プロローグ

私の名前は皐月智晴。

今は親から継いだ道場を経営しながら護衛業をしている。

かつて私の家、皐月家は、“曆”という戦闘一族の一つだったそう
だ。

はるか昔は相当有名だったようだが、今では知る者は極少数だろう。
その名残から、皐月家は、親戚、つまりは他の曆一族と共に“曆”
という組織で護衛業をしていた。

そして皐月家の子供であった私も家にある道場でその曆流武術を習
った。

幸い才能は十分に有った様で、腕は悪くなかった。そして時々遊び
に来る親戚の神無月尚孝と仲良くなり、互いに意識しながら、成果
を上げていった。

時流れ、私は高校卒業を目の前にして親から進路を提示される。

“曆”に入るか、普通に生きるか。

親としては普通に生きてほしいそうだが、“曆”に入るなら止めは
しないと聞いた。

私は悩んだ末に“曆”に入る事にした。

その後、高校を卒業した私は道場を継ぎ、さらに“曆”の一員とし

て護衛業を行い、しばらくして一人の女性を嫁にもらった。妻の美紗は、私が学生の時に川神を訪れた際に知り合った川神院出身の武芸者で、性格は少々男勝りな所もあるが容姿端麗で家事全般できるという素晴らしい女性だ。そして彼女との間に娘もできた。

尚孝とは、少しではあるものの、私達と交流があった。

彼もすでに結婚して、私達よりも先に薫という子供も生まれていた。

そして、雨の降っていたあの日、娘が生まれて9年程経った頃に一本の電話がきた。

普段は妻や母に任せているのだが、その時は珍しく私が電話を取った。

「もしもし、臯月ですが？」

『……………智晴か？……………俺だ』

「……………尚孝？珍しいな。電話してくるなんて。どうしたんだ？」

『俺は、とんでもない事をしてしまったのかもしれない』

「どうかしたのか？」

『もしかしたらお前に俺のシワ寄せが来るかもしれない。すまない……………』

「何を言ってるんだ？」

『こんな酷い親友で悪かったな。元気だな……………』

「ちょっと、どついつことだ！？尚孝！？尚孝！？」

そういつて彼からの電話が切れた。私はその場で呆然と立ち尽くしていた。嫌な予感がした。

それから数日後、“暦”に所属している親戚から連絡が来た。

『尚孝が先日、亡くなつたらしい』

それを聞いた時、シヨックだった。

おそらくあの電話の後、彼は死んだのだ。

状況からして他殺。遺体の様子からして怨恨によるものではないか、というものだ。犯人は不明。未だ手がかりすら掴めていないらしい。

あの電話から予想できたかもしれないのに。彼を助ける事ができたかもしれないのに！

『アイツの嫁は行方がわからないらしいが、一人息子は一命を取り留めたそうだ。ただ、彼もやはりシヨックが大きかったようで自失状態に陥っているらしい』

「……………そう、ですか……………」

彼の息子の薫が生きていたのは良かったが、それでも心の傷は大きいだろう。

『ま、このままだと精神病院か孤児院行きだろうな』

そして、私は決心した。

「あの、彼の入院先を教えてくださいませんか？」

『? いいけどどうして?』

「私が引き取ります」

薫を家で引き取ることに。これには家族皆が賛成した。

彼を助けられなかった事を少しでも償いたい、などと綺麗事は言わない。私はきつと、ただ親友の残したものを放っておけなかっただけなのだから。

それから一月程して、私達夫婦は怪我が治ったという薫を引き取りにいった。

病院の先生によると、薫は、事件が原因だと思われる異常なほどの対人恐怖症とおそらく彼に習っていただろう武術が組み合わさって、近付いてくる者は誰だろうと攻撃するようになり、しかも強いので

手が付けられない状態になっているらしい。そして時々備品を壊したりもするらしい。

そういえば、彼が昔、薫は天才だと言っていたのを思い出す。あれは親バカではなかったのかもしれない。

そうして、薫の病室に行くと、案の定威嚇された。事情を説明しても警戒を解いてくれない。

しばらくすると、警戒を解いてくれたが、彼の目から生気が感じられなかった。

先程から威嚇していた時も、何とというか、感情が感じられなかった。とりあえずもう一度事情を説明すると、彼はただ頷き、私達についてきた。

その様子を見て、私は彼を機械のように感じてしまった。これは思っていた以上にまずい状態だ。

そうして、家に着いた後も大変だった。

初対面なら誰だろうと威嚇する。

ある程度近付いたら攻撃を加える。

ある程度信用されても距離がある。

これは馴れとかそういう次元ではない。娘の姿は何回も威嚇されていた。

美沙に尋ねると手を焼いているそうだ。どうしようかと悩んでいる

と妻がこういった。

「もういっそ、一旦川神院にでも預けてみる？あそこなら薫が暴れても大丈夫だろうし」

川神院。かつて妻が所属し、武道を学んだ場所。

しかし、引き取るといった身で無責任ではないだろうか？

「無責任だろうが何だろうが、薫がちゃんと元気になればいいのよ。それが不満だったら、鉄じいにアドバイスを聞くだけでも随分違うと思うわよ？鉄じいは伊達に年齢ってるわけじゃないだろうからね」

妻の言う通りだった。例え無責任と言われようと、薫が立ち直ってくればそれでいいのだ。

ちなみに鉄じいとは川神院総代・川神鉄心さんのことだ。……鉄心さんをこのように呼ぶのは彼女だけだと思う。

「わかったよ。とりあえず頼んでみよう」

「そうと決まれば善は急げっていうし、すぐにも行くわよー！」

「え？あの、アポイントとか取らないと……」

「大丈夫、鉄じいならすぐに会ってくれるって」

そう言って、私達は薫を連れて、川神院に向かった。

行動力ある妻だった。

.....

今、川神院の道場にて鉄心さんと面会をしている。
最初、門前払いされるかと思ったが、美沙が

「ボケ始めの、ブルセラ鉄じいー」

と大声で叫んだら鉄心さんが一瞬で来た。相変わらず凄まじい……

「美沙！お主、久しぶりに戻ってきていきなりそれか！いい度胸し
とるのお」

「ちょっと急ぎの用事でね。頼み事があるんだけど、いいわね？と
りあえず道場で話すわ」

「はあ……この門下生でワシをそんな扱いするのはお前と釈迦堂
くらいじゃぞ」

「気にしない気にしない。それじゃ、トモ、薫、着いてきて」

妻は自由奔放だった。

そして鉄心さんに事情を説明した。

「成程のお……………どれ、試してみるかの」

そう言つて、鉄心さんが薫に近付く。

薫が威嚇を始めるが、鉄心さんはさらに近付く。

「あ、鉄じい、言つての忘れてたけど……………」

「何じゃ？」

鉄心さんが薫の攻撃範囲に足を踏み入れた。

「薫は強いよ」

次の瞬間、薫は間合いを一気に詰め、鉄心さんに襲い掛かった。

「！ほお……………」

それを驚きながらも鉄心さんは軽く避ける。

鉄心さんが軽く避けれた、といつても普通は避ける事も困難な速さで、この齡で出来る動きではない。

「鉄じい、軽くなら反撃してもいいよ」

「そうか、ほい、と」

妻が許可を出すと、鉄心さんが軽く（とはいつても薫には避けられ

ないくらい速く、結構な威力はあるが）蹴りを放つ。

すると、ガンッ、という固い音が鳴って、薫は吹っ飛んでいく。

しかし薫は腕で防いでおり、空中で体勢を立て直して見事に着地する。怪我はないようだ。

今、薫は気を腕に集中して纏わせることで、鉄心さんの蹴りを完全に防いだのだ。

再び鉄心さんに向かっていく。

「ちなみに反撃されると薫は敵とみなすから」

「何じゃと？美沙、お主謀りおったな。気絶でもさせんと話を続けることもできないではないか」

悪い笑みを浮かべる妻とこうして話している間も薫は攻め続けているが、鉄心さんには一発も当たっていない。

「先程の業わざを使われたらなかなか気絶せんしのお。ならここは……」

そついうと鉄心さんは薫から少し離れた。

それを追う薫だが、

「顕現の参・毘沙門天！」

鉄心さんの造り出した毘沙門天に見事に潰された。

今のをくらった薫は流石に気絶しているようだ。

「ちよつ！？鉄じい、やりすぎでしょ！？」

予想外の攻撃に美沙は抗議する。

「あんなモノ使えるのなら、このくらいせんと気絶せんわい。下手に手加減して長引かせるより一気に終わらせる方がいいじゃろ」

納得しそうな言い訳をしながら鉄心さんは『してやったり』というような顔をする。絶対さっきのちよつとした美沙の謀はかりごとに対するお返しである。それに薫を使わなくても……

「さて、話の続きじゃが、確かにここで預かった方がいいかもしれん。極度の対人恐怖症じゃが、ここでなら人に馴れさせ、かつ、攻撃を仕掛けても大丈夫な者しかおらんからのお」

なら、そうするべきなのだろう。

正直悔しいが、仕方がない。私の意地より薫の未来だ。

「じゃが、義理とはいえ親なのだから、たまには顔を見せに来ることじゃ。わかっておるな？」

「それは当然です」

「当たり前でしょ」

私達は薫を川神院に預けた場合、最低でも月に一、二回は会いに来るつもりだったし。

「よし、では皐月薫を川神院に体験入門という形で預かせてもらおう。あまり公言すべき事情ではないしのお。師範代の連中には教えておくが、それはいいかの？」

「それは仕方ないでしょう。では薫をよろしくお願いします」

「頼むわね、鉄じい」

その後、薫は川神院で数年もの時間を過ごし、感情を取り戻していき、かけがえのない友達もできたようだ。

そしてそれからさらに数年後

皐月家

周りが自然で囲まれた昔ながらの武家屋敷であり、それとは別に道場も建っている。

その廊下を、一人の人が歩いていく。その人は女性のよ様な顔つきに中性的な体格で、格好は黒い学ランと手首にリストバンド、そして紺色の長髪を布で後ろに纏めている。

この皐月家の長男、皐月薫である。

この容姿によって、時々凛々しい女性と見られる事が多いが、れっきとした男である。

薫はある一室の前に来ると足を止めて中に声をかける。

「失礼します」

「どうぞ」

薫が入った部屋には一人の男がいた。彼の名は皐月智晴。皐月家の家長であり薫の父である。すでに40代だが見た目は20代に見える若い人だ。ちなみに彼の妻の皐月美沙も40代だが、見た目は20代前半といっても疑われないほどの美貌を持っている。……なんだこの夫婦は。

「さて薫、今日あなたをここに呼んだ用件は唯一つです。……学校に行ってみませんか？」

「結構です」

今のこの会話を聞いて、薫が不登校児のように思われるかもしれないが、そうではない。

今、薫は中学三年で成績優秀、運動神経抜群、顔も良く、性格も悪くない。女子からは人気があり、男子からもそこまで妬まれていない（一部男子からは変な目で見られてはいるが）。よく遅刻・欠席をする以外は絵に描いたような優等生だった。

そんな彼が出した進路希望は

『家業を継ぐ』

であった。

薫はすでに“暦”の一員として護衛業に足を踏み入れており、今まで学校の合間などに依頼をこなしてきた。

それを護衛の仕事一つに集中しようとしているのだ。

「薫の進路だから口出しするつもりはなかったのですが、これはどうかと思いましたので」

「私は自分の夢の為に、中途半端な姿勢ではいけないと思ったのです」

「それは別に学業を続けてからでもいいのではないですか？」

「それは時間が限られているから……！」

「そう、時間は限られています。仕事に打ち込むのはいつでもできるでしょう。しかし学生時代というのは一度しかありません。私も美沙と出会ったのは学生の時代ですし、あなたにとって大事なモノ

を見つけられるかもしれません」

「……………」

「まあ、薫が何を言っても川神学園の入学は変わらないのですが……」

「……………は？今、何と……………？」

「実はですね、美沙が勝手にあなたの入学手続きを済ませてしまったのですよ。余りの速さに私も驚きました」

「ちょ……！あの！私は試験など受けてはいないのですが……………？」

「推薦で通ったそうです。薫の日々の努力が結んだ結果ですね」

「な……………！！こんな結果を得るために努力してきたわけではないのに……………！というか過去の成績だけで合格できるものなのですか！？」

「知りません。で、詳しくはこちらの書類に書いていますので良く読んでおいてください。あと、文句があるのなら美沙に直接言うてくださいね。それじゃあ」

「あ……………ちょっ……………！」

そういつて、父・智晴は逃げるように部屋から出て行ってしまった。

.....

父上に言われた通り、文句は母にいう事にした。

「どういふ事ですか、母上!？」

「んー?何が？」

「勝手に学校に入学させて……」

「別にいいと思うけどな、アタシは。学生だからこそ出来ることもあるわけだし」

「別に私は……」

「それに学歴っていうのも大切よ?薫はバカな大学生より頭はいいけど、このままだと学歴だけみたら中卒。人によってはそれで見下すヤツもいるわ。大学はともかく高校ぐらいは卒業しときなさい」

「.....」

「それにアンタが行くのは川神学園だし、昔の仲間にも会えるよ」

昔の仲間、今でも連絡は取り合っているものの年に数回しか会えない、それでも掛け替えの無い仲間。風間ファミリーだ。

おそらくキャップたちも川神学園に行くだろう。最近は会っていないが、久しぶりに会うのもいいかもしれない。仲間がいるのなら同じ学校に通うのも有りかもしれない。

「……分かりました。文句を言うのはやめにします」

「うんうん、物分りのいい子は好きだよ」

そういつて母上は笑った。

「あ、そうそう。下宿先なんだけど、最初は麗子がやってる島津寮にしようかと思っただけ、男子部屋はもう全部埋まってるみたいなのよ」

ちなみに麗子とは風間ファミリーの島津岳人の母親で母上の友人だ。

「だから鉄じいに頼んで川神院に下宿させてもらおうかと……」

「え？普通に他の寮でいいのでは？」

「薫、アンタに友達ができないとは言わない。けど、出来るまでの間、アンタはどうやって登校するつもり？」

「それは、普通に歩いて……」

「無理ね。アンタ極度の方向音痴じゃない」

グサッ

「中学までの通学路だって、一年間迷い続けてたじゃない。詳しく言つと、奏が入学して一緒に登校するようになるまで」

グサッ

「前の北海道での仕事の後、道に迷ってロシアまで行ったのは誰だったかな？」

グサツ

「何か言う事ある？」

「ありません……」

全てが事実なだけに言い返せない……！

「それと、向こうでは全力の戦闘は基本禁止ね」

「え！？何故ですか!？」

「修行をするなってわけじゃないわ。ただ仕事以外の時ぐらい闘いから離れなさい。まあ自己防衛とか譲れないものの為ならいいけど」

「しかし……」

「いい、薰？アンタは今焦りすぎてる。焦ってたら“アレ”も再発しやすいでしょ？ていうかアンタ身体弱いじゃない。まあ弱いつていっても普段生活する分とかには影響ないだろうけどさ。まあ一度落ち着いてよく考えなさい」

結局そう押し切られてしまった。

そうして、私は川神学園に入学し、再び風間ファミリーの一員とな

った。

そして、物語は幕を上げる

プロローグ（後書き）

ということプロローグ終わりです。

薫の外見のイメージは暁の護衛の南条薫です。

ちなみに父はH×Hのウイングさん、母はアスラクラインの柱谷由璃子ですね。わからなかったらググってください。

次は一気に原作に飛びます。

というか書いてしまった。まだもう一つの二次創作の更新が出来ていないのに……。まあ両方とも遅れすぎないように頑張ればいいか。

興味があるなら『とある中立の貸借稼業』も読んでもらえればうれしいです。

ちなみに“暦”は、実力はあるが、規模は小さく知名度も低い組織です。まあ廃退した一族の親類が集まった組織だし仕方ないっちゃ仕方ないですよね。

何故それをここで言うのかというと、あまり“暦”という組織が出てこないだろうという事からです。あくまで予想ですが。

始まり（前書き）

続けて投下。

始まり

4月20日月曜

皐月薫

最初に会ったのは、小学4年の時だった。

「コイツは薫だ。コイツもいつしよに遊ぶぞ」

「……………」

新しく風間ファミリーに入った姉さんが馴染んできた頃に、姉さんが連れてきたヤツだ。

話を聞くと、「最近川神院に預けられた子どもで、喧嘩売って来たから買って喧嘩したら懐かれた」だそうだ。姉さん相手に喧嘩売るって……………」

最初に見たとき、女みたいだなと思った。

「はは、お前女みたいだなあ。ちゃんとついてんのか？」

ガクトがそれだからかったりしていた。

「……………」

でも何の反応も示さなかった。ただ……………」

「ねえ……………」

「ぐるる……」

「ひう！？えええーん……」

姉さん以外がある程度近付くと威嚇してきた。ワン子が何回も威嚇されて涙目になっていた。

それから姉さんは何度も薫を連れてきていた。俺は最初、狂犬みたいなヤツだと思った。

でもしばらくしたら、印象が変わった。

「あの……この前は怖がらせてごめん」

「え？う、うん。別にいいよ」

「じゃあ、俺たちといっしょに遊ぼうぜ！」

「うん」

だんだん威嚇をしなくなっていくって、俺達の言葉にちゃんと反応するようになってきた。

「ははは、お前ホントは女じゃねえの？」

「だれが女だ！」

「ぐへえー！」

ガクトが女扱いしたら吹っ飛ばされてた。実は薫は強かった。

感情が表に出始めたというのか、今まで顔に出さなかった喜怒哀楽が目に見えてわかるようになっていった。

「あれ？薫？こんな所でどうしたんだ？」

「散歩に出たら……道に……迷った」

「川神院すぐそこだぞ」

気紛れで、よく散歩に出ていたが、異様に方向音痴で、何度も迷子になっていた。

ただ身体が弱いらしく、無理しすぎないようにと医者に言われていたらしい。

そんな素振りを見たことなかったけど。

こうして、すこし真面目な薫は、風間ファミリーに加入した。

それが、俺達と薫との出会い

「ん……」

目が覚める。すると目の前には水色の髪の美少女の顔があった。

「おはよ、大和。朝だよ。そして好き」

「おはよう京。お友達で」

「ちっ、おいしい」

「おしくない」

いつものように美少女、京こと椎名京に起こされて目覚める。

京は小学生の時家庭の事情で今では考えられないほどガリガリで虐められていた。あまりにもその虐めが陰湿だったので策を用いて助けたら……

「I love you?」

惚れられた

「友達で」

「ちっ」

京は大事な仲間だし、中途半端な気持ちで付き合っただけで傷つけるのは避けたい。

「朝ごはんできてるって」

「ん」

「私が朝ごはんという説も……」

「ないだろ。とりあえず着替えるから出て行ってくれ」

「視姦する」

「出て行け」

いつも通りの朝だった。

朝食を食べ終えて、島津寮から出て行く。いつものように寮の前で京が待っていた。

「私も今来たところ」

「デートの待ち合わせっぽくしなくてもいいから。そういえばキャップはどこ行ったんだらうな」

「さあ？いつものことだしいいんじゃない？そういえば大和、朝、寝言言ってたけど夢でも見てたの？」

「ああ、薫と出会った頃の夢を」

「……………！！寝取……られ……た……！！！！」

「いや、夢に見ただけだし、薫男だし」

「夢精寝取られされた……新ジャンルの開拓で地雷小説の予感……」
「そんなジャンル開拓してないし、そもそも夢精なんかしてないから」

そんなやり取りをしていると、寮の隣に住んでいるガクトこと島津岳人が来た。

「よう、大和に京。今日も俺様イケてるだろ？」

そういつてポーズをとり、鍛え上げられた筋肉を見せ付けるガクト。

「イケてる？どこが？」

「ガクトの頭が心配だ。将来大丈夫かな？」

「この幼馴染たち容赦ねー！ー！」

そんな感じで学校に向かい、川原でジャンプを持ったモロこと師岡卓也と合流する。

「やー」

「おはよー」

「おはよう」

「おっすー」

「モロ、顔がにやけすぎ」

「今週のトラブルンは結構Hでよかつたんだよ」

「マジか！？パンツ何回出たんだ？俺様にも見せる！」

「朝の通学路でそんな会話するなんて、少し自重しなよ。……で、大和は私のパンツ気になる？」

「お前も自重しろ」

しばらく歩いていくと前方に数十人の集団が集まっていた。集団の視線の先には川岸で黒いロングヘヤーの女子が一人、十数人の不良（武器装備済）に囲まれていた。

「おい大和お前行けよ。弟だろーが」

「何でだよ。薫に任せればいいだろ。っーか弟じゃなくて弟分なんだけど」

「でも薰いないみたいだよ？」

「えー？じゃ、行った方がいいのか？」

「あ、もう遅いや」

視線を川原に戻すと不良達が全員倒れていて、囲まれていた女子、姉さんこと川神百代が悠然と立っていた。観客は歓声を上げ、姉さんを称賛する。

「相変わらずすげーな、おい。目を離れた一瞬で不良全員倒すとか……」

「それに慣れてる川神^{ウチ}学園の生徒も少しおかしい気がするけどね」

その後、姉さんは娘漁りをしてから俺たちと合流した。

「見るお前等、あの子完全に脈有りだったぞ」

「美人の女好きってもつたいなさすぎるぜ」

姉さんは女子にもモテモテだった。

その後、多馬大橋、通称変態の橋にて

「みんなー、おはよー!」

タイヤを引きながら走ってきた赤いポニーテールの女の子、ワン子こと川神一子と合流した。

「川辺で大勢倒れてたけどあれお姉様が?」

「ああ、つまらない相手だったな」

「さすがお姉様!アタシもいつかお姉様みたいになってやるわ!強さはもちろんスタイルも!」

「いや、無理だろ」

「何おう!アタシだっていつか『おいおい、お前の身体はくだもの

「屋かよ。胸にメロンが二つも付いてるぜ」とか言われてやるんだから！」

「ははははは」

「それナイスギャグ」

「お、京に受けたぞ。ははは」

爆笑だった。

「笑うなよう……真剣マツなよう……」

「よしよしワン子。私は応援してるぞ」

姉さんがワン子を抱き締める。

「はふう……お姉様」

姉さんの胸の中で落ち着いたワン子が、ふとキャップがないことに気付く。

「あれ？キャップはどうしたのよ？」

「土曜に出てったきり帰って来てない」

「なんだ。いつもの事が」

「っーか歩いてる時ぐらいタイヤ引ききずるのをやめろよ」

「一緒に登校してる僕達まで変に見られるからね」

「そういえば姉さん、そういえば薫は？」

「薫なら朝散歩に行ったつきり行方不明だ。道にでも迷ってるんじゃないか？」

「いつもの事だね」

「今日はどこまでいったのかな？」

いつも通りの朝だった。

昼休み

「うおおお開幕ダッシュュ！！」

「ガクトてめえ！フライングしてんじゃねえ！！」

学食組がもうダッシュュで戦場（食堂）に向かった。

「大和、今日は教室なんだ」

「今日はクマちゃんに朝パンを俺の分も買ってきてもらったんだ」

「ベーカリー・ラクステイのパンはパイみたいなサクサクとした感じがいいんだよね」

クマちゃんこと熊谷満は常に食べ物を持っているだけあって食通なのだ。ちなみに姉さんはクマーンと呼ぶ。

教室に残る組はそれぞれ昼休みを楽しんでいた。

『次のニュースです。昨日の午後七時ごろ埼玉県深谷市で無銭飲食した男が……』

川神学園では昼にニュースを見るならテレビをつけてもいいのだ。

「何か面白いニュースやらないかしら」

ワン子はそう言って二杯目の牛乳を飲み始めた。

『男を取り押さえたお手柄の男子学生は、神奈川県川崎市在住の風間翔一さんで、限定メニューを先に注文されたので本気で追いかけた……』

「ぶはっ!?!」

「妙技ムーンウォーク」

ワン子が吹き出した牛乳を京が華麗に避けた。

「え!?!今の風間くんじゃない!?!」

「それ以外考えられないよね」

ニュースに出てきた風間翔一とは、風間ファミリーと呼ばれている仲良しグループのリーダーでそのメンバーの俺達はキャップと呼ん

でいる。赤いバンダナがトレードマークで、風のように自由な男だ。

「うわ、凄いじゃん、さすが風間くん！」

「犯人逮捕に貢献なんてクラスの誇りですね！」

クラス中（主に女子）が一気に賑わった。

「だから何だっつてんだ。いちいち騒ぎやがって。どっちかつつと痛い部類じゃねーかよ」

男子の多くはなんだか面白くなさそうだった。

『続いてのニュースです。先程、神奈川県七浜市で起きた銀行強盗ですが、その場に居合わせた学生によって鎮圧されました』

「へえ、風間くん以外にもそんなスゴイ学生がいるんだ。イケメンかな？」

「ちっこれだからスイーツは……ソイツが男かどうかもわからないのに気にする所が顔とは……」

「というか先程ってことはソイツ学校行ってないだろ」

『目撃者によると、その学生は目にも留まらぬ速さで拳銃を持った銀行強盗数人を素手で鎮圧、その後立ち去ったそうです。その学生は川神学園の男子用の制服を着ていたようですが、顔立ちや髪の長さ、そして男装をした女性と一緒にいたことから女性ではという声もあり、詳しい情報を』

「……目にも留まらぬ速さで動けて、女っばい男の川神学園の学生
」？」

「それってもしかして……」

「……薫？」

「しかし思い浮かばない」

俺たち風間ファミリーの面々はその学生が誰なのか分かった。ただ
クラスの連中は気付いてないのでクラスの話はキャップのままだ。

「七浜まで迷うとかどうなの？」

「まだマシなほうだろ」

「そうだね」

「アタシが聞いた話だと、道に迷って北海道からアラスカまで行っ
たことあるらしいわよ」

「流石にそれはないでしょ！！」

「ところで、アラスカってどこの国？アメリカの右？」

やはりあまりいつもと変わらなかった。

放課後

ガクトとモロとの三人で帰る。

「あー、俺様早く女欲しいぜ」

「あんまりがつつくのも良くないと思うよ」

「そういうモロだって彼女欲しくないわけじゃねーだろ？」

「そりゃ、まあ、二次元より現実の女子と付き合えればなあ、とは思うけど」

「大和はどうだ？彼女欲しいだろ？」

「そうだなー。まあ相手によるが、出来るなら欲しいな」

そんな話をしながら歩いていく。

そして寮の前でガクトとモロの二人と別れる。

「あーそろそろ夏に向けて金貯めないとなー」

そうばやきながら寮の玄関を上がる。

「何を考えてるんだい？大和」

「いやバイトしないとなーとか」

俺に話しかけてきたこの1m程の大きさの卵型ロボはクッキーとい

って世界の九鬼財閥が最先端の技術で造ったお仕えロボである。何故そんなものがここにあるかというのを説明するのは色々面倒なので今はやめておこう。

「ああそういえば大和。マイスターたちが……」

ちなみにマイスターというのはキャップのことだ。

「知ってる。ニュース見た。ったく、キャップといい薫といい、今頃どこで何してんだろうな」

そついいながら自室のドアを開ける。

「あ、お帰り大和」

「邪魔しているぞ」

すでにキャップと薫は寮にいた。てか俺の部屋でキャップはネギラーメンを、薫は肉まんを食ってた。

「いやー警察から解放されるのおそくなっちまってさ。ほいこれお土産」

キャップからネギせんべいを渡された。

「警察とかは関わると面倒だから関わらない方がいいぞ。これ、お土産。稲村屋の」

薫から肉まんを渡された。すでに冷めてた。

「二人ともテレビでニュースになってたぞ。キャップは名前出てたし、薫は出てなかったけど銀行強盗一人で倒して警察来る前に姿眩ますってどうよ？下手すれば傷害罪だぞ？」

「厳密に言つと違う。あれは私を川神まで送ってくれた親切な眼帯のお姉さんが半分やったから、私が全部やつつけたわけではない」
あまり変わらなかった。

「で、キャップはなんで埼玉に？」

「いやあ、バイト先の人が埼玉のネギラーメンとかの話しててよ。それ聞いてたら食いたくなってさ。土日使つて行った訳よ」

「警察の人に彩の国について熱く語られたそうだ」

何故に？

「つといけね、バイトの時間だ。あ、ラーメンの残り、お前にやるよ。それじゃな！」

キャップがバイトで出て行った。

「それじゃ、私もそろそろ帰ろうかな」

「待て薫！お前一人じゃ確実に迷う！」

「そ、そんなことは……ない……といいなあ」

迷うって自覚はあるんだな。

「とうとうここで、クッキー！」

「どうしたんだい、大和？」

「薫を送ってやってくれ」

「わかったよ。任された」

「ごほつごほつ、いつもすまないな、クッキー」

「それは言わない約束だよ」

薫がクッキーに連れられていった。……薫のやつ、本当に身体が弱いんだろつか？今の咳だって芝居だしな！。

「あーあ。もう部屋がラーメンの匂いで大変な事に……」

しかしこれは食欲をそそるものがあるな。

「って汁しか残ってねー！ー！」

今いないキャップへの苦言は後にして、とりあえず冷めた肉まんを温めるとしよつ。

始まり（後書き）

百代「さーて、お約束の終了メッセージ、予告っぽく言ってみるぞ」

薫「次回、真剣で私に恋しなさい！〜暦の五月〜、『反逆のクッキー』」

クッキー「クッキー第二形態が命じる。．．．．．全力で見逃せ！！」

モロ「反逆して最初のセリフがそれなの！？使う場面間違ってるよね！」

キャップ「わかったぜ。全力で見逃す」

モロ「え！？キャップ何言ってるの！？」

キャップ「モロ！キャップたる俺の命令が聞けないのか！」

クッキー「ふはははは、さらばだ！！」

いねまでの日常（前書き）

今回は薫視点で。

..... 薫じゃなくて薫です。間違えないように。

これまでの日常

4月21日火曜

「ん……」

朝の5時、いつも通りに目が覚める。

「とりあえず起きるか……」

まだ若干眠いが我慢して起きる。

まずは顔を洗って、ジャージに着替えて軽く身体を動かす前に玄関に行く、ワン子が出て行くところだった。いつもの朝の新聞配達
のバイト兼走り込みだ。

「ワン子、気をつけていくんだぞ」

「もう薰ったら心配性よねー。もちろん身体は大事だから気をつけるわよ。それじゃ行って来るわねー！勇往邁進ー！！」

走り込みに行くワン子を見送ってから、鍛錬を始める。

それを終わると厨房に入る。

「おはようございます」

「ああ、おはようございます。臯月殿は今日も早いですね」

川神院の料理人さん達に挨拶しながら昼の弁当を作る。川神院の人

も弁当を作ってくれるのだが、まあ趣味のようなものだ。
弁当を作り終わると、朝食までの間、修行僧の人達と一緒に座禅を
始め、それが終わると運ばれてきた朝食を頂く。
食べ終えて部屋に戻り制服に着替えて鞆を持ち、モモちゃんの部屋
の前に行って声をかける。

「モモちゃん、そろそろ行くところか？」

「ちょっと待ってくれー。今着替え中だー」

「わかった」

「覗くかー？」

「……覗かない。覗いたら酷い事が起こりそうだ」

「チツ、ばれたか」

こんな感じで朝は過ぎていく。

今日は通学路をモモちゃんと二人歩いていく。

「はい、弁当。こっちが川神院のでこっちが私のだ」

そういつて二つの弁当をモモちゃんに渡す。

「いつも悪いなー」

「気にしなくてもいいさ。モモちゃんの為だけじゃなくてモモちゃんにお金貸す人の為にもやっっているわけだから」

モモちゃんはいつも早弁をする。そうになると昼は学食で食べる事になるのだが、モモちゃんは万年金欠でよく知り合いに借金をしている。一応月末には返すのだが、それでまた金がなくなって金を借りる……というサイクルが生まれてしまう。

だからそれを少しでも緩和しようと思モモちゃんの方も弁当を作っている。一つも二つもそう変わらないわけだし。ただ、そうしてもそのサイクルは続いているが。

「それにしてももったいないなー薫は」

「何が？」

「料理できて、掃除もできて、性格もよくて、なにより美人なのに、男って………女だったら私が嫁に貰ってもいいくらいだぞ」

モモちゃんはそういいながら後ろから私にもたれかかってきた。

「モモちゃんは女だろう」

「周りに魅力のある男がいないからなー（カプッ）」

「~~~~~!?!?」

耳を甘噛みされた。

そうこうしていると川辺で集まっているキャップ達を発見する。

「おっ、皆揃ってるな。どした道端で？」

「そっちこそどうしたのさ？ 薰顔赤いけど大丈夫？」

「……問題、ない」

「照れてるだけだもんなー」

「はて、これもともとの話だったか？」

「ワン子、ガクトに馬鹿って言い返すチャンスだぞ」

「ぐまぐま」

ワン子は何かを食べていた。

「……皆揃っちゃったし登校すっか」

「うん。サボって鬼小島に目を付けられることないよ」

「四月で担任としても張り切ってるしな」

「よし行くぞ」

「待て大和、号令はキャップたる俺の役目だ」

そういつてキャップは一息つく。

「さあ行くぜ、狂乱麗舞、風間ファミリー出陣だ！ワン子、先陣を切れ！泣く子がいれば黙らせる！」

「任せなさい！アンタらアタシに続けー！」

仲間が8人揃って、川辺を歩き始める。

周りから見たらこの集団はどう見えるのだろうか？

単なる仲良しグループ？いやそれにしては一味どころの違いじゃないのだろうな……。

多馬大橋の近くまで来たときにふと橋の上に、そこには違和感のある誰かいるのが見えた。

「ん？橋の所に誰かいるぞ。こつちを見ているな」

「男か。……武道やってるやつだな」

「お姉様目当てじゃないかしら？」

「また挑戦者…か」

「面白い。昨日のヤツらじゃつまらなかったんだ」

「昨日何かあったのか？」

「そついえば薰いなかったね」

モロから昨日の説明を受けている間に拳法家とモモチちゃんのやり取りはある程度終わったようだ。

「時と場所は」

「今ここで。すぐに戦おう」

モモちゃんが戦うということでギャラリーが集まり始めた。こういうことに慣れている川神学園の生徒は少しおかしいと思うのは私だけなのだろうか？

「今回は正式な死合いだ。観客は遠ざけてくれ」

「はいはい。今日は見世物じゃないよー」

「見物はなし。学校行った行った。」

ワン子とガクトが見物人を散らす。それでもまだ集まってくる。

「キャップ前に出てくれ」

「ん？」

「あ、風間くん！昨日テレビ見たよ！」

キャップが一步前に出ると観客が群がっていった。テレビって何かあったのか？

河原でモモちゃんと拳法家が対峙する。

「雲野十三、参る！！きえええいつ！！」

拳法家が怪鳥のような声を出して構えをとる。しかしそこから動かない。いや動けないのだろう。対峙して初めて分かる実力の差。あまりの隙のなさに戸惑っているのだろう。

そしてモモちゃんが右ストレートを放った。

「はあっ！！」

「ばぎゅらっ！！」

拳法家は避ける事も防ぐ事もできずにその攻撃を喰らい、10メートルほど吹っ飛んでいった。

相手が弱いのではない。モモちゃんが圧倒的に強すぎるのだ。

モモちゃんは相手に一礼した後、携帯で電話をかける

「川神院じたくに連絡しておいた。十分ほどで回収されるだろ」

正式な試合なら相手に礼を尽くし、外道相手なら更なる外道をもつて相手をする。それがモモちゃんのスタイルだ。

「流石お姉様！いつかこの強さに並んで見せるわ！」

「相変わらず瞬殺だったね。もはや敵なしじゃないの？」

「……そうだな」

「……？」

戦闘前と違ってモモちゃんは浮かない顔をしている。まあ理由は知っているが。

「さあ、ガッコ行くぞお前等、今日はラジオもあるからな」

八人で変態の橋こと多馬大橋を渡る。

周囲を見てみる。

ワン子はさっきの試合で興奮したのかシャドーをしながら進んでいく。

後方30メートル辺りでは一人の女子学生が手に何かを持ってそれに話しかけている。

その付近で、幼女を連れ去ろうとするロリコンのおじさんがいた。

それを撃退するハゲのロリコンもいた。

今日も変態の橋はおかしな人がたくさんいた。

H R

問題児を集めたとされている2・F。しかしHR前からはものすごく静かである。

その理由は担任である小島梅子先生にあった。美人だが厳格で厳しく今の時代に珍しく鞭で叩くという体罰を行っているが、何故かそれを問題にされない教師だ。

「さて。面白いニュースを諸君に伝えよう。今週の金曜に川神市の姉妹都市であるドイツのリューベックから転校生が来ることになっ

た。」

ざわっ……！！

「静粛に！」

そついいながら、小島先生は鞭で床をパシーンツと音をたてて叩く。

「質問は挙手して行うように」

「女子ですか？美人ですか？胸とがありますか？」

「男子ですか？イケメンとかお金持ちですか？」

「男はロコツよねー」

「女子だって同じようなもんじゃねーかよ」

「どちらなのでしょうが、小島先生？」

見た目小学生のクラス委員長、甘粕真与が改めて尋ねる。

「ひ・み・つ、なんてな」

ざわっ……！！

「では金曜を楽しみにな。HRを終わりとする」

休み時間

「まったくあの先生は時々謎の冗談を言うから怖いぜ」

「表情変わらないから余計にねー」

「おいおい。時代は転入生の話題だろ！」

「こつこのつてギャルゲーだと美人だよー」

「すつげえボインの姉ちゃんだったらどうするよ！俺そーだったら絶対女にして揉みまくるぜ！」

ヨンパチこと福本育郎が大声で女子が引くようなことを言う。ちなみにヨンパチという渾名は彼が四十八手全て覚えていることから付けられたあだ名で、本人もその渾名を誇りに思っている。

「何あのチビ、マジキモ……」

「さかつてるサルとか動物園帰って欲しいんですけどー。アタイが身の危険感じるんですけどー」

女子からの人気は壊滅的でないが。

「死んでもお前にだけはやらねーよ。お前こそ山に帰れヤマンバが！」

「アタイのことヤマンバとかいうヤツ、マスカラで目玉染め上げたんですけどー！」

こんなやり取りも2・Fでは日常茶飯事だ。

それにしても、ドイツから来る転入生か……まさか

「どうした薰？」

私の様子を見て大和が話しかけてきた。

「ドイツから来る転入生なんだが、そのリューベックにいる知り合いの娘さんが丁度私たちと同年代だったはずなんだ」

「もしかしてその娘さんが来るってことか？」

「いや……流石にそれはないと思う。そんなことがあるのは小説の中だけだろう」

「……性別不明の転入生か。面白くなりそうだな。……！！いいこと思いついた」

キャップが何か良からぬことを思いついた気がする。まあ放置しておこう。

昼休み

「風間くんはなんでそのバンドナに拘ってるの？」

今時の女子高生という言葉がよく似合う小笠原千花がキャップに声をかける。

「俺のトレードマークだからな。それ以上の理由はない」

「へーそうなんだ。アタシ、もうちょい派手目な髪にしたいけどそれだと思いつきり校則に引っかかるしなー。流石に風間くんみたいに内申捨ててまではね」

川神学園ではこういった外見の校則違反は内申を捨てれば許可される。キャップは内申を捨ててバンダナ装着を許可されているのだ。

「俺冒険家になりたいから内申関係ないし」

「へー冒険家とかカッコいいなー」

「風間君は相変わらずもてるなー」

「本人は自覚してないというか素だけどね」

「冒険家ねえ……夢のある職業だとは思うが、俺が同じ事言ったら『現実見るよキモい』とか言われるんだぜ。ったく調子いいんだよリアル女は！」

現実を捨てて完全に二次元に走っている本格派オタク、大串スグルがそうぼやく。

「まあ確かにそうというのは人を見て判断するな」

スピーカーから音楽が流れ始める。そうして始まるラジオを聴くことにする。火曜日にはモモちゃんが出ている校内ラジオ『LOVEかわかみ』があるのでいつも聞いている。

……………
いつもながらにぐだぐだなラジオだった。モモちゃんのキャラが面白いからお願いしているらしい。確かに面白いが……

放課後

「僕は今日はスグルとかとゲーセン寄ってくよ」

「ストV稼働中だ。ザンギユラ使いとして行かねば」

「了解した。俺は今日は遠慮しとくよ」

モロはスグルと帰って行った。

「薫はどうするんだ？」

「私はクマちゃんと一緒に寄り道してから帰る」

「関西風でおいしって噂のお好み焼き屋ができたんだよね」

クマちゃんとは仲がいい方だ。私が作った料理を試食してもらった
り、よくキャップもいれた三人で食べ歩きに出かけたりもしている。

「お好み焼きとは珍しい」

「大和もどうだ？」

「うーん、俺は遠慮しとく。」

「キャップも誘おうと思ったんだが……どこ行ったか知らないか？」

「え？そういえば……」

いつの間にかキャップがいなくなっていた。

「仕方ない。今日は二人で行くとしようか」

「そうだね。風間君とはまた今度行けばいいしね」

「じゃ俺は帰るよ。またな」

そう言つて大和と教室で別れてクマちゃんの案内でとりあえずそのお好み焼き屋に向かった。

店に到着して、とりあえずお好み焼きを頼んで食べた。

「うーん、確かにおいしいけど……」

「そこまで、というわけではないな」

不味い、というわけでは決してない。確かに美味しい。ただ期待していたほどではなかったただけだ。

「少々期待しすぎたか」

「やっぱりすごくおいしい粉物は関東じゃ少ないのかなあ」

「まあ、中々美味しいし、不満があるというわけではないか」

「そうだね」

まあ美味しかったのできちんと平らげた。

「今度、お好み焼き作ってみようかな。その時はクマちゃん試食を頼むよ」

「わあ、楽しみだなあ」

「こうして日常は過ぎていった。

これまででの日常（後書き）

風間ファミリーでの薫の立ち位置はずばり『オカン』です。

……え？薫は男だって？それでもオカンです。

その感じがうまく出せるようになるか不安ですが……感想待ってます。

百代「さーて、お約束の終了メッセージ、予告っぽくいってみるぞ」

薫「次回、真剣で私に恋しなさい！の暦の五月、京の畏、貞操の危機」

京「十面埋伏の計を発動します」

一子「テソーウ？というか誰の危機？」

薫「言わずもがな」

モロ「大和に決まってるでしょ」

京「このポジション（大和の嫁）は誰にも渡してたまるカツ！」

大和「お友達でお願いします」

ドイツから来た転入生（前書き）

少し時間が飛んで金曜です。

今回は少し長い気がします。内容的に、というか文章が原作のコーピの部分が多いです。流し読みを推奨します。

……もつとすんなりいくと思っただけどなあ

ドイツから来た転入生

4月24日金曜

今日は転入生が来る日だ。キャップの設けた賭けの結果が分かる日である。

転入生が女だつていうことは調べて既に分かっていた。

その上で水曜の朝礼の時に他のクラスに『転入生は男らしい』という噂を流しておいた。

そして狙い通り、その噂に騙されて男に賭けるヤツが多かった。

まあ、正解の女の方に、勘で賭けてきたり、本能と願望に賭けたり、確実な情報を調べて最後にドカツと賭けてきたヤツもいるが、金はそういうヤツと俺達だけが儲かればいいだろう。

「転入生の紹介しようと思うのだが、その前に臯月はどうした？」

「朝、散歩に出てから行方不明だそうです」

薫は迷子で遅刻中だ。

「仕方ない。それでは、お待ちかね。転入生を紹介しよう。では、入りたまえ」

梅先生の呼ぶ声で入ってきたのは、

「ゲーテン・モルゲン」

軍服をきたオジサンだった。

ざわっざわっざわっざわっざわっ！！

教室の中がざわめく。

「皆勘違いしないよう。この方は転入生の保護者だ」

「あ、そーなんだ。びっくりしたなあ。もぐもぐ……」

「こら熊飼！HR中にピザを食うな！」

パシーンと梅先生の鞭がクマちゃんを叩く。

「あ、ごめんなさい。驚いてお腹すいちゃって」

「罰は百叩き。これも日本の伝統ですな」

「あの、ご息女は？」

「ご安心を。時間には正確な娘です。間もなく駆けて参りましょう」

オジサンが指差した先。窓に注目が集まる。

「グラウンドをしてみるがいい」

「……………？げ！？」

「どうした大和、何が見えるんだ？」

「女の子が学校に乗り込んできた」

「なんだそりゃ!？」

「何かあるらしいな。よし、見たい者は見てよし」

皆が窓の方に群がっていく。その視線の先には一人の金髪美少女がいた。

「うん、確かに乗り込んできたねえ……………」

「クリステイアーネ・フリードリヒ!!ドイツ・リユーベックより推参!!この寺子屋で今日より世話になる!!」

「馬で」

そう、馬に乗って。

風にたなびく金髪が美しい。

「おおお金髪さん!可愛くね!?!マジ可愛くね!?!」

「超・当たりなんですけどおおお!!」

乗り込んできた美少女を目にし男子連中は咆哮する。

「だっはっはっは、馬かよ！アイツ面白れえ！」

「ぐっ、女かよ、まずった！賭けに負けた！」

「あっ、俺もボロ負けだ！！でもそんなの帳消しになるくらいレベル高えよ！」

「うわ……これは完全に負けたわ……でも馬って」

「日本では馬は交通の手段だろう」

「や、あの、道路とか見ましたよね？」

「自動車が多かった。だが、テレビでは馬も走っている」

「それ時代劇だと思うんですけど」

「おお、あれはまさか……」

「？うわ！よりによって例外が……」

窓の外で走ってくる人力車を発見。あれは2-Sに在籍している九鬼財閥の御曹司、九鬼英雄とその従者である忍足あずみだ。

「人力車で登校の生徒もいるとは、さすがはサムライの国ですな。ハハハ」

「大和、もしかしてこの親子……」

「ああ、間違いない。『日本を勘違いした外国人』だ」

「む、父様がいらっしやる。あの教室か。行くぞ、浜地鳥（馬の名前）！」

「……馬からは降りて来い」

黒板にクリステイアーネと書かれる

「クリステイアーネだ。あらためてよろしく！」

凜とした声と立ち振る舞いに男達は見惚れていた。

「よし、何か質問があれば挙手していけ」

「はいはい……」

「では島津。品位を持つてな」

「オッスオッス！えっと、くりすていあーね？」

「自分としてはクリスと呼ばれることを希望する」

「クリス。彼氏はいたりすんのかな？」

「そんなものいないに決まっているだろうガッ！！！」

父親の怒号に、教室が静まり返った。

「父様のおっしゃる通りだ」

「そ、そーすか……」

「クリスにちよっかいを出すものは軍が殲滅する」

「GUN？」

「父様は任務に私情を持ち出さない軍人だ」

「今めっさ持ち込んでたでしょうが！」

この人、重度の親バカか。

「父君、そろそろ……」

「そうだな、皆、娘を頼む」

「あの馬も、回収していつてもらいます」

そうしてクリス父は出て行った。

と思ったら戻ってきた。

「クリス、何かあれば戦闘機で駆けつけるからな」

そしてクリス父は娘煩惱っぷりを存分に俺達に見せ付けてから、今度こそ帰っていった。

「おいおい、何か手を出したら殺されかねないぞ」

「くうっ、勿体ないな。超絶可愛いのに」

その効果は男子連中に靦面だった。

男たちがしょぼくれる中、ワン子の目がキラリと光る。

「はい、クリスに質問。何か武道はやっているのかしら？」

「フェンシングを小さい頃よりずっと」

「YES!!梅先生提案!転入生を“歓迎”してあげたいと思います!」

「ふふっ、血気盛んだな川神。だがそれは面白い」

クラス全員がワン子の思惑を理解した。

「クリス。そのポニーテールがお前の腕前を見たいそうだ」

「!! なるほど、新入りの歓迎か」

「川神学園には“決闘”ってシステムがあるの」

決闘とは、川神学園独自のシステムで、互いの同意があれば生徒同士で戦う事を許可されるものである。決闘の内容は各自で決める。喧嘩やスポーツ、舌戦やテストの点数でも構わない。肉体を用いる

ものは職員会での許可が必要だが……

「ワシが許可しよう。学長権限じゃ。ワシが責任を持って立ち会おう」

と、いきなり現れた学長、川神鉄心によって許可された。

「クリス、戦闘で勝負よ！」

「分かった。受けて立つ」

ワン子の決闘がクリスに受理され、教室のテンションが盛り上がる。

「武器は教室に飾ってあるレプリカを使え。許可なく触れるのは禁止だぞ」

ワン子は雑刀を、クリスはレイピアを手に取った。

「決闘はグラウンドで行う。皆も移動しろ」

そういうと、クラスの皆がグラウンドに向かう。

『ただ今から、第一グラウンドで決闘を行います。決闘内容は武器有りの戦闘です。見学希望者は』

他のクラスの連中も決闘を見に来る。クラスの担任が認めれば見に来ることも可能だ。

それにこういう突発的なイベントにも対応してくる商魂高い連中もいる。

「決闘トトカルチヨだ！ワン子 対 クリス、どっちに賭けるよ！」
キャップもその一人だった。

「大和、京、手伝え！」

「一割だぞ」

「一割ダゾ」

「お前ら、キャップの命令には無条件に従えと……」

「誰の許可を得てここで商売してるんだ？シヨバ代を納めてもらおうか」

そこに姉さんが現れた。

「姉さん。それより転入生が上玉だよ」

「それを早く言え。どれどれ……」

姉さんがクリスの方を見る。

「*:.:.。...*..(n) (n) *:.:.。...」
「(訳:上玉キターー!!!)」

「ドイツから来たんだよ」

「ああ、あの金髪撫で撫でしたい」

やはり姉さんはクリスを気に入ったようだ。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う。二人とも前へ出て名乗りを上げるがよい！」

「2年F組、川神一子」

「今日より2年F組、クリスティアーネ・フリードリヒ」

「いざ尋常に、はじめいー！」

「勝負！」

「いつけえー！ー！」

開始の合図と同時に二人は動き始めた。

ワン子が薙刀を鋭く振り回す。

「……ッ！」

ワン子の薙刀の間合いが広く、クリスは自身の間合いを詰めれずにどンドン追い詰められていく。俺には、というか誰の目にもワン子の優勢が見えた。

だが姉さんは違ったようだ。

「ワン子の攻撃が単調すぎる。このままだとマズいな」

「でもクリスは避けるので精一杯なんじゃないの？」

「そろそろ転入生の目が慣れてきた頃だ。仕掛けてくるぞ」

姉さんがそう言ったと同時に、クリスが攻めに転じた。

「やーっ！ー！」

「！！迅い！？」

クリスの凄まじく迅い突きをワン子はなんとかギリギリかわし、二人の距離が一旦開いた。そうして観客は沸いた。

「スツゲーぞ！！いいぞー二人ともー！！」

「今、突いたんだよな？」

「もの凄い突き……ワン子、次懐に入られたら終わりだよ」

「続けて行くぞ。次で仕留める！」

「上等よ！ー！」

ワン子が雑刀をクルクル回し始めた。回転数はどんどん上がっていき、遠心力によってその威力はどんどん上がっていく。

「むっ！」

クリスもそれを見てワン子必勝の構えだと気付いたらしく、足を止める。ただ踏み込めば斬られることは俺でもわかる状況だし当然の判断だろう。

ワン子は薙刀を回転させ、クリスも足を止め、その膠着状態が続く。そして、先に動いたのはやはりワン子だった。

「川神流

」

薙刀を大きく頭上に振り上げるワン子。

誰もがそのまま振り下ろしの攻撃に移ると思われていたその軌跡は

「山崩し！！！」

その予想を裏切り斜めに走り、クリスの脚を狙ってきた。

「！！！！！」

フェンシングでは有効部位は胴だけであり、足への攻撃に慣れていない。誰も避けられないと思ったその攻撃を

「ふ！」

「！？避けっ……！！？」

「はぁぁーっー!!」

「ぐあっー!!」

クリスはかわして、隙のできたワン子の肩に突きを放った。

「それまで！勝者クリス!!」

見守っていたギャラリーからドツと歓声が沸きあがる。

「足りない頭使いすぎなんだよ。もっと本能で闘え」

「うっわ、ありゃ鎖骨イったんじゃね？」

「とか冷静に思ってる場合じゃない。大丈夫かワン子？」

ワン子の元に走る。

「フム骨は大丈夫じゃな。しばらく痕は残るかの」

「それは良かった」

悔しさと痛さで俯いているワン子だが……

「くっ……う……ふ……ふふふ……ふふふふ」

「どうした、“ふ”しか喋れなくなったのか？」

「アンタは黙ってなさい！面白いわねクリス……本気でやってやる

ーじゃない!!」

そういつてリストバンドを外し、地面に放ると、ドスンと音を立てた。

ギヤラリーから『な！あのリストバンド何キロあるんだ！？』とか『今まであんなものつけて戦ってたのかよ！？』という驚きの声上がる。

「さあ。第二ラウンドと行きましょ」

「アホ！もう勝負あったわ！」

ワン子の頭を学長が叩いた。

「イタっ！？じーちゃん何すんだよお」

「初めから全力で行かんお前が悪い！」

「大怪我させるのは悪いと思ったのよ」

「フェンシングにも全身有効な種目がある。ワン子お前これ知らなかったじゃろ？」

「一番メジャーな種類しか知らなかったわ……………てなわけで、負けには仕方のない理由があるの。これで勝ったと思わないことね！」

「む」

「あいつこの期に及んでまだあんな事を……………叱るか？」

「ん、まあ大丈夫でしょ」

「まあそれは置いて……やるわねクリスマスアタシ達はアンタを歓迎するわ」

「……！」

「強かったんだねー！スゴイスゴイ！」

「健闘を称えて拍手ですー。パチパチ」

「骨のある奴だ」

「カツコ良かったぞー！」

「よろしくね」

「こちらこそ、よろしく頼む！」

「ワン子精神的に成長してやがるな」

ワン子の一言でクラス全員がクリスを一員として認めた。確かに成長してるな、ワン子。

「ということ、アンタのあだ名は、えーっと……クリスマスだからクリね」

「く、クリ？」

「やべえ立ったー！」

「股間の反射神経凄すぎだろ！！まあ俺様もなんだがな」

「お巡りさんここに変態が二人もいます。……大和はまさか立たないよね？ふふ」

「お巡りさん、三人です。変態は三人でした」

「栗！ははははこれでいいじゃない」

「クリスだ！……ならばお前は犬だ。自分はお前をそう呼ぶことにする」

「あー！！クラスメイトをイヌ科の哺乳類にしたわね！」

「お前にいたっては自分を植物化していただろう！！」

「ぬぬぬ」

「むむむ」

にらみ合うワン子とクリス

「ワン子成長してなかったな。というかクリスも張り合ってるし……」

「この世の全ての美少女は私へのお供え物」

意味不明な事をいいながら姉さんがクリスの腕を掴んだ。

「っ?」

「来い。お姫様抱っこしてやる」

「な、何をする!」

驚いたクリスが拳で攻撃するが……

「おゝ鋭い攻撃だ。お前強いな」

「な?」

姉さんは軽々と手のひらでそれを受け止めた。

「だが残念ながらまだまだ私には敵わん。ほ…「はいストップ」…
ぐえ!」

クリスを抱きかかえようとした姉さんが襟元を引っ張られた。姉さんに察知されずにそんな事出来るやつっていえば学長と……

「けほっ……何をする薫!」

「嫌がつている相手にそんな事したら駄目だろう」

薫だった。え?いつの間に?

「私は!今、クリスを抱きたいんだ!!金髪を、撫で撫でしたいんだ!」

「だめだビョーキだ」

「この強さ……貴女が川神百代ですか？」

「ピアチエーレ！その通りだ。ワンスの姉でもある」

「それイタリア語……」

「おお……噂は聞き及んでいます。なんでも真剣勝負を繰り返す戦士であると」

「ああ。戦ってみるか？柔道の寝技でっ」

今度は学長が姉さんの頭を後ろからはたいた。

「アホかモモ。ほらほら授業に戻れ」

「ジジイ……気軽に頭を殴るな！（パンチ）」

「くらモモ！学長に殴りかかるなど退学じゃぞ！！（ジャンプ）」

「うるさい！だいたい花の女子学生に小遣いゼロとかおかしいだろ！質素節約ってレベルじゃないぞ！！（ジャンプ）」

今度は 孫 対 祖父 の空中戦が始まってしまった。

「この二人は放置。近付くと竜巻に巻き込まれるぞ」

「それでは皆さん、速やかに教室に帰りましょう」

皆慣れていた。

教室に戻って、ガクトやヨンパチが頂垂れてるのを横目に自分の席に戻る。

「ほら、儲けの一割だ」

「ん。このお金は秘密基地の拡充に当てよう」

「俺、今夜はバイト終わってからいくからな」

「“いつもの”期待してるよ、キャップ」

「任せとけ！というか、薫はいつからいたんだ？」

「ついさっき。だから何があったのかさっぱりなんだが」

「それでも姉さんを止めるとか流石というか」

「まあ相手が知人だったしな」

「？クリスと知り合いなのか？」

「いや、クリスの父親の方だ。軍の中将だろう？」

「父様を知っているのか？」

俺たちが話しているとクリスが自分の父親の話題に食いついてきた。

「まあ、何度か会ったくらいだが。えっと、クリスティアーネだっ

たか」

「クリスマスでいい。えっと……」

「臯月薫という」

「一応、言っておくが男だぞ」

「……………大和、それを言う必要があるのか？」

「念の為だ」

もし女と間違えられたら、薫がキレて大変なことになりかねないからな。

「臯月薫！その名前は父様から聞いているぞ。何でも“誇り高きサムライ”だとか」

「いや、それは言いすぎだ。私はそこまで凄いものじゃない」

「成程、これが日本の“謙遜”というものか」

「あ、いや本当に違うんだが……………そもそも刀は使えるが、そこまで使っているわけではないし……………」

薫はクリスとの会話が弾んでいた。やはり共通の話題があるのは有利なんだなあ。というよりどうやって軍の中將と知り合ったのか気になる。

男連中が羨ましそうに見ていた。

帰りのHR

ケガをしたワンスはもうピンピンしていた。クリスにちょっかいを出せる程に。

そして梅先生が教室に来て、HRが始まる。

「クリスの事だが、彼女の面倒は風間達に任せる」

「え？別にいいすけど」

「?.....なんで?」

「クリスは島津寮に入るからだ」

「ああ、なるほど、了解」

「あっさり了解してくれるなあ」

「では、これで帰りのHRを終わる」

放課後

「ちょっといいだろうか?」

キャップと薫と話していたらクリスが話しかけてきた。

「おっ。どうした?」

「部屋が隣という椎名殿に案内を頼もうと思ったのだが、部活があるということで行ってしまった」

逃げたな京。まあしょうがないか。

「あー、そりゃゴメン。アイツ根暗だけどいいヤツだからさ」

「だがキャップはこれからバイトだろう？私は島津寮ではないし」

「薫はそれ以前の問題だろ」

「ぐっ……」

「？」

クリスが不思議そうな顔をしている。薫の方向音痴については後で説明するでしょう。

「ということで軍師大和」

「分かった。俺が案内する。ついでに学校も軽く案内するよ」

「……ありがとう」

クリスが柔らかく微笑む。やっぱり可愛いな。ドキドキする

「直江大和。同じ寮の1階に住んでる。よろしく」

「大和……日本国の異称、“大和”の字か？」

「そう、戦艦大和の大和ね」

「とてもいい名前……大和と呼んでも？」

「いいよ。皆そう呼んでるしね」

「では大和、よろしく」

男子が複雑そうな顔をしている。言い寄りたい 父親怖いのにジレンマだろう。俺は案内って名目が出来てよかった。

この後、俺とクリスは喧嘩をすることになるなんて予想もしてなかった。

ドイツから来た転入生（後書き）

金曜集会までいかなかった。行くつもりだったんだけどなあ。

そして気づく。あれ？このキャラまだ出てなくね？そろそろ出しとかないとまずいなあ……。でも出す場面がなあ……。そのキャラとは……。終了メッセージで

百代「さーて、お約束の終了メッセージ、予告っぽくいつてみるぞ」

??「次回、真剣で私に恋しなさい！の五月、友達百人できるかな？」。ちなみにあと百人です。ううう」

??「ガンバレまゆっち！オラがついてる！まゆっちなら熊百頭だつていける！物理的にいける！」

??「そ、そうですね！熊と友達に何の関連性があるのかわかりませんが、松風、私頑張ります！」

薫「盛り上がっている所悪いが、まゆっちはまだ本編に出てきていないのだが……」

??「はあう!？」

??「な、ナンダッテー!？」

大和「少なくとも名前は出てきてないな。それにほら、名前の所も??になってるし」

??「ああああ、すすすすいけません！ま、まだ登場すらしてないのに出しゃばってしまって……し、失礼しました……」

モロ「……いつちやったね」

百代「そして落ち込んでるカワイイ後輩を慰めて落とす。……
・いいなそれも」

薫「ダメだビョーキだ」

ガクト「この人早く何とかしないと……」

金曜集会（前書き）

感想で『薫脇役説』が指摘されたので何とかしてみようと頑張りました。

．．．．．あまり改善できなかった．．．．．0

r
z

金曜集会

金曜集会

中学の時、両親の離婚により静岡の学校に行く事になった京。

京は時間を作って金曜から週末にかけて川神に戻ってきていた。もちろん風間ファミリーの面々も京のために時間を空けて金曜日には秘密基地である廃ビル（ちなみに私達、風間ファミリーはこの廃ビルの持ち主から警備のバイトに雇われていて、その代わりにここを秘密基地として使っている）に集まった。

これが金曜集会の始まり、らしい。らしい、というのはその頃すでに私が川神にいなかったからだ。私が川神に来ていた長期休暇の時には、京は普通に川神院に泊まっていたし。

そして川神学園に入って京が寮暮らしになった今でも、その習慣は続いている。

誰もやめようとは言わないし、私自身も心地よい時間だからだ。

そして風間ファミリーは今日も秘密基地に集まる。

「　　って事がさっきあったわけなんだぜ!？」

大和の話によると、クリスマスを案内している時、それまでは楽しく話をしていたそうだが、賭けの事を話すと急に機嫌が悪くなり、卑怯だと糾弾してきたらしい。

「はははっ、大和がせこい手使ってっからだ」

「失礼な女だね。案内した大和に対して」

「大和が見誤るなんて珍しい。そういうのには敏感だろう?」

「薫と同じ真面目形かなと思ってたら、真面目さが筋金どころか鉄骨入りだったんだよ」

「薫の真面目さに入ってるの針金だからね」

「酷くないか? まあ別に否定はしないが」

「しないのかよ」

「ん? 策を用いる大和に怒りを覚エルナラ、正統派肉弾タイプの俺様ならクリス落ちルカ?」

「無理無理。ああいうタイプは口ウルサイヨ」

「そもそもクリスが生真面目なタイプなら普段から色んな女子に声をかけているガクトに落ちるとは思えないが」

「まあ父親も怖いしな……俺様の肉体も銃は弾けない」

「銃で済めばいいが……中将殿なら本当に軍を動かしかねない」

「私は別に軍など怖くないから関係ないな。ああいう生真面目そうなのを私の美少女パワーで落とすのもいいなあ」

「ダメだこの人、早く何とかしないと……」

「モモ先輩が原因で第三次世界大戦勃発とか……有り得そうで笑えないね」

「というかそもそも任務に私情を持ち出すって軍人としてダメだろ」

「違うぞ大和。中将殿は任務に私情を持ち出さない。正確には私情で軍を動かしているだけだ」

「なおさら悪いわ!」

「む、この強い気と普通の気は……ワン子とモロロだな。今二階辺りだ」

「相変わらず便利なセキュリティだね」

この廃ビルの周囲2キロに渡ってモモちゃんが気を張り巡らしている。誰かが入ってきたら感知できるようになっている。

私もしようと思えば出来るがモモちゃんに比べて疲れる(当社比2.5倍)のでしていない。

「飲み物買ってきたわよー」

モモちゃんの言う通り、ワン子とモロロがやってきた。

「それは預かって置こう」

ワン子から飲み物を受け取るクッキー。

「ワン子は修行だろ？モロは何してたんだよ」

「ヨンパチの画像収集用PCが重くて調子悪いって言うから見に行つただけど、常駐ソフトが同時に立ち上がりまくって重くなるはずだよ。で、メモリ増やすより先にリソース不足を解消しようと不要ファイルとかレジストリーなんかをソフトで消していったらラグとかかかかって……」

「出た。モロの機械語り」

「おい、誰か聞いてやれ。火種のガクト行け」

「ヤドカリオタクもいるし迷惑な存在だぜ」

「ほう、ヤドカリの素晴らしさがわからないか。いいだろう。まず彼等はキュートに動く。木に登ったり砂にもぐったり……。その、のんびりした感じが慌しい現代では……」

大和まで暴走した。

「二人に増えたじゃないか！いいから止める！」

「大和は引き受ける。例え、貞操を失っても止める」

「大和の貞操が心配だ」

「もうなかったりしてな」

「そしたら殺す」

「盛大に殺す」

「てーそう？何のこと？和菓子の名前？」

「ワン子にはまだ早い。これでも食べておけ」

そう言っつてワン子に微味棒（肉味）を渡す。

「わーい。ぐまぐま……」

単純だった。

「いつまで喋ってるんだ舎弟！最後の一人が来たぞ」

結局大和はモモちゃんが殴って止めていた。

「いてっ！ん……？」

原付の音が聞こえた。おそらくキャップの乗ってきた物だろう。

「キャップか？」

「この楽天的な気は間違いないな」

「ウイース！！」

キャップが部屋に入ってきた。するとワン子が真っ先に駆け寄っていく。

「待ってたわよ晩御飯!!」

「そっちかよ! まあいい。ほれ! 今日の余り物だ量多いぜー」

そういつてキャップが置いた袋の中にはバイトの残り物である大量の寿司が入っていた。

「モロ口寿司来てるぞー。お前は箸使う派だろ」

「ビデオカードアクセラレータつけて18万で売れて……あれ、ああキャップ来てたんだ」

「準備しないと食べたいのがなくなるぞ」

「こんだけあれば十分食えるだろ」

「甘いなガクト」

「アタシ達、ガッツリ食べる予定よ」

「大和、はい醤油」

「おう」

「大和、はいタバスコ」

「いらんだろ」

「うるでしょ」

「ああ……醤油にタバスコを……赤いよ」

「京……辛いのが好きなのはいいが、度が過ぎないか？」

「そつでもないよ」

「……まあ人の好みに口を出すのもどうかと思うから強くは言わないで置く」

私達は寿司を堪能した。

キャップが持つてきた寿司を食べ終わって一段落ついた頃、キャップがある事を言い出した。

「じゃあ今日の議題だ」

「明日、どこで遊ぶか？」

「それも重要だが、転入生のクリスのことだよ」

「んー？クリがどうしたの？」

「俺たちのグループに入れようかって議題でてたろ」

「今聞いたよ！」

「で、俺はイイと思うんだけど、久しぶりの新メンバー加入。どうよ皆っ？」

「賛成だ。クリスは欲しい。いろんな意味で」

「俺様賛成。理由は簡単だ。可愛いし、骨もあるからだ」

「クリはいらん子だと思うわよ……まあでもいつでも勝負挑める相手が増えるのはいいわね。ただ、あいつ自身こーいうの好きかしらね？」

「そうだな。私も別にいいが、クリスの様子を見ながら柔軟に行くべきだと思う」

「私は反対。他人は増やさなくていいよ。いらぬそんなもの。この八人でいられるのが好きなの」

「僕も京と同じで反対かな。今更新しいメンバーとか気を使っちゃうよ」

「よく言ったモロ。キノコゾーンへ来なさい。二人で胞子を飛ばして、皆も洗脳しよう」

今のところ俺を残して、賛成はキャップ、ガクト、姉さんの三人。反対は京、モロの二人。様子見がワン子と薫の二人だ。

「えーつと今は賛成3に反対2、様子見は2か。大和。お前の意見が重要だ。聞かせてくれよ」

「ふふっ、責任重大ね。やーいやーい！」

「うーん」

「無視しないでよお……」

「よしよしワン子。撫でてあげるから、泣くな」

「はふう……」

薫がワン子を手懐けていた。

「俺は……反対だ」

「流石大和、前世でも夫婦だっただけあるね」

「いや、勝手に夫婦にしないでくれ。前世も現世も」

「見事に割れたな。こういう時はキャップである俺の意見が優先されるが……」

「俺たちにもある程度譲歩してくれ」

「わかってるって。じゃあ、お前らの意見も尊重して、まず誘ってみて何かあったら容赦なく切るってことで」

「それでいいな京」

「うん、いいよ」

「でもな、俺はもっと楽しくなる確信はあるんよ。この数年、新規メンバーなんて俺が言い出したの初めてだろ？それぐらい面白いヤツだぜ、クリスは」

「相変わらずズバツと言いつ切るね」

そして話は変わり、姉さんが女の子に走るのは、魅力ある男が周りにいないから、という話になった。

「ということ、男共、誰か私をときめかせてみる」

モロのターン

「僕には無理すぎてパス。ガクトどうぞ」

ガクトのターン

「俺様フラレ続きで今はパス。キャップいけよ」

キャップのターン

「えー？恋に生きるは切なすぎるぜ。大和行けよ」

俺のターン

「勝算がないことはしない主義なのでパス。薫頑張れ」

薫のターン

「一ターン目で全員パスだと？」

まさかのパス続きにビックリする薫。

「薫、さあ飛び込んでこい。この胸に」

そういつて手を広げる姉さん。

「…よし、ここは空気を読んで、行くぞー！」

薫は気合を入れて姉さんの腕の中に飛び込んでいった。

「よーしよし、本当に来たな。可愛がってやろう。」

そういう姉さんの顔は少し嬉しそうだった。もしかして、姉さんは薫の事を……

「まずは、愛のサバ折りだ！」

「ぐああああ！予想以上の力!？」

……そんな事はなかったようだ。

「こうなるのわかってて、それでも行くなんて……」

「薫はエンターテイメントがわかってるな」

「くろう、関節を外して逃げられるかと思っていたのだが……!」

「関節外した程度じゃ抜けられないでしょ!？」

「ははは、そんな事させるわけないだろ」

「ここまでコケにされてると羨ましいとは思えねえ」

「わー！どけどけどきなさいよー!」

ワン子が薫と姉さんの間に強引に割り込んでくる。

「犬はご主人が他の相手と仲良くしているとヤキモチを」

「なるほど“愛犬の仕付け方”にもそう書いてあるね」

もはやアレは愛犬家のバイブルだな。

「薫はモモ先輩に行ったから、大和は私の胸に飛び込んでくるといい！」

「行きません」

「ちっ、おいしい」

「ちっともおしくねーだろ」

そんな話をしながら夜は更けていった

金曜集会（後書き）

百代「さーて、お約束の終了メッセージ、予告っぽくいつてみるぞ」

京「次回、真剣で私に恋しなさい！〜暦の五月〜『根暗派の台頭。堕ちたガクト』」

ガクト「どーいう状況だ!？」

京「私とモロの二人で胞子を撒いた結果そうなった」

ガクト「何で最初の犠牲者が俺様なんだよ！俺様の筋肉が胞子ごときに負けるか！」

薫「頭が弱いからじゃないのか？」

百代「ははは、的確だな」

モロ「根暗なガクト……ダメだ、想像できない」

京「そしてモロは「こんなガクト、僕の好きなガクトじゃない!」って叫んでBL展開に突入、わかります」

モロ「勝手にBLにしないでよ!!!」

クリスマス参入

4月25日土曜

朝、河原で遊んでいる時にキャップが勧誘してクリスマスが風間ファミリーに加入した。
そしてその歓迎会を島津寮ですることになった。
端折りすぎ？気にしたら負けだ。

島津寮、102号室

「大和、大和！腹減ったよう！」

「川神院から肉が届けられる！それまでこらえろ！」

「モモ先輩達の稽古終わってからだろ？待てん！土日自炊システムは島津寮の欠点だぜチクシヨウ！」

「あいにく俺の部屋の食糧は尽きてしまった」

「そんな大和は軍師大和じゃないぞう！」

「とりあえず台所に行ってみよう」

「さすが軍師大和！麗子さんが食材を補充してくれてるかもしれないな！そうと決まれば早い者勝ちだぜ！」

キャップは走り出した

「おい待て!…くっ、素早い」

そんな感じで俺達は台所へ……………

「この冷蔵庫に“調べる”コマンドをかけるぜ」

キャップは 冷蔵庫 を 調べた

冷蔵庫 から 微妙に安物な冷凍肉 が 見つかった

キャップ は 微妙に安物な冷凍肉 を 手に入れた

「料理できない俺達にどうしろってんだ!？」

意味なかった。

「キャップ、バイトで経験してるだろ」

「正味な話バイトでもないのに労力使いたくねー」

「オイ!…………肉を目前にすると余計腹減るな」

どうしようもなくなったその時、

「おい、ギヤーギヤーうるせえぞ、テメエら」

そんな時、島津寮の最後の男の住人、新ジャンル・健康的な不良、ゲンさんこと源忠勝（源だからゲンさん）が居間に現われた。

「あ！ゲンさん帰ってきた！皆のゲンさん！」

「僕らのゲンさん！ハラヘッタ！」

「何か作って！食材なら冷蔵庫にあるから！ちなみに俺達は応援し
かない！」

「何でオレがテメエらのためにメシを……アホかボケ」

「ゲンさんが作ってくれないと前途ある若者三人が栄養失調で電車の
駅名しか言えない体になっちゃう！」

「ヘんなロボが作るポップコーンでも食ってるよ」

説明しよう。変なロボことクッキーはポップコーン製造が可能なの
だ！

「やだよ！俺一時期食いまくってたら体がポップコーン色になった
んだぜ？」

「知ったことか。夜もバイトあるんだ邪魔するな」

そういつて、最後の希望、ゲンさんは部屋に戻ってしまった。

「……………あーあゲンさん行っちゃった」

「練馬……………桜台……………江古田……………東長崎……………」

「あぁっ、既にキャップが電車の駅名しか言えない体に!?!しかも西部池袋線とは重症だな。どうしようか……………」

何とか風間さんグループに入れてもらおうと色々と考えていたけれど、どれも空回りして私は落ち込んでいた。

「どうすればいいのでしょうか？松風」

「そうだなー、まゆっちは押しが弱えーんだよ。もっとこう、アグレッシブに攻めていけば大抵の男はイチコロだぜ」

「そ、それは言い過ぎではないでしょうか……」

「そんな事はねーよ！てかもっと自信持てよまゆっち！今まゆっちに必要なのは、チャンスと勇気だけなんだよ！」

「しかし……あれ？何やら居間の方から声がしますが……」

「行ってみよーぜ。もしかしたらチャンスかもしれないぞ」

という事で私と松風は居間へと足を向けます。

そしてそこにいたのは直江先輩と風間先輩でした。

話を聞くと、どうやら二人はお腹がすいているようです。

「これは、チャンスでは……？」

ここで私が二人に夕食を作って差し上げればそこから友達になれるかもしれない。

「そうだぜまゆっち！今こそ踏み出すんだ！友達作り為に人形相手に話しかける訓練を一日100回もやってるまゆっちならこんなの

熊倒すのよりも簡単はずだ!!」

「し、しかし……!!」

「あーもうまゆっち!まゆっちはスゲーんだぜ!フツー人形相手に100回も話しかけるなんてこたあできねーんだ!!もつと自信持てよ!!」

「自信……」

「さっきも言ったけど、まゆっちに必要なのはチャンスと勇気だけなんだ!そして今そこにチャンスがあるんだ!後は勇気だけだ!!それにまゆっちにはオラもついてる!!それを忘れんな!!」

「!!そうですよね……松風が一緒なら大丈夫ですよ!私、行きます!!」

「よく言った!!じゃあまずは話しかけるんだ!そこでメシ作って友情の始まりだ!」

「はい!!」

そして私は独り、戦場リベンゲに立つ

「あ、あのー……」

どうしようか悩んでいたその時、誰かが話しかけてきた。

「ん？二階の……薫さん」

彼女はこの島津寮に住んでる一年の女の子で、常に刀を持っているので正直怖い。朝食の時とかに話すが、急に睨んできたり馬の携帯ストラップと会話してたりと、正直よく分からない。

「椎名町？（何か用？）」

「え、ええと……わ、私でよろしければ、その、これから夕食を、その……」

「い、いやそんなににらまれましたも……」

「あ、あうあう……」

薫さんがドモってる間に

「困っているようだが……」

後ろの方から聞き覚えのある声が聞こえてきた

「その声は！我等がオカン、薫！」

確か薫は料理ができたはず！何でここにいるのか、という疑問など些細な問題だ。

振り向くとそこには食卓に座っている薫の姿があった。

「いいところに！俺達にメシを作ってくれ！！」

「実はさっきから見ていたから事情は知っている。何か作ってやるから少し待っているといい」

「やったー！！」

「ところで何で島津寮に？」

「実は道に迷ってしまって、なんとかここに辿り着いたのだが……」
またか……それにしても、いつからここにいたんだ？

「それにしても二人がいるということは、ここは島津寮だったのか」
「気付いてなかったのかよ!？」

見知らぬ人の家だったらどうするつもりだったんだ、コイツ？

そんな話をしているとゲンさんが居間に戻ってきた。

「チツ、メシの話されたら腹へってきやがった。……ん？臯月じゃねえか。どうしたんだよ」

「今からキャップ達に何か作ろうかと。そうだ。ついでだしゲンさんの分も作るよ」

「……いや、別にいい」

「キャップ達のついでだし大丈夫だぞ。それにいつも世話になってる礼だと思ってくれ」

「……別に礼をされるほど何かしてるわけでもねえし」

そんな事はないんだが……ゲンさんにはよく世話になってるぞ、俺達だ。

「しかし……」

それでも食い下がる薫。そうすると折れるのは当然……

「……だが腹へってんのは事実だし受けとらないのも失礼か……仕方ねえな、貰ってやるよ」

「さすがゲンさん！俺抱かれてもいいや！かといってほんとに抱こうとするのはやめてね！」

「大和、テンションがおかしくなって言動もおかしくなっているぞ。そう言いながら、薫は冷蔵庫の中を見る。

ハッ！？少しデレかけたゲンさんを見て思わず……

「勘違いするんじゃない。作ってもらった方が俺の労力が少なくすむからだバカが」

そういつてゲンさんは食卓に着いた。

「で、薫さん何？」

「あ……い、いえ何でもないです。すみませんでした！」

「次は気をつけてくれたまえ」

「は、はい！それではっ！」

キャップにそう言われて、薫さんは走り去っていった。

「彼女何で謝ったの？」

「ううん、知らない。テキストに返事したぜ」

やっぱりあの一年生はよくわからない。

P・S・ 薫の作った肉じゃがは美味かった。

三時間後

川神姉妹が肉を持って島津寮に到着した。姉さんが俺の部屋を漁るという迷惑行為があったが、特に何の問題もなく焼肉が始まった。

「炭焼きの用意、居間でできたよ」

「よし、じゃあ始めるか。大和は私の肉を焼け」

「京、姉さんのお肉を焼いて」

「クリス、こういうのは新入りが焼くもの」

「命令の交錯が激しいグループだな」

「仕方ない、私が焼こう」

「アタシはひたすらに食べるわね」

「ゲンさんバイトか。あ、この二階の子もここに呼ぶぜ」

「ああ。寮での歓迎会ってやつだしな」

「キャップ。寮の女子として二階に上がることを許可」

「あいよ。呼んで来る。風のように素早くってな!」

島津寮では一階が男子、二階が女子と別れていて女子の許可なく二階に上がったなら市中引き回しの上で退学という重度のペナルティが科せられる。過去に本当にあったらしい。

「ガクトもモロもくればよかったのに」

「モロはじーさん、ガクトは魍魎の宴だって」

「最高に頭悪そうなネーミングだな」

「大和、何だソレは？」

「俺もなんだか知らんが、外せないらしい」

「ほう、今度ガクトに聞いてみるか……」

そうこうしている間にキャップが薫さんを連れて戻ってきて歓迎会は始まった。

肉は全て薫が焼いていった。こういうのを率先してやる所が風間ファミリーのオカンたる所以だ。

「うんっ、美味しいわね、さすがウチへの献上品」

「おお。これは本当に美味しいな」

「ドイツ帝国からのお墨付きがでたわよ」

「ワン子、ドイツは帝国じゃないぞ」

「帝国ではなく、連邦制の共和国だ」

「ぐまぐま」

聞いてなかった。

「肉もやーらかいし、いい感じだぜ。どう、薫？」

「はいっ、これまいっーですねー！」

「さー次焼きなさいよ薫、急いで！」

「もう焼いているから少し待てワン子」

「あ！俺ももつと肉欲しいぞおー！」

「あれ、まいっーがスルーされ気味でしたよ、松風」

「状況は悪くない。将棋で言えば、歩を一つ進めたよ」

またこの一年、一人でブツブツ言ってるよ……

「（む。私の将来の配偶者がつまんなさそうだ）」

「はっ?! なんだか生暖かい視線。やはり携帯ストラップと喋る怖い奴と思われたのでしょうか松風」

「大丈夫。将棋でいえば、二歩かましたようなもんだ」

「それ負けじゃないですか!」

「ははっ、なんだなんだこのおもしろい生き物は」

「ふえっ」

「カワイイ……」

そういつて姉さんが黛を抱き締める。

「ああ……人の体温……なんと温かいことか……」

「モモ先輩そっちの肉を食ってどーする(ちらっ)」

「いやそれほど上手いこと言えてないから」

「しょんぼり……」

「げ、元気をだすんだ」

クリス、京に第一次本格的接触

.....

.....

「辛党同士が見つからない」

クリス、京に第一次本格的接触の結果、失敗。だがまずまずの反応。

「焼けた？焼けたよね？その肉もらったわ！」

「まだ裏側焼けてないから、少し待て」

「うぁー、でも食べたいわー」

「とりあえず塩つけたキャベツでも食べておくか？」

「うん！」

「京に貰いなさい」

「人任せなの！？」

それでも欲しいのか京の所に行くワン子。

「ワン子あーん。おねだりして口を開けなさい」

「アタシにください」

「何が欲しいんだ」

「キャベツを、ねじ込んでください」

「おねだりできたな。フフフ。そら」

「まぐまぐ」

「おたくの妹さん調教されてますよ」

「アリだな。ではその京を私が調教しよう」

「調教師が多い空間だな」

「食べ物に目がない。ふふ、確かに犬だな」

「なにい、嬉しそうに喋っても聞き逃さないわよ」

「第二陣が焼けたぞー」

「先鋒お任せあれ！肉はもらったわ！」

「強引なっ、それは既に抜け駆けで軍律違反だ！」

「あ、ご飯が炊き上がった」

「すみませーん。ご飯もう持ってきちゃって下さい」

「もはや客気分ね。まー別にいいけど、大盛りね」

京がご飯大盛りにして、ワン子に渡す。

「はい。他に白米いる人？」

「自分ももらえるだろうか？」

「白いのがたくさん欲しいです、とおねだりして」

「?白いのがたくさん欲しいです」

「ワン子といいクリスといい邪気が無さ過ぎる」

「お前が邪気をハラみすぎだ」

「そりやもう、大和にも鍛えられたから。『いじめなんて、いじめられる方が悪いんだYO』」

「ぎゃああすみません!昔の俺の真似はやめて!」

「大和はニヒルなキャラだったからな。あんな恥ずかしいことも言っていたな……確か」

「そっちもほのぼのと思り返さないで!」

……「つうして歓迎会(?)は過ぎていった

歓迎会の後

島津寮では温泉が湧いているので姉さんとワン子とクリスは風呂に一緒に入るようだ。ちなみに京は居間に、黛さんは自室に戻っていた。

「ふふ。さーてでは風呂って来るか、なあクリス」

「はい。随分と嬉しそうですね」

「うん。ほらワン子も嬉しそうだ」

「お風呂、お風呂ー」

ワン子のはしゃぎながら二階への階段を上っていった。ちなみに男子と女子は風呂も分かれていて女子風呂は二階にある。

「な。ふふふ」

「それとは別の嬉しさにも見えますが……」

「気のせいだ」

「そうですね。では気のせいなのですね」

「ん。江戸の街では風呂の付き合いも重要だぞ」

「温泉、気持ちいいので好きです。行きましょう」

クリスマスもワン子に続いていった。

「ではな、大和。じーーーーーっくりと見てくるぞ」

「はいはい、いってらっしゃいまし」

「写メ一枚三万円どうぞだ」

そう言っつて、百代も二階の風呂場へ向かっていった。

「生々しい金額だ……冗談に聞こえない」

「じゃ、俺も夜の引越しのバイトあつから」

「具体的な内容聞くのが怖いな。いってらっしゃい」

キヤップはバイトのため外出。

「あ、大和、私も風呂借りていいか？温泉に入りたいのだが」

「ああ、別にいいと思うぞ。……わかっつてると思うが、男湯は一階だからな」

「わかっつてる」

薫は一階の風呂場へ入っていった。

「さて男は寮で今俺一人（薫は風呂なので除外）、女性陣（京、薫さん以外）はおそらく脱衣中。さて、どうするか……」

【選択肢】

様子を見に行く

想像して独りで楽しむ

何もしない、リアルな人生を送る

> 薫の方を……

「俺も薫と一緒に風呂に入るとするか……ハア……ハア……」

……なんて事は考えてないよね、大和？」

「いきなり入ってきて俺の声真似してそんなセリフ吐かないでくれ。
京」

「もし薫の入浴を覗こうとしてたら、グロテスク描写のあるゲーム
に早変わりしてた所だよ」

「何言ってるんですか、京さん？」

「で、実際の大和の心境は？」

「いくら女っぱいからって男覗こつていつのもどうなんだってい
う話だよ」

「だよ。だから大和って好き？」

「お友達で」

「残念」

そういつて京は部屋から出て行った。

「……………あ、危なかった……………」

一瞬、頭に浮かんだ選択肢で選びかけたぞ…………

「やっぱりフツーが一番だな。無駄な行動はリスクが高い」

大和は部屋に戻り、新聞やネットでニュースを眺めていた。

……………しばらくして、薫が風呂から上がってきた。ちなみに髪は解いている状態。

「ふう……………いい湯だった」

「そうか……………何かそうしていると、ホントに女っぽいよな」

「殴られたいのか大和は（殺）」

あ、しまった。地雷踏んだ。

そう思ったその時

ドゴオンッ！！

「な、なんだ！？二階で爆発音！？」

「私はまだ何もしていないぞ？」

「何する気だつたんだお前！？」

だだだつ、と誰かが駆けてくる音がする。そして部屋のドアが開かれた。

「大和ー！大変よ。女子のお風呂場が……って誰！？」

「私だ、ワン子」

「あ、なんだ、薫か。ってそれ所じゃなくて……！！」

「……嫌な予感がするな。ちょっと麗子さんと呼んでくる！」

内心、助かったと思った。

結論から言うと、音の正体は風呂釜の壊れた音だった。

原因は姉さんがクリスの肢体を隅々まで見ようと近付いたら照れて逃げられて、つい興奮してしまい、追いかけてく内にドカーンと、やってしまったそうだ。

もともとリフォームする予定だったので、そこまで責任を問われることも無く事は済んだ。

そうはいつても島津寮の女子風呂のリフォームが住むまで、一階にしか風呂はないので、しばらくの間、男女兼用になるらしい。

そのことを居間にいる京に伝えるに行く。

「……という事に決まったみたいよ、京」

「男女混浴になるんだ。ハアハア……」

「ならねーよ！入るのは別々に決まってるだろ」

「そして女の子が入浴中に大和が乱入。分かります」

「ハハハ。そんなお約束ありえねーな。陳腐陳腐」

「あ、大和今フラグだった」

クリス参入（後書き）

百代「さーて、お約束の終了メッセージ、予告っぽくいつてみるぞ」

クリス「次回、真剣で私に恋しなさい！〜暦の五月〜」
『激震、新ヒロイン参入』」

松風「ついに真打ち、まゆっちの出番だー！ー！ー！」

まゆっち「が、頑張ります！」

キャップ「さあ、新ヒロインが誰か予想して賭けてみな！」

クリス「む、おい賭け事は良くないぞ」

ガクト「いいじゃねーか少しぐらい。俺様年上美人だったらいいや」

百代「私は薫の女装姿の薫ちゃん（仮）に二千元だ！薫の金で」

ワン子「アタシも薫ちゃん（仮）に千円で」

薫「ちょっと待て。色々と待ってくれ。特にモモちゃん」

大和「大穴で卓代ちゃん（モロ）に二千」

モロ「なんで僕なのさ!？」

京「そうだよ大和。卓代ちゃんは大穴じゃなくて本命だよ。ということでは三千」

モロ「つつこむ所そこなの!？」

まゆっち「あれ?何だか私じゃない雰囲気ですよ松風」

松風「大丈夫だまゆっち!あれはあくまで予想であって事実じゃね
ー」

まゆっち「つまり皆さんは私が参入する事を好ましく思っていない
ということですね、うう……」

松風「挫けるなまゆっち!傷は浅いぞ!」

更なる新メンバー（前書き）

さあ皆さんもお待ちかねのアノ人の登場です。

「やっとオラの出番か。オラアわくわくしてきたぞ！」

「ち、違います松風！松風じゃなくて私の……っであれ？
違うかい？」

更なる新メンバー

4月26日日曜

「ん……」

いつもの時間に目が覚める。

いつもの様に顔を洗い、ジャージに着替えて朝の鍛錬を開始する。

「ふっ！」

鍛錬、特に素振りの際、私は一挙手一投足を大事にしている。例えば動きが遅くなったとしても守るようにしている自分なりのルールだ。

「ふっ！」

拳を振るう。『パンツ！』という音が鳴り響く。数撃てば当たるというが、レベルが高くなればなるほどそんな理論は効かなくなってくる。

洗練された確実な一撃を何発も入れられるようにする。そんな技術が求められてくる、と私は考えている。

朝の鍛錬を終えて、自室に戻っている途中、掃き掃除をしているワ
ン子を見つける。

「掃除ー！掃除ー！」

「か、一子殿、ここのエリアは私の掃除持ち場ですから……」

「元気だな、ワン子……」

どうやら修行僧と掃除対決をするようだ。邪魔したら悪いし、声はかけないでおこう。

さて、朝食の手伝いをしてくるとするか。

……朝食……

「はいはい。みんなー座禅やめ、ご飯だよー。ほら、師範代もご飯ですよ」

「おー、楽しみにしてたネ」

ルー・イーさん。川神院の師範代で川神学園の体育教師。昔はこの人にも世話になった。

「今日の朝はご飯と味噌汁納豆焼き魚に卵焼きー！アタシは作ってないけどー生懸命運んだわ！」

「今日もボリユーム満点だ！ありがたや」

「朝はがつつり食べないと力でないからネ」

「あまり急いで食べたらだめよー。朝なんだから」

「おおっと、ワタシも怒られてしまいそうだ」

そんな感じで朝食は進んでいく。

「うむ。一子は感心感心。それに比べお前はなんじゃモモ、漫画なぞ読みおって」

「うるせーぞ、じじい。朝の鍛錬はこなした」

「風呂壊すだけでなく台所から肉持ってったな」

「友に振る舞ったんだ。いいだろそれくらい」

私も美味しくいただきました。まあ今は口に出さないが。

「まあ、それはいいが、モモ、お前退屈そうじゃのお」

「ああ、大和達と遊ぶのは楽しいがそれ以外は退屈だ。私に挑戦者はいないのか。試合がしたいぞ」

「モモ、お前闘う事ばかりじゃのう……」

「それが川神家跡取りのあるべき姿だろ。だいたい私は定期的に人を倒さないと生きていく感じがしないんだよ」

「むう……」

鉄心さんが唸っている。悩みの種だししょうがないか。

「じゃあ闘いに備えて走り込みにでも行ってくるかな」

「アタシも行くよ、お姉様、いつしよに走ろう!」

「ああ。薫はどうする?」

「あー……私はいい。姉妹水入らずで行ってきて」

「そうか。ワン子、二人で行こうな」

そうして、モモちゃんとワン子は走り込みに出かけていった。

「うーむ。妹想いの所はいいんじやが、モモめ、闘いにとらわれすぎとるのお」

「はい。よくない兆候です」

「なにかひとつ、他に大きな趣味でも持ってくれとありがたいのお……」

「ええ。武道が人生の全てではないにですからネ……」

「でもすぐには難しいと思いますよ。モモちゃんにとって闘いは生き甲斐、快樂ですからね」

「薫もそう思うかね」

「人を倒さないと生きていく感じがしない、ってモモちゃんは言っていたけどそれは正確には違います。襲ってくる不良どもを吹っ飛ばしてるわけです。正確には強者との闘いを求めてやまないのしょう」

「確かにのお……」

「まあ、私も何とかしたいのですが、アレはどうしようもないかと。できて和らげるぐらいじゃないでしょうか。ま、焦っても何も答えは出ませんよ」

それにモモちゃんのは、私の“アレ”よりはまだずっとマシだ。

「それでは、私も失礼しますね」

そう一言入れてから、私は川神院での私の部屋に戻っていった。

薫が去った後、ルーが儂に話しかけた。

「薫くんは何やら達観してますネ」

「そうじゃのう。まあ、昔が昔じゃったから、お主が驚くのも仕方がないのかもしれないが……」

薫の過去、それは川神院においては総代である儂と師範代であるルーぐらいしか知らない事情である。

「彼は以前と比べればいい方向へ向かっていますネ。百代もそうやってくれるといいのですが……」

「うむ。彼との関わりによって何か変化が起きるかも知れぬの。それに一子のこともな」

「……やはり一子で八蔵しいと？」

「正直のお。そろそろ言っておかねばなるまい」

「私としては一子に八頑張ってほしいのですが……」

川神院も悩みが尽きないようだ。

「そういえば、最近釈迦堂と連絡が取れんと言っておったが、どうなっておる？」

釈迦堂刑部しゃかどう けいぶ、川神院の師範代でありながらその危険な考え方から、

川神院を破門された男。連絡は取れるようにはしておったが最近また連絡が取れなくなったそうじゃ。

「そうですネ……別に悪い噂が流れているワケで八ないですし、あの釈迦堂のことですから『面倒だ』とかそういった理由でしょうし、今八放つてイマス」

「そうか……」

「釈迦堂がどうかしましたか？」

「いや、なんでもないわい」

儂は釈迦堂を破門した日に、あ奴とした会話を思い出していた。

『あー……そうそう、薫のことだけどなあ、アイツの扱いには気をつけたほうがいいぜ』

『何じゃと？何故じゃ？』

『あ
』何というか……アイツからは、俺と似たような匂いがするからな
』

夕方、友達との映画鑑賞（映画自体は微妙だったが、話題ストックが増えたと思う事にする）から島津寮に帰ってきたら、黛さんが台所で料理を作っていた。

居間において俺を睨んでくるクリスに尋ねると無視されたので、キャップや京から事情を聞くとどうやら昨日の焼肉のお礼に、ということらしい。

「何やら気合入ってる感じするだろ？ すごい楽しみだ。食材も見る感じかなり豪華だぜ」

「これからモモ先輩たちもケータイで呼ぶところ」

「じゃあ俺モロ行くか。大和はガクトな」

「あいよ。あの二人一緒にいる気もするけどね」

「……………電話中……………」

「モロ晩飯来られるってさ。スグルとアニメ見てた」

「アニメならガクトは別行動だな。電話電話」

ガクトに電話をかける。

『オイオーイ。今女とやってるから電話かけんな』

「（プツッ）ガクト電話でないや」

すぐにガクトから電話が来た

『冗談だよ！すぐに電話切るとかお前結構Sだよな』

「女子校生の手料理が食えるぞ。夕飯食いに来い」

『マジで！？イエエエイ！！これで女の手料理食った事無いヤツよ
り俺の方がモテるぜ！！っておいそれ、京の激辛殺人料理じゃない
だろうな』

「寮の一年生の女の子が焼肉のお礼だって」

『……………なんだ後輩かよ』

「で？来る？来ない？」

『日課の一人Hするところだ。行ってから行くぜ』

「（プツッ）ガクト来るってさ」

「声大きいから聞こえてた。セクハラだよあの男は。で、その、大和は日課なのかな。きゃ、恥ずかしい！」

「お前もセクハラだよ。同じ事聞かれたらどう思う？」

「お望みなら詳細に答えるよ。えっと枕を大和に見立てて……」

「ごほん。川神シスターズ+ は来られそう？」

「モモ先輩はスキップしながら来るって」

「女の子の手料理だから上機嫌だな、姉さん」

「あ、ワン子はウサギ跳びしながら来るって」

「普通に来れないのか俺の友達は……」

「薫はモモ先輩たちのところにはいなかったよ」

「そうか。じゃ俺がかけるよ」

薫に電話を試してみる。

『もしもし大和？どうした？』

「昨日の焼肉のお礼に薫さんが夕食を作ってくれて。食いに来い」

『わかった。すぐに行く。ところで……』
「ん？」

『私もモモちゃん達みたいに何かしながら行った方がいいのだろうか？逆立ちしながらとか』

「（プツッ）薫もっ来てるってさ」

「ほんと？薫ー？」

「ここにいるが？」

「うおお！？」

「何だあ！？」

薫が現われた。……ダンボールの中から。

「早いね」

「いや、実は……道に迷ってしまって……。何とか島津寮を見つけたから来てみたら、誰もいなくて……まあ暇だったから気配消して居間にいたんだけど」

「ていうか何で京は普通に受け答えできてんだよ！」

「ほんとに普通に来れないのか、俺の友達は……」

「……じろじろ」

「いまだ視線を感じる2009!!」

「大和さつきからクリスに睨まれてるけど」

「そうそう、京と黛は仕方ないとして、クリスマスまで俺へのリアクションがないなんて、一体何したんだ？」

「実は朝うつかり着替えシーンに遭遇して」

「……た……寝取られ……」

「いやいや一瞬下着見ただけだ」

「っ!」

「視姦寝取られされた、これは地雷ゲームの予感」

「日本語でお願いできますか？」

「昨日のフラグ回収か、マメな男だな、本当に」

「お前まで何言ってるの？だから俺は偶然クリスの下着を見ただけであり……」

「見た見たうるさいぞ！」

クリスの蹴りが飛んできた。

「ぐはっ！！す、すまん！！！」

「まったく！……直江大和、お前という男は……」

島津寮居間には、俺達の仲間が全員集まっていた。

「お、お口に合えば良いのですが……」

テーブルいっぱい料理がズラツと並んでいた。

「凄い数だねこれ。半端ないや」

「肉のお返しとは粹な真似を。ありがたく食べるぞ」

「なんか料亭の出し物みたいだね、見た目が凄い」

「こりゃあ味も期待出来るぜ」

「いただきまーす」

「(ドキドキドキ。どうか、美味しいと感じますように。……
どうか、美味しいと感じますように!)」

「(大事な事だから二回言ったぜまゆっち!)」

黛さんの料理はどれも美味しく、風間ファミリーは皆大満足だった。

「あ、あれ! ? 何か話が端折られた気がしないでもないんですが!
?」

「気にしたら負けだぜまゆっち! 大丈夫、オラがついてる!」

黛さんがまた一人で何かやってるけど、キャップが何か言おうとしているのでスルーしておいた。

「で、なんか俺達に話があるんだろう? 後輩」

「は、はい……!」

「そういう目してるもんな。何か決意してる」

「！そうか、すまねえな」

「え？」

ガクトが何か気付いたようだ。……どうせ勘違いだろうけど。

「彼氏が欲しいってなら俺様は年下専門外なんだ」

「いきなり何勘違い発言してるんだお前バカか」

「バカでしょ」

「そうだった、ははは」

「辛い世の中になってきたなあ」

「世の中関係ないと思うよ」

「ねむー」

ワン子が眠りかけていた。

「おい、人の話は聞かないとダメだぞ」

そこでワン子の目の下にリップクリームを塗る

「！？わ、ちょ、やつ、スーソーするっ……」

「容赦ないなお前達は」

「友達だから何をいっても、何をやっても許されるのさ」

「大和わりい。借りた携帯ゲーム、データ消えた」

「ははは、俺の労力分を賠償してくれればいいよ」

「おい！全然友達な風に見えないぞ！！」

そんなやり取りを見て、黛さんが言葉を続けた。

「や、やっぱりいいな！」

「何が？」

「私の魅力がか？また妾が増えるのか」

「あれってファンじゃなくて妾だったのか……」

「……その空気が、凄く、いいです……。あの、あの……あう」

「まゆっちGO！ここは天下分け目だぜ！」

黛さんが携帯ストラップと漫才しているのをマジマジと見ている――
堂。

「……すうーはー……よし、言います」

深呼吸して落ち着いた黛が俺たちの方を見る、そして

「お願いします！！！」

そう言つて、頭を下げた。

「いきなり頭を下げられたぞ」

「悪い気はしないのは何故だろう？」

「薫、実はサド？」

そんな会話をスルーして薫さんは話を続けた。

「私も、皆さんの仲間に入れてください！！皆さんと一緒に遊びたいんです！！」

あの、私、ずっと地元で友達いなくて……それで……それで……今度こそ友達をつて思つてこっちに出て来て……それでも友達作れなくてそこで皆さんが楽しそうにされていて……私も、仲間に入れたらどんなに楽しいだろうって。

だからお願いします、仲間に入れてください！

私、食事作れます！掃除も自信あります！体力も人並みにはあります！

だから……だから……私を……仲間に入れては下さいますか！！」

薫さんの真剣な嘆願に、アイコンタクトで会話する一同。
そして、肩で息をする薫さんにキャップが話しかける。

「薫由紀江さんだったっけ？」

「は、はい……」

「今のままじゃ、仲間には入れられない」

「……………あ」

黛さんの顔が曇る。だが、キャップの話は終わっていない。

「仲間ってのは基本的に対等なもんだろ？土下座みたい你真似して、何でもするから入れて！とかで入るもんじゃないよな。普通に“面白そうだから私も入れて”でいいぜ」

「あ……………！」

黛さんの顔に希望が生まれる。

「お、面白そうだから私も入れてくださいー！」

そしてキャップは

「断る」

断った

「はあああうっ!?!」(ばたり!)

あ、倒れた。

「鬼かアンタは!」

「酷過ぎるぞキャップ!……実はS?」

「ハハハ冗談だよ。冗談。これから一緒に遊ぼう!」

「つか、この一年ショックで気絶してね?」

「きゅっ……」

「人工呼吸&介抱タイム!私に任せておけばいい。ワン子には刺激が強いから目を瞑ってアメリカの州の名前でも読み上げて待っていてくれ」

「おー。……ラスベガス……」

「それ州違う」

「モモちゃん、ワン子にこれはハードル高すぎ」

「だ、大丈夫です……わずかに意識が飛んでいただけ」

「チツ、持ち直したか。ま、何事もなければそれで何より」

「真っ暗だよー。目をあけていいかしら？」

「だめ」

「うん。開けない」

「……お前、犬をいじめてないか？」

「で、では、その……私も仲間で……い、いいですね」

「ああ！いいぜ！」

「………うううううう。嬉しい……ありがと……ごめい……ま……ずっ……」

「オーバーだな。そう無闇に泣いちゃダメだぞう」

「良かったな。歴史に残る瞬間だったな」

「で、それは何なのだ？」

皆が気になっていたことを黛さんにクリスが訊いた。

「それとは？」

「その携帯ストラップと会話しているようだが」

「ああ松風ですね。松風、ご挨拶を。しっかりと。しなやかに」

そういうと、黛さんは馬の携帯ストラップを手に乗せこちらに向けた。

「オッス。オラ松風。まゆっちの友達だぞ」

「松風は父上が作ってくれた携帯ストラップです。いつか友達ができて携帯が必要になったらと心をこめて……」

「で、今まで友達なしってことは、携帯は……」

「はい。必要が無いので買ってませんでした。うう」

「なんだか可哀想ね 안타って……」

「ワン子に同情されるなんて可哀想すぎる」

「どーいう意味よー！」

「なんでその携帯ストラップと会話してるんだ？」

「それはですね……」

要約すると……

部屋で誰かと話したくて松風に話しかけていたら、なんと松風が話しかけてきた！

松風に九十九神が宿ったのだ！！

「という設定なのね」

京は黛さんの説明をズバツと斬った。

「せ、設定…そ、そんな身も蓋もない」

「腹話術のようなものでしょう？」

「……それを認めたら松風が松風でなくなります」

「まゆっち。どこまでも優しい人間だ」

「今の、自分で自分を褒めてるってことよね？」

「そう考えるといい根性してるぞ、面白い！」

「これからは私達に遠慮なく話しかける」

「ありがとうございます」

「モモ先輩まゆっち気に入ってるな」

「ま、まゆっち！？」

まゆっちと呼ばれ、必要以上に驚く黛さん改めまゆっち。

「あだ名。ダメ？」

「い、いえいえ！いえいえ！是非！」

どうやら気に入ったみたいだ。ただ顔は怖かった。

「じゃあこれからまゆっちで」

「私はまゆまゆだな。まゆまゆ相当強いだろう？そこが気に入った」

「いえいえ、私などまだまだです！」

「かるーくパンチ連打するから避けてみる」

「エッ？」

「問答無用で、そろそろそろそろ」

「うわわ！..！」

姉さんがパンチの連打（俺にはちゃんと見えない）を放った。

それをまゆっちはひょいひょい、と避けていく。

「おお！見事！」

「ふ、ふーん。な、なかなかやるじゃない」

「全部見えたけど、全部避けれたかどうか」

「……成程」

「まゆまゆは、クリよりかはやや弱いつて感じかな？（今の状態ではだが……）」

「私など、まだまだです」

「黛十一段の娘が何を言っている」

「！父上をご存知なのですか？」

「国から帯剣許可をもらえた剣聖だろう」

「幻の十一段の娘……また大型新人だなあ」

こうして、風間ファミリーに黛由紀江ことまゆっちが入った。

更なる新メンバー（後書き）

いきなりですがアンケートをとります。詳しくは下を見てね。

百代「さーて、お約束の終了メッセージ、予告っぽくいつってみるぞ」

薫「次回、真剣で私に恋しなさい！〜暦の五月〜」大和の貞操の行方、ヒロイン決定」

京「そのポジションは私のものダツ！！」

薫「何か激しくデジャブを感じるのだが……………」

モロ「今回はアンケートらしいよ。何か大和のお相手を決めるんだってさ」

薫「というわけで大和の嫁候補を紹介していく。コメントはガクトとモロにお願いしよう」

キャップ「おい！何で俺を入れないんだよ！！」

薫「いや、だって……………ね」

ガクト「キャップがお子様ただけだろ。それよりも！大和の嫁だけじゃなくて俺様の相手も募集しろよ！」

薫「……………プロテイン？」

ガクト「フザケンナ！」

モロ「とりあえず、候補の人は名前を呼ばれたら自己アピールしてね」

薫「それでは始める！！エントリーナンバー1！川神百代！」

百代「舎弟の物は私の物、私の物は私の物。あと世界の美少女も私の物」

モロ「どんなジャイアニズムなのさ！」

ガクト「ダメだこの人早く何とかしないと」

薫「エントリーナンバー2！川神一子！」

一子「川神院師範代に、アタシはなる！！」

モロ「ワン子らしいといえばワン子らしいけど」

ガクト「色恋沙汰じゃねーな」

薫「エントリーナンバー3！椎名京！」

京「大和の鞘！大和の剣を受け止める！！」

モロ「どんなアピールなのさ！？」

ガクト「いきなり下ネタでくるとは……………」

薫「エントリーナンバー4！黛由紀江！」

由紀江「ふ、不束者ですが、よろしくお願いします！！」

ガクト「それちょっと違うくねーか？」

モロ「うん、違うよね」

松風「そんなことねーよ！まゆっちの清純さが滲み出てるだろーが！！」

薫「エントリーナンバー5！クリステイアーネ・フリードリヒ！」

クリス「騎士の誇りに賭けて、非道の輩は許さない！！」

ガクト「あれ？大和アウトじゃね？」

モロ「いや、大和はそこまでじゃないと思うよ」

薫「とりあえず以上だが、その他の女子でも良いそうだ。期間は特
に設けないので気が向いたら感想と共に書いてほしい」

キャップ「女と付き合うとか何がいいんだ？疲れるだけじゃねーか
」よ

ガクト「このお子様め」

モロ「キャップはそのまま純真でいてね」

夢、時々友達（前書き）

決定的な原作離れ！

とはいっても原作に沿っていくんですけどね。

夢、時々友達

4月27日月曜

あの時から、私は変わった。いや、変わらなければならなかった。

周りを自分に近づけさせない。もし近付いてきたら、どうなるかわからないから。

病院の医者、看護師、私を引き取りに来た義父、義母、義妹、預けられた武道寺の総代、師範代、誰であろうと遠ざけた。

信用できないから。いや、してはいけないから。

私の周りは敵だらけ。私は孤独。そう思った方が楽だった。いや、思わなければいけなかった。

そんな時だった。彼女に出会ったのは

「なあお前、強いだろ？」

「うう……」

いつものように威嚇をする。これで大抵は逃げていく。逃げなかつたとしてもいい顔はしない。なのにその子は違つた。

「ハハハ、やっぱリスゴイなお前。私と同じ齡くらいでこんなに力を感じたのは初めてだ」

嬉しそうに笑つたのだ。

初めてだつた。

威嚇した相手が心底嬉しそうな顔をしていたのは。そしてその子は笑いながら近付いてきた。

彼女が私の反撃範囲に足を踏み入れた瞬間、私は彼女に攻撃を仕掛けた。

それと同時に、彼女はこう言った。

「お前、私と戦え！」

「ん……」

いつも通りの時間に目が覚める。それにしても懐かしい夢を見たものだ。

「起きるか……」

眠い身体を目覚めさせる為に顔を洗いに行った。

朝のHR

「今週は希望進路調査がある。どんな事でもいいから自分のしたい事を書いて提出しろ。あと、二階の窓ガラスが割られていた。ウチでは珍しい事件だが何か知っているものがあれば知らせるように。以上」

梅先生が教室から出て行った。その途端に教室中が騒ぎ出す。

「進路希望調査か……どうしようかな……」

「俺は冒険家だな。出世に生きるのは疲れるぜ」

「俺様、梅先生の旦那って書くぜ」

「勇者がいるぞおおおおおっ!!」

「俺は女体カメラマンだ！これ以外、俺に進む道はねえんだ！」

「そんな格好つけていっても内容がねえ……スグルは？」

「物理学者だ。いつかディスプレイの向こう側に行く為にな」

「動機理由がスゴイ……」

「アタシは当然、川神院の師範代よ！」

「自分は軍に入るつもりだ」

「私はすでに大和の専業主婦に決定、と」

「していないから」

「私は就職ですかね、チカちゃんは何んて書きます？」

「とりあえず短大出て遊んで25歳くらいで結婚して幸せな家庭を築くかな？相手はイケメンで、優しくて、モデル体型である程度筋肉ついてて、身長は170は欲しいな。年収は当然1000万円であらう。家事とか万能で、家の事とか子育てとかもぜんぶやってくれる人！」

「そんな奴、いるわきゃねーだろおが！！」

「いきなり何よ！つーかアンタらオタの崇拜してるアニメキャラのほうがいるわけないでしょ！」

「そんな事は子宮から顔を出した瞬間から承知している。だから俺はモニターの向こうに行くかモニターから出てくるのを待っているんだよ！」

「はあ？本格的に頭おかしいんじゃないの」

「近寄るなスイーツ（笑）！性病がうつる！皆わかるはずだ！こういう女は存在してはいけないと！メランコリックな世界へ還れ！」

「うわぁ、その発言も童貞くさいわねえ。さすがキモ男三人衆の一人」

いつものような喧嘩を見ていると、クリスが喧嘩に介入した。

「やめるんだ二人とも。同じ寺子屋で学ぶ者同士喧嘩はよくない」

「寺子屋ときたか」

クリスの介入で二人は言い合いをやめた。

「直江大和、何故今の喧嘩を笑って見ていた？」

「日常茶飯事だから。いつものことだよ」

「それにしては後半酷い言葉が出ていた」

「それだけ遠慮がないって事さ」

「理解できんな」

「理解してもらわなくても結構」

「ムッ」

「む」

クリスとのわだかまりはなかなか解けなかった。

それにしても小笠原さんには悪いけど、確かにそんな奴はいないだろう。そうして周りを見渡すと薫が目に入った。薫はどうだろうか？流石の薫でもあの条件には当て嵌まってないだろう。

イケメンかどうか……女と間違われるが、十分イケメンに入るだろう。誰かにエレガンテ・クワットロ（訳：イケメン四天王）候補だと聞いた気がする。

優しいかどうか……まあ優しいの部類に入るだろう。

モデル体型かどうか……一見華奢にも見えるが、実際は無駄な肉がないほどに鍛えられている。かといってガクトのような筋肉ではない。身長は確か173だったか？

年収1000万……年収は未定だがアイツの能力なら頑張れば1000万ぐらいいけそうな気がする。

家事・子育て……家事は全部できるし、子育ても何だかんだいいつつやりそうだな。

……あれ？全部当て嵌まってね？

……まあ誰も気付いてないようだし、黙っておこう。

それにしても将来の夢、か……

昔は大きな夢を持っていた。とても大きな夢……

それが今じゃ現実を知り、イカサマとか策によく走るようになった。昔の俺が今の俺をみたら、どう思うんだろうか……？

昼休み

「さーてクリ、お昼ご飯よ。よつと」

「ああ一緒に食べよう。京も」

「言われずとも食べるよ。今日も赤飯めでたいな」

「京のは辛子でご飯が赤くなってるだけでしょ」

女性陣が教室で仲良く弁当を食べ始めた。

「クリはお弁当持参なのね。っていなり寿司？」

「ああ、はまってしまったんだ！INARIに！！犬は自分で作っているのか？」

「違うわよ。川神院には料理専門の人がいるからその人にお弁当を作ってもらってるの」

「私は自分で作ってるよ。今日は明太子に唐辛子を入れてみた。麻婆力レーを参考に」

「いなり寿司おいしそうね……煎りこんにゃくとウィンナー一個と
いなり一個を交換！」

「あ！何をする！」

「ぐまぐま……うん、美味しい！」

「今のままでは貿易として不公平だ。いなり一個には、煎りこんにゃくとウィンナーと玉子とトマトが妥当だな」

「あ！取りすぎよ！ならもう一個もらっわ！」

「ああー！何をするんだこの犬！！」

ワン子とクリスの弁当の具争奪戦が始まった。

「こらこら二人とも。そんな人の弁当取り合っんじやない」

それを見た薫が仲裁に入った。

「しかし犬が自分のいなり寿司を　　！」

「クリがアタシのおかずを　　！」

「はあ……二人とも少し私のを分けてやるから落ち着け」

「いいのか？」

「まあこんな事で勝負事になるよりかはいいだろう。好きなのを選

べ

そうして薫は弁当を差し出す。

「？薫の弁当は犬と同じ川神院のじゃないのか？」

「ふふんっ、薫は自分の分は自分で作ってるのよ。アタシはこのアスパラの肉巻き頂戴」

「何故犬が偉そうにしているんだ。あ、自分はこの煮物をもらおう」

「薫は甘いね」

「京もいるか？」

「じゃあそのキムチとこの唐辛子ご飯をトレードで」

「いや、唐辛子ご飯は遠慮しておく」

「というか、京の弁当は赤くてどれが何だかわからないぞ」

「おいしいよ。クリス、食べてみる？」

「あ、ああ。それじゃあ、一口……」

クリスが京の真っ赤なナニかを口に入れた。入れてしまった。

「……ッ！！辛ッ！！辛い辛い！！」

「オーバーだなあ。はい飲み物」

「ありがとう京。ごくごく……」

京から渡されたモノをクリスは一気に飲む。飲んでしまった。

「くくくッ!? これも辛いッ!」

「麻婆豆腐」

「飲み物ではないだろう!」

「麻婆豆腐とカレーは飲み物でしょ」

「違うから京。はいクリス、これを飲むといい」

「す、すまない薫。ごくごく……」

そういつてクリスは薫から渡された飲み物を飲む。

「やっぱり薫は甘いね。あとこのキムチには辛さが足りない」

「そんな事はないだろう。あとキムチに唐辛子かけるんじゃない」

そんな女性陣 + 薫の様子を俺はモロとガクトとメシを食いながら見ていた

「……ああいつの見てると薫ってやっぱり母親っぽいよねえ」

「俺様もそう思った」

「ガクト、朝もハンバーガーじゃなかったか？」

「おう！俺様といえはマッグだろ。朝ギガトマト、昼ギガテリヤキ、夜ギガタマゴ」

「あきらかに致死量だぞ」

「とにかく俺様肉汁が欲しい。そういう点ではマッグ最高」

「でもそんな食生活してたら薫に……」

「ガクト、ハンバーガーだけだと身体に悪いだろう。野菜も食べた方がいい」

「うお！？俺様のほうにまで来た!？」

やはりオカンっぽかった。

放課後

別段静かではないが騒がしくもない放課後の教室。まだそこそこの人が残っている時間帯のことだった。

「チクシヨウ……チクシヨー!!」

ヨンパチが叫びながら教室に入ってきた。

「どうしたのよ、サル」

「腹が立つことが二つあった。一つは、カワイイ女の子のスカートが風でめくれたら中身がスパッツだった」

「お前は今、泣いていい」

「なんだいつものごとくか……心配して損した」

いつか捕まるんじゃないか？ヨンパチ

「で、もう一つが“賭場”で大負けしちまって……」

“賭場”か……学校で禁止されてるが、まあ教師は黙認している感がある。

「今日は賭場開いてるのか。で、何で負けた？」

「麻雀だ。大和お、仇とつてくれよお！！」

「勝つ日もあれば負ける日もある。次ガンバ」

「正論だな」

「それがよお、相手は隣の2・Sの女でさあ。さんざんバカにして勝ちやがって悔しいんだ！！」

「アンタ馬鹿にされ慣れてるでしょうが」

「俺達をバカクラスって言いやがってさ！見下したんだ！優等生だからって！」

「腹立つわね。2・Sのヤツラならいいぞ」

「カワイイだけに余計ムカツクっていうか」

「ほう。とりあえず見るだけ見てみるか」

「お、行くんだ。つかカワイイに反応したね」

「京は部活、キャップはバイトか……モロ、ついてきて。場合によつては一緒に打って」

「僕で大丈夫？正直自信ないな」。薫のほうがいいんじゃないの？」

「私は麻雀のルール覚えていないから無理だな」

「あ、そういえばそうだったね」

「まあ何とかなるんじゃない」

「じゃあ大和、私は先に帰るよ」

「そうか、迷わないように気をつけるよ」

「川神学園（川）と川神院までの道は流石に覚えたから、寄り道しなければ大丈夫だ」

「寄り道したらダメなんだ……」

「それじゃまたな」

そうして、薫と別れて教室を出て行った。

大和達と別れて教室を出る。

「……麻雀のルール覚えるべきか……？」

ちよっと悩んでいた。

「こんにちは、薫君」

「うん……？冬馬じゃないか」

葵冬馬、成績優秀で学年一位。顔も良く、軽快なトークで女子から人気があり、川神学園が誇る（らしい）エレガント・クワットロの一人だ。

「よ、臯月」

「やつほー、元気か？」

「準に小雪も」

ハゲでロリコンの井上準と不思議系アルビノの榊原小雪もいつものように一緒にいた。

この三人は皆、親が葵紋病院の関係者で、冬馬が院長の、準が副院長の、小雪が幹部の人の子供である。

いや、だっ..たというべきか。

今、葵紋病院は存在しない。

数年前に葵紋病院が何者かの襲撃を受けた。未だにその襲撃犯は不明である。

幸い、重傷者や患者への被害はなかったが、当初事情を聞きに行つた警察は予定外の資料を見つけてしまった。

それは、行政との癒着や医療品等の横流しの証拠となるものだった。

この時、葵紋病院の黒い裏が表に出てしまったのだ。

当時、院長の息子の葵冬馬と副院長の息子の井上準はそれに関わっていた為、警察に連れて行かれた。

ただ、二人共その時はまだそこまで深く関わっておらず、未成年という事もあり、軽い刑で済んだ。

しばらくして学校に戻ってきたが、犯罪に関わっていた事など何の

その、女子人気は落ちていなかったらしい。これも人徳か。

葵紋病院は上層部がほぼ全て捕まったので、今では別の病院になっている。

跡を継ぐ病院がなくなった為、葵冬馬らは友人の九鬼英雄によって九鬼財閥へ勧誘されており、すでにその誘いを受ける事を決めているそうだ。

ちなみに二人がいない間、小雪の面倒は九鬼財閥が見ていた。凄まじいな、九鬼財閥。

私がこの三人と会ったのは約一年前、川神学園に入学してからすぐだった。

放課後、私が教室にいた時に冬馬が現れて話しかけてきたことが始まりだった。葵紋病院のことは知っていたが話をしてみると結構気が合った。

二人で話していると、今度は小雪と準がやってきて話に加わった。

そんな些細な出会いだった。

「薫、マシユマロいる〜？」

「ああ、もらっしょ」

小雪からマシユマロをもらっしょ……うん、美味しい。

「こうしていられるのもあなたのおかげですよ。私たちがいない間、ユキの面倒も見てもらっていますし、ありがたい話です」

「ユキがこんなに懐くのって珍しいんだがな」

「うん、僕ちゃんとお世話されてるよ」

二人は、時々ではあるが、すでに九鬼財閥の一員として活躍していたりもする。

いつもは小雪もそれに着いていくのだが、時々連れて行けない時がある。

そんな時、小雪は私の所にやってくるのだ。

川神院にまで来ることもあるので、川神院では『白い少女の霊が遊ぼー……遊ぼー……』と遊び相手を求めている、彼女に見つかつたらそのままあの世に引きずり込まれる……』などの怪奇現象として受け止められている、らしい。いや、実体があることに気付け修行僧達。

「別に構わないさ。それにしても言いすぎじゃないか？私がいいるのは彼女の遊び相手になるだけだぞ」

「それだけではないのですがね。そもそも切っ掛けは貴方でしょうっ」

「何のことかわからないが」

「……そうですか。ところでどうです？一度私と付き合ってみませ

んか？」

「断る。私は男だぞ」

「私は男でもいけますよ？」

「冗談だろう？」

「真剣マッですよ」

「……………」

私では判断がつかない。準の方を見る。

こういう時は彼の判断を聞くに限る。

冗談でありますように。

冗談でありますように！

「気をつける、今の若は真剣マッっばいぞ」

残念、願いは届かなかった。

「……………だったら尚更だ。私にそっちの気はない」

「それは残念です。っと、すいませんが、そろそろ私は行かせてもらいます」

「用事でもあるのか？」

「ええ、女の子を待たせるわけには行かないので」

デートする相手がいるのに付き合おうとか言ってきたのか。しかも男に。……………相変わらず節操のない……………。

「……………さっさと行ってやれ」

「そうします。それではまた後日、デートでもしましょう」

「断る!!」

カ一杯断っておいた。

私の返事を聞いた冬馬はいつものような笑みを浮かべながら去っていった。

「さあ薰く、僕と遊ぶく。ついでに準も」

「俺はついでかよ」

「まあ、特に用事もないしいいか。で、何して遊ぶんだ?」

「んーっとね……………リアルおままごと!痴情のもつれで最後はみんな死んじゃうの!」

「そんな遊びするんじゃないありません!」

「僕が精神的に参ってる専業主婦の妻でく、準が上司にこき使われて不満が溜まってるサラリーマンの夫でく、薰がお金目当ての準の

「愛人役ね〜」

「私は女役なのか!?!?」

「さー、はじまりはじまり〜」

結局、着物を着た女子（あれは確か……不死川の御令嬢だったか？）が泣きながら走ってくるまで小雪の希望通り、リアルおままごとをしていた。

夢、時々友達（後書き）

りゅ、竜舌蘭 の取り潰しだと……!?

やっちまったものは後戻りはできない。

後悔はしてる。反省はしない。

ていうか、刑事事件として葬くんへの処罰はどうなんだろう？適切なのだろうか？

とりあえず感想がほしいです。

百代「さーて、お約束の終了メッセージ、予告っぽくいつてみるぞ」

ワン子「次回、真剣で私に恋しなさい！〜暦の五月〜『白い亡霊』」

キャップ「白い亡霊って何だ？面白そうだな」

百代「川神院にいるという幽霊だ。何やら白い美少女が『遊ぼう……遊ぼう……』とカワイイ声で油断させて馬鹿な男を誘き寄せてはその男を呪い殺すとかいう恐ろしい幽霊だ」

京「ガクトとかすぐに引っかかりそうだね」

ガクト「俺様がそんなもんに引っかかるかよ！年上か同い年ならわからんがな！」

モロ「威張って言う事じゃないからね！」

大和「姉さん大丈夫？幽霊とか苦手でしょ？」

百代「殴れないからな。でも呪い殺す相手が男限定だから何の問題もない。それなら白い美少女を見てみたいなあ」

大和「姉さんも対象内な気がする……………」

ワン子「アタシが聞いた話だと、その女の子と会ったらもらえるボールを七個集めたら何でも願いが叶えてくれる光の龍が現れるらしいわよ」

モロ「それどこドラゴボールさ!？」

クリス「なんと!あの龍の話が本当だったとは……………やはりすごいな日本」

モロ「今のどこに信じる要素があったのさ!?!そう軽々と信じないですよ!?!」

キャップ「面白そうだな。今度俺達でその白い亡霊とやらを調べてやるっぜ!?!」

クッキー「その時は僕も協力するよ、マイスター。記録なら任せておいて」

まゆっち「あれ?薫さんどうしたんですか?」

薫「……………いや、何でもないよ……………」(モモちゃんもワン子も気づいてないのか!?!実体があることに気づいてないよ!?!)」

薫の容姿（前書き）

今回は少し短めです。多分

薫の容姿

4月28日火曜

朝の登校時、とある試みをしていた。

「ファイトだ、ワン子」

「おおー！まだまだ行くわよー！！」

ワン子が朝引つ張っていくタイヤの上に私が乗る。

そうすることでワン子は修行、私は道に迷うことなく登校できる。ついでに瞑想しておこう。

「えっほ、えっほ、えっ
！！」

いきなりワン子が加速し始めた。

「とりあえずタイヤの上で体勢をキープ」

お？これはこれでなかなか。

そんなこんなで着いた先は通学路の河原。そこには風間ファミリーの面々がすでにいた。そうか、誰かが犬笛を吹いたのか。

昔、風間ファミリーの面々が面白がってワン子に仕込んだ結果、この犬笛を吹けばワン子がやってくるようになった。恐ろしいのはその行動がワン子の意思と関係なくされるといふことだろう。ちなみ

に私も常備している。

「おはようー！呼んだのだねー？」

「おっと、危ない。皆おはよう」

急に止まられるとこっちが危ない。うまくバランスを取る。

「名付けて犬笛」

「成程。そうして呼べば来る辺りさすが犬」

「すぐに受け入れたね〜この怪奇現象を」

「目に見えるものは信じるタイプだな」

「犬をいつでも呼び出せるから……なんだ？」

「ワン子、冬は湯たんぽ代わりになるよ。足ではさめば足が冷えない」

「ただし寝返りうたれたら布団の中で怒るわよ」

「喧嘩相手に不自由しないだろ？」

「自分はそのような血気盛んなキャラではない」

「ワン子、クリスが朝から勝負したいってさ」

「おいー！」

「なーんだ。クリも元気余ってるんだ。いいよー！」

「元気はあるが、お前と交戦したいとは思わん」

「言い訳好きだねクリ。それがお国柄なの？」

「フフ、何で勝負するか決めようか」

なんだかんだで息が合いそうな二人であった。

「というか、薫は何でタイヤの上に？」

「利害が一致したからと言っておく。で、モモちゃんはさっきから真剣な表情で何考えてるんだ？」

「ああ、もしも私が男だったら結婚するのはこの中限定で誰になるのか、考えていた」

「少しでも心配した俺様がチヨイバ力だった」

「人間シリアスな顔してても、意外とこういっどーでもいい事考えたりするよね」

「ああ、よくある」

そんな話をしていると橋のたもには二人の男が立っていた。

「兄者！あれが川神百代じゃけえのお！」

「ウム。噂に違わぬ美しさ。満点で合格だな」

「今日はゴツツイ二人がいるぞ。挑戦者か？」

「川神百代とお見受けするけんのお」

「そうだが」

「我らは地元では知らぬ者のいない仁王兄弟。道場の世継ぎを作るために強い嫁を探している」

「川神百代。お前俺達と来い。妻になるけんのお」

「ガクトが二人いるみたい。筋肉バカっぽいね」

「ふん。俺様の方が断然知的でナイスガイだろ」

「五十歩百歩だな」

「純粹な勝負か、嫁探しか。どっちだ？」

「勝負なぞしなくても俺達の圧勝だけんのお」

「嫁探した。俺と弟の相手をする嫁のな。ワハハ！」

「何だこの無礼な男達は。挑戦者といえぬ」

「だから挑戦者じゃないんだよ」

「ここは俺様の見せ場だろ。追い払ってやる」

そう言つて、ガクトは一步前に出てくる。

「ああん？学生が俺に勝てるか………思つてんのかコリアー！！！」

自分に勝てると言つているガクトにイラついたのか、仁王兄がガクトに拳を放った。

「………痛え………けどそれだけだな」

「何？」

「お返しだコリアー！」

「ぐはぁっ！？」

ガクトの強烈なボディブローが相手に命中した。

「て………てめえ………」

「足にきてるぜ？ふふ、俺様の見せ場見せ場」

「流石しよっちゆう私達に攻撃されてるだけあるね」

「耐久力ハンパなくなつてるよね」

「そこ余計な横やり入れんじゃねーよ！！！」

「ねえモモちゃん、もう一人は私がやっていいか？」

「ん？まあいいが、珍しいな」

「まあたまには軽く動かないとね」

それにイラっときたし……

「というわけでお前の相手は……」

「ははは、何だコイツ貧乳じゃけえの！」

貧乳 〃 女

「（プチンッ）」

ナニかが切れる音がした

「あ、アイツ地雷踏んだ」

「あ、あわわわ……」

「しかもワン子の様子的に、相当やばいよ」

「犬は自分よりも強い者を本能的に感じ取るっていうしねえ……」

「？何がだ？」

「そこは空気読もうよクリ吉」

「こら松風、そんな事言うんじゃないやありません」

周りが何か言っているがどうでもいい。

「乳の大きくないオナゴはオナゴじゃ」

「ダアアレが女だああああ！！！！」

一瞬で顔に6発、腹に4発、股間に2発叩き込む！！

「グベエツ！？」

最後にアツパー！！

「グフツ！！！！」

そうしてクズは多馬川に落ちていった。

「まあ、殺しはしない。殺しは、な」

「……なあ犬、今の、見えたか……？」

「……も、もちろんよ！！か、薫もなかなかやるじゃない！！」

「……攻撃箇所は見えただけ、何回したかわからなかった……」

「……も、ものすごく速かったです……！」

「ほーう、薫のやつ、腕上げてるじゃないか」

「……なあ大和」

「……どうしたキャップ」

「……俺、なるべく薫を怒らせないようにしようと思う」

「……奇遇だな。俺もそう思ったところだ」

ふう、ちょっと落ち着いてきた。

「……どうよ！勝ったぜお前ら！！ってどうした？」

どうやらガクトの勇姿は誰も見ていなかったようだ。

「ガクト空気読みなよ」

「時代は既に薫がブチ切れた時のヤバさだよ」

「ぬあー！せつかく俺様が倒したのに目立たん……！」

「まあ元気だせ。ほら炭酸ぬけたコーラやるよ」

「鞆の中に入れっぱなしだったものなんかいるか!」
報われないガクトだった。

三時間目終了後、休み時間

教室を見渡すとクリスがクラスの女子と話をしているのが見える。
クリスはクラスメイトと仲良くやっているようだ。

「まあ大和にはまだ刺々しいが」

「着替え見られただけで普通怒るかね?」

「うん、普通怒るね」

「当然だな」

「だよー」

「それだけってワケじゃないでしょ?」

「俺とクリスの思想の問題かな」

それがある意味一番厄介なんだが……まあ何とかなるだろう。

「1、2、3、4、5、6、……」

ワン子はマイペースにダンベルを上げていた。感心感心。

その時、私のケータイが鳴った。

「？電話？」

ケータイのディスプレイには皐月智晴（父）の文字が

「？誰からだ？」

「父上からだ。ちょっと出てくる」

断りを入れてから、廊下に出て電話に出る。

「父上、どうかしました？」

『えっと、ちょっと言いにくいんですけど、“曆”の話です』

“曆”……仕事か。

『前に護衛した方からの紹介で、今日の夕方から木曜の昼まで国内の護衛をお願いしたいと依頼が来ました。依頼主は霧夜カンパニー総帥の御令嬢にして重役の霧夜エリカ。なるべく護衛に見えない護衛が欲しいとの事です』

「つまり、心当たりがあって、そいつの弱みを握りたいわけですね？」

『その通りです。本来、休業中で学校生活を送っている薫に仕事を頼むのは心苦しいのですが……』

「大丈夫。祝日はさんでいるから特に問題ないですよ。でもちゃんと給料払ってくださいね」

『それはもちろんです。では昼休みにでも川神学園に迎えを出しますので』

「了解、それでは（プツッ）」

仕事は別に嫌いではない。それに噂通りなら霧夜エリカという人物は私がコネを作っておきたい人物だろう。

「さて、お仕事だ」

まずは早退の連絡だな。

「何だったんだ？親父さんからの電話？」

「ちょっとした仕事が入ったから昼休みに迎えをよこすとのことだ」

「仕事？」

「というところで早退の連絡をしてくる」

さて、仕事の時間だ。

おまけ

昼休み

スピーカーから音楽が流れ始める。

今日は火曜日。ラジオの日だ。耳を傾けようか？

【選択肢】

>はい

いいえ

『ハアイエブリバディ。ケータイの待ち受けを自分の顔写真にして
いるナルシストはいないかな？今週もラジオ番組LOVEかわかみ
が始まるよ。パーソナリティはこの俺、スキンヘッドこと二年、井
上準』

『人生、百花繚乱酒池肉林！三年、川神百代だ』

『いやー最近はさらに暖かくなってきましたね』

『そつでもないな』

『話広げてくださいよー！まあいいや、メール読みまーす』

『今は気分がいいから私が読んでやろう。』敬愛するモモ先輩とついでに病院に行った方がいいと思う準さんに質問です』

『小児科なら喜んで』

『（バキッ）次そんな不穏なこと言ったら骨はずすぞ。えーっと』
気になることがあるのですが教えてください。2・Fの皐月さんって男なんですか？女なんですか？』だとさ』

『おう、一応言っておくが男だ。しかし本人に聞いたらヤバイから気をつけた方がいいぜ』

『ああ、温和なアイツが真剣ツマでキレル。で、攻撃してくる。こんな感じでな（バキッ！）』

『痛ッ！？何するんすかモモ先輩！！』

『うっさいな、さっさと次のメール読め』

『理不尽だな、ホント。さて続いているメール、』皐月くんって本当に男なんですか？髪とか肌とか綺麗だし、美人だし、女として自信がなくてしまいます』……さっきも言ったけど彼は本当に男だよ』

『今回は薫のことばっかだな。確かに私も思わず間違いかねないから気持ちはわかるぞ。風呂上りの薫なんて私が思わず襲いたくなるくらいに色っばいぞ。そうは思わないか？ハゲ』

『いや見たことないし何とも言えませんねー。まあ、あと10年若ければわからなかったですけど。……?ギヤアアア!?!』

『不穏な発言すんなって言ったばかりだろうが。じゃ、曲流すぞー』

……………内容傾倒してる上にバイオレンスなラジオだった。

薫の容姿（後書き）

百代「さーて、お約束の終了メッセージ、予告っぽくいつてみるぞ」

クッキー2「次回、真剣で私に恋しなさい！〜暦の五月〜『開眼、クッキーの新機能』」

キャップ「そうなのか。で、どんな機能なんだ？」

クッキー2「ふふふ、何を隠そう魔法を見れば解析して私自身がその魔法を使えるようになったのだ！」

モロ「非科学すぎでしょ！？」

キャップ「面白そうじゃねーか！使ってみるよ」

クッキー2「いいだろうマイスター、と言いたい所だが、私自身は魔法を見た事がないのでその機能を使うことができない」

キャップ「何だよ！それじゃ役に立たねーじゃねえか」

クッキー2「ほう、私を愚弄するか。お仕置が必要だな」

キャップ「あ、やめる！」

クッキー2「もう遅い！！」

キャップ「うぎゃー！！」

モロ「相変わらず仲がいいんだか……」

依頼（前書き）

話が木曜日まで飛びます。

依頼

4月30日木曜

「今回はホントありがとね。思った以上に成果が出て正直驚いたわ」
「ありがとございます」

今回は霧夜さん本人を餌にして敵を炙り出す為に雇われたわけだが、その思惑通り刺客が襲ってきた……何回も。そして全ての刺客をクライアントに気付かれないように倒してある程度情報を吐かせて、さらにその日の最後に彼女の部下に引き渡してさらに吐かせた。そうして背後関係を探ったらその相手は彼女の親戚だったのは驚きだ。しかも一人ではなく二、三人。ただ……

「これで私の総帥になる為の手札が増えたわ」
「そうだね」

その事実には驚かない彼女やその秘書の佐藤さんにも少し驚いたのだが。

そんな感じで時間は経ち、依頼はもうすぐ終了となる。

「自分で頼んどいてなんだけど、最初に見たときには少し不安になっちゃったわ」

「そうだよね。あんまり強そうに見えない人が来たから私も驚いちちゃったよう」

「でも、その容姿といい強さといい、貴方の事気に入ったわ。どう？私のもにならない？」

どこからともなく薔薇を出して私にそう問いかける。……どうやって出しているんだろうか？

「遠慮します」

「そうきっぱり言わなくてもいいじゃない」

『私のもの』というのが“美少年ハーレム”も含まれているという事を知らなければこうもはっきり言わなかったのだが……

「まあ心変わりしたらいつでも言ってちょうだい。貴方ならいつでも迎えてあげるわ」

「エリー、そろそろ行かないとまずいよう」

「それじゃよっぴーも呼んでるし、またね」

そういつて護衛対象、霧夜エリカとその秘書、佐藤良美は立ち去っていった。

さて、昼過ぎからになるが、学校へ行くとするか……

放課後

「まゆつち見つけてきたよ！ 剣道部覗いてたわ」

「クリスマス連れてきた。茶道部でお茶飲んだ」

「薰連れてきたぞー！ 街で迷子になってた」

「よつしこれで10人全員揃ったな。喜んでくれ！ 久しぶりに依頼が来たぞ」

「依頼か。それはいいな。食事代が浮く」

「あの、依頼というのは？」

「ああ、それは……」

依頼とは、風間ファミリーは部活の練習試合の助っ人などで雇われる時がある。それを依頼と呼ぶ。つまりは校内専門の何でも屋だ。報酬は食券で受け取る。

「今回は一人上食券9枚」

「おお、リッチ！ 結構規模のでかさうな依頼ね」

「討伐クエストだな。“窓割り犯人を叩き伏せる”」

「それ、依頼に回ってきたんだ」

「よくもぎ取ってきたな」

「もぎとる？」

「それはだな……」

他にも何でも屋をやっている連中は多く、依頼はまず競りにかけられる。それで競り落としたチームが責任をもって依頼を果たしていくのだ。

今回は2・S担任・宇佐美巨人、通称ヒゲからの依頼で、学長が出張するには小さい事件だから何とかしろ、と上から言われたらしいが、本人が面倒らしく依頼に回してきたようだ。

「情報をまとめる。敵は3、4人のグループ。逃走は自動車を使用。警備員が音を聞いた」

「それで十分だ。今夜早速警備しろってことだな」

「武器は教室のレプリカ使っていていいってよ」

「やつほー。存分に暴れられるじゃないの」

「ふふふ。これで少しは楽になるぞ」

姉さんは真つ先に自分の報酬を受け取った。

「モモちゃん、私が弁当作っている分食費は浮いているはずなんだから……」

そういいながら薫も取った。

それに続き、皆食券を取っていく。

ただクリスは、参加はするが報酬は入らないといったのでクリスの分はみんなに分けることになった。

「キャップ、作戦会議よろしく」

「A棟、B棟とやられてるから次の狙いはC棟だろ」

「私が気を探つてやるさ」

「おそらく相手はバット系の凶器を持つてるから単独ではなく二人ツーマンセル一組で行動。こんなもんか。軍師大和、なんか意見あるか？」

「ツーマンセルの組み合わせだが、キャップとワン子、クリスと俺、ガクトとまゆっち、それに姉さんとモロって感じかな」

「大…和……？」

はぶられた京がこの世の終わりのような顔をした。ちなみにもう一人、名前を呼ばれなかった薫はノーリアクション。この差は何だろうな。

「いやいや京これ作戦。お前にはヒソヒソ」

「納得した。任せて」

「私は？」

「薫にはヒソヒソ」

「……了解」

「モロは情報の伝達だ。戦闘はモモ先輩に任せておけ」

「言われなくてもそうする、というかそうなるよ」

「守ってあげるぞ、モロロ」

「この絶対的な安心感が、逆に男として情けない」

「行くぞ。俺達の学園を荒らす奴は容赦しないぜ！」

「ああ。遊び場所を間違えた事思い知らせてやる」

クリスやワン子がレプリカ武器を装備した。

「しかし、五人とも武道やってる女子ってすごいな。武士戦隊サムライレンジャーと名付けよう」

「私はブラックだろうな」

「レッド！アタシレッド！クリ、イエロー確定」

「待って！辛いモノ……カレーとか好きな京がイエローというのも……」

「そーいう深いこだわりはいらわないわ」

「良く分からないがイエローは正義なのか？」

「5人ともジャスティス」

「ならば色などにこだわらん。イエローで結構」

「私は静かなる色、青を希望」

「あ、あの……そもそもどういった内容のお話ですか？」

「そんなまゆまゆは癒し系だからグリーンだな」

「だはははは！よく考えたら受けるな！」

「何がおかしい？」

「5人女子なのにピンク似合うのが誰もいないとか！つい笑っちゃうだろこれ！はははは！」

ガクトが笑っていられたのは三秒かからなかった。

「丁度いい肩慣らしになったな」

（思っても言うなよ。南無阿弥陀仏）

夜

標的がヒョコヒョコと侵入してくる。

「敵は四人……丁度いいことに各階に分散したな」

『つて、モモ先輩言ってるよ。GO』

モロから携帯で連絡がきた。

各組が迎撃に動き出す。

S i d e c h a n g e 軍師 > > T h e G o d

4階

「フンフンフン　ンー今カラガラスをブレイク」

「ブレイクするのはお前なんだけどな」

百代が犯人の背後から現れた。

「!?!?見タナ!!!」

「川神百代。この名前、悪夢とともに思い出すがいい」

「パンチをクラエ!シュツ!シュツ!」

「拳というのは、こつやって突くものだ!」

百代は犯人の拳よりも速く、強いパンチを放った。

「オーウノーウ！」

犯人は一撃で倒れた。

「あまりにも弱すぎる……」

百代は相手の弱さに呆れる。

「あまりにも強すぎる……」

モロは百代の強さに呆然とする。

3階

「な、なんだYOお前等」

犯人の前にはガクトが立ち塞がっていた。

「この生徒だよ。てめえこそ何モンだコラ」

「ぼ、ボブ君！ボブ君！ピンチだYO！」

少年が助けを呼ぶ。しかし来る気配がない。

「叫んでもお仲間ならもうとっくに寝てると思うぜ」

「そ、そんな。あの鬼強いボブ君が嘘だYO！」

「観念してお縄になれ。俺様を怒らせないうちにな」

「わ、私などが差し出がましかつたでしょうか？」

「いやサンキュ」

「ほっ、よ、良かったです・・・お役に立てましたあ」

「.....」

「.....？」

「わっ！」

「ひゃあう！？あわわ、や、やはり何かまずかったのでしょうか？
こゝ呼吸することは許してください」

「こんな小動物みたいな一年が強いとはなあ」

「あの、あのあの私何か至らなかつたら直します！成績表にも頑張り屋さんって書かれてましたから！」

「オラからも言うておくから。遠慮なく言えー」

「お前が遠慮してんだろが！」

「はわわわわ」

2階

「よし、やってやる！これはただのガラス破壊じゃないんだぞ、病

んだ社会への警鐘だ」

「お前か。俺達の学校に傷付けてくれた奴は」

「ひっ!？」

気弱そうな少年の前に現れたのはキャップ。

「圧倒的に許せねえ、校舎の痛みを思い知れ！」

キャップは跳び蹴りを放った。

「あぎゃっ!!！」

「なんだ軽い奴だな。メシちゃんと食べてるか？」

「に、逃げ……」

少年は這い蹲りながらもキャップから逃げようとしていたが……

「後ろに逃げ場はないぜ。勇ましいのが通せんぼだ」

そこには雑刀を振り回しているワン子がいた。

「川神院次女、川神一子推して参ったわ!ここを通りたくば、腕付くで来なさい！」

「ひいいい、助けてくれええ！」

「ってちよっと土下座!？アタシの出番は!？」

「一発で戦意喪失かよ。悪いワン子、こんな俺を許せ」

「うっう、不完全燃焼」

1階

「お、クリス。見る、いたぞ犯人だ」

大和は犯人を発見した。

「大人達は俺達のことをゆとり世代ってバカにしてるけど俺達がい
い歳になれば、今の大人は皆ジジババだ、素敵な世界だぜ！姥捨山
とか作っちゃいますよお」

「若者の主張をして気付いてないな。丁度いい。俺が行く。お前
は反対側から回り込み退路を断て。はさみうちって奴だ。簡単に討
ち取れる」

「回りこむ間に窓ガラスを割られるだろう」

「俺が会話で時間を稼ぐから」

「まどろっこしい。それに挟み撃ちは卑怯だ。自分は正面から堂々
と行くぞ、直江大和」

「おい、暴走するな落ち着けマドモアゼル」

大和が止めるよりも早かった

「そこまでだ、狼藉者め」

「オオウ？」

「我が名はクリスティアーネ・フリードリヒ！義の道を貫くが為、暴虐の輩を成敗する！行くぞ賊！お前に救いの道はない！……む？」

クリスが前口上を述べ終わる前に犯人の少年は逃げ出していた。

「賊め。逃げたとはひとかけらの誇りも持たぬのか」

「だから退路塞いどけとあれほど言ったのによ」

「ただちに追撃をかける！」

「必要ない。逃げた時の場合も想定済みだ」

屋外

「へへ、なんだかしらねえが逃げちゃいますよ！俺あクレバーだから一人の時は喧嘩しねーんだ！おっしゃ、車に乗ってトンスラこいちまえ！他のヤツらは、いったん置いておくか！」

少年が車に乗り込もうとしたその時

Bannon!

という音が鳴り響いた。

「んあ？なんだべ今の音？」

音の発生源を確かめようとタイヤの方を見てみると、そのタイヤには先ほどまでなかったはずの矢が刺さっていた。

「あ、ああああ！タイヤに矢が！？パンクしてるじゃねえか！だ、誰がどこからこんなもんうちやがった！？」

屋上

矢を射つたのは屋上にいた京だった。

「『逃げてきた奴が乗ろうとする車のタイヤを射抜け』。大和の命令、実行完了。これで私の事をほんの少しでも、さらに好きになってくれたら嬉しいな。ふふ……春の夜の乙女心」

屋外

「やべえ、とりあえずここから離れないと……」

「それは不可能だ。ここには私がいるからな」

「！？て、てめえいつの間に……！……！」

そこにいたのは薫。

薫が大和から言われた役目は、『外で待機し、京からの連絡に従っ

て逃亡しようとしている犯人を取り押さえる』ことである。

「な、なんだてめえ、近寄るんじゃない！」

ポケットからナイフを取り出し、薫に向ける。

「刃物か……だが、ナイフの手入れから構え方まで成っていないな」
突き出されたナイフを持っている方の手首に冷静に手刀を入れ、ナイフを落とす……

「あ……！」

「眠れ！」

「ジーザス……！」

掌底一発、腹にねじこめば、少年は膝を突いた

「ふう……、敵将、討ち取ったぞ！」

薫が指を空に向けて宣言した。これにて依頼終了。

「あー！遅かったかあ……うう、不完全燃焼」

ワン子が悔しがっていた。

「楽な依頼だった。もうちょい刺激欲しかったか」

「よーし全員無事か。めでたしめでたしだな」

「あの2人はある意味無事じゃないというか」

モロが指差す方にいるのは大和とクリス。

「だから俺が言っただろ。後ろに回りこむってさ」

「まさか敵がここまで脆弱だとは思わなかったぞ。武器を持っているから開き直って向かってくるかと思えば……腑抜けが」

「これからは、俺の言う事も……」

「大和はどうも策に走りすぎる。こちらに正義がある以上……」

「……しょーもない……」

仲間内に京の呟きが響いた。

依頼は果たしたが、大和とクリスの溝は深まった……

依頼（後書き）

ね、ネタが、足りない………思い浮かばない………特
に、お約束の終了メッセージのネタが………

百代「さーて、お約束の終了メッセージ、予告っぽくいつてみるぞ」

京「次回、真剣で私に恋しなさい！〜暦の五月〜『美女百人切り』」

クリス「何だと！？辻斬りか！？そのような蛮行、騎士として許す
わけにはいかないな」

モロ「そういう意味じゃないんだけど………」

クリス「む、そうなのか？」

京「で、誰がするの？美女百人切り」

ガクト「当然！俺様以外にいねーだろ！」

モロ「無理でしょ！ガクトの場合、一人だつて無理だからね！！」

百代「私の美少女パワーなら出来なくはないな」

松風「パネエ！姐さんパネエぜ！」

大和「確かに出来そうだし、しそつだ………」

薫「大和だつたりして」

京「大和！？私だけじゃ物足りなかったの！？あの夜はあんなに激しかったのに！！」

大和「俺じゃ無理だろ。というか妄想を現実にしないでくれ、京」

動き始めた非日常(前書き)

説教が難しいです。うまく出来たかどうか……

あとオリキャラの登場ですが、まあなんとというか……

動き始めた非日常

5月1日金曜

今日は登校中に10人揃わなかった。薫がまた散歩にいつて行方不明になったらしい。

「今日、金曜集会な」

「ウイース」

「連休の予定も決めないとな」

「まゆまゆとクリは金曜集会分からないだろ。妹よ。放課後は基地に案内頼むぞ」

「アイアイサー！……ところで、このアイアイって何の略？」

「俺様に聞くとは上級者だな……猿？」

誰も薫の心配をしてなかった。まあ俺もだが……

多馬大橋

「あれ？橋の所に誰か立ってるよ」

「ん？どれどれ……」

そこにいるのは執事服を着て顔に口の部分が空いている面をつけているおかしな格好の男だった。ちなみに面には縦に“不戦”と書かれている。というかあれで前見えるのか？

「挑戦者か？」

「わからん。聞いてみればわかるだろう」

そうしてその男の下へ歩いていくと、男がこちらに気付いた。

「川神百代と御見受けするが」

「いかにも。お前は挑戦者か？」

「不挑^{いひま}。私は武者者ではない。故に武神に挑む理由はない。私は主が命により、皐月薫に言伝を云い遣わされたのだ」

「薫？アイツなら朝の散歩で道に迷って行方不明だぞ」

「……成程、了解した」

「えつと、じゃあ俺達が薫に伝えておこうか？」

「不^{いひま}及^あ。私は直接伝えよと言われたのでな。心遣いはありがたいが断らせてもらおう」

「なあ、仕事も出来なかったようだし、私と戦わないか？いや、戦え」

「不戦。たたかわず 私には今ここで戦う理由がない。よって断らせてもらう」

「そう言わずに、なあ！」

姉さんが仮面の男に向かって拳を放つ。俺には全く見えないほどの疾さ。仮面の男はその攻撃を喰らい吹き飛ばされた。

しかし、男は難なく着地した。

「な！？姉さんの攻撃をまともに喰らって倒れないなんて！！」

「違うよ大和。あの人はモモ先輩の攻撃に合わせて自分で後ろに跳んだの。そうすることによって衝撃を緩和した」

「それにきちんと腕でガードしていました。おそらくですが、ダメージは受けていないかと」

「つまりモモ先輩の攻撃を見切れる程の実力を持っている、というわけだな」

「そう。クリスの言う通り。でもそれよりも驚きなのが……」

「それ程の実力を持っていながら、その強さを感じ取れないってこと。お姉様はそれを感じたみたいだけど、アタシは全く気付かなかったわ」

「ワン子の言う通り。私も全然気付けなかった。気の強さとしては影の薄いモロよりも少し感じるくらい。言ってみれば一般人程度ぐらいしか感じ取れない」

「引き合いに僕を出すのやめてよ」

「……もう一度いうが、私には戦う理由がない。それに其方もそんな時間はあるまい」

「はあ？何を言っているんだお前は？」

あ、本当だ。姉さんは気付いてないみたいだけど、確かに時間がないな。

「姉さん、もう時間やばいよ。早くしないと遅刻する」

「サボる。今は目の前の相手の方が大事だ」

「学長にも止められてるんでしょ？自分から挑みに行ったらダメだ
って」

「ぐう……！なら名前だけでも教える！」

「“如月”だ」

「よし、川神院から正式に挑戦を要請してもらっからな、覚悟しろよー！」

「戦う気満々だよこの人……」

今日も変態の橋は変態でいっぱいだった。

始業のチャイムが鳴ってからしばらくして、橋に人目がなくなった頃。

「……………で、いつまでそこにいるつもりで？」

気配絶ちをしている私に気付くとは……………気配探知はモモちゃんよりも上か……………

「人目がない方がいいんだろう？ “如月”の」

「不違^{ちがわず}。確かにその通りだ」

「用件を聞こう」

「我が主より臯月薫に言伝を預かっている」

「言伝とは？」

「“曆”の害となるとして、“閏”^{ヌル}に臯月薫を排除せよとの命が下った。これは“曆”上層部の総意と思え」

「“閏”……“裏曆”か」

“閏”とは、“曆”という組織の闇を担う機関であり、金さえ払えば暗殺などの汚れ仕事も引き受けるという組織である。

かつては“曆”の中の一部門だったそうだが、いつしか切り離され、別組織として扱われるようになった。

ただそうだった今でも行っていることはあまり変わらないので“裏曆”と呼ばれることもある。

組織と言っても、構成員は12名のみ。一族の姓を継ぐ者しか入ることが出来ない“曆”と違い、実力さえ伴えば誰でも入れる。まあ、外部の人間は形式的に養子という形になるが。

そして、その“閏”を操ることの出来るのは“曆”と“閏”の上に形式的に立っている“曆”の御老中達のみである。

「……老害共が考えることは変わらないということか……」

「思ったよりも驚かないのだな」

「前例があるからな」

「もう一つ、言伝がある。もし、お主が“曆”の頭領足る器と判断すれば、“閏”はお主につく事を伝えよ、とのことだ」

「何……？」

「言伝は以上だ。もしかしたら、私がお主の前に立つこともあるかも知れん。その時は容赦せぬ。肝に銘じよ。では御免」

一瞬、目を逸らした間に、如月はいなくなっていた。

「如月」……“曆”一族の人間か……」

そう呟いた直後、後方から、なにやらものすごい速さで人力車が走ってきた。

成程、人目についてしまうから奴は退散したのか。その人力車は私の目の前に止まった。

「フハハハハ！誰かと思えば臯月ではないか！」

「おはよーございます」

「英雄にあずみさんか、おはよう」

人力車に乗っているのが九鬼財閥の跡継ぎである九鬼英雄、一人で引っ張ってきたメイドが忍足あずみである。

九鬼財閥の叡智の結晶であるクッキーが風間ファミリーのモノになっているかという点、英雄がある理由からワン子にプレゼントした

からだ。その理由とは……

「臯月よ、一子殿はどうしている？今朝も夢に向かって鍛錬に励んでいたのか？」

「ああ、いつもみたいに元気に修行していたよ」

「フハハハ！それは良かった！我は夢を追う一子殿を好いているのだからな！」

そう、英雄はワン子に惚れているのだ。求愛の言葉もかけている。それ故にクツキーをワン子に送ったのだ。

それをワン子は「いらなくい」と大和になすりつけ、それをみたキヤップが「俺にくれ！」と言った事でクツキーの現マイスターはキヤップになっているのだ。……報われない。

それにワン子は英雄に苦手意識を持っているようで、なるべく避けるようにしている。……いい奴なんだがなあ、英雄は……

「ところで臯月よ。前から申しとおるが、我が九鬼財閥に来る気はないのか？お前ならば九鬼従者部隊でも十分にやっていけるであろう」

「ありがたいけど、断らせてもらおう。私にもやるべき事はあるのでな」

「英雄様が直々に申し出ているのですよ。少しくらいは悩んでください」

「出しゃばるなあずみ！我は臯月に強要させるつもりはない！」

「申し訳ありません！！英雄様……！！」

……二人ともいい人なんだが、正直このノリには着いて行き難い。
………あずみさんは性格的にいい人と言えるか微妙だが。英雄の前では猫被ってるし。

「何か失礼なこと考えませんでしたか？」

「いや何も」

それに勘も鋭いし実力も凄まじい。

「まあ、我はいいのだが、姉上が随分とご執心なのでな。会う事があるのなら気をつけよ」

「揚羽さんか……わざわざすまないな」

「フハハハハ！礼には及ばん。民あつての王だからな。行くぞあずみ！」

「了解しました！英雄さま……！！」

そうして、英雄を乗せた人力車が学園に向かって走っていった。

「……まあ、如月の言伝がどういふことだとしても、することは変わらないか」

とりあえずは平穩を楽しむとしよう。

授業中

「というわけで、マロは平安時代こそが至高の文化だと信じてるでおじゃる。

マロのカリキュラムは平安時代9、その他の時代1でおじゃるから、そのように覚悟しとく、の」

何か間違っている気がした。

放課後

楽しい楽しい金曜集会のはずがこんな雰囲気……

今の状況になった経緯を簡単に言おう。

クリス「こんな廃ビルなど今すぐ取り壊すべきだ」

京「お前、死ねよ」

以上。

当然だ。何よりも仲間との空間を大切にしている京がこんなこと言われてキレないわけがない。

京が殴りかかる前にモモちゃんが止めて、大和が抱き締めているおかげで京は大分落ち着いてきた。

「な……何だ。何が気に障った？自分は正しい事を言ったはずだが……」

「クリスマスやっぱりそれが正しいと思うんだ」

「あ、ああ」

「じゃあ、本当にさよならだね」

「え？」

「仲間にはなれなかったけど学校ではまた話そうよ。気をつけて帰ってね」

モロは普通に見えるが、あれは完全にキレてる。そういえばモロもクリスマスの参入に元々は反対だった。それはキレる。

ガクトは何か言おうとしているが、うまく言葉にできないらしい。それはクリスマスに対して批判的な意見だろう。

「クリ、お前ウザイぞ」

モモちゃんもクリスマスに向かってはつきりとウザいと言い切った。

ワン子は大和のアイコンタクトで黙っているが、それがなかったらクリスマスに何か言うだろう。

大和はクリスマスを諭すように話しかけているが、客観的に物事を見られるからできることで怒っていないのとはまた違う。

私も含め、昔からのメンバーは、クリスマスの発言に対して少なからず怒りを感じている。

クリスはクリスで何故皆が怒っているのか解かっているみたいだし、諭してきた大和にたいして不平不満をぶつけている。

「あのっ……自分ごときが口を挟んで恐縮ですが、そ、その、あま
り怒らないで、お、落ち着いて、その……」

まゆつちが皆を止めに入ろうとするが、自分を卑下しすぎているのは
はいただけない。

「まゆつち、お前もそろそろ怒るぞ」

「ふえ？」

「それは俺様も思ってた。いくら俺様でもそこまでへこへこされた
らイラツとくるぜ」

「……さつきから意味不明だ」

「さつきの何が意味不明だ馬鹿娘」

「ば、馬鹿!？」

……大和に説明させてもいいが、それだと大和とクリスとの仲がさ
らに悪くなりそうだし、そろそろ止めておくか。

「そこまでッ!！」

「ッ!？」

「ッ！？薫？」

私がいきなり大声を上げた事で、場が静かになった。

「私が説明するよ。大和は京を」

「……………わかった。頼む」

大和には京を宥める事に専念してもらい、私はクリスを正面から見て、説明を始める。

「クリスの言っている事は間違いではない。確かに、わざわざ廃ビルに集まることは効率的とは言えない」

「だつたら何故!？」

一瞬京からの視線も来た気がするが、構わず続ける。

「だが、その主張が正しいとも言えない」

「!?!?何故だ!?!」

「人間、効率的とかそんなことは関係なく、誰にだって大切な物がある。他人に理解されなくても大切だと思えるものが。」

それが私達にとって、風間ファミリーであり、この秘密基地だ」

「……………理解できないぞ」

「理解しなくてもいい、というのは簡単だが、これだけは仲間になったクリスには理解してもらいたい」

どう説明したのか……

「例えば、そうだな……確かクリスは時代劇が好きだったか？大和丸夢日記とか」

「ああ、そうだが。それが何か関係あるのか？」

「私は時代劇など何の興味もないから見た事もないし、何がいいのかもわからない。時間の無駄だとも思える」

「むっ！それは薫が見た事のないからであって……」

「そうだな。その通りだ。で、今クリスはどう思った？私に時代劇を侮辱されて」

「え？そうだな……少しイラッとしたな」

「そうか。じゃあ侮辱されたのがお前の家族だったらどうだった？中將殿のことを侮辱されていたら、おそらくさっき以上に怒った筈だ。違うか？」

「それはそうだろう！自分の大切な者を侮辱されて怒らない奴がいる　ッ！？」

ようやく気付いたようだ。

「そうだ。お前にとっての大切な者が、私達にとっての風間ファミリーであり、この場所でもある。

言ってみれば風間ファミリーはもう一つの家族とも言えるし、秘密こ

基地はもう一つの家とも言える。まゆっち

「は、はい！」

「お前は家族に対してもそんなに顔色を伺っているのか？」

「い、いえ！そんなことは！！！」

「だったらそんなに畏まるな。自分の意思をちゃんと伝えた方がいい。」

それと、今私は皆とここを家族と家と言ったが、それもファミリー内では認識が違っただろう。人それぞれ価値観が違っただ。自分が理解できないからといって人の大事なものを侮辱していいはずがない」

「まさにそれだけ。俺様が言わんとしたこと」

ガクトもそれを言いたかったようだ。

「そうか……そこまで大切な場所だったのだな……」

クリスにも私の言いたかった事がきちんと伝わったようだ。

「椎名京。皆。謝罪する。すまなかった。」

クリスは深々と頭を下げ、京に、私達に謝罪した。

「その、私もすみませんでしたっ！まだまだ勉強不足でした。でも、それでも！まだ私は皆さんと一緒にいたいです！！！」

まゆっちは他人の顔色を伺う事無く、自分の意思で私達といたいと

言い切った。

「自分も二度と先程のような発言はしないと誓う。だからここに
させて欲しい」

クリスマスもそう言った、その時……

「おっーすー！いやいやいや聞け聞けお前達！俺の運たるや、ま
さに豪運と言っているいい領域だぜ？ガラガラ回しまくって豪華景品ゲ
ットだぜ！

ささ、寿司の残りをつまみつつも皆で俺の偉大さを祝ってくれ！ま
あ今日のネタ玉子だらけだがな！」

キャップが乱入してきた。

「……ってあれ？何だこの空気？ずるいぞう大和！俺のいない間に
何青春っぽい気まずい雰囲気になってるんだよ！？」

「お、落ち着け今全部話す！！実は……」

これは丁度いい所に来たんじゃないか？キャップ

……事情説明中……

「ふーん、成程ねえ。ってか、話もう全部解決しちまってるじゃん。クリスマスもまゆっちも謝ったんだろ？」

「ん、まあな」

「ま、一回ぐらいこういうの、仕方ねえわな。というわけで、今ちよつと気まづくなった関係を修復する意味も込めて、連休旅行行かね？」

「旅行!？」

「いきなり発言したなお前」

「いやー、アタシもさっきクリに言おうとしたんだけど、直江さんちの大和君がアイコンタクトで自重って」

「さらにややこしくなりそうだったからな」

今回はそこまでややこしくならずにすんでよかった。

ただ、少しの間だが、客観的に見て風間ファミリーの危うさが見えた。

なんというか閉鎖的というより排他的な所がある気がする。

これは放っておくと不味いかもしれないな……。

「で、旅行ってどういう事、キャンプ？」

「実はな……」

商店街の抽選でキャンプは見事二等・二泊三日箱根旅行団体様招待券を当てたのだ。ちなみに他は全部ティッシュ。

日にちは3、4、5の三日間で、皆で行くことがほとんど拍子で決まっていた。

その後、キャンプがもらってきた余りの寿司（ネタはタマゴばかり）で軽い寿司パーティ（もはやタマゴパーティだったが）をすることになった。

川神姉妹がパクパクとタマゴを食べていたり、大和が京の機嫌を良くしたり、クリスとまゆっちに連帯感が生まれていたりしていた時、まゆっちが一枚の写真を見つけた。

「この写真、皆さんの小さい頃ですか？」

「おー。8人揃ってるだろ」

「皆、面影があるな……」

「背の高い花ですねえ」

「ふふん。リュウゼツランっていうのよ」

「犬が知っているとは。よほど大事な話があるのか、この花には…」

…」

「そんな認識の仕方は酷くないか？まあ合っているからいいが」

「良くないわよ！ちゃんと否定しなさいよ！」

「それはね……」

そうして、大和が昔話を始めた。

動き始めた非日常（後書き）

わかる人には一発でわかる如月のモデルは言うまでもなく、刀語の『不忍』の人です。……そのまんまですが。

大和の嫁アンケートはまだまだ実施中です。

百代「さーて、お約束の終了メッセージ、予告っぽくいつてみるぞ」

準「次回、真剣で私に恋しなさい〜暦の五月〜『無限の幼精』」

モロ「何その変なタイトル!？」

準「まあ、言ってみれば俺の願望だな。固有結界ともいう」

モロ「言わないからね!！」

準「無限に現れる幼女達。『Unlimited Lolita Works』……まさに樂園だなあ」

百代「危険な発言すんなハゲ!！」

準「うぎゃあああ!?!腕が曲がっちゃいけない方向に!?!」

モロ「……それじゃあ、また次回に会おうね」

竜舌蘭（前書き）

久しぶりの更新です。

竜舌蘭

俺たちは、空き地を秘密基地として使っていた。

この頃は、薫と京は加入前なので、メンバーはキャップ、俺、ワ
子、ガクト、モロ、姉さんの6人。

そんなある日、空き地で変な草を見つけた。

「なんだろうこの草？背丈が3メートルくらいあるよ」

「前は2メートルくらいだったのにな」

「夏だから成長してるんじゃない？」

「俺様もこのくらい身長ほしいぜ」

「アタシも欲しい」

「ワン子は変わんねーもんな」

「アンタがデカくなりすぎてんでしょ！」

「はは、ワン子も言い返すようになったねえ」

「私に弟子入りしたのだから当然だ」

「うん、アタシ強くなる」

「よーしよし、いい子だ」

「とりあえずこの草は成長期ってことで」

それから二カ月経って、薫が参入して慣れてきた8月

「うわ！この草も5メートルくらいあるよ！」

「何？この大きな草は？何かの変種？」

「そういえばあの時薫いなかったな」

「前見たときは3メートルくらいだったんだけど」

「実は妖怪だったりしてな」

「ある日、ワンの姿が消えた。次の日、この草を見てみるとワンの身長分だけ背丈が伸びていた」

「ギャー！怖いわよ！」

「ある日、ガクトの姿が消えた。そしてこの草が花を開いた時、その花からガクトの顔が」

「ギャー！気持ち悪いわよ！」

「むむむ、でも化け物なら殴れるから怖くないぞ」

「あれ？姉さんお化け怖いのか？」

「殴れないからな。それならミサイルの方がまだマシだ」

「それもどうなのさ」

「こらガクト！学校の先生からちゃんと宿題させるように電話きちやっただじゃないの！！」

「あ、ガクトのお母さん。丁度いいや聞いてみよう」

（事情説明中）

「この草はあれだよ。竜舌蘭じゃないのかい？」

「リュウゼツ……ラン？」

「なるほど、これが『センチユリープラント』だったのか（この頃の大和はニヒルに毒されています）」

「なんだ、そのゲームの中ボスみたいなのは？」

「気候にもよるが、数十年に一度しか咲かない花だ」

「詳しいことなら百代ちゃんのお爺さんの方が詳しいんじゃないかしら？」

「じゃあ呼んでみるか。すう……」

姉さんが息を吸い込むと同時に俺たちは反射的に耳を塞ぐ。そして、

「ボケ始めの、ブルセラじじいー!!」

と叫んだ。すると……

「こりゃモモ！お前ワシに対してその物言いはなんじゃ!!」

先程までいなかった学長が一瞬で現れた。

「一瞬できちゃったよ。もうおかしいよね、この一族」

～事情説明中～

「ふむ、確かにこれは竜舌蘭じゃの。50年前にも咲いていたのを見たのう。ソイツの子どもじゃろう」

「50年！？人間の一生と同じくらいじゃないか」

「咲いて枯死する前に子株を根元近くに作り残すと聞いたが、よくわからん」

「分からない……？」

「この花は個体変異が大きく、変種も多いから分類が難しいんじゃ。じゃが、コイツはあと明後日には黄色い花が咲くじゃろう。さて、ルーと将棋してたから儂は戻るぞい」

そういつた刹那、学長はすでにいなくなっていた。

「明後日開花か。楽しみよねえ楽しみよねえ」

「まあな。粹なイベントがやってきたものだ」

「皆で写真撮ろうよ」

「いいな、それ。……ん？」

キャップが急に原っぱの入り口まで走っていった。そこには一人の女の子がいて、先程からこっちを見ていたようだ。

「……………」

「おい、またこっち見てたな」

「う、あ、あの……私も……」

「ん？ちゃんと目を見て話せよ」

「どうしたキャップ？入り口まで走って」

「っ」

次の瞬間、女の子は逃げ出してしまった。

「あ、おい！なんだ、行っちまうのかよ」

「今の椎名菌の椎名じゃなかったか？」

この時、京はまだいじめられていた。

「何か俺に話があるらしいけど。ま、いつか」

そしていよいよ開花の迫ったその前夜、関東に台風が上陸した。

「花がきちんと咲けるように保護するぞ！」

と、キャップからの召集がかかった

「なあ、竜舌蘭はふつうに植物園とかで見れるらしいぜ。今回は諦めてそっちで我慢するのもありだと思っが……」

「ダメだ！あの花はあそこにしかないんだ！代わりなんてねえ！」

「アタシも〜！」

「そういつと思った。という事で姉さん、お願いします」

「任せろ。私がお前達を守ってやる。ふふふ……」

こんな危険な状況で何故か姉さんは楽しそうだった。

ワン子とモロは風で飛ばされないように姉さんと縄で結ばれている。

「薫、お前大丈夫か？」

「問題ない。皆といれば道に迷うこともない」

「いやそつちじゃなくて……」

まあ大丈夫そうだった。

風に飛ばされて飛んできた木材を姉さんが打ち落とす。取りこぼした木材や砕けた破片は薫が打ち払う。

そうして俺たちは一丸となって何とか空き地まで何とかたどり着いた。そこには先客がいた。

「……………あ」

「あ！お前椎名じゃないか！」

京が土管の影で縮こまっていた。

「何でこんな時に出歩いてやがる！？」

「……………み、皆、この花咲くの楽しみにしてたから……………でも嵐来たから、その……………」

「聞いてたのか」

「お前関係ねーだろ！もう帰れ！危ねーぞ！」

「で、でも……………」

「いや、今一人で帰す方が危ない、と思う。一緒にいた方が安全だ」

「確かにそうだな。姉さん、一人増えたけど大丈夫？」

「私を誰だと思ってる」

問題ないそうだ。

「人手は多い方がいい。お前も手伝え！」

「う、うん！」

俺たちは嵐の中、花卉が飛ばされないようにビニールで覆ったりして花を保護した。

身体的に優れてる姉さんや薫がいたおかげで素早く作業を終わらせることができた。

「よし、それじゃ、ワン子と椎名から家に送っていくぞ！」

その後、親にこの台風の中、勝手に外出したのがバレて死ぬほど怒られた。

この台風で死者が数名出たらしい。

そして翌日

「わーわー！これが50年に一度なのね！」

あの竜舌蘭は見事に黄色い花を咲かせていた。

「正直、待たせる割りには凄く綺麗な花じゃないな」

「俺も思った」

「でもまあ、50年に一度と思うと感慨深いな」

「この花は俺達が守った花だ！放っておいても自力で咲けたとかなんて考えはこの際ナシで！」

「図々しいけどそっちの方が楽しいよね」

「ほら、写真とるんだろ。パシャリといくわよ」

ガクトのお母さんがカメラを持って俺達に呼びかける。

「よし、お前ら集合！写真だ！」

キャンプの号令に集まる一堂。

「！お前も来いよー」

その時、キャンプが原っぱの入り口にいた京を見つけた。

「！……………」

「大和、あの子はお前に怖がってフシがある。お前が連れて来い」

「マジで？」

「マジで」

「……………まあこの花に関しては頑張ってくれたしな」

そう言うってから俺は京の所まで走っていく。

「なあ見事に咲いただろ？あの花の前で記念写真を撮るんだ。一緒に
にどつだ？」

「え？……………え、と……………その……………」

嫌ではないがどう答えていいか分からない様子だった。

「嫌じゃないなら来なよ」

少々強引に手を掴んで引つ張っていく。

「お、その子新顔かい？それじゃ撮るよ。ハイ、チーズ！」

パシヤリ、と俺達は竜舌蘭を背中にして写真を撮ってもらった。

その後、竜舌蘭を見て皆で話す。

「この花、図鑑のヤツより色が濃いね」

「竜舌蘭の中でも変り種っぽいよな」

「また写真撮りたいな〜」

「いいなそれ。また50年後に撮ろう」

「50年後か、その時私達60歳ぐらいだぞ」

「爺さん婆さんばっかだな」

「まあ私は壮絶な修行により若々しいままだろうかな」

「この人の場合、本当にそうなりそうなんだよね」

「その時は今日と同じポーズで撮ろうぜ」

「キャンプぎっくり腰になってたりして」

「有り得そうだ。無茶な冒険ばかりして危険な目にたくさん遭って
いそうな気がする」

「でもキャンプならそれすら切り抜けてる気がする」

「き、キミも元気だったらその時きなよ」

「う、うん」

50年後、この花の前で一人も欠けることなく、同じように
写真を撮る。

それがとても簡単なことだと、その時の俺達は思っていた。

「　　というお話だったのさ」

「なるほど、そういう経緯の写真だったのか」

「その空き地、埋め立てられちゃったけどな」

「アタシ達でその花の子どもを植え替えたのよ。このビルの下
の草地にね」

「根が深くて大変だったよ」

「まだ小さいが、後でみせてやるっ」

「ああ、是非」

「いい話ですね……あ、あの、もしよろしければ！」

「ああ、その時はまゆっちもクリスマスも一緒に写真撮ろっぜ」

「……ありがとう」

「感激です……」

「やったなまゆっち！」

「ふう、外の空気を吸ってリフレッシュ」

丁度いいタイミングで、外に出ていたガクトが戻ってきた。

「ガクトの為に寿司残しておいたよ」

「友達の余計な気遣いが泣けるぜ」

「そつだ！薫、お前“如月”ってヤツの事知らないか？」

姉さんが思い出したように、寿司（ネタは玉子オンリー）をパクついていた薫に尋ねる。

「私に言伝を持ってきた仮面の人だろう。彼がどうした？」

「川神院から手合わせを申し込んでもらおうとしたんだがな、見つからないらしい」

「一日二日では見つからないだろう」

「いや、一日も経ってないからね」

「“如月”っていう名字だけじゃさすがに無理でしょ。仮面で顔を隠してたし」

下の名前も顔すらもわからない相手を一日も待たずに探せというのは無理がある。まああの仮面が逆に手がかりになる気がしないでもないが。

「やっと強いヤツと戦えると思ったんだがな」

姉さんは本当に悔しそつだ。

「その分、明日薫に相手してもらおうか」

「わかったよ」

「ああ、そういえば明日って2日だったな」

「？2日って何かあるのか？」

疑問に思ったクリスが訊いてくる。

「ああ、毎月2日に薫と姉さんが組み手するんだよ」

「まあ制限をつけてだが」

「この鬱憤を晴らすから制限を緩めるぞ」

「え？それはキツイからやめて欲しいんだが」

「却下だ。朝からやるからな」

「朝から？」

「えっと、それって私も見に行っていていいですか？」

「ああ、俺達も行く予定だから一緒に行こうぜ」

「は、はい…」

「勝手に朝の予定決められてるけど皆大丈夫か？俺は行けるけど」

「アタシは当然見るに決まってるでしょ！」

「自分も問題ない」

「大和が行くんなら私も行くよ。これぞ良妻の証」

「僕も大丈夫」

「俺様もだ」

「まゆつちの行く所にオラの姿ありつてもんだろ？」

「いや、松風には聞いてないから。後、京は妻じゃないから」

「何だとコラー！」

「えー、いけず」

「そういえば気になっていたんだが、何故薫はモモ先輩のことを『モモちゃん』と呼ぶんだ？」

「何故、とは？」

「いや、他の皆は『モモ先輩』と呼んでいるのに何故薫だけそう呼んでいるのか気になってな」

「あ、私も知りたいです」

「オラもオラも！」

「特に理由はないんだが……あえて言うなら昔からの習慣かな？」

「昔から、ですか？」

「そういえば、薫は僕達と会う前からモモ先輩の事をモモちゃんって呼んでたよね」

「俺様達のこととはあだ名で呼んでたのにな」

「特に理由はないが。まあ、モモちゃんが嫌がらない限りはわざわざ変える必要もないかと思っている」

そう言って、薫は残っていた寿司（というよりもはや玉子）を口に
する。

「あ！アタシも食べる！皆いらならアタシがもらっわよっ」

「どっどっどっど」

こんな感じで今日の金曜集会は終わった。

竜舌蘭（後書き）

竜舌蘭って風間ファミリーにとって重要ですけど、ルートによってはプロローグ以外全く触れられないですからこの話を入れるか迷いましたが、とりあえず入れておきました。

百代「さーて、お約束の終了メッセージ、予告っぽくいつてみるぞ」

ガクト「次回、真剣で私に恋しなさい！〜暦の五月〜『到来、俺様の時代』」

大和「後にダーク・クロニクル（闇歴史）と呼ばれる事になるだろう」

ガクト「？まあ何でもいいがついに俺様の時代が」

百代「来る訳ないだろうがこのバカ」

京「天地が引っくり返ってもないね」

薫「妄言を吐くのはお勧めしないぞ」

ガクト「何だこの幼馴染達容赦ねー！」

モロ「まあガクトだしねえ……」

月に一度の手合わせ

5月2日土曜

川神院

「それでは、始めるぞい」

「ああ、行くぞ薫！」

「お手柔らかに頼むよ」

そうして姉さんと薫の、月に一度の手合わせが始まった。

手合わせのルールは

- ・五分間のみ。
- ・全力を出さない。
- ・気弾を出さない。
- ・無茶しない。
- ・学長の立ち合いが不可欠。
- ・判定は学長など。

まあ結局は加減してやるといふことなんだが……

「いつも思うんだが、これで手加減してるのか？」

俺には二人の体がブレて見える。

「そうだね。私やワン子にも見えるレベルでやってるから」

「半端ねえなー、モモ先輩も薰も」

「あ、今モモ先輩の右の拳が薰の顔にヒットした」

「ガクトは見えた？」

「と、当然！」

「いえ、それは防いでました」

「実は嘘。ククク……」

「見えてないじゃん」

「京テメー！」

「……凄まじいな、ここまでレベルが違うとは……犬はどっと思っっ」

「……」

「？おい、犬？」

「……」

この手合わせの時、いつもは騒いだり姉自慢したりしているワン子

はいつもジーンと二人の組み手を見ている。

少しでもこの組み手を自分に活かそうとしているんだそうだ。

ただクリスはそんな事を知らないしKYだからワン子に無視されて
少しいらだっている。

「おい、無視するんじゃない」

「クリス、今はちゃんと二人を見といた方がいいぞ」

「……む、そうだな」

俺の言葉によってクリスも組み手に集中し始めた。

「そこまで!!」

学長の声で二人の動きがピタッと止まる。

二人は最初の立ち位置まで戻って礼をする。そうして今日の組み手
は終わった。

三人がこっちに歩いてくる。

「で、今日はどっちの勝ちだったんだ？」

「僅差でモモの勝ちじゃのお」

「あの、どうという基準で勝ち負けを決めているんですか？」

「それはどっちの攻撃がよりまともに入ったかで決めておる。今回は薫が2発喰らったの」

「え？あれだけ撃ち合ってたのに2発だけ？」

「姉さんは何発くらったの？」

「私がもらったのは1発だけだ」

「凄まじいね」

「それじゃあ僕はそろそろ行くぞい。ルーと将棋の約束をしとったからの」

そついうと学長は既にいなくなっていた。

「それじゃ、今日は薫に久寿餅でも奢ってもらおうか」

「はあ……まあほどほどに頼むよ、モモちゃん」

「賭けでもしてたの？」

「ああ、私が勝ったら薫が私に久寿餅を奢る。薫が勝ったら私が久寿餅を奢られる」

「どつちも変わってないじゃないか」

「そんな事はないぞー。薫が勝ったら美少女の私が食べさせてあげるんだからな」

「それは羨ましいことです」

「よし、じゃあ俺たちもいっしょに行くぜ！」

「一応言っておくが、私が奢るのはモモちゃんのみだけだぞ」

「えー、薫のケチー！」

「ケチで結構。明日の旅行の準備でもしておくんだな」

「あ！そうだった！俺やることあったんだ！というわけで解散！」

そう言うとキャップは走り去っていった。

「薫、ちょっといいだろうか？」

「ん？どうしたクリス？」

「自分とも手合わせして欲しいんだが、構わないか？」

「あ！クリスるい！」

「……私とか？」

「ああ、父様の言っていた“誇り高きサムライ”の技をこの身で感じてみたい」

「侍の技、か。……クリスは得物を持ってきているのか？」

「ああ、ちゃんと持ってきた」

そう言っただけクリスはレイピアを取り出す。

「ならちよつと待っていてくれ。私も得物を取ってくる」

そのセリフを残して薫の姿が消えた。あれ？いつの間に？

「？薫は拳が武器ではないのか？」

「姿が消えた事にはノータッチなんだ」

「薫は基本拳だが、他の得物も一通り使えるぞ。それに侍の技といえはやはりアレだろう」

「アレというと……？」

「お待たせ」

そして再び現れた薫の手に握られていたのは

「おお、それはジャパニーズ・ソード！刀か！」

黒塗りの鞘に入った日本刀だった。

「それ本物？危ないんじゃないの？」

「もちろん刃引きはしてあるから安心するといい」

「それじゃ、私が審判をしてやろう。名乗りは時間が勿体ないから

省くぞ。双方、位置につけ」

姉さんの言葉に従い、クリスと薫はある程度の距離を取る。

クリスは抜き身のレイピアを構えたのに対し、薫は刀を抜かずに柄に手を添えるだけだった。

「抜かないのか？」

「これが構えだ」

クリスの疑問に短く答える薫。会話はそこで終わった。そして……

「では尋常に……始め!!」

姉さんの合図とともに手合わせが始まった。

薫は鞘を片手で持ち、右手で刀の柄を握り、腰を落としてから微動だにしない。

クリスは薫との距離を測っているのか、じわじわと距離を詰めていく。

こうした二人の膠着状態が続く。

いつまで続くのかと、時計を見ると、手合わせ開始から1分も経っていないかった。

「二人とも動かないね」

「クリスは少しずつ距離を詰めているけどな」

「薫に隙が見当たらないからクリスも探ってるの」

「この勝負、一瞬で勝敗が決まるぞ」

いつの間にか横に来ていた姉さんのこの言葉通り、勝負は一瞬でついた。

「はあっ！！」

先に動いたのはやはりクリス。

クリスが取った攻撃は薫の攻撃範囲外からの突進。

一見無謀とも思える行動だが、理には適っている。要は薫の抜刀よりも早く攻撃が届けばいいのだ。

鋭い突きが放たれる。それでも薫は動かない。

レイピアの切っ先が薫に届く直前、薫の刀から閃光が走った。

「ッ！？」

カキンッ！という音が鳴り響き、クリスのレイピアが弾かれた。

抜刀術

これによって薫は目前まで迫ったレイピアを弾いたのだ。

クリスの体勢も崩れ、大きな隙が出来てしまった。それでもレイピアを放さなかったクリスを褒めるべきか。

ただ隙だらけと言っても、薫も刀を振り抜いた状態で追撃は難しい。薫が立て直す前に、クリスは距離を取ろうとする。

が、薫の一手の方が速かった。

「……………ッ！！……………参った」

既にクリスの首元には刀、ではなく鞘が添えられていた。

「そこまで…！」

姉さんの声で場に時間が正常に戻る。

クリスが仕掛けてから10秒と立っていない内に決着がついたのだ。つた。

「流石父様が認めるサムライ、私の完敗だ」

「いや、そんな事はない。あの突進には少し肝を冷やしたよ」

「今の技、どこかで見たことがあるような……………」

「漫画に出てきた技を参考にしているからな」

「でもよ、鞘ぐらいで勝敗がつくのか？俺様なら耐えられる気がするが」

「基本的に鞆は鉄製だ。鉄パイプと同義と思えばいいだろう。その気になれば首の骨も折れるぞ」

「フフン、俺様の筋肉に鉄パイプ如き通用しねえ!!」

「ガクトの場合、鞆の前の抜刀で斬られているから関係ないだろう」

「そうだね。……大和付き合わない？」

「お友達で」

「いくら何でも唐突過ぎでしょ!」

「それ以前に何自分目線で物を語ってるんだお前は。相手はガクトじゃなくてクリスだろうが、このバカが」

「空気読みなさいよねー!」

「何だこの幼馴染たち容赦ねー!」

こうして、月に一度の手合わせが終わった。

親不孝通り

「……ここはどこだ？」

あの後、モモちゃんと仲見世通りで久寿餅を食べて、そこで女の子のナンパに行ったモモちゃんと別れて散歩に出たが、どうやら道に迷ったようだ。

歩いていると不良に何回か声をかけられてカツアゲされかけたのでお仕置きしておいた。この治安の悪さは確か、親不孝通りだったか？

「おい、臯月。テメエこんな所で何してやがる」

そんな時、声をかけてきたのがゲンさんだった。

「いや、道に迷ったんだが……」

「迷ったって……ここらへんは危ねえぞ。まったく仕方ねえ、表の通りまで送ってやるよ」

「本当か？わざわざ悪いな」

「勘違いするんじゃない。丁度俺もそっちの方に行く所だったからあくまでついでだ」

「それでもありがとう」

「ふん……ちゃんと着いて来いよ」

そうして、ゲンさんと二人で通りを歩いていく。

「そういえば、ゲンさんの浮いた話というのを聞いた事がないがどうなんだ？」

「はあ？何でそんな親父みたいな事を聞くんだよ……」

「いや、なんとなくだが。って宇佐美先生も？」

ちなみにゲンさんはワン子と同じ元孤児院育ちで宇佐美先生に引き取られたそうだ。

「別に男色とかそういう特殊な性癖ではないのだろう？」

「ったり前だ！つーか何でテメエにそんな事答えなきゃならねーんだよ」

「いや、友人を心配してだな」

「チツ……まあ、そういうのは人並みだ。そういうてめえはどうなんだよ？」

「私？……まあ、私も人並みかな？大和とは違うさ」

「そうか。つーかアレは特殊だろ」

「まあそうだな。大和はよく耐えていると思うよ。男色ではないだろっし……」

そんな事を話しながら、親不孝通りを歩いていった。

一方その頃、その大和はというと……

「ん……おお、お前中々好みだな。気に入った。よし、来い」

「は？」

「いいから来い」

「ちよちよ、ちょっと待て！何すんだあんた！？」

「俺の飢えを満たすんだ。獣の飢えをな」

そう言つて、男は俺の手をもの凄い力で引つ張つていく。

(何でこんな状況になった!?)

状況を整理しよう。

川神院を出てから、京と二人で明日の旅行の為に買い物をした。

その帰りにモロがいるかも、という事でゲーセンに立ち寄り、そこでトイレに行くことにした。

トイレに向かう途中に一人の屈強な男がいて、何故か俺の顔や身体を眺めた後、先程の会話に繋がる。

「(……どこに原因があるのか、全くわからん)」

じゃなかった！

『獣の飢えを満たす』ってどういう事だ？殴られるのか？いや、それだったら俺じゃなくてもいいわけだし……

とりあえずこのままだと何かマズイ気がする！どうする!?

【選択肢】

> 男の手を振り払う。

男に従う。

「離せ！」

「無駄だ。俺の力の前には抵抗しても無意味だ。既にお前は俺に抱かれる事が決定しているのだ」

「は？」

抱かれる？

ま、まさか……

コイツ、そっちの奴か!?

「ほれ着いたぞ確か個室が空いてたな。行くぞ」

「ちょ!?!」

俺の純潔の危機（いや、笑い事じゃなくて）を嫌なぐらい感じていた、その時

「大和、この人だれ？」

なかなか戻ってこない俺を心配したのか、京が現れた。

「いや知らないヤツだ」

「大和をどうする気？」

京が俺と男の間に割ってはいる。

「貴様あ、女連れだったのか！」

「京、コイツ何かやばいぞ」

「チツ！しらけるな！解放してやる。他を探すとするか」

そう言っつて、男は去っていった。

「中々の迫力だったね。まあ睨み返したけど」

「見ない顔だったな。……ま、嫌なことは忘れるか」

「帰ろう」

そうして、京と二人で寮に帰った。

寮の部屋にて……

「今日は嫌な目にあつたよ。ヤドン、カリン」

ヤドカリのヤドンとカリンに今日あつた事を報告する。それにしてもヤドカリを見ていると癒されるぜ……。

「大和、まゆっちが夕飯作つたつて」

「わかつた。今行く」

土日は自炊という島津寮のシステムは欠点だと思つが、まゆっちのおかげで随分楽になつた。

「今日は私が作りました」

「さすがまゆっち。どれもうまそうだ」

「いえいえいえいえ！私なんてまだまだです」

「別にそこまで謙遜する事はないだろう」

「おお、これが日本の“謙遜”というものか」

「……俺の分もあるが、いいのか？」

「あ、はい。源先輩もどうぞ召し上がってください」

「だがな……」

「ゲンさん、人の好意は素直に受け取っておいた方がいいと思っぞ」

「……それもそうか」

「さっさと食べようか」

「はい、では」

「「「「「いただきます」」」」」

「ゲンさん珍しいね。バイトは？」

「別にいいだろうがよ。……これ食ったらすぐにバイトだ」

「薫、ちよつと醤油を取ってくれないか？」

「ああ……あ、もう空だな」

「それじゃあ、僕が入れてあげよう」

「そうか、ありがとうクッキー」

「タバスコはいらないの？」

「えええ！？醤油にタバスコですか！？」

「刺激的過ぎるぜ。オラの理解の範疇を超えてやがる……」

そんな感じで進んでいく食事の風景。つて、あれ？

「んー？」

「どうしたの大和？」

「いや、何か違和感があつてな……」

「違和感？どこら辺に？」

「うーん……」

京に言われて改めて考えてみる。

「そうだ。こういう時真つ先にはしゃぎそつなキャップの音が聞こえないんだ」

「そついえばそつだね」

「キャップならいなかったぞ。クッキーはキャップがどこ行ったか聞いているか？」

「残念だけど僕にもわからないや」

「で、何が違和感なのだ？直江大和」

「いや、キャップがないってことは島津寮には5人しかいないってことだよな」

「そうだね、僕を入れると6人になるけど」

「オラのこととも忘れるなよな大和！」

「で、ここに居るのは何人だ？」

「普通に考えれば5人だろう。何を言っているんだお前は」

「え？クリスさん何を言っているんですか？6人ですよ？」

「そつだよクリス。今ここに居るのは6人だよ」

「？」

「だって薫がいるじゃない」

「あーそうか。薫を入れて6人だな。それで……………」

……………

「「それだーーーーー!!!」」

思わず、俺とクリスの叫びが八モった。

「何が？」

その当の薫は何かおかしいのか分からないかのように聞き返してくる。

「何当然のようにここでメシ食ってるんだお前は!？」

お前はどこのぬらりひよんだ。

「え?今更?私は大和が来る前からここにいたのだが」

何…だと……?」

「み、皆は気付いてたのか!？」

「え、ええ、まあ人数分を作ったのは私ですし……」

控えめにそう答えるまゆつち。

「コイツは俺とここに来た訳だしな」

当然のようにそう述べるゲンさん。

「何回もこんな風に来てたらわかるようになったよ」

もう慣れた、とでも言うつよに肩を下げる京。

「クリスは気付いてなかったんだな」

「うーう、うるさい！た、たまたまだ！たまたま！」

というかクリスは薫に話しかけてなかったか？

「それよりもまゆっちがせっかく作ってくれたんだし、食べてしまおう」

「あ、ああ……」

こうして、旅行前日の夜は過ぎていった。

月に一度の手合わせ（後書き）

百代「さーて、お約束の終了メッセージ、予告っぽくいつてみるぞ」

薫「次回、真剣で私に恋しなさい！〜暦の五月〜『百鬼夜行の主』」

京「で、誰が百鬼の主なの？」

大和「どう考えても薫だろ」

薫「何故だ？」

大和「何故って……異様にステルス機能が高かったり家主に気づかれずに飯を食うとかぬらりひょんみたいじゃないか」

京「実はぬらりひょんの血が混じってたりして」

百代「安心しろ薫。もしそうだとしても怖がったりはしないで。妖怪なら殴れるし」

薫「嬉しいが、複雑だ……」

クッキー2「ちょっと待ってもらおうか！」

薫「？どうしたクッキー？」

クッキー2「百鬼夜行の主はこの私だ。私は三代目となる。全ての魑魅魍魎は私の後ろで百鬼を成せ！」

薫「どこか故障したのか？今すぐ九鬼財閥に修理してもらった方がいいな」

大和「……意外とそういう反応が一番キツイと思っぞ」

箱根旅行初日

5月3日 日曜

私は朝のノルマをこなす前に厨房に来ていた。目的は厨房そのものではなくそこにいるだろう人間なんだがな。予想通りというか、厨房には川神院の料理人達以外にもう一人いた。エプロン姿の薫だ。エプロン姿に全く違和感ないな。

「今日も早いなーお前は」

「あ、モモちゃん。おはよう」

「薫、今日の弁当はどうするんだ？作るのか？」

「んー？まあ手で食べられるものを作ろうかな。おにぎりは多分島津寮の方で和食が得意そうなまゆっち辺りが作っているだろうし、サンドイッチにしようと思っているよ」

「そうか、味見ならしてやるぞ」

「味見する余地がないから。ところでモモちゃん、朝の修行はどうしたの？」

「心配するな。これから行ってくるさ。肉入れとけよー」

そう言って、厨房を後にする。

「……肉を入れるなら、カツサンドにでもするか。あとワン子はフランスにうるさいだろうから野菜のサンドイッチも入れて……ああでもガクト辺りがカツサンドだけ食べそうだから野菜も一緒にしてしまおう。京用にマスタードを別に持って行っておこう。それから……」

思わず「お前は母親か」と言ってしまうそんな独り言だった。

川神駅から箱根まで“特急・踊り漢”の一本で一時間三十分弱で着く。

「いやあ、僕達10人でしょ？こういう特急列車は四人座席がデフォ、4×2で二人あぶれると心配したんだけど結果オーライだね」

あぶれた2人は姉さんと薫。そしてその2人はというと……

「こういつ出会いがあるから旅はおもしろい、な！」

「そうね、旅は最高っ!」

「ねーちゃん、そのシューマイくれ」

「いいわよ。はい、あ〜ん」

「あ、ずるい〜!私も食べさせる〜」

「旅の〜お供は〜めんこいねーちゃん〜 なんてな〜」

姉さんは旅の女子大生三人組と意気投合してた。とりあえず目的地で回収するでしょう。

そして薫の方はというと……

「へえ、武道やってるのか」

「正確には武術なのだが、まあいいか」

「どんなこと出来んだ?手からこう、ズビィイイ!って感じでビームとか出せんのか?」

「いや乙女さんじゃないんだから出来ないだろ」

「蟹よ、少しは常識で考えようぜ」

「ビームは頑張らないと難しいが、気弾なら何とか撃てるぞ」

「出来るのかよ!?!」

「スゲーー！！それに比べてこのへタレは……」

「甲殻類に言われたくねーよ」

「ンだとコラーー！」

「ま、坊主もガンバレってことだな」

「ところで乙女さんって、あの鉄乙女さん？」

「え？乙女さんの事知ってんの？」

「面識は一応あるな。武道四天王の一人としても有名だし」

「世の中ってのは意外と狭いもんだな」

「というか武道四天王なんて始めて聞いたぞ」

「お前ら！みんなのシャーク鮫氷が戻ってきたぜ！ってあれ？俺の席はないんだけど？ねえ、どゆこと？」

薫も大学生らしき四人組と意気投合していた。

……向こうで一人あぶれていた気がするが、気にしないでおう。

「なあ、俺様腹へったから何かくれ」

「ええっと、私の作ったおにぎりと薫さんの作ったサンドイッチとどっちがいいですか？」

「ちなみにまゆっちの方は私が最初から最後まで手伝った」

「俺様の筋肉でも京の料理は防げない。薫の方をくれ。肉が入ってる気がするぜ」

「女好きのガクトが男の料理を取るなんて……もしかしてできてる？」

「ンなわけあるか!!」

「そしてそこでモロが「僕のガクトを……」と嫉妬に燃える……わかります」

「燃えないからね!!」

「ん?どうしたクリス?顔が赤いぞ?」

「い、いや!何でもない!」

「むむ、クリスからほのかに同じBL好きの匂いが……」

「Zzzz……さあ、冒険の始まりだ……Zzzz……」

キャップはさつきからずっと寝ている。何でも昨日まで箱根に行ってきた徹夜だったらしい。

「おお!カツサンドとはまた俺様好みだぜ!周りの野菜が邪魔だがウマイ!」

「おお！肉だけじゃなくて野菜もちゃんと取れるなんてさすが薫ね！ベリグーよ！」

「辛さ以外は9点かな？あれ？これは……“京専用マスタード”。どれどれ……おお！これは文句なしの10点だね」

薫のカツサンドは好評だった。というか風間ファミリーの事をちゃんと考えて作られている。さすがは『オカン』薫だ。ただ一つ誤算があるとするば……

「あれ、松風？私のおにぎりが食べられていませんがどうしたらいいんでしょう？」

「大丈夫だ！誰も食べなかつたらオラが食べてやるから！あ、でもカツサンドもうまそうだな。やっぱりオラ、あっち喰おうと」

「まさかの裏切り！？」

「というか松風肉食だったの！？」

好評すぎてまゆっちのおにぎりが食べられていないことだな。

せつかなので俺はまゆっちが作ってきたおにぎりの方を貰うことにした。

「まゆっち、おにぎりちょうだい。京が作ったの以外で」

「おおっ、先手を打たれた……」

……京の真っ赤なおにぎりはさすがに食べられない。

「自分もまゆっちのおにぎりを食べてみたいぞ」

「あ、はい！」

「よく言った！大和にクリ吉！さあ、まゆっちのピュアな真心こもったおにぎりを喰らいやがれー！」

「お前さつき裏切ってただろ」

そうして目的地まで盛り上がっていた。

箱根湯本。

旅館は山の上なので本来はバスに乗って行くのだが……

「よし、修行よ！！クリ！どっちが先に宿に着くか競争よ！！」

「ふ、いいだろう。」

この二人は走っていくようだ。

「頑張れ。荷物は任せろ。バスのヤツ乗り込めー」

「ウエーイ」

このメンバーはとことんクールだった。

「じゃあ、まゆっちは私と走ろうか？」

「あ……はい！」

「オラの俊足なめんなー！」

薫がまゆっちを誘って走ろうとしていたが……

「お前絶対迷うからバスな」

「おろ？」

姉さんに引きずられてバスへ

「……あれ？……とすると私は……」

「まゆっちもバスにしとけ。可愛がってやろう。カモンベイベイ」

誘われたまゆっちも追加でバスへ。

そうしてバスは山道に行く。

箱根温泉宿

宿は綺麗で好感を持てた。よく見たら九鬼財閥傘下の所だった。

「10人で一部屋かあ。大きい部屋だね」

「ZZZ…株が1円…買い占める…ZZZ」

キャップはまだ寝ていた。

「寝ているキャップの代理で私が仕切る！温泉は24時間入り放題！夕飯までには時間が余っている！とりあえず、好きに行動しろ！」

モモちゃんの号令の元、各自思い思いの行動を取り始めた。

ガクトは散歩、まゆっちはお土産屋、大和は走ってくるワン子とクリスを待たため入り口に、京はそれの付き添い、キャップは部屋で爆睡。

そして私はモモちゃんとモロと部屋に備え付けてあるゲームをする。ソフトの名前は『拳で語れ ケンタくん』

『俺ケンタ。無駄に威張ってるヤツはとにかく許せねえ！まずは米

不足なのに具体的に対策を講じねえ日本政府にヤキ入れてくるぜ」

「凄いな、ケンタくん……というか社会的過ぎないか？このゲーム」

「でも普通の横アクションだな。よつと」

「ネットで検索してもヒットしないとかレアゲすぎ」

「ははは、このキャラ、国会議事堂に殴りこんだぞ」

「展開早くないか？」

『貴様ら！早く備蓄米を国民に放出するんだ！』

「政治的解決をしているとは……」

「あ、次のステージ、中国のパクリテーマパークだ」

「これいつの時代のゲームなんだ？」

世の中、奥は深かった。

この後ケンタくんは、ロシアやイラク、ギリシャにアメリカなど、世界中の様々な国々に殴りこんでいた。ちなみにエンディングロールの後に次回作を示唆していた。どうやら次は神様相手に殴りこむらしい。

川神市、廃ビル前

風間ファミリーの秘密基地である廃ビルに危機が迫っていた。

「ここ良さげじゃね？」

「いいねえ。女連れ込んでもバレなさそうだし」

「ここオレラの溜まり場にしょーぜー！」

不良が三人、廃ビルに寄ってくる。しかし、そこに、

「ここら、キミたちここは私有地だよ。さっさと立ち退くといい。立ち退かないなら痛い目に遭ってもらうけどいいかい？」

クッキーが現れた。クッキーは風間ファミリーの留守を任されていたのだ。

「何だーこの変なロボ？無駄に高性能っぽくね？」

「うぜえ。てか痛い目に、ってコイツがかあ」

「邪魔だよこのポンコツがよー！」

しかしクッキーの見た目から不良達からは舐められている。

「コイツ僕を馬鹿にして……仕方ない、僕の可変機構を見せてやる。後悔しても遅いよ」

「へ？カヘン……？」

「残り電源終了までの180秒でけりをつける！」

「な！姿が変わってく！？」

不良が驚く中、クッキーの変形が終え、先程の卵型ではなく大人程の大きさの人型ロボットに姿を変えていた。

「待たせたな、クッキー第二形態だ。ちなみにあともう一段階、変形を残しているぞ」

「声まで変わってますけどー！！」

「ふ……ふはははははは！ようやく暴れられる」

そういうと、どこからか光るサーベルを取り出した。

「実はな、私がこの形態で登場するのは小説本編では何気に初めてなのだよ」

「へ？何言ってるのこのロボ？」

「だから今まで我慢していたせいか……人を斬りたくて斬りたくてうずうずしているのだ！」

「明るい声で危険な発言した」

「ロボット三原則どこ行ったあ!?!」

「で、でも斬るっ たってどうやって斬るんだよ!?!」

「このサーベル、九鬼財閥が開発したもので、安全装置が掛かっ
ていて斬れないようになってる…… ように見せかけて実はよく斬れ
る」

「安全装置意味ねー!?!」

「つーか九鬼って…… ここ九鬼財閥の所有地かよ!?!」

「ヤベエ、逃げる!?!」

「フハハハハ、この私から逃げられると思うか!?!」

「は、速え!?!」

「存分に楽しませてもらうぞ! クッキー・ダイナミック!?!」

「うぎぎや あああ!?!」

こうして、秘密基地の平穩は守られた。

夕食後。至福の温泉タイム

今まさに覗きが決行されようとしていた。

「では、男湯を覗きます」

ただし、女湯で。

「やめときなさいよ。てか大和以外の男が見えたらどうするのよ京的に」

「しまった。その可能性を考慮してなかった。では聞き耳をたてるくらいで……京イヤーは地獄耳」

京イヤー発動！

「ふう……いい湯だね。温泉いいなあ」

「ああ。たまにはこういうのもいいな」

「ああ……癒される」

「なあ薫、風呂の時ぐらいそのリストバンド外したらどうだ？」

「それは無理だ。隠し武器があるからな。主に針とかが」

「武器要らないでしょ！」

「なあ薫、あの鎖どこにあったんだ？」

「キャップ、鎖って？」

「何か薫の服の上にやたら長い鎖が何本もあったから気になってな」

「ああ、それは仕込み武器の一つだ。普段は身体に巻きつけておいて、使う時は服の袖から出すんだ」

「何かカッコ良さそうだぞ！俺にも教える！」

「ツッコミ所が違うぞキャップ」

「見る、貴様等！俺様の筋肉美！」

「少しは隠してよ！グロいんだよガクトのは！！」

「銃で言う所のバズーカだな、俺様のジュニアは」

「まだ1度も対象に向けて発砲してないけどな」

「訓練ばかりで弾を無駄にしているのだろうか？」

「砲身は磨いてるんだが…って何言わせんじゃいコラ！」

「ああもつ。やめてよその手の話は」

「男同士でいちいち隠す必要もないだろ」

「キャップとガクトは堂々としすぎだ」

「……キャップは銃でいうとマシンガンか」

「そついうてめえらの愚息はどうなんだよ大和に薫」

「俺はマグナムだね。重い一撃をズドンと」

「私は銃には詳しくないからな。わからないな」

「薫のは……ショットガンってところか」

「2人ともバズーカには遠く及ばないな」

「はん。いざという時に暴発しそうだなガクトは」

「てめえは弾詰まりしそつだかな」

「コレで弾詰まりってどういふ状態なんだ？」

「下品ーげーひーん」

「モロ。お前あだなモロなんだから隠してないでモロに出せばいいじゃな」

「そーいふ意味のモロじゃないでしょ！」

「モロの水鉄砲は皮のホルスターに入ってるから」

「……僕だって好きでそうなってるわけじゃ……」

「ん？つまりそれって……」

「遠まわしに言うんだ、キャップ。それがやさしさを」

「むけてないのか」

「うわああああー!」

「それ遠回しどころか最短距離だろ」

「頭をなでるように優しく言ったのに」

「言葉のチョイスが殺しにいつてるとしか思えねー」

「キャップって時々鬼畜な発言をしないか？」

「確かに……」

「そっぴや、モロのって見てないなー。俺に見せてみ？モロの大事な部分」

「何でそういう展開になるのさ!」

「いや、気にしてるんだろ？だったら俺がむいてやる。上手くいくかもしれない」

「嫌だよ!そんなイベント誰が幸せになるのさ!」

「閃いた。もしかしたら売れるかもしれない」

「は？何が？」

「実は最近、とある令嬢と知り合って」

「薫テメーいつの間にならぬで、年上か！？美人か！？」

「話の腰折るな。ちなみに年上の金髪美人だ」

「俺様にも紹介しろよ！！」

「まあ聞け。彼女、学生時代にクラスメイトを題材にしたBL小説を自分で書いていたらしい」

「うわぁ……………」

「ちなみに彼女、元・生徒会長」

「大丈夫かその学校？」

「さらに言えば百合。多分女王様気質」

「ええー！？」

「そんな彼女は恋人として有りか？」

「美人で年上なら有りだ！！」

「うわぁ……はつきり言い切ったよ」

「そうか。まあ紹介はしないがな」

「今の紹介する流れだったろーが!」

「何で聞いたんだ?」

「なんとなく。で、キャップとモロのやり取りを録音したら売れるかなと……」

「売らないでよ!ていうかまず録音しないで!」

「じゃあキャップにむかれるのはいいのか?」

「何でそうなるのさ!?」

「照れるか?5年6年の付き合いじゃないんだぜ」

「うん。まあ照れると思うよ、普通」

「もっと風のように自由にいこつぜ」

「フリーダムすぎる」

「いやでもリーダーとして心配なんだよ」

「いらぬ心配だつて!」

「だって大和なんてかなり昔だけど夏休みに……っと、そうだった。

なんでもね!」

「それにしても、髪を解いた薰ってさ」

「何だ?私がどうした?」

「色っばすぎて女に見えるよな。っーか女にしか見えねー!ハハハ
!」

「あ………ちょ、ちよつとガクト」

「あーあ、やっちまつたなガクト」

「へ?もしかして俺様……」

「地雷踏んだな」

「早速、この針が役に立つ時が来たな」

「げ!?しまった!?!ちょ、ちよつと待て薰!話せばわか
!」

「問答無用!」

「アツ………!」

「おお〜う……コレは凄い展開だった……」

「ん、なんか面白い話をしてたの男衆は？」

「ねえモモ先輩。マグナムってどんな銃だっけ？」

「大口径ならグリズリーだっけ倒せる立派な銃だ」

「屈強なモノを装備してるんだね大和……ドキドキ……」

色々と話していたが京にとって最重要だったのは大和のジュニアのことだった。

一方男湯では……

「クリスと決闘するだど？」

「ああ、そつだ」

大和がクリスに決闘を挑むことにしたらしい。

「この旅行中に少しでも距離を縮めようと思ってたけど、それには俺を認めさせるしかない」

「だから決闘か」

確かにクリスに何らかの勝負事で正々堂々勝ったら大和の事を認めるだろう。

「でもどんな種目で戦うの？」

「それが問題なんだよなー」

頭脳なら大和、戦闘ならクリスが勝つだろう。

しかし、頭脳で勝つてもクリスは大和を認めないだろうし、純粹な戦闘なら大和に勝ち目はない。

「それじゃ、俺が考えといてやるよ」

「ああ、頼むわ」

種目はキャップが考える事になった。

「で、いつにするんだ？」

「とりあえず明日にでも申し込もうと思ってる」

「そうか。とりあえず応援はしよう」

「うん、頑張りなよ」

「おっ」

「うっん……俺様は一体……？」

湯船にプカー……と浮かんでいたガクトが目を覚ました。

「はっ！そうだ！おい大和、明日覗きに行こうぜ！」

「ガクト、復活するの早いね……」

「というか復活して最初の発言が覗きとは……」

「おいおい、覗きなんてそんな子供のやることだぞ………なんて事は言わない！覗きに行きたくば行けばいい！！」

「さすが軍師！」

「簡単に許可をするな軍師。こういうのは、バレたら止めなかった私達まで責任が問われる可能性があるんだぞ」

「そこ自分の心配なの！？」

……邪念たっぷりの一日目だった。

箱根旅行初日（後書き）

本当ならクッキーの活躍は二日目なんですが、出番が今までなかったし、二日目もいっぱいだったので前倒しさせてもらいました。

後、ネタを考えるのもしんどくなってきたし、好評なのかどうかわからないのでお約束の終了メッセージを毎回載せるのをやめる事にします。思いついたときだけにしようかと思っています。

感想が欲しいです。意見とかでもいいんで欲しいです。

箱根旅行二日目(前書き)

連続投下!

箱根旅行二日目

5月4日月曜

朝、いつもの時間に目が覚める。

周りを見るとまだ皆眠っているようだ。とりあえず皆を起こさないように立ち上がる。

そして改めて周りを見る。布団を蹴飛ばしていたり、衣服が乱れていたりと、このままでは風邪をひくんじゃないかと心配になる。

「……ティーカッププードルが…意外と手強い…ムニヤムニヤ」

「……風は誰にも…捕らえられない…ぐう……」

「……マルさん…すう…すう……」

「……誰か…強いヤツは…いないのか…」

「……俺様の時代が…やっと来たぜー……」

「……そんなの…来るわけないから……」

かといってわざわざ起こすのも気が引ける。

それにしても寝ながら寝言に突っ込むとは流石はモロだ。私には到底真似できない。

「……全く」

そう言いながら、皆に布団をかけ直す。

「……………ん……………」

その時、京が目を覚ましたようだ。

「おはよう、京」

「あ……………おはよう薫。でも今からもう一回寝るからおやすみ……………」

そっぴいなながら、京は大和の布団の中へ

「……………まあ、頑張れ」

二人に布団をかけてやる。

「うん、ありがと。後で何かお返しするね」

「別にいいさ」

「（あわわわわ、どうしましょう。決定的なところを見てしまいました。あれが裏取引という奴ですか？松風）」

「（そうだけ。下手したらオラ達消されっから。向こうはオラ達が起きてること気付いてねえみたいだし、このまま寝たフリしとく事をお勧めするぜ）」

「（了解しました。松風）」

……まゆつち、確実に起きているな。まあ寝たフリするみたいだし、声をかけない方がいいか。

そんな事を考えながら私は朝の鍛錬のために外に行った。

……この後、朝の鍛錬を終えて部屋に戻ってくると、京が部屋の外に追いやられていた所だった。京に話を聞こうとしたが、

「ああ〜生殺しだよ。どんなエロイことをするのかは大和はハアハア……」

という要領を得ない回答しか返ってこなかったので放置しておくことにした。

箱根川辺

今日は自然の中、川で釣りだ。

宿の近くに川が流れており、釣り道具も宿でレンタルしたものだ。

「ここらへんでいいだろう。ナイス景色だなあ」

「よし盛大に釣ってやろうぜー！ヒャッホー！」

各々が釣りをしていると川神姉妹と京が格闘修行をすることにした。

その際モモちゃんに

「大和と薫、私の分も釣れ。先に三匹釣れなかった方、私刑な」と言われた。

「厳しい法律だな……」

「だな。ま、こっちはすでに5匹釣れているが。大和、私刑決定ご愁傷様」

「早過ぎない!？」

その後、京が大和にアピールしていたけど、モモちゃんに連れて行かれていたり、まゆつちがクリスの分の餌をつけようと頑張っていたのを大和が代わりに付けてあげていたりした。

しばらくするとモモちゃんが戻ってきた。

「ワン子と、もえもえ京たんは？」

「いない時だけ京をいじってやるとかサドだな」

「組み手に入った。あれは好きにやらせておくさ」

「京が素手でどんどん強くなっていくなあ」

「ははは。無理矢理襲われる覚悟はしておけ」

「冗談に聞こえないのが怖い……」

「そういうえばモモちゃん、さっきの言いつけは大和の負けだぞ」

「あっ！薫お前……！」

「そうか。じゃあ、私刑は大和にだな」

「ふっ。いつまでも喰らい続ける俺じゃない」

そういうと同時に、大和は一気に逃げた。

「んー、そういう負けず嫌いな所好きだぞ。30秒待ってやるー！
逃げる逃げるー！」

「か、狩りが始まりそうな雰囲気ですが……」

「いいんだよ、姉弟でのコミュニケーションでしょ」

「随分とまた過激そうなコミュニケーションだな」

「ん？」

そんな時、覚えのある気を感じた。

「クリス、ちょっといいか？」

「ん？どうした、薫？」

「マルギツテは今日日本にいるのか？」

「マルさん？わからないが……、というか何故薫がマルさんを知っているのだ？」

「まあ、前に会った事あるんだが、それより彼女の気を感じたからちょっと見てくる」

「え？ってちょっと待て薫！！」

箱根山中

一子と京は今追い込まれていた。

2人で組み手をしていたら、眼帯をつけた外国人の軍人っぽい女が現れて、「私も混ぜなさい」と言っって乱入してきた。

そして、最初は押されていたものの、一子が一撃をいれ、京も相手を見事な背負い投げで相手を叩き付けた。

そして起き上がった女軍人は、静かで、そして獰猛な声でこう言った。

「……Hasen(野ウサギ達め)、Jagd(狩ってやる)」

「……？雰囲気か……？」

京が違和感を覚えた瞬間に相手が突っ込んできた。

それを左右に展開し、相手を挟む。

「頭に血が上ってるなら……」

「これで眠りなよ！」

2人同時に容赦の無い蹴りを放つ。

が、

それを敵は、左右の手で同時に受け止めた。

「この手応えは……木？」

女軍人はいつの間にか武具を装備していた。

二本一組の武具、トンファーによって2人の蹴りがガードされている。

彼女はトンファーを自分の体の一部のように自在に操り、まずは京に狙いを定めた。

「H a s e n J a h d ! ! !」

武器を起用に回転させながらの一撃が防御した京のガードごと吹き飛ばす。

「京！」

「っ、大丈夫！」

京をかばうように一子は女軍人の懐に飛び込んでいく。

「ハアツ!!!!」

「ち、このトンファーの乱撃、スキが無……」

「トンファーキック！」

「ぐっ!?!」

トンファーに気を取られ過ぎた一子のガラ空きの腹部に強烈な蹴りが炸裂し、吹き飛ばした。

「…く…はっ、…今のは効いた」

振り回すトンファーに気がいって、蹴りの注意を怠っていた。

相手は相当の手だれ、この死合いとも言える状況で、一子も京も武器がないのが痛かった。

「ハハハ！H a s e n n ! J a

」

勝ち誇る相手。そこに

「飛燕」

声と共に横から敵に向かってから何かが飛んできた。

「な!?!」

彼女は驚きながらもそれを何とかトンファーで受け止めた。

「これは!?!ぐうつ!!」

それは気で出来た刃。彼女はその勢いを殺しきれずに押される。

「ハアツ！」

「ぐつ！」

そこに木々の間から現れた何者かが蹴りを入れた。女軍人はそれを

もう片方のトンファーで受け止めたが、そのガードごと吹っ飛ばされた。

相手を蹴り飛ばしたのは薫だった。

「薫！」

「大丈夫か、2人とも。それとも邪魔したか？」

「別にいい。助かった、ということにしておく」

「素直じゃないな。まあいいが。さて、」

そいつって薫は吹き飛ばした相手の方に顔を向ける。

「久しぶりだな、マルギツテ。元気にしていたか？」

「……やはり、薫ですか……！」

一子が「え！？知り合い！？」と驚いてるが二人は無視する。

「素手相手に武器を持ち出すのってどうなんだ。ああ、結果を求める軍人としては正しいのか」

「ならば、別の相手と闘っている者に不意打ちを加えるのはどうなのですか？」

「正しくなくとも、私は自身の考えに従ったまでだ。後悔や反省はない」

「……確かに、それでこそその薫です」

「そういう言われ方もどうかと思うが……」

「おいおい、薫、私の出番がなくなっただじゃないか」

敵ことマルギツテの背後から百代が現れた。

「！？私の後ろをとるとは！」

「闘気を感じて来てみれば面白いことになってるじゃないか」

「本当だ、こっちにも軍人かよ」

遅れて大和も来た。

「大和、モモ先輩」

「モモ？…そうか、最強と名高い川神百代か！」

そうこうしているとクリスもやってきた。

「待て、薫！……あ」

「クリスお嬢様」

「マルさん！」

「クリもコイツの知り合い！？」

「それよりマルギツテは何でここにいるんだ？」

「それはですね……」

「それは私が説明しよう」

そうして出て来たのはなんと、というかやはりというか

「父様！？」

「クリス、我が娘。今日も美しい。」

クリス父ことフランク・フリードリヒだった。

「中将殿……お久しぶりです」

「おお、薫君ではないか。久しいな。娘から同じクラスだと聞いていたよ。君と同じクラスならば安心できるな」

「恐縮です」

「あー、話の途中悪いんですが、そっちの人は……？」

「ああ、そうだった。紹介しよう。私の部下のマルギツテ少尉だ」

「マルギツテ・エーベルバッハです。覚えなさい」

さて、クリス父とマルギツテがここにいる理由、それはなんとクリスからの友達と泊りがけで旅行をするという連絡をきいて心配になって来たらしい。部下である獵犬部隊30名ほど連れて。

「あと、マルギツテ少尉は今度2・Sに転入する予定だ」

「え？真剣マツですか？」

「ああ。流石の私も、少尉をクリスと同じクラスに手配するほど親バカではないよ」

「いや、十分に親バカだと思っけど……」

その後、マルギツテが2人に襲い掛かった事を百代が軍人10人ほど倒した事とチャラにして、2人は軍の部隊を引き連れて悠然と去っていった。

「マルチーズか……覚えてたわ！」

「覚えてないからね！マルしかあってないからね！」

「人の名前ぐらいは覚えるべきだぞ、ワン子……」

気を取り直し、皆で釣り再開。

「やつほう！またヒットだぜ！20センチ以上あるな。これ川下の釣り人に売りに行ったら商売じゃね？よーし。行ってくるぜ！我ながら商売人だ！」

キャップは凄い速度で、川下へ駆けていった。

「止めるヒマがねえ」

「まあ私達は好きに動くさ……」

そう言いながら川岸に座って素足を水に付けて遊ぶ姉さん。

「モモちゃん、魚逃げるって」

「いいだろー、別にー」

その横に胡坐あぐらをかいて釣竿を川に向けている薫。ただ……

「……薫は何してんの？」

「釣り」

「餌ついてないように見えるが」

「こつすると精神修行になると聞いたから」

「釣りする気、もうないねアナタたちは」

「これでも釣ろうと思えば意外と釣れるのだが……それに虫全般苦手だ」

「あ、そういえばそうだったな」

完璧超人に見える薫の弱点、その一つが虫だ。

蚊とかの小さい羽虫はまだ大丈夫みたいだが、それ以外はダメらしい。

以前薫が俺の部屋に来た時に一回『G』^{「ギンリ」}が出現したことがあった。

その次の瞬間、薫の手のひらから光の球体が放たれ『G』は畳の一部を巻き込んで消滅した。

その時の薫の顔といったらそれはもう………無表情があんなに怖いものだとは思わなかった。思わず畳の損傷を忘れるくらいに。

「というかさっきまで餌どうしてたんだ？」

「それはこうやってだが」

薫は釣竿を振り回して、岩場の下にいた虫を釣竿の針に引っ掛けた。

(良い子は真似しないで下さい)

「何かもうツツコム気失せたわ。というかもう餌なしでやってくれ。それ相当危ないから」

「了解した。それはそうと、モモちゃんは足指も綺麗な形をしているな」

「ふふふ、そうか。ではもっと見るがいい、美少女の足の裏を！」

姉さんは、さばっ、と水に濡れた足の裏を薫に突き出した。

「目の前に足の裏をつきだされても……」

「何だど？だったらこれでどうだ！」

「痛！？モモちゃん蹴らないで欲しいんだが」

「ハハハ、断る」

姉さんの遊び相手は薫に任せてクリスとの距離を縮めることにした。それが無理そうだったら昨日言った通り、クリスに決闘を挑む事にしよう。

「そういえば薫、お前アイツとどこで知り合ったんだ？」

「ん？アイツってマルギツテ？」

「そうだ。というか親しげだなおい」

「1年くらい前に仕事で。女友達と旅行に行く娘に、軍の仕事の都合上少数しか護衛が置けなくて心配になって仕方なく私を雇ったらしい」

「その娘ってクリか？」

「当然。で、実力を測るとかでマルギツテと闘わされた」

「ほう。で、どっちが勝ったんだ？」

「勝負つく前に止められて結果的には引き分けだ。まあ護衛する前にポロボロになるのはまずいじゃない」

まあどっちがと言わないが。

「そうか。つまりあのマルギツテは少なくともお前とやり合えるぐらいには強いわけだな」

「まあ、そうかな？」

「ところで……」

お、ヒットー……

「私と、真剣マツメでやらないか」

一瞬動きが止まってしまった。その際に魚に逃げられた。

「……………全力戦闘は禁止されているから無理だ。すまない」

……………一瞬違う方向に思考が行ってしまった。私もまだまだ精神修行が足りないな。

「そうか。残念だ。それにしても餌もついてないのにどうやって釣れるんだ？…………ん？何か大和とクリが面白そうなことになってるぞ」

「それじゃ、行ってみる？」

「そうだな」

大和とクリスの所に行ってみると、丁度大和がクリスにこう言った。

「勝負だクリス、俺という人間を認めさせてやる！」

「なるほど、力が伴えばさっきの言葉にも説得力が宿るな。面白い、その勝負受けた！」

こうして昨日の言った通り、大和とクリスの決闘が決まった。

ただキャンプの「今日は釣りやるっぜ」という主張で次の日に行われることになったが。

夜、宿の部屋

「フッフッフ、俺様出現。右良し、左良し」

「安心しろ。周囲には人いないぞ」

「じゃあ早速、下の旅館の風呂覗きに行こうぜ！」

「何故俺を誘う?」

「キャンプはお子様で興味なし。モロはビビりまくりのチキンボーイ、薫はすでに行方不明、だが俺達5人の中で一番エロいお前なら!」

「そこまで俺はエロくない……が、お前だけ行かせてバレたりしたらまずいから、俺も行く」

「よっしゃ。よく言った」

「じゃあ早速行くぞ。兵は神速を尊ぶ」

「では冒険に出発だ!財宝を求めて!!」

ヤマト が 仲間になった(~~~~)

ガクト は 部屋の扉 を 開いた

「くくく。キイタゾキイタゾ」

モモヨ が 現れた

「大変だ大和！いきなりラスボスだ！」

「これはまずい。気配殺してたな姉さん」

「私も行くっ」

「はい？」

「私も、ねーちゃん達の裸を見る！」

モモヨ が 仲間になりたそう（？）な目で こちらを見ている

仲間 に しますか？

> はい

いいえ

モモヨが仲間になった(~~~~)

「で、どっちだ？」

「ああ、俺様に着いて来てくれ」

頼もしすぎる仲間が増えたな。

俺達は山の中へと入っていった。

ガクトによると山の下にもう一つ温泉宿があつて、その女湯を覗けるポイントを昨日の内に見つけていたそうだ。

さらにモロに頼んでその宿に女子学生の団体が泊まる事も確認済み。覗きに行ったけど何もなかったということにはならない。

「ポイント到着。ターゲットはラクロス部女子学生」

「ぷりぷりの、ピーチやメロンが並ぶ八百屋を、堪能だ！」

自分の姉さんながら、この人ちょっとおかしい。

「さあ、この茂みをかき分けるとエルドラドが……………」

その時、突如警報装置が鳴り響いた

『フシンシャハツケン ケイカイタイセイレベル4!』

「な、こんな装置昨日の昼間はなかったぞ!」

「ちい、夜の間の警報装置か。敵も考えるな」

畏を調べる。カメラはない。姿は写っていない。

「む。早い。6人ほどの人間がこっちに来る」

「警備員の動きめっさ迅速だな!」

「私はいくらでも切り抜けられるがお前達と一緒に姿を見られかねん。そこで3人全員が切り抜けられる方法は……」

「任せろ、女性の姉さんがいることで言い訳できる」

「いちいち言い訳めんどいな」

姉さんは俺とガクトをそれぞれ片手で持ち上げた。

「お前達は下の川へ逃げろ。私は走って逃げる」

「おいおい!下の川まで高さスツゲーあるぞ!」

「まさか落としたりしませんよね?」

「問答無用。無事戻ってこいよ」

「うおおおおおおおおお!?!」

「バカなああああああ!？」

俺とガクトは、5月の川の中に投げ込まれた。

「さて、私も逃げる前に……薫、いるんだろ」

百代は木の陰に向かってそう言った。すると

「流石モモちゃん、よくわかったね」

そこから薫が現れた。………覗きスポットの警報機の方こう側から

「私を誰だと思ってる。で、なんでここにいるんだ?」

「……実は、散歩にでたら道に迷って、……彷徨っているうちに、その、フルーツ専門店を見つけて……見ていた」

「お前もエロいな。というか………なんでお前は警報機に引っかかるないんだ!」

「これもステルス気配遮断スキルの高さ故だ。ということで宿まで案内してくれないか？」

「イヤだ！私は見てないのになんでねーちゃんの裸見たお前を案内しないといけないんだ！気配を極限まで消して付いて来れないようにして帰ってやるー！」

「そうか……モモちゃんにはそのバライソの動画を見せてあげようと思ったのに……仕方ない、消去するか……」

「私についてこいー！」

「うわ、変わり身が早いよ」

そう言いながら薫は百代に動画の入ったケータイを渡す。

「私の気を辿ってこいよ」

「了解、でも見た後にちゃんとデータを消去しておいてくれ」

そして百代は、警備員達の間を堂々と走ってすり抜けた。

「突風？今、何か通ったか？」

「気のせいでしょう？それより覗き捕まえないと」

常人の目には、何も映らないほどの速さだった。

そして薫はその横を悠々と歩いていく。

しかし警備員達は薫に誰一人として気づかない。まるで、薫の姿が目映っていないかのよう。

箱根旅行二日目（後書き）

他の作者さんのマジ恋作品を見ると、皆すごいなーとか思っていますね。

もっと薫クンを前に出さない！

そう思い見直してみると、ここ変えた方がいいかなというのもあるので少し改訂するかもです。

箱根旅行三日目 前編

5月5日火曜

今日は箱根旅行最終日、そしてクリスとの決闘の日、なんだが……

「はつくしよーい!!!」

「検温終了、8度1分もあるねえ」

俺は風邪をひいていた。

「あーあやつちゃったね。川にダイブかな原因は」

「だったら俺様だって風邪ひいてるはず」

ガクトは超元気だった。

「ガクトは参考にならない。バカだし」

「ふっふっふ。軟弱ボーイのひがみ。みっともねー。ジムの割引券やるから、ここでお前も肉体を鍛えろ」

「元はといえば、お前に付き合っただのが原因だろうが!!!」

「まったく覗きなんてしようとするから……」

モロが呆れている。まあ仕方ないが……

「警報機に引つかかるとは……全くマヌケだな、ガクト」

「うるせー!」

薫は着眼点が少しおかしい気がするが……ってあれ？

「ちょっと待て。何でガクトが引かなかった事、薫が知ってるんだ？」

「あ、そういえばあの時（風呂入ってた時）薫いなかったよね」

そう、俺達が覗きに行つてガクトが警報機にかかったのを話したのは風呂に入った時。

その時薫は行方不明（多分迷子）でいなかったはずだが……

「……」（薫）

「……」（ガクト）

「……」（大和）

「……」（モロ）

「……?」（キャップ）

「まあそれはいいとして、」

「よくないよ!」

まあモロの突っ込みたい気持ちも分かるが、それよりも今は決闘の事だ。

「決闘はどうするんだ？このままだと不戦敗になるが…」

「やめておいた方がいいよ、こんなに熱あるんだし」

モロは今日の決闘をやめるように言うが、俺の気持ちは変わらない。

「それは嫌だ。勝負を挑んだ以上勝つ」

「決闘の延期をお願いしたら？ガクトが原因なんだから責任取ってもらおうよ」

「どーとるんだYO？」

「実は昨晚ガクトが『ガイアに自分を捧げる』とか言って、裸になつて庭に飛び出したから全力で止めたせいで風邪をひいた、とかどうかな」

「確かにそれなら女子達は信じるだろうな」

「やめろ！俺様がただの変態だと思われるだろうよ」

「あ、もう十分に変態だと思われてるから大丈夫」

「ガクト、気付いてなかったのか？」

「俺様は変態じゃねー！！」

「ガクトの嘘は本人からボロでるから駄目だ」

「じゃあどーするの?」

「誤魔化すしかないな。体は普通に動くし」

頭はボーっとするけど。

「誤魔化すくらいだったら大和、秘孔を突いてあげようか?うまくいけば風邪が治る」

「本当か!? だったら……」

「ただし、三回に二回は失敗する」

「……失敗したらどうなるんだ? 体調がさらに悪くなるとか……?」

「身体が弾ける」

「どこの暗殺拳なのさ!?!」

「大丈夫、行為と事象に関連性があることを証明できないから身体が弾けても私は罪に問われない」

「そこ自分の心配なの!?!」

あ、何かデジャビユ。

「さすがに風邪治すのに命を掛ける気にはなれないな……。宿の人に熱止めをもらってくる。効くかもしれない」

「何か大変そうだな、大和」

「だからお前のせいだろーが!」

「!!人の気配!誰だ、盗み聞きしている忍びのものは!」

「にゃ、にゃうーん」

「何だ猫か」

「怪しいな。箱根の猫はもっとラップ調で鳴くんだ」

カマ掛けてみた。すると、

「にゃっーにゃっにゃっ、にゃっーにゃっ、にゃっ

乗った。間違いない。

次は薫が、

「いや、箱根の猫はもっと応援団っぽく鳴くのでは?」

と言った。すると

「にゃにゃっー!にゃにゃっー!にゃっーにゃっーにゃっーにゃっー!」

また乗った。

さらに薫がいい笑顔を浮かべながら、

「じゃあ次は……」

「やめてくれ！まゆつちのライフはもう0だ！盗み聞きしてたのはオラなんだ！まゆつちはなんも悪くねえ！！」

扉から松風だけが現れた。

「……まゆつち、馬鹿な事やってないで出て来なよ」

「は、はい……」

まゆつちが扉の向こうから現れた。

「コイツ等結構なサドだと俺様強く思うね。特に薫」

「右に同じく……」

「薫には負けるさ。まゆつち聞いたね」

「あの、私皆さんを呼ぼうとして……」

「聞いたって事だね。で、お願いがあるんだけど」

「オネーガイ（1412）1467）？」

「俺が熱出してる事皆には黙ってて欲しいんだ」

「あ、あああ！お、お願いですね！わわ、わかりました！……ってえええ！？ダメですよ！そんな状態で勝負なんて！！」

「まゆっち」

名前を呼んで目をじっと見つめる。そして、

「頼むよ、ね」

笑顔でまゆっちの耳元に囁く

「あうあうあう……わ、わかりました」

ふう、何とかだったか。

後ろから「モモちゃんと京には勝負の後に『大和がまゆっち口説いてた』と報告しておこう」という声があったが空耳だろう、うん。

大和とクリスの対決が始まった。

勝負の内容は川神戦役の縮小版。川神戦役とは、主にクラスとクラスがやりあう時に使われる決闘法で、色々な種目の書いたくじが入っているくじ箱からくじを引いて、でた種目で闘う。勝負を繰り返して先に5回勝った方の勝ち。

本来は出た種目に対して強い奴がいく団体戦だが、今回はそれをタイマンでやる。

とりあえず、じゃんけんでくじを引く順番を決める。

じゃんけんは大和の読み勝ち。クリスが予想通りすぎた。

大和がくじをひく。その時京がイマジネーションプレイしていたが、まあいいとしよう。

そして大和がひいたくじには

一回戦種目、『Chain Death Match』

これは二人の手を鎖でつなぎ逃げられないようにして、相手が倒れるまで殴りあうという競技だ。要は腕っ節の強い方が勝つ。つまり

……

「はははは、殺せよー!」

頭脳派の大和に勝ち目はないのだ。

「あ、俺が入れたやつだ」

「キャップが？どうして？」

てっきりモモちゃんかと思ったのだが。

「薫の鎖を見て思いついたんだ。つーワケで薫、鎖貸してくれ！」

「それは構わないが」

そう言つて袖からジャラジャラと鎖を出す。

「……お前、いつもそんな物仕込んでるのか」

「ちよつと待った！それはダメ！」

その時、京から待ったの一声が。

「京？何故？」

「大和は薫に気があるような気がするから、薫の匂いとかがついた物は与えないで欲しいの」

「……そういう理由なら、やめておこつ」

「んなわけあるか……！」

若干、というかかなりひいた。実際、大和と距離をとろうと一歩下がってしまった。

……大和の否定の言葉で少し安心したのは秘密だ。

「ちなみに要注意人物は薫、キャップ、クリス、まゆっちの順」

「何で男が上位なの!？」

「む。そのクリス、今のBL発言に反応したね」

「し、していない!!」

「顔真つ赤にしても説得力ないぞ」

この後、当然大和はギブアップ。その時、「女は殴れない」などの言い訳をしてクリスを納得させていた。

大和 0 1 クリス

次はクリスがくじをひく。

二回戦種目、『絵を描く』

これは互角か？

絵のお題は『まゆっち』になった。勝負は一時間、審判はまゆっち自身。

2人は真剣マツに描いてる。何故かキャップも描き始めた。ヒマだし私も描いてみよう……

……一時間後……

クリスのターン

「少し照れるな」

クリスの絵は、まゆっちが一人風を受けて川辺に立つ姿を綺麗に描いていた。

大和のターン

「俺の絵は、こうだ」

まゆっちが私達に囲まれて、幸せそうに笑っている絵

正直、画力はクリスのほうが上だが、まゆっちは大和の絵に感動して大和の勝利になった。

「あ、勝負に関係ないけど俺の絵はこんな感じだぞ」

キャップのターン

「写真！？いや違う、普通に描いたのかこれ」

「負けた……上手すぎるぞキャップ！」

三人の勝負だったらキャップの勝ちだった。

「ちなみに私のはこんな感じ」

私のターン

「はあうー!!?」

「び、ピカソ？」

「印象画っぽく描いてみたのだが」

「上手いのかどうかわからないぞ」

「なんか落書きに見えるわ」

「同じく」

「おめえ、オラが温厚じゃなかったら蹴り飛ばしてる所だぞ！」

「す、すまない……」

四人の勝負だったら、少なくとも私の勝ちはなさそうだった。

大和 1 1 クリス

気を取り直して大和がくじをひく。でた種目は

三回戦種目『肝試しゲーム』

「私の希望したゲームだ。これも互角そうだな」

「モモちゃん、幽霊とか嫌いだったよね」

「殴れないからな。だがこれはそういっのじゃないんだよ」

「??というところ？」

「ルールは簡単。取り出したるは、細長い棒状のチョコのお菓子『ポッキー』。これの端を自分の口に咥え、反対側の端を異性に加えてもらう。そして異性がだんだん菓子を食べてくるので……顔が接近してくるのを何秒耐えられるか試すチキンレースだ。口を離したらゲームオーバー」

「ってただの合コン用のゲームじゃないか!」

「見つめ合って食べないと無効だからな。ははは」

「見クリス不利に見えるが、モモちゃん提案だし多分違

「……」

「ん?どうした薰?」

キャップが私の様子を見て話しかけてきた。

「いや、何でもない。まだ時間掛かりそうだし、少し散歩に行ってくる」

「そうか、迷子になるなよ」

「ああ」

箱根山中

「くくく……」

木の上に一人の男が立っていた。

仲間連中からヤツが離れていくのを確認した。

皐月薫。“曆”の構成員でありながら、御老中達が危険視する人物。

「ま、買いかぶりだろうがな」

人質は取るな、とのことだったが

「関係ないな」

我等“閩”、目的の為なら手段を選ばず。

まあ人質はもしもの時の保険として確保しておくか。

昨日は何故か軍人が大量にいたし、今は“武神”がいるから迂闊に

動けない。

(まあ、このオレなら武神相手でも逃げるくらいなら何とかなるだろう)

人質として狙い所はやはり女、その中で一番御しやすいのは……

(ポニーテールの女だな)

目標を決め、いざその場から跳躍しようとした瞬間

「動くな」

背後から声が聞こえた。

「なっ？」

「動くな。喋るな。振り向くな」

(い、いつの間に!?)

「お前、“聞”だな？私を狙ってきたのか？」

「て、テメエ……誰が言うかよ！」

内心、「何でコイツ俺の正体知ってただよ!？」とか思っているの

だが、それを悟られまいと大声を上げ、虚勢を張る。

「喋るなど言っただろう」

その発言と同時に、『トス……』と何かを首に刺された。

「ウグツ！？て、テメエ何しやがる！？」

「針を刺した。だから喋るな」

さらにもう一本『トス……』といかれた。

「グフウ！？」

「それじゃあ、質問に答えろ」

「だからテメ「喋るな（トス……）」クハッ！？」

「何でいう事を聞けないんだ？……ああ、そうか、それじゃあ質問に答えられないか」

「テメエ……わざとだろ！」

「うるさい。じゃあ質問の回答以外で口を開くな。さもなくば殺す」

「ちょ、ちょっと待てよ！確かにオレは“閨”の人間だしアンタを狙ってきた！それは否定しねえよ！だが、オレは軽く痛めつけてやる程度にしか考えてなかったしな！ここはどうか、どうか！」

「……“閨”の質も下がったものだな」

やれやれというように薫は深く溜め息をついた。

(今だ!!)

「死んでくれや」

振り向くと同時にヤツに向かって腕を振るった。

(今のオレの手の中には一本の鉄串が隠されている。不意打ちでこれを放たれば、何かしらのアクションを起こすはず!殺れなくても、せめて避けてる隙に距離を)

ガキン!

「こんな見え透いた手を使ってくるとは」

「な!?!」

見れば鉄串はそこら中に張り巡らされた鎖に受け止められていた。

「い、いつの間に?!」

(このオレに気付かれずにこれだけの鎖を張り巡らすだと!?じ、
実力が違いすぎる!!)

「ま、待ってくれ!てゆうかこういう最初の相手ってのは、勝つに
しても負けるにしてもいい勝負して見せ場があるもんだろーが!そ
れを何か?こんなあっさりと終わっちゃまっていいのかよ!オレは
まだ名乗ってすらねーんだぜ!?だからここは仕切り直しという意
味も兼ねて一回お開きにしよう、ぜ!」

足にできる限りの力を込めて逃げる。

(全力で逃げるしかねえ!!)

しかし

「逃がさん」

時既に遅し。

逃げる速度よりも速く鎖が身体中を縛り付けられ、薫の方に引き寄

せられ、さらに腰を抱きかかえられて、そのまま……

「ジャーマンスープレックス!!」

「ちょ! 待て! これ、死 …… !?」

頭から垂直落下。更にそこから回転も加えられる。

「漫画の見様見真似、表・蓮 …… !」

木の頂上から回転をかけて猛スピードで頭から垂直落下。身体は鎖で縛られ、さらに一人の人間が腰にしがみ付いて受身どころか身動きすら取れない。

(あ …… オレ、死んだ)

名乗ることすら許されなかった刺客は、地面に直撃する前に自らの死を感じ、気絶してしまった。

「…と、と…」

地面に激突する前に薫は服の両袖から計四本の鎖を射出、周りにある木々に絡み付いて勢いを減速させた。

結果、地面にぶつかる頃には勢いは皆無に近かった。

既に気絶している刺客を見てから、薫はこういった。

「あー、楽しかった」

……やはり彼はSなのだろうか？

薫が腕を動かすと鎖が動き、服の袖の中に戻っていった。

「それにしても、ツボをついたから気が使いにくくなっているのに気付きすらないとは……」

薫が刺客に針を刺していたのはそれぞれ、『気の放出を抑えるツボ』『気の流れを抑制するツボ』『気の流れを乱すツボ』で、刺客が攻撃を仕掛けてきた時にはすでに最悪のコンディションになっていたわけである。………本来は戦闘中等の慌しい状況時に刺せるツボではないのだが相手の油断と隙が大き過ぎたので突く事が出来た。

これらをしたのは戦闘になっても百代達に気付かれないようにするためである。

もし、気を感じれば、百代は文字通りここに飛んできたであろう。

いくら大丈夫だとしても、薫は自分の日常を壊されるのは許せなかった。

のなら、私が を たい

「 ……ふう」

危険な思考を拭い捨てる。

刺客を動けないようにどこからともなく取り出したロープで木に縛り付ける。(鎖は勿体ないので)

「ワン子が戦うとしたら……素手だと厳しいくらいのレベルかな…」

そんな事を考えながらファミリーのいる場所に戻ろうとした時、薫のケータイがなった。

「ん？電話か？このケータイはバイト用のだな」

声を整える。

設定は24歳男性。

調整し終えて、電話に出る。

「はい、こちらゴールデンウィーク青年相談室」

『幼馴染の女の子に………ストーカーされているんです』

相手は大和だった。

「ほう、ストーカー」

『はい、確かに顔は凄く綺麗なんですけどその分性質が悪いというか。この前なんか朝俺を起こす時に顔にバスト84を擦り付けながら』

話を聞いていると何だかイラツときたので、ちょっといじってみることにした。

「自慢なら他でやってください」

『いや、自慢じゃなくて真剣マジメで悩んでるんです。いつ過ちを犯してしまうか不安で………』

「なら過ちを犯してしまえばいいじゃないですか」

『そんな事薦めるなよ!!……………大事な仲間だから安易な気持ちで受け入れて傷付けたくないんですよ』

「そうですか……………それだったら一つ、いい方法がありますよ」

『え!?本当ですか!?!』

「去勢すれば過ちを犯したくても犯せない(ブツツ)……………って切られた」

ケータイを仕舞いながら、先程ファミリーのいた川原へと戻っていた。……………多少道には迷ったが。

箱根旅行三日目 前編（後書き）

戦闘が何だか残念な出来になった気がします。申し訳ないです。

そういえば、youkeyさん主催のコラボ企画『川神聖杯戦争』に参加を希望してOKを頂きました。

迷っていたのですが、どうやら定員的にはギリギリセーフだったようです。危なかった……………

あとやっぱり感想が欲しいです。やはり感想の量は作者の文才と比例するのか……………

コラボ企画『川神聖杯戦争』広告（前書き）

youkeyさん発案のコラボ企画に参加させていただける事になりました。

SEIMAさんが書かれた広告を載せさせてもらいます。

少々訂正しました。

コラボ企画『川神聖杯戦争』広告

川神鉄心の気まぐれで行った。

魔術儀式よって呼ばれた平行世界の7人の戦士

『悪いが、俺の相棒のために死んでくれ』

襲いかかるは野獣を身に宿した、闇の王者

『屑がその程度の力で王に挑むとは片腹痛いわ!!』
五行を統べる王の軍勢が敵を殲滅する

『そんな読みやすい攻撃、僕の技のいい餌だよ……』
策略の柔術使い手の青年の技が冴える

『私のマスターに指一本触れさせない!』
戦闘一族の末裔の不屈の護り手が、主の最強の盾となり

『へ？戦争？じゃあ俺巻き込まない方向で、見学してっからさ』
まったりのほほんとは真逆の現状に、格闘士としての血が騒ぎ出す

そして、出会うことのなかった光と闇が今、交差する

『俺は、お前みたいな武術を使う偽善者が嫌いなんだよ!!』
孤独な悪意が牙をむき

『コイツとの絆を護るために、お前を撃ち殺す!!』
銃弾の拳を持つ青年が結んだ絆のために拳を振るう

そして現れる最強の敵
『お前が最後の生き残りか……。さあ私の渴きを満たしてくれええ
え!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

鎧を削る武の狂宴

その先にはなにが待つのか

運命の『死の遊戯』バトル・ロワイアル今開演する

『問おう……………お前が俺のマスターか?』

マジこいSS作家7人による、真剣で私に恋しなさい!! コラボ企画

『川神聖杯戦争』(企画原案youkey)

近日公開

参加者募集は既に締め切りました。

箱根旅行三日目 後編(前書き)

今回は短めです

箱根旅行三日目 後編

川辺

道に迷いながらも何とか先程の場所に戻ってきた。私にしては快拳の時間である。

ただ、そこにはキャップしかなかった。

「よう薫、遅かったな」

「他の皆はどうしたんだ？」

「ああ、実はな……」

あの後、三回戦は大和が、四回戦はクリスが勝って、2 2になっていたのだが、大和の体調が悪化してまゆつちがそれを暴露。大和の提案によつて次の勝負で勝敗が決まることになったらしい。

それで、最後の種目が『山頂からダウンヒルランニングバトル』

簡単なルールは山頂の展望台からここまで駆け下りるランニングレース。

ただし、山の中腹に二箇所チェックポイントがあり、どちらかでクイズを答えてサインポールをもらってくる必要がある。

道の途中にあるポイントには難しい、離れた場所にあるポイントには簡単な問題が用意されている。

乗り物に乗らなければどのルートを通るのもありで、相手チームへの妨害は無し。

さらにパートナーを一名選べ、自分か自分のパートナー、サインポールを持つてゐる方がゴールすればそのチームの勝ちになる。コイントスの結果、クリスには京、大和にはワン子がパートナーになつたらしい。

「大和が不利そうだな」

「なあ薫、ヒマだし大和とクリスのどっちが勝つか、賭けしないか？ 負けた方が勝つた方に何か一つ奢るってことで！」

「じゃあ私は大和に賭ける」

こういう時、大和は熱くなつて意地でも勝とうとするからな。

「あ！ ずるいぞう！ 俺も大和に賭ける！！」

この考えにはキャップも同感らしい。

「それじゃ賭けにならない」

「じゃあ薫がクリスに賭ける。それで賭けは成立する！」

「何故変えなければいけないんだ！」

結局賭けは流れた。

少しして、クリスがやってきた。余裕綽々という感じだ。

「クリスこつちだ、俺にタッチすれば勝ちだぜー！」

これはクリスの勝ちか？……いや、違う。大和が来た。

ただしクリスの後方から、ではなく川の上流の方から。

「大和、こつちだ。キャップにタッチすれば勝ちだぞー」

クリスが驚いている。クリスが後ろを見ると、そのずっと後ろでワ
ン子がニヤリと笑っていた。

それを見たクリスが全力疾走する。が、間に合わない。すでに大和
がキャップに向かって飛び込んでいる。

「俺の、勝ちだああー!!」

「ええええ飛び込んでくのかよ!？」

「避けるなよ、キャップ」

いつの間にか来ていたモモちゃんに釘を刺されるキャップ。

「ちっ、しゃあねえ、バッチ来い！」

クリスが手を伸ばすが、それよりも早く、大和がキャップに勢いよ
く突っ込んだ。

「どわああー！ビチヨビチヨだ！」

「勝者！直江大和！！」

「……クツ、負けたのか……」

「そつだ……ゼエ…ハア、お前の負けだ」

その後、大和はクリスに先程行った作戦を説明した。

京がクリスにボールを投げた時に、大和がワン子からボールを密かに受け取っていたのだ。

何も持っていないワン子に追いかけて、自分は川に飛び込み、上流から下流に流れてきたということだ。

ちなみに飛び込んだ場所は昨日モモちゃんに放り投げられた場所らしい。（モモちゃん談）

「ああ。許せ。お前は強い男だった。自分自身が未熟。またそれを思い知らされた」

「ふふ、分かればいいんだよ、分かれば！」（バタリッ）

クリスに認められた瞬間に、大和は倒れた。限界だったようだ。

「看病してあげよう。まず熱をはかります」

そう言って京は大和の側に。

「熱測るのに股間に手を当てる意味がわかんないから」

それから約二時間後、昼食を食べて、クリスの携帯番号を教えるもらっている間に、やっと大和の意識が戻った。

「大和、顔色が悪いが大丈夫か？」

「まあ薬が効いてくるよ」

「大和さんはあまり動かないでくださいね」

「そうだね。わかったよ」

クリスは大和に対して棘のある言い方はしなくなったし、まゆっちも遠慮せずに言いたい事をいうようになったし、二人ともすっかり風間ファミリーに馴染んだようだ。

「もう二人とも文句なしで仲間だな」

「よし。後はお前達2人に川神魂を授けるぜ」

「川神魂？」

「何だそれは？」

「こいつの詩がある」

そういつてモモちゃんが詩を紡ぐ

光灯る街に背を向け、我が歩むは果て無き荒野

奇跡も無く標も無く、ただ夜が広がるのみ

揺るぎない意志を糧として、闇の旅を進んでいく

「これが川神魂だ」

「あえて荒野を行かんとする男の詩だぜ」

「女の子のアタシだってわかるけど長いわ」

「勇往邁進。一言で言えばそついう事だな」

「勇往、邁進」

クリスが心に刻むように口にする。

「困難をもともせず、突き進むこと、ですね」

「いい言葉だな。前に進む意志があふれている」

「辛い時は口にするといい。同じ旅をいく仲間がいる。そう思うだけで力が出るぞ」

「確かに、そうだな」

「それさえ刻み込めば他には何も言うことねーな」

「ねー、大和と京も来た事だし、乾杯しない？」

「いいなそれ。皆飲み物を持つんだ」

モモちゃんの指示で皆に飲み物が行き渡る。

それを確認したキャップは一つ咳をしてから、乾杯の音頭をとった。

「　　楽しくやろうぜ。それで十分だ!!カンパニー!!!!」

「　　カンパニー!!!!」

10個のグラスが、がちーん、とぶつかり合った。

新生風間ファミリーの誕生だった。

その後、私達は観光をした。

芦ノ湖を横断する遊覧船でワン子のはしゃいでいたり、クリスと大和の意見が合っているのを見て、キャップがクリスに突進したり、その反撃で打ち上げて空中コンボ入れられたキャップを湖に落ちる前に私が鎖で回収したりと色々あったが割愛しよう。

そうして夕方、川神に帰る為にバス停でバスを待っている時の事。

「もし、その輝きを放つあなた」

バス停の側に陣取っていた占い師の老人が話しかけてきた。

「俺様のことか？」

「いえ、そのバンダナの方です」

「俺スか？」

「そうです。あなたのような人に好かれ、強運を持っている人は滅多にいない。是非私に占わせていただきたい。お代はいりません」

「タダか！？だったらいいぜ！」

「現金だね……」

「では早速……」

そう言って老占師はタロットを並べていく。しかし、占いの結果が出る前にバスが来てしまった。

「あ、バス来ちゃったよ」

「爺さん、悪いけど俺達もう行くわ」

「そうですか。後は結果だけだったので残念です」

キャップ達がバスに乗り込んでいる間、老占い師は「うむ、この者は試練を得るが大丈夫」とか「この者は引かれてしまっている！しかし、仲間がいるのなら何とかなるだろう」とか占いの結果を見ている。

皆が乗り込んで最後に薫が乗り込んだ時、老占い師の表情が明らかに変わった。

「こ、これは……！」

そしてバスに乗りかけている薫に大声で呼びかける。

「お聞きください！あなたは大変不安定で危険な存在だ！救済をもちたらず事もあれば破壊をもちたらず事もある！だから一人に

「

残念ながらバスが発進してしまい、占い師の言葉は最後まで届かなかった。

否、そもそも薫にとって、届く必要が無かった。

「そんな事、当の昔に解かり切っている。誰よりも、何よりも」

「どうした薫？何か言ったか？」

「いや、何でもない」

私は本来、風間ファミリー（ニコ）にいるべきではない
のだから

箱根旅行三日目 後編（後書き）

これで、わずかながらのストックがなくなってしまった……

これからは更新がさらに遅くなるかも知れませんが、覚悟してください（何を？）

次回は……どうなるんだろ？

薫の交友（前書き）

とりあえず更新。今回は日常ですね。

あと、コロナ企画がもうすぐ公開です。

薫の交友

血が騒ぐ……。

「何だこの子どもは？どこから入った？」

騒がしい……。というかここはどこだ？どこかの建物みたいだが……

「どうします？消しますか？」

まあ、そんな事はどうでもいい。ただ、このどうしようもない濁きはどうすれば取れたらだろうか？

「いや、まだ子どもだ。とりあえずつまみ出せ」

「しかし、子どもとは言えコレを見られたのはマズイのでは……？」

確か……そうだ。こうすれば満たされたはずだ。

バキッ

「ぐぐぎゃっ……！」

そこにいた白衣の集団の一人を殴った。スカツとした。

少し満たされた。

「何だ!?!」

うるさい。黙れ。

バキッ!

「や、やめっ……!!」

バキッ!

殴る。殴る。殴る。

手に鈍い感触が残る。

「ひ、ひいいい!!」

殴る。殴る。殴る。

血が手に付着する。

「た、助けてくれッ!」

「け、警察を!!」

殴る。殴る。殴る。殴る。

ゴキリと何かが碎ける音がした。

「馬鹿か！今警察なんて呼んだら俺達まで捕まるぞ！」

「死ぬよりかはマシでしょ！」

「だからってガッ!？」

「ひいつ!！」

殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。

自然と笑みが浮かぶ。

「お、お願い……何でもするから、み、見逃して……」

声おとのする方を見る。まだいた。とりあえず殴った。

「ひびきゃっ!！」

ああ、気持ちいい。快感だ。

他にはナニか無いのか？

彷徨って、ナニが見つけたら殴って壊して、また探す。
それを繰り返した。

「　　ッ！！」

がばり、と跳ね上がるように起きる。

「はぁ……はぁ……」

嫌な夢を見た。呼吸が荒い。寝汗が酷い。気分が悪い。と、寝起きとしては最悪の朝だった。

時計を見ると、いつも通りの朝5時を示していた。

「……………ZZZ……………」

「ん？」

すぐ横から寝息が聞こえてきたので横をみると、そこには小雪が私の布団で丸くなって眠っていた。

確か昨日は冬馬と準が仕事で忙しいらしく夜分遅くにやってきて、しばらく遊んだ後に小雪にマッサージをしていたらそのまま小雪が敷いてあった布団で寝てしまったので、もう一組の布団を出して離れて寝たはずなのだが……

「何故同じ布団で寝ているんだ？」

まあいい。まずは放置されている布団を片してから朝の鍛錬をする

とっせむじ。

今日は珍しく朝早く起きた。ということまで薫をからかいに行くことにした。

「薫ー！美少女の私が起こしに来てやったぞ

」

薫の部屋の襖を勢いよく開け放つ。これで何かやましい事をやっていたらそれだからかってやるうと思っていたら、

「……………ZZZ……………ムニヤムニヤ……………」

そこには女の子が眠っていた。

白い、少女、だと……………！？まさか……………

「噂の白い美少女の幽霊！？なワケはないか」

実はある意味正解なのだが今は脇に置いておく。

「いや、それよりも重要なことは……」

ここは薫の部屋で、今はカワイイ女の子が布団で寝ている。部屋には布団は一つ。つまりは昨日の夜から一緒にいたわけで。

「……………」

判決・有罪^{ギルティ}！！

朝の鍛錬を終え、朝風呂を頂いて汗を流した後に、厨房に向かっている

「薰——————!!」

後ろの方からモモちゃんが走ってきた。どうしたのだろうか？

「ん？ああ、モモちゃんおはよ

」

「天誅!!」

「ぐべらっ!？」

いきなり殴られた。訳も判らず、防御も回避も受身も取る暇もなく私の身体は吹っ飛んで、そして無様に転がりながら壁にぶつかった。

「まさかお前が、あんなカワイイ子を私に黙って川神院に招いているとは思わなかったぞ!!……これはお仕置きをしないとなあ」

「……………な、何の話だ……………？」

ドモったのは心当たりがあるからではない。痛みを堪えているから

だ。

「あくまでしらばっくれるつもりか？よし、来い」

「ちょ！？自分で歩くから引つ張らないでくれ！」

引つ張られて行った先は私の部屋だった。

「さあ、この状況をどう説明する気だ！」

「この状況って……」

私の部屋には小雪が布団ですやすやと気持ち良さそうに寝ている。

「……成程、何故殴られたかは理解できた。だが、それは誤解だ」

「誤解だと？こんなカワイイ女の子と私に黙って一晩中一緒にいて……この世全ての美少女は私の物だ！まずは私が味見をすべきだろうが……！」

「そこか……？」

「ん？コイツは確か……葵冬馬やハゲといつも一緒にいるカワイイ子じゃないか」

「今更？気付いてなかったのか？」

「……むう？あれ？どこどこ？」

「……まさか誘拐したのか？」

「そんな訳ないだろう!!」

「ああーそうだ。カオルの部屋だー」

まだ眠いのか、小雪は目を擦りながら、辺りをキョロキョロ見ている。

「あ、カオル!」

その最中私に気付いたようで、私に向かってこう言った。

「昨日は気持ちよかったね」

次の瞬間、モモちゃんに思いつきり殴られたのは説明するまでもないだろう。この一撃のせいで今日は弁当を作れなかった。

2 - S

「　　　という事が今日あったんだよ」

小雪は朝あつた事を二人の保護者に報告する。

「バイオレンスな朝を送ってるんだな、皐月のヤツは」

「そうですね。ユキは本当に薫くんが好きなんですね」

「うん！でもとーまや準の方がもつと好きだよー」

「ほう、冬馬達は皐月と随分と仲が良いのだな」

いつもの三人で話していると、英雄も話に加わってきた。

「ええまあ。そういう英雄の方も仲がいいみたいですが、彼とはどこで知り合ったのですか？」

「我は姉上から紹介されたのだ。その時から優秀で骨のあるヤツだから将来的に九鬼財閥に入りたいと言っておったわ」

「へーそうなんだ」

「言ってみれば皐月さんは揚羽様のお気に入りですね。おそらく専属の執事にしたいのかと。能力的にも問題ありませんね」

「では次は此方の番かの」

今度は不死川まで加わろうとしてきた。

「何がだ？」

純粹に疑問に思った井上が尋ねる。

「此方と皐月との知り合った経緯じゃ」

(ない) 胸を張りながらそう答える不死川だったが……

「特に語らずとも良い、庶民Aよ」

「英雄様がそう仰ってるのですから語る必要はありませんよ?」

「そつだそつだ」

特に求められていなかった。

「うるさいわ!……」つほん。」

しかし、それに構わず不死川は語り始める。

「紙芝居つーくろつと!」

……語り始める。

高貴な此方と皐月との出会いは食堂でじやった。

初めて食堂に行った時、高貴な此方は下々の者が使う券売機なるものの存在を知らなかったのじゃ。故に高貴な此方は困っておった。

そこに声をかけてきたのが皐月なのじゃ。

その後、皐月と色々と話をして、此方は悟ったのじゃ。

今まで此方はこの世界の人間は、選民とそれ以外で構成されている
と思っておった。

しかし違ったのじゃ。

世界の人間は、選民と、選民に仕える資格を持った人材と、それ以
外の三つで構成されている事に気付いたのじゃ。

「
ということなのじゃ」

「紙芝居かんせーい！英雄聞く〜？」

「フハハハ！我は忙しい。しかし！庶民の声を聞くのも王の務め。
よかろう！我に物語を語る事を許す」

「さすが英雄様！英雄様の寛大な心に、このあずみ感激致しました
！」

「此方の話を最後まで聞けなのじゃー！ー！！」

誰も聞いていなかった。

「私が女の子の話を聞かない訳がありません」

訂正、葵は聞いていた様だ。

「……不死川、お前さんの仕草ってどこか子供っぽいよなあ」

「慈愛に満ちた目で見るでないわ！！気持ち悪い！」

「あと二年前だったら……おいしいなあ」

「ひいいい！！だ、誰か何とかするのじゃ！」

井上の視線に思わず震え上がる不死川。思わず助けを求めてしまう。

「榊原小雪作、タイトルは『羊と狼』」

「此方を無視するでない！」

助けるどころか、誰も気にしてなかった。

「ある所に、羊の群れがいました。その中でも特に仲のよいグループがありました。」

彼等は何をするのにも一緒です。

群れのボスにイタズラをしかけるのも、迷惑行為をする群れのボスを懲らしめるのも、

群れのボスが独り占めしている極上の草を盗み食いするのも、職務怠慢な群れのボスの尻拭いをするのも、

ライバルの山羊との戦いに口だけの群れのボスを突き飛ばすのも、狼に襲われた時に真っ先に逃げ出したボスを蹴飛ばすのも一緒にしていました」

「つーか群れのボスろくなヤツじゃねーな。何でボスになってんだ？」

「この群れでは、ボスは世襲制だからです」

「そのような愚者など追い出してしまえ!!!」

「そううまくいきませんよ、英雄」

「そんな仲良しグループの中の一匹は、ある時は仲間を助け、ある時は群れのボスを叩き、

ある時は仲間を叱り、ある時は群れのボスを叩き、

ある時は仲間と遊び、ある時は群れのボスを叩いたり、みんなが頼りにするスーパーマンでした」

「いやボス殴りすぎだろソイツ」

「そんな彼にも仲間にも言えない秘密がありました」

「何だ？まさかソイツは羊じゃなくて山羊だったとか？」

「実は、彼は羊ではなく、羊の皮を被った狼だったのです」

「大問題！？ライバルどころか天敵だったのかよ!？」

「最初は奇襲をするつもりだった狼ですが、仲良しグループと一緒にいることに心地よさを感じていました。」

そして、狼はもう羊は食べないと決心したのです」

「身の程を知らない決意ですね」

「だが、その心意気や良し！」

「しかし、本能にはそう簡単には勝てません。時々、目の前にいる仲間が餌に見えるようになりました」

「まあ仕方ない事だな。食わなきゃ生きていけないわけだし」

「狼は更なる決心をします。「例え餓死したとしても、俺は羊を食べはしない」と」

「カツコいいねえ」

「そうして我慢をしてきたある時、仲間が怪我をしてしまいました。仲間が血を流しているのを見た瞬間に、狼の理性は飛んでしまいました。」

気付けば、辺りは血みどろ。口からは血が滴り、肉の味がしていました」

「ああー、やっちまったな」

「狼は仲間を食い殺した後悔と本能を満たした快感という相反するものに押しつぶされてしまいましたとさ、続く」

「続く！？続くのかコレ!?!」

「続きは『赤ずきんちゃん』を読んでねー」

「何だと！？その狼、可愛い赤ずきんちゃんを喰って川に流される最低クズ野郎だったのか！？許せん！！」

「テメエは発言をわきまえるハゲ」

一瞬で井上の首元にあずみの小太刀が添えられる。

「す、スンマセンしたーーーーー！」

「ん？どうしたのだあずみ？」

「きゃるるん 何でもありません、英雄様」

また一瞬であずみは小太刀を仕舞い、猫を被る。これであずみの本性は英雄に気付かれない。

「その話は『分をわきまえる』ということですか？」

「ううん、違うよー。ちゃんと正直に自分の事をバラすのが正解だったのー」

「？」

「実は仲間の中にも、山羊とか肉食羊とかライオンとか悪魔とかが混じってたから特に問題なかったんだよー」

「裏設定濃いな、おい」

「スパイだらけという訳か。これも群れのボスが腑抜だからだな。我ならこのような醜態は晒さんぞ」

「その通りです！英雄様！」

昼休み

「さてと、どうするかな？」

「どうしたの薰？お昼食べないの？」

「今日は弁当を作れなかったんだ」

作らなかったのではない、作れなかったのだ。そこは間違えないよ
うに。

「もぐもぐ……川神院のお弁当はもらわなかったの？」

ワン子が疑問に思ったのか、肉を食べながら訊いてくる。

確かに受け取った。川神院の料理人さんがいつもの時間に厨房に現れなかった私を心配して、私の分も作ってくれていたのだ。ただ一つ誤算だったのが……

「モモちゃんに取られた」

残念な事に機嫌の悪い暴君にそれを取られたのだ。

「そうなんだ。私のハバネロ入り明太子一口いる？」

「悪いが遠慮する」

「なら自分のおいなりさんを食べてもいい。この前のお返しだ」

「好意に甘えて、もらっておくよ」

「薫ちゃんも大変ですねー。お姉さんがこの中から好きなの二つ上げますよ」

「それでは枝豆を。また今度お返しするよ」

「臯月、これ食っとけ。勘違いするんじゃないねえ。お前が倒れてバカ二人が騒がしくなるのが嫌なだけだ」

「ああ、わかった。ありがたくもらっておくよ」

「臯月君、このプリン食べる？絶品だよ」

「いいのか？ありがとう」

皆の好意がありがたかった。

ただ、これらの発言の後に「ヤベエ、たつた！！」とか「爆発しそ
うだ！！」とかいう声など断じて聞こえていない。

その後にヨンパチが前屈みになって教室から出て行く姿など見てい
ない。

今日も平和だった。

薫の交友（後書き）

ということでも日常編でした。主に2・S連中との関係でしょうか？
後は2・Fでの親密度？

ユキは薫クンのことが好きですが、あくまでLikeでありLove
eではありません。

簡単に表すと、

とーま 準<<<（越えられない壁）<薫<一部のクラスメイト<

その他

ぐらいです。

不死川の選民思考が変わっているようで全く変わっていないという
不思議。あれ？少しはましにするつもりだったのに変わっていない
だど……！！？

ちなみに不死川にとって劇的（？）だった出来事を薫クンはあまり
覚えていません。本人自信は「あー、そんな事もあった……
のか？」ぐらいの意識です。

薫を気遣うセリフが誰なのか、どれも一発でわかるのがすごい。や
っぱり原作キャラはキャラ濃いなあ……

作戦会議（前書き）

今回は短めです。

感想お待ちしております。

作戦会議

とある廃屋

不良以外には人が寄り付かないような場所に、数人の人が集まっていた。

「では、“閨”作戦会議を始めます」

そう言っただけで会議を仕切るのはツインテールの小学生ほどに見える、どこかのハゲがみたら即行で落ちる、そんな幼女であった。

「それは構わないんだが……人数少なすぎねーか？」

彼女にそう言ったのは、黒のズボンに黒のシャツ、その上に黒のロングコートという全身黒尽くめの男である。

彼が言う通り、そこにいる“閨”のメンバーは三人。“閨”は総勢10名　本来は12名だが欠番が二つあるので二人足りない

だが、この場にはその内の半分も集まっていなかった。

「えっと、睦月さんと如月さんが欠席。水無月さん、文月さん、長月さんの三人と卯月さんは任務中で、師走さんが入院中。皐月と神無月は欠番。出席は私とアキラさんと雫さんの三人だけです」

「これって会議って言えんのか？」

「言えますよ。情報を纏めるだけでも十分変わってきます」

「ちなみに四人の任務内容って何？」

そう聞いたのは、毛先で跳ね返った黒髪ショートヘヤーの眼鏡をか
けた女性で、手には何故か竹箒がある。

「卯月さんは潜入捜査です。あ、今回とは別件ですよ。で、他の三
人は襲撃に行っています」

「オタ三人組が襲撃に行ってるんだね」

「……まあ確かにオタだけど微妙に違う気も……」

「そんな事より会議しようよ」

「話振ったのテーマだろ！」

「えーでは。ここ数日、アキラさんが柄にもなく突撃せず、標的に
ネチネチと武芸者をぶつけてみたり不良に絡ませてみたりして、わ
かったことが一つあります」

「凄まじく悪意を感じる言い方だが、なんだ？」

「現時点で臯月薫を殺す事は非常に困難だということですよ」

「まあそうだな」

「だよな」

三人一致だった。

「ていうかですね、アキラさんが雇った武芸者とか不良の大半が目標に仕掛ける前に川神百代にやられているのはどうということですか？」

「知るか。大方向こうが勘違いしたんだろ？」

想像してみよう。

不良もしくは武芸者が向かう 皐月薫の近くには大抵川神百代がいる 川神百代はいつも挑戦を受けている 勘違いする

武芸者や不良も「川神百代を倒せば名が上がる」と思い、訂正しない 結果、やられる

自然な流れである。

「で、話は変わって、これは師走さんの突撃の映像です」

そういつて取り出したるはノートパソコン。(ちなみに師走というのは、箱根旅行の時に襲撃をかけた人です。)

「どっやって撮ってきたんだおい？」

「隠し撮りです。とりあえず見てください」

さらっと言いついてパソコンを三人で覗き込む。

……視聴中……

「名乗らせてもらえてないなんて……」

「これは、突撃とも言えねーな。つーか何で師走のバカは入院してんだ？ケガ全くしてねーじゃねエか」

「ああ、師走さんが入院しているのは精神病院です」

「……あー何というか……」

「私の戦闘能力は蚊トンボにも劣りますが、眼と反応だけはいい方なのでこれがどういふことなのか、ある程度は理解できます。この時、標的は『漫画の見様見真似』と言っていたので遊び半分で師走さんを倒したことになります」

「でも師走だよ？戦闘能力はそこまでじゃないよね？」

「それでもある程度の実力は持ってたぞ。まあ、敗因は実力云々よりも慢心しすぎたってのが一番だろ？」

「ですね。この時、彼の仲間はこの戦闘に気付いていません。気付かれても厄介ですが」

「それだ。その仲間が邪魔すぎるんだ」

「どういうこと？」

「まず標的の下宿先が武道の総本山、川神院です。仲良しグループの中には川神百代を筆頭に武芸に秀でた者が多数います。大規模な戦闘が起きれば確実に気付かれます」

「学校もとんでもないミステリーポイントだぞ。学長は川神院総代・川神鉄心、教師に川神院師範代が一人、他に二人ほど強いヤツがいる。さらに生徒にも『武神』に『女王蜂』ってありえねーよ」

「そこに『獵犬』が更に加わる予定です。政治方面でも綾小路家と不死川家、さらに九鬼家までいます。とんでもない巣窟ですね」

「これで“周りを巻き込まずに始末しろ”って無理だろ？」

“閨”が上から受けた命令は『臯月薫の殺害。ただし周りは巻き込まないように』である。

「『これ、なんて無理ゲー？』状態ですね。そもそも何故上層部は

彼をここまで危険視するのでしょうか？」

「確かにそうだね。危険だったら“閨”に入れるなりすればいいのに」

「丁度、五の皐月は空席だしな。とんでもなく強いなら戦力として使えばいいのに何考えてんだ上の連中は？」

三人で唸って考えるが答えは出ない。ヒントもなしに出たら苦勞はしないのである。

「その話は後にしましょう。話を戻しますが、アキラさんの腕なら狙撃で殺れるんじゃないですか？」

「無理。殺るのはできるかもしれねーが、その後大騒ぎになるし、絶対逃げ切れん。これじゃ任務どころか“暦”にとって不利益になるだろ」

相手の周りが普通なら問題はない。

問題なのは周りの人間なのだ。

近くに『武神』がいれば間違いなく捕まる。ていうか殺されるだろ。

「確かにそうですね。では正面から挑めばどうでしょうか？」

「尚更無理だな。今の状態なら何とか互角ってところか」

「？無理じゃなくない？」

「ああいうのは奥の手とか絶対に持つてるタイプだ。俺じゃ相手に

実力の七割を出させるのが精一杯だろうな」

「それ程ですか」

「これでも過小評価だと思っぜ。アレは武神レベルと思ったほうがいい」

「それは、過大評価では？」

「最悪は想定しといた方がいんだよ」

「となると、彼を確実に殺せるのは……」

「姐御と旦那ぐらいじゃねーか？二人は何て言っただ？」

「睦月さんは『もう少し傍観させて』。如月さんは『主の命に従う』だそうですね」

男の問い掛けにパソコンを弄りながら答える少女。

「それって結局二人とも動かないってことだよな？如月さんの主が睦月さんなんだから」

「手詰まりじゃねーか」

「とりあえずオタ三人組の報告を待つしかないね」

「いやだからその呼び方やめてやって」

その時、パソコンを弄っていた少女から最新情報が。

「あ、そのオタ三人組が標的に敗れました。既に回収の手配はしましたが、入院生活を送る事になるでしょうね」

「……どーすんだよ？」

「知りません。それを考えてもらう為に集まってもらったんですが」

「いつそのこと任務を放置するとかは？」

「ダメだろ。かといってこのままじゃ成功は無理だしなあ」

そういった後に流れる沈黙。しばらくして黒尽くめの男がこう呟いた。

「……いつそ巻き込んでしまつか」

「巻き込むって？」

「仲良しグループをですか？」

「いや、もっと大規模にさ」

そうして“閨”は動き出す。

「……………」

臯月薫は親不孝通りを歩いてきた。ただ単に道に迷った、という事ではない。まあ、迷っていない事でもないのだが。

街を一人で歩いていると、なにやら後を付けられたので、路地裏などの人目のない場所に行くと、「閨」を名乗る三人の男が現われた。そこまではいい。

そいつらは「死角なきフォーメーションを喰らえ」と言った後に、縦一列に並んで「エトストリームアタック！」とか言って突っ込んできたので、とりあえず突っ込んでくる奴等を一人一人前から順番に倒したら、「お、俺を踏み台にしないのか……！！」とかいってあっさり倒れてしまった。

とりあえず面倒事は嫌なので彼等をその場に放置して来たという訳だ。

「今の閨って色物が多いのか……？」

そんな疑問を思わず抱いてしまった。

薫が道に迷ったと自覚するまで、後、3分。

作戦会議（後書き）

さて、出てきました敵（？）オリキャラ！詳細はまた今度！

閨も大変なんです。頭がダメだと手足が大変というヤツですね。

youkeyさん発案のコラボ企画も是非読んでください。

座敷犬は見た！（前書き）

今回は前回よりは長い、と思いきや実は前回よりも短いです。
.....あるえ？おかしいな。

座敷犬は見た！

今日は早く起きた。

正確に言つと新聞配達の日よりは遅いけど、ない日にしては早く起きた。

「今日も修行、修行ー！勇往邁進ー！！」

朝の支度をしてから朝の鍛錬（川神院のメニューとは別の自主練）をしようと部屋を出ると、視界の端に人影を見かけた。

「？誰かしら？」

人影の方を見るとジャージを着た薫が向こうに歩いて行くところだった。

「薫も朝練かあ……」

そういえば薰って手加減してるとはいえお姉様と闘えるぐらい強いよね。どうやったらあんなに強くなれるのかしら……？

「よし！覗いてみよーっと！」

とりあえず薫の後を追いかけることにした。

薫に付いていつて着いた場所は川神院の道場の裏手にある場所だった。

それを物陰に隠れて観察する。

「ちとと……」

そう呟くと、薫の手から光の玉が出現した。

「あれは……気弾？」

それをどうするのかと思っていたら、薫はその光の玉をパァンツ！と両手で潰した。

その後、何が起きるのかというと……

「何も……起こらない？」

そう疑問に思ったけど、何かが変わった気がした。その何かは何なのかはわからないけど。

「リミッター1から3まで解除……完了」

りみったー？何だろう？おいしいのかな？

「極技・ツクヨミ」

次の瞬間、薫の姿が消えた。

「え？……あれ？どーゆーこと？」

周りを見渡しても上を見てもどこにも見当たらない。

「何をしているんだ、ワン子？」

「きゃわん！？」

いきなり後ろから声をかけられたので驚いた。声のした方に振り向いて見てみたけど、

「あれ？誰もいない……？」

「ああ、そうかツクヨミの状態だから見えないのか。ちょっと待ってくれ」

その声が聞こえた後に、少し待ってみた。

「……………？出て来ない？」

「いやこっちだから」

「ふえ？」

そう言われて振り向くと先程消えた場所に薫が再び立っていた。

「あれ？さっきいなくなったのにどこにいたの？」

「さっきからここにいたが」

さつきからここにいたって……さつき見た時、消えたんだけど……？

「????？」

「……そういう技なんだよ。ツクヨミは認識のズレを最大限に生かす隠密特化の技だ」

認識の……ズレ？

「????？」

「……まあ、簡単に言えば相手の視覚を騙す技だ」

「ふーん。他にはどんなのがあるの？」

よくわからないけど他にもスゴイ技があるのかな？という純粋な興味から聞いてみた。

「……本当は見せるべきではないんだが……まあいいか。」

……何だかんだ言って、薫もワン子に甘いのだった。

「さつきのツクヨミも含めてだが、これから見せる技の詳細について誰にも言つなよ」

「どーして？」

「技を知られるだけで手数が大分減ってしまうからだ。いいな。言ったらお仕置きだぞ」

「お、お仕置き……………うん、絶対言わない」

薫のお仕置き……………ガクガクブルブルガタガタブルブル……………

「もういいのか？」

アタシが震えてた間に薫は技の準備を済ませていたようだ。

「あ、うん！」

「では……………極技・アマテラス」

次の瞬間、薫から光が放たれた。

薫の身体を、黄金に光り輝く気が包んでいた。

「これは防御特化の技だ。多少の攻撃なら効かない。ちなみにどのような環境にも適応できるようになっていて、極端な熱や冷気などは通さない。さらには空も飛べる。まあ跳んだ方が速い時もあるが」

そう言われて見ると、薫の身体が心なしかふわふわと浮きかけてる気がした。

「ワン子、全力で一撃を撃ってこい」

「へ？どうして？」

「いいから。手を抜くなよ」

「わ、わかったわ……」

よくわからないけど、薫の言う通り、全力で一撃を撃つために、構えて、そして息を整える。

「行くわよ!!」

「来い」

「川神流・蠅撃ち!!」

手加減せずに全力で撃った。体調もいいし、会心の一撃だった。それなのに……

「……ウソ……!？」

薫にその拳は届かなかった。

だからといって薫が防いだわけじゃない

この黄色く光ってる気の膜に止められたのだ。

「……うん、成程」

「?」

「ワンスに一つ訊く。『川神院の師範代になる』という夢は諦めないんだな？」

「?当たり前じゃない」

「本来なら、私が言うべきではないのだろうが、はっきり言おう。ワンスが川神院師範代になるのは厳しい。」

「……………!？」

「それでも夢を追い続けるか？」

「追っわ！」

「モモちゃんや鉄心さんに同じ事を言われてもか？」

「当然よ！たとえお姉様に言われたからって、『はい、そうですか』
ってそう簡単に納得できるわけないじゃない！」

「……………そうだな」

薫はその場で考え込み、そして何か閃いたみたいでアタシにこう言
った。

「だったら話を聞いてみるか？川神院師範代の候補だった女性に」

「え？そんな人いるの？」

「ああ。師範代になるのは確実と言われていたらしいのだが、試練
を受けるのをやめたそうだ」

「どうして!？」

信じられなかった。アタシが必死になってなろうとしてる師範代に
確実になれると言われてたのに、それをやめた人がいるなんて。

「何か理由があったらしいが。話をしたいのなら連絡してみるが、
どうするっ…」

「うん！聞きたい！」

「わかった。ただ、すぐには無理だろうから気長に待っていてくれ」

「わかったわ」

師範代になれなかった、じゃなくて、ならなかった人。

一体どんな人なんだろう。どうしてならなかったんだろう。

話を聞いてみたい。そう思った。

と、ここで気になった事を聞いてみた。

「ところで、さっき潰してた光の球ってなに？」

「あれ？あれは簡易結界だ」

「結界？」

結界って川神院の門下生が何人も集まって作るアレ？

「鍛錬とはいえ、気を強くするとモモちゃんが強襲してくるから、外に一定以上の気を出さない為の結界だ。まあ結界の出入りは自由にできるが。時間が経つと消える。一つで30分ぐらいだから後10分ぐらいか」

やっぱり薫は実はスゴイ。お姉様とは違う意味でスゴイ。

アタシは強くなりたい。強くなって川神院の師範代になって、お姉様のすぐ側でサポートしたい。

そのためだったら何でもする。出来ることなら何だってやってやる。

そんな決意から、アタシは薫にお願いする。

「……ねえ、薫」

「何だ？」

「私に、修行つけて！」

「ならまず休め」

「……………え？」

休め？何で？

「何で？」

「お前は修行しすぎだ。せめて週に一回ぐらい、ノルマの他に余分にやっている鍛錬を休むといい」

「ええ!?!で、でも」

「答えは“ワン”か“キャン”かだ!」

「わ、ワン!」

「わかったらそろそろ戻った方がいいぞ。返事は?」

「ワン!」

アタシは自分の部屋に戻っていった。

その途中で気付いた。

.....あれ?どっちも返事じゃない?

薫に文句を言う為にさっきの場所に引き返す。

もしかしたらもう移動してるかもしれないけど、

「あ、間違えた。“はい”か“Yes”かだった。まあ、いいか」

という声が聞こえてきたから移動はしてない事はわかった。

とりあえず様子を伺う。

「リミッター4解除……………完了」

また何かするみたいだ。そのままバレないように覗いてみよう。

「極技・スサノオ」

その日、アタシは“鬼”を見た。

座敷犬は見た！（後書き）

本来ならこれらの奥の手ともいえる技はずっと後で出す予定でしたが、コラボ企画のことも考えて放出することにしました。

まあワンの話は書く予定でしたし、その展開をどうしようかと考えて、だったら極技もだしてやれ！と閃いたので書いた次第。

これから、展開どうしようか……

技の簡単な説明

極技・ツクヨミ：認識のズレを最大限に利用して姿を消す隠密特化技。機械だつて騙せる。普段気配を消しているのはこれの応用である。

他にも別の使い方があがるが、それはまた今度に。

イメージは『ぬらひよんの孫』の鏡花水月、だつたっけ？ リオの畏れつて？

極技・アマテラス：光り輝く気を身体に纏う防御特化技。変身や形態変化といつても過言ではない、と思う。

光の気の範囲は操作でき、その範囲内の人間を護る事も可能。ただし、範囲を広くすればするほど気の消費は激しくなるので大抵は自分の身体を纏う程度に留めている。師範代レベルなら、この状態の薫にダメージを与えられないとマズイです。

本来はどんな環境下でも戦えるための技術。理論的には南極・北極やマグマの中でだつて戦える。

イメージは『幽白書』の聖光気。

極技・スサノオ：詳細不明。説明しないほうがいいですね。

とりあえずこんな感じで。・・・ツクヨミとアマテラスの説明文の長さの違いには突っ込んではいけないよ。

初めてのの……（前書き）

遅れながら更新。

もう一個の二次創作も進めないとなあ。

初めての……

川神院

休日、自室で精神鍛錬のために瞑想をしていると、ケータイがなった。相手は大和だった。

「どうした大和？」

『まゆっちのケータイを買いに行こうってな。薫も行くか？』

「ああ、暇だったし行くよ」

『姉さん達そこにいるか？』

確か……モモちゃんとワンスの二人は川神院内で修行をしていたはずだ。

「ここにはいないが、まあ川神院にはいるはずだから探せば見つかるだろう」

『そうか、じゃあ誘っておいてくれ』

「了解」

そう言って、通話が切れた。さて、早速モモちゃん達を誘うとするか。

ということでもゆつちのケータイを買いに来た。

メンバーは俺、京、クリス、まゆつち、薫の5人だ。

薫を川神院に迎えに行った（本来なら島津寮で待ち合わせをした方がいいのだが、薫の場合高確率で迷子になるので）時、姉さん達がいなかったの聞いてみたら

「既に走りこみに行っていていなかった」

だそうだ。

ちなみにキャップはいつもの旅。ガクトはナンパ。モロはスグルとゲーセンだ。

「ケータイってどんなのがいいんでしょうか？」

「オラたち全然わかんねーもんな。知る必要もなかったしな」

「それを言わないで下さい松風……」

松風に泣かされるまゆっち。てかこれ自爆じゃね？

「最近のは必要以上に機能がついてるからな。実際に見て決めた方がいいよ」

「そういえば薫はいつぱい持ってたよな。」

「ああ。個人用に仕事用にバイト用の三つだな。まあ個人用以外は最低限の機能しかついていないが。」

「よくそんなに持つてるよね。」

「仕事？薫はすでに働いているのか？」

クリスが薫の言葉に疑問を抱く。まあ学生で仕事っておかしいわな。

「まあ、家業の手伝いだが、高校に進まずにそれ一本に専念しようかと思っていた事もあった」

「え？それは初耳だけど？」

「私も」

「じゃあどうして川神学園に？」

「母上の手配で、気付いたら合格していた。知ったのは卒業式目前」

何だそれ……。というか川神学園って推薦合格とかあったのか？

「何の仕事をしているんですか？」

「護衛業だ。“曆”という小さな組織だが実力は十二分にある」

俺は聞いた事もなかった。まあ一般人にしてみれば護衛なんてもの
必要がないから知る必要も無いんだがな。

ただ、何故かまゆつちがビツクリしていた。

「ええ！？こ、“曆”？まさかあの曆一族……？」

「そうだが」

「まゆつち知ってるの？」

「曆一族は武家ではある意味伝説ですよ」

「てゆうか、曆一族って真剣マシで存在してたのかよ。オラそこにビツ
クリ」

「？？どういうことだ？」

クリスがまゆつちに尋ねようとした時、薫のケータイが鳴った。

「バイト用の電話だな」

そういうと、薫は俺たちから離れながら少し声を整えていく。……
あれ？この声どこかで聞いたような……

「はい、こちら青少年相談室です」

「おおおい！！お前だったのか！？」

何のことかわからない人は箱根旅行3日目前編からやり直せ！

「電話中だぞ大和。少し静かにしてやれ。」

「どうしたんですか大和さん？」

「そつとしいてやれよまゆっち。無闇に叫びたい年頃なんだよ大和は」

「そんな大和でも一生愛します」

「……ありがとう。お友達で」

「いけず」

閑話休題

「ところで暦一族とは何だ？」

「あ、それ俺も気になる」

「私は何か聞いた事あるかも……」

京は聞き覚えがあるようだ。

「えつとですね……暦一族とは日本古来より存在する戦闘一族です」

「戦闘一族？」

思い浮かぶのは龍玉の「戦闘力たったの5……ゴミめ」などで有名な野菜人。

「まだ侍などの戦い専門の職がなかった時代から戦いに携わってきたとされている最強の一族です」

「川神院よりもずっと早くから存在していたらしいぜー」

「最強っていつのは？」

「暦一族は当時、『味方にすれば負けなし。目を付けられれば滅亡あるのみ。』と謳われて畏れられていたそうです。曰く、『源氏が平家を打倒できたのは暦の力があつたから』、『元寇の神風を吹かせたのは暦一族である』、『豊臣秀吉の天下統一の影には暦の姿有り』などの伝承が残っています」

「さすがにそれは胡散臭いな」

「大和、そう勝手に決め付けるのはよくないぞ」

「そうは言ってもなー」

神風を起こすって姉さんでも……………あれ？蹴りで竜巻起こしてな
かったっけ、あの人？

「ただ、証拠が全くと言っていいほどないので、あくまで御伽噺や
伝説として語り継がれていますね」

「あ、そういえば昔『悪い事をする暦一族が襲ってくる』って父
さんに脅かされた覚えがある」

ナマハゲかよ。

「あれ？でも薫の名字は“暦”ではなく“皇月”ではなかったか？」

まあ確かに暦ではないな。

「お待たせ。何の話だ？」

薫に今までの話の流れを説明する。

「私も詳しくは知らないが、暦一族の滅亡の危機を乗り越えるために一族を分けたいらしい。暦の月から名前を取って姓を変えることによって存続しようとしたようだ。まあ結局、暦は弱体化してしまっただが。」

薫によると、今の暦一族は没落した家系であり、最強を名乗る程の実力はないそうだ。

「あくまで推測だが、暦はどこかに滅ぼされかけたのではないかと考えている。その相手から身を隠す為に分裂したのではないだろうか。」

「でも最強の暦一族を滅ぼせる所とは一体……」

「そこまではわからない。まあ大方数で押されたのではないかと考えているよ。」

その後ケータイショップでまゆっちはケータイを購入し、遂に松風は携帯ストラップとしての役割を果たす事となる。

なお余談ではあるが、ケータイを選んでいる時に店員が説明するよりも早く、より詳しく、薫が説明していたのを見て、ケータイショップの店長らしき人に「ウチで働かないか？」と言われた。まあ断っていたのだが。

まゆっちのケータイを買い終わった後、薫は大和達、島津寮組と別れた。

それにはある理由があったからだ。

誰かに付けられている。

そう感じたので薫は一人で行動して人気のない路地裏に入る。ただ、先程まで感じていた気配が感じなくなった。

「……ついて来ていないの　　!？」

咄嗟に身を屈めた瞬間、先程まで首があった場所に手刀での突きが

通り過ぎた。

相手から距離を取る。攻撃の相手を見ると、そこには

「ほう、避けたか」

「！如月か！」

『不殺』と書かれた仮面をつけた執事服の男、如月が立っていた。

「主の命により、戦わせてもらう」

「主……やはりお前も閨の一人か」

「不答^{コタエズ}。答える必要はない。」

そういうと、今度は蹴りを放ってきた。

「！？」

如月の蹴りに何かを感じた薫は、その蹴りに特殊な技法で放った蹴りで受け止める。

カキンツ、と金属同士を打ち合わせたような音を立ててぶつかり合った。

「これは暦の暗殺体術か。まさか使える奴がいたとは……！」

そう言いながら薫はさらに距離を取る。

暦の暗殺体術

これは武器を持ち込めないような場所でも闘う、正確には殺す為に編み出された、暗殺用の体術である。

異常なまでに鍛えた身体を刀や槍などの武具に見立て、使用する。一流の使い手ならば、そこらの刃物よりも切れ味が良い凶器と化す。

小刀を持たずとも手刀で頸を斬れる。刀を持たずとも蹴りで人を斬れる。槍を持たずとも突きで鎧を貫ける。そういった類のものだ。

ただ、この体術を身につけるよりも武器を取ったほうが手っ取り早く強くなれるので、廃れていった技術の一つである。

「これらは元々如月の技だ。驚くことではない。それより其方が暗殺体術も使えるという方が驚きだ」

表情（と言っても仮面で口元以外見えないのだが）を変えることなく驚いたという如月。実際には驚いていないだろう、と薫が思ってしまうって仕方がない。

「暗殺以外にも色々と使えるからな。」

缶を切る時とかに、とは言わない。言っても空気は和まないだろうから。如月はピクリとも反応しないのはわかりきっているから。

「だが練度としてはこちらの方が上のようだ。」

それは事実だ。先程の蹴り合いでは如月の方が優勢だった。

「しかし、それほどの腕を持っていて、尚且つ周りに気付かれぬように始末するというのは少々骨が折れる。この闘いも早めに終わらせねば武神の孫が駆けつけて来るだろう。ならば、あのグループを巻き込む事も考えねばなるまい。」

如月がそう言った瞬間、空気が変わった。

「……………もし、お前が彼等に危害を加えるのなら」

薫から、ただならぬ殺気が漏れる。

「殺してでも止めてやる」

「……………出来るのか？貴様にこの私を殺す事が？」

殺気に動じることなく、如月は淡々とそう返す。

「ならここで死ね」

さらに殺気が強くなる。

「不死^{シナス}。ここでは死ぬわけにはいかないのな。」

如月は相変わらず淡々とそう返した。

そして、鬨いは始まる。

「リミッター解除。極技・アマテラス」

薫は黄金の気を纏った。

(……………防御特化の形態変化……?)

如月は疑問に思う。

聞いた話だと、アマテラスは防御特化の形態変化。

先程の発言や今も向けられている殺気からして良い選択とは言えな
いだろう。

しかし油断はしない。

「見せてやろう。これが、アマテラスでの戦い方だ」

そう言いながら薫は、何もしない。しかし、

「 !? 」

如月は咄嗟に横に跳んだ。次の瞬間、先程までいた場所に何らかの衝撃が通り抜けた。

(これは……)

薫は何の動作もしていない。にもかかわらず謎の攻撃、しかも目に見えない不可視の力が飛んで来た。

「アマテラスとは本来環境に依存しないために編み出された技だ。その環境は、何も雪山や火山帯などといった地形や気温だけではない。例え、敵に捕らえられようが、四肢が封じられていようが、動ける状態でなかるうが、戦う意志があるのなら戦えるようにするための技だ。ここまで言えばわかるか? 」

(成程。つまりは、予備動作なしで攻撃できるということか……)

「まだまだ行くぞ」

そういつて薫は攻撃のペースをあげる。

謎の力が放たれ、多くの不可視の攻撃が如月を襲う。

この攻撃方法は戦闘においてはとても有利に働く。

本来、武道家同士の戦いは、読み合いが重要になってくる。

相手がどんな攻撃を仕掛けてくるか、それを相手のちよつとした行動で予測し、迎え撃つ。これが基本である。

しかし、この攻撃にはそれがない。相手の動きを読もうにも、まず

相手は動かないのだ。

ただ、如月がこの攻撃を喰らうかといえばそうではない。数が多くなってきた不可視の攻撃を悉く避けている。

如月が避けていられるのは何も勘だけではない。

薫の眼からそれを読み取っているのだ。

目は口よりものを言うとはよく言ったものだ。とはいっても何とか攻撃の軌道を読み取れる程度なのだが。

それでも近付く事が出来ない。

「クツ!!」

あまりの多さに如月も段々と捌き切れなくなって来た。

そこに薫が音もなく接近し、ハイキックを放つ。もちろん謎の力も込みで。

「!!」

その攻撃を避けきれず、腕で防ぐ。不安定な体勢で受けた為、少し飛ばされる。

(蹴り単体の威力を考慮すると、不可視の攻撃にそこまでの威力はない。防げば何とでもなる。これで致命傷を与えるには、ひたすら数を当てるか、本命の為の足がかりのどちらか。数は既に試している。ということはある。)

「トッカノツルギ
十拳剣」

薫の周囲に気で出来た拳大ほどの球体が無数に現れる。おそらくあれが本命なのだろう。

(やはり、か……それにしても一瞬でアレだけの気を放出し制御するのは流石と言つべきか……)

「大人しく死んでいろ」

薫の一言を切つ掛けにして、気の塊は如月に向かって飛んで行く。

「クツ……!!」

それらは如月に当たると爆発を起こし、次々に炸裂していく。

一つを薫の近くに残し、全ての気弾が爆発し、爆煙で様子が見えなくなる。普通ならあれだけの爆発を受けたのならボロ雑巾のようになっただけもおかしくないのだが……

「そこだ」

薫は一つ残った気弾を自身の後方に向かって放った。

何もない場所で爆発を起こし、爆煙が晴れるとそこには右手を前に突き出した状態の如月の姿があった。

おそらく片手で気弾を防いだのだろう。

「見事、と言っておこうか。」

「……ツクヨミまで使えるのか」

「さてな。」

そういって、如月は右手を下げて、闘気を収める。

「今回の目的はある程度果たせたので引かせて貰おう。次に顔を合
わせる時には敵でない事を祈っている」

そう言うと、如月の姿が消え、去っていった。

そうして路地裏に残ったのは薫一人。

「…力量を量られたのか……」

そろそろ薫の気に反応して百代が強襲してきてもおかしくないのだ
が、その様子は全くない。

「結界も張られていたのか。何と用意周到な……」

そう呟きながら、薫は帰路につく。

今日は珍しく道に迷わずに川神院まで帰ってこれたが、それを素直
に喜ぶ事は出来なかった。

勝負は引き分け。しかし薫の気分は晴れなかった。

初めての……（後書き）

今回は、感想の返信でしばらく活躍しないと書いていた如月さんがいきなり活躍したお話でした。返信した時にはまだ出す予定じゃなかったのに……。

言い訳をすると、まゆっちのケータイの話を書いたのは良いが、尺が足りない。暦の話を加えたのは良いがまだ足りない。どうしようか……と悩んでいたら、気付けば如月さんとドンパチを繰り広げていました。自分もビックリです。

戦闘に入ると筆は進みますが、上手くかけている気がしません。特に他の作品に比べると。まあ日常の話は筆も進まないし上手くも書けていない気がしますが。あれ？それってダメじゃね？

感想・意見・酷評をお待ちしております。

11/2 技の説明を忘れていたので追加します。

暦の暗殺体術：本文で書いた通り。簡単に言えば、
ンピースの六式の指銃や鉄塊みたいな感じ。頑張れば嵐脚や月歩もできるかも……？

不可視の攻撃：アマテラス発動時のみに使える攻撃。不可視でノーモーションで何発も放てるため、とても便利な技。アマテラスの黄金の気から放出されている何らかの力を利用していると思われるが、実際にはよくわからずに使っている。言ってみれば次元の違う攻撃である。ただ、一発の威力は比較的に低めで、ワンスの妹キック程度の威力であるので、基本的に数を当てるか相手の足を止めて次の

技の繋ぎに利用している。ちなみに妹キツクの威力は、ガクト相手に放つと痛がるけど特に問題はないくらいである。

トツカノツルギ

十拳剣：気の放出技。自身の周囲に無数の気弾を発生させ、それを相手にぶつける技。剣とあるが形状は球体である。ぶつかったら爆発する。一発当たっただけでも一般人にとっては致命傷である。本文ではアマテラス発動時に使用しているが、この技は通常時でも使用可能である。

ちよつとした日常(前書き)

色々和小話を詰め込んでみました。

あとSEIIMAさんのコラボ企画『Bonds of fate
that ties fate』真剣で輝石に恋しなさい』に参
加させていただく事になりました。ありがとうございます。

11月21日 加筆しました。

ちょっとした日常

これは、川神院に少し慣れた頃の記憶

川神院

「今日はここまでにするか」

「はあはあ…ありがとうございました！」

そう言っつて、モモちゃんはどこかに走って行った。

「さてと、梅屋の豚丼でも食いにいくか」

モモちゃんがいなくなったのを見計らって私はモモちゃんに指導をしていたその人に声をかける。

「釈迦堂さん」

「ん？」

川神院師範代・釈迦堂行部。実力は十分すぎる程ありながらも思想の違いから、昔に川神院から破門された人だ。

その釈迦堂さんがこちらを向く。

「……………どうも」

「よう、薫。お前も物好きだなあ。で、今日もあれか？話を聞きたいのか？」

「はい」

「またか。別にいいがなあ。……………前も思ってたんだが、俺の話なんか聞いてどうすんだ？面白くも何ともねえし、為になるわけでもねえのになあ。てかお前、俺のこと嫌いだろ？」

「ええ、嫌いです」

きっぱり言い切った。

「……………こうまではつきりと言われるとむしろ清々しいなあ」

「でも、あなたの、性格とか考え方は、嫌いではないです。」

「あ？じゃあ何で俺のこと嫌ってたんだ？」

心底不思議そうにする釈迦堂さん。

「一言でいうと、同族嫌悪です。」

「は？」

「あなたと私の、根っこの部分が、似ているからです」

「根っこ？はっ、ガキが何を言ってるやがる。お前と俺とじゃ正反対
だろおが。」

「そう、心掛けていますから。こうして、話を聞くのも、あなたを
反面教師にする為です。」

「それが本当だとしたら、お前自分のことが嫌いってことになるが
な」

笑いながら話す釈迦堂さんに対して私はこう言い切った。

「ええ、嫌いですね。あなたのことよりも、ずっと。」

「……………は、はははははは！面白いなお前、気に入ったわ！ど
うだ、今からいつしよに豚丼喰いにいくか？」

「いいですね。行きます。」

「そこなくなっちゃなあ」

そうして二人で歩いていった。

「ん……」

自然と目が覚める。いつも通りの時間だ。
それにしても今日は懐かしい夢を見た。

「あの人、今どこで何をやっているんだろう……？」

そんな事を思いながら、身体を起こして顔を洗いに行った。

川辺

登校中、今日はファミリー10人が揃っていた。

「そういえば今日はたこ焼きを作ってきたんだが、み」

日本人観光客ばりの迂闊さで手作りたこ焼き（8個入り）を取り出した薫の言葉が終わる前に

「風のように頂くぜ」（ひょい）

「当然私もらってやろう」（ひょい）

「俺様ももらい」（ひょい）

「アタシもー!」（ひょい）

「当然私も。大和、あーん」（ひょい）

「いや普通に食べるから」（ひょい）

「じゃあ僕も」（ひょい）

「で、では自分も」（ひょい）

「こ、この場合はどうするべきなのでしょうが、松風?」

「なくなる前に普通にもらっとけー!てか遠慮はイラねーって言われたバツカだろ!」

「そうですよね!では私も頂きます、ってもうない!?!」

まゆっち以外がたこ焼きを取っていった。

「あ、ちよつと待つ」

薫が止める間もなく皆たこ焼きを口に含む。その時、薫がニヤリと笑ったことに気付かずに……

次の瞬間

「「「「「辛ーーーーー!?」「」「」「」

「あ、美味しい」

たこ焼きを食べた7人の悲鳴が上がった。1名には好評のようだが。

「だから言ったのに……」

「あ、あれ？私助かったんですか？取らないのが正解だったんですか？」

「でも笑いのには不正解だな」

「か、薫……おまツ！わざと……!?!」

「そんなわけないだろう。私は止めようとしたぞ」

そついう薫。てかニヤリと笑いながら言っても説得力はないぞ。

「では何故こんな辛いたこ焼き作ってきて今ここで取り出したんだ!?!」

あまりの辛さにクリスマスまで文句を言う。

「いや、京カスタムしたたこ焼きだから京的にはどうなのかと思って味見をしてもらおうと思ったただけだ。」

「グッド！おいしいよ」

親指をグツと立てる京。

「そもそもつまみ食いをしたお前達が悪いだろう」

「うー！それをいわれると……」

例え、いや確実に確信犯なんだが、一応薫の言い分は正しいので「ちらから強くは言えなくなる。」

だが、この中で一人、理不尽な人がいるのを俺は忘れてはいない。

「か〜〜お〜〜る〜〜……覚悟はいいな〜……」

姉さんが変に笑みを浮かべながら、薫に問いかける。

「ふ……当然、逃げるさ！」

そういつてすごいスピードで逃げる薫。

「こら待てー！こイツー！ー！」

それをスゴイスピードで追いかける姉さん。

「だ、大丈夫でしょうか、薫さん……」

心配そうに俺たちに問いかけるまゆっち。しかし、

「さ、さすがの俺様の肉体でもこの辛さは防げない……」

「ホント、辛いよ……」

「そう？ベストな辛さだと思っけど」

「京の舌と同じにしないで欲しいぞ！」

「うっうっ……辛いわ……って、あれ？」

「何か、ウマくなってきたぞ？」

「辛味のあとにくる旨み……さすが薫。こっして、辛党同士が増えていくんだね。」

「多分増えないから。確かに美味いけどそれ以上に辛すぎるコレ！」

俺達は辛さと戦っていた。

「あれ？松風、何だか仲間はずれみたいですよ私達。」

「大丈夫！仲間はずれでもオラと一緒にだ！一人じゃねー！」

この後、犬笛がなってワン子が駆けていき、スッキリした顔をした姉さんとその姉さんに襟首を掴まれて引きずられている薫と一緒に戻ってきたが、詳細は割愛しておこう。

教室

朝のHR。特筆する事はなかった。

「こら！熊谷！！HR中にお好み焼きを食べるな！」

「す、すいません！ついおなかが減っちゃって……」

まあ、いつもの様な光景はあったが……クマちゃん今日はお好み焼きか。

そうしてHRが終わり、梅先生が教室から出て行った。

「クマちゃん、そのお好み焼きつまそうだなー。どこの店で買ったんだ？」

キャップがクマちゃんに尋ねる。まあこの二人は仲がいい。

「これはね、お店のものじゃなくて臯月君が作ってきたやつなんだ。」

「

「薫が？」

そういうとキャップの視線は薫の方へ。

「そのついでに今朝のたこ焼きを作ったんだ。」

余計な事を……。いや美味かったけどそれ以上に辛かった。

「前に食べに行ったお好み焼きぐらいには出来たつもりだが、どうだった？」

「うん。とってもおいしいよ。生地焼き具合といい、具材とのバランスといい、絶妙だね」

「うまそうだな……。ヨシ！薫、俺にもクレー！」

キャップはまた……

「そういうと思っていたよ。はい」

薫はどこからかお好み焼きの入った容器を取り出してキャップに渡す。つーか予測済みか。

「サンキュー！さすが薫！やっぱオカンだなー」

「…この場合、女扱いに怒るべきなのか、頼りにされていると認識すべきなのか、悩むな……」

そこ悩む所なのか……。口に出す時は気をつけないと……

「あれ？薫自身の分はないのか？」

「あつたんだが、モモちゃんに以下略」

「なるほどな」

「以下略で何したかわかるモモ先輩も何かスゴイよね」

「じゃあ俺様の分はないのかよ！」

「三枚しかなかったから早い者勝ちにする予定だったんだ。欲しかったらキャップに分けてもらえ」

「うんめー！」

確かにうまそうだ。

「俺様にも少しよこせよ、キャップ」

「あ、わりい。全部食っちゃった。」

「食べ終わるの早すぎでしょー！」

「こつこついう時真っ先に飛びつきそうだが、どうしたワン子？」

さつきから一人でダンベルを持ち上げているワン子に話しかける。

「実はさつきお姉様から分けてもらったの！」

「いつの間に……さっきの犬笛か！」

放課後

「あの薫さん！」

学校の廊下で一人帰ろうとしているとまゆっちに声をかけられた。

「?どうしたの、まゆっち?」

「その、聞きたいことがあるんですが」

「聞きたい事とは?」

何だろうか？まゆつちに聞かれるような事があつただろうか？

「薫さんの友達の定義を教えてくださいませんか？」

友達の定義？

「それまたどうして？」

「以前ガクトさんに教えてもらったんです。鼻毛を抜けるのが友達で抜けないのが友達じゃないって」

「またわかりにくい例えを……」

その例えを女子にするか、普通？

「それはわかりやすかつたんですけど」

「あ、理解できたのか」

「それですね。実はお友達候補の大和田伊予という方がいるんですけど、その人、鼻毛が出てないんです」

「ガクトの例えをそのまま受け取ってしまったか……」

抜いていたら友達になる前から交友関係が終わっていたんだろうな。

「それで、その、どうすればいいのかと思ひまして……それで風間ファミリーの皆さんに相談に乗ってもらおうと」

「頼むぜカオルン！まゆつちの悩みに答えてやってくれー！」

「そうだな。……まずはその『カオルン』という呼び方をやめてもらおうか。何か女っぽい気がする」

「そこからかよ？それじゃあフツーに薰でいいか？」

「それでいい。とりあえず彼女に鼻毛が出ていなくてよかった。いきなり鼻毛を抜かれたら驚くし、下手をすればひかれるぞ」

「えええ！？」

……やはりいきなり鼻毛を抜くつもりだったのか……

「ちよっ！まゆっち気付いてなかったのかよ！ふっつーに考えればわかることだろーに」

松風にすら突っ込まれている。というかよく考えるとこれは自分が自分に突っ込んでいるという何ともシニールな光景だな。

「ガクトが言っていた鼻毛の話はあれだ。人の悪い所を指摘できるかどうかということだ。指摘できるのが友達ということだろっ」

「で、でもいきなり悪い所を指摘するなんて恐れ多いですよ」

「そっだぜー！てかまゆっちに人の悪い所を見つけれられると思ってんのかー！」

……自分で自分を陥れてどうする。というか見つけるぐらいならできるところだろっ。

「なら、とりあえず友達からではなく知り合いから始めるつもりでいけばいい」

「し、知り合い、ですか？」

「例えば朝教室に入った時に『おはよう』と挨拶をするとかそういった所から始めていけばいいだろう。そこから相手の反応を見て少しずつ話をしていく」

「な、なるほど……」

成程、と言われるほど意外なことではないと思うのだが。

「まずはやってみて、これも無理そうだったなら大和に相談するといい。友達作りのプロだからいいアドバイスがもらえるだろう。間違っても京単体に相談しないように。孤独の素晴らしさについて洗脳されるから」

脳裏に「一匹狼最高ロソウウルフ」と自信満々に宣言する京の姿が浮かぶ。

「は、はい！ありがとうございます！」

「洗脳とかパネーゼ……」

「ちなみに、薫さんの友達定義は？」

「あ、そもそもそういう話だったな。そうだな……私としては挨拶をする程度なら知り合い、普段から話をしたりするのが友達、それ以外が他人といった所か。風間ファミリーは別格だが。」

「なるほど……」

「ただ、これはあくまで私の定義だから鵜呑みにしないように。まゆっちは自分の定義を作るんだ」

「は、はい！頑張ります！」

「……まゆっち、顔が怖くなっているぞ」

「はうあ!？」

前途多難だった……

まゆっちと別れた後に、薫は京と一緒に弓道場にやってきた。

「おじゃまします」

「あ、皐月君！今日はどうしたの？」

弓道場にやってきた薫と京を迎えたのは弓道部部长だった。

「今日は見学に来ました。よろしくお願いします」

「いいわよ。あ、わかってると思うけど、他の部員の邪魔にならないようにしてね」

「わかりました」

「椎名さんも用意してね。出来れば後輩にコツを教えてもらえるかしら」

「……はい」

京にそういうと、部長は後輩の指導に戻っていった。

「?どうしたの薫?部長見つめて?」

「いや、いつ見ても矢場さん(弓道部部长)の変わり様にはビックリだ。いつも『〜で候』と言っているイメージとはかけ離れているから」

「そだね……」

「大和も京の勇姿を見に来ればいいのに。そうしたら京に惚れるかもしれないのに」

「そだね!薫からももっと言ってあげてよ。もし大和が来たら私の弓でハートを打ち抜いてあげるのにな。そして二人は結ばれて……キヤ?」

「京の返答の変わり様にもビックリだよ。」

人は話題によって対応も変わる。それは当然の事だった。

そうして練習が始まる。

京は弓を引き、薫は道場の端で正座をして見学をしている。

すると薫の所に弓道部の顧問である梅先生がやってきた。

「よく来たな、皇月」

「お邪魔しています。指導の方はしなくてもいいんですか？」

「構わんだろう。顧問をしているが、弓はそこまで巧くないからな。」

謙遜である。確かに専門ではないのだろうが彼女の弓の腕は並ではない事を薫は知っている。

「小島先生から見て京はどうですか？」

「そうだな。弓の腕は言うまでもなく私よりも上だろう。相変わらず消極的だが、お前が見学に来るようになってから顔を出す回数が増えた。感謝するぞ」

そう言って、京の方に目を向ける。京は消極的ながらも後輩の質問に答えたり指導をしたりしていた。

他人だけではなく仲間がいる、という事が、京が部活に顔を出す回

数に多少なりとも影響を与えているのかもしれない。

「別に感謝されるような事ではないですよ。見学に来ているのは私としても弓に興味があったからですし。」

もちろん、京の交友関係の悪さを少しでも緩和できればという考えが薫になかったわけではないが。

「なら入部すればいいだろう。」

「そこまで、と言うわけではないんですよ。忙しいですし。とりあえず知識として収めておきたいんです。」

「そうか…残念だな。まあゆっくりしていけ」

「はい。そうします」

そうして、薫は弓道部の活動が終わるまで見学をしていた。

おまけ

梅「直江が見に来たら椎名ももっと張り切るのだろうか？」

薫「いや、逆に大和に付きっきりになるのでやめた方がいいと思います。」

ちょっととした日常（後書き）

どんな意見でもいいので感想をお待ちしております。

パーティ・タイム(前書き)

まことに勝手ながら、主人公設定を消させて頂きました。

あと、11月21日、前話に加筆させていただきました。

パーティ・タイム

川神院の薫の部屋

今、薫は電話をしていた。

持っている携帯はプライベート用ではなく仕事用であった。

『 と言うわけで、護衛をお願いしたいんだけど、いいわね？ 』

電話の相手は以前護衛した霧夜カンパニーの令嬢、霧夜エリカであった。

「出来れば暦を通して依頼してください。」

薫は護衛をするのは仕事でしかないと決めていた。

何故かというのを説明するのは難しいが、簡単に言えば、公私を混同しては色々と厄介だからである。

まあプロボクサーが試合以外で拳を握らないというのと似ているかもしれない。

故に暦を通して欲しいと言ったのだが、

『 ああ、それだったらもう許可とつてあるから大丈夫よ 』

既に外堀は固められていた。

「 ……既に暦に依頼しているなら私に聞く必要はないじゃないですか。」

『 別にいいじゃない。…ところで、私のモノになる決心はついたの 』

かしら？』

「美少年ハーレムなんてものに入れられるのは嫌なのでお断りします」

薫はある目的があるから誘いを受けても問答無用で断っているが、その目的がなくとも美少年ハーレムになど入りたくはないのだ。

『何言ってるのよ。私のハーレムには美少年だけじゃなくて美少女も入ってるに決まってるでしょ。』

「論点はそこではないでしょう!？」

『え？違うの？じゃあ何がいけないのかしら……は!？まさかBL……?』

「ダメだこの人、ビョーキだ」

思わずタメ口になってしまったのは責められることではないだろう。

『冗談に決まってるじゃない。それじゃヨロシクねー』

「……切れた。……とりあえずスーツを出すか……」

そう言いながら、薫は準備をし始めた。

そういうわけで今回の依頼は七浜にあるパーティ会場での霧夜エリカの護衛であった。はずだったのだが……

「で、この状況は何ですか？」

「うーん、さすがの私もコレは予想外だったわ……」

「ど、どうしよう、エリー……」

「ビクビクと怯えるよっぴー……良いわね……！」

「え、ええー！！？ちよっ！！？エリー！？？」

「少しは真面目にしてください……！」

私達は三人、黒い覆面を被った集団に囲まれていた。

クライアント
霧夜エリカの予定では、今回のパーティーで親族の中で誰が自分の味方で敵なのかをはつきりと見極めるつもりだったらしい。

パーティー会場での護衛という名目だが、パーティー会場でのみの護衛では色々と不審に思われるという事で、私はパーティー会場に入る前から彼女に合流していて、車でパーティー会場に向かっていた。

その最中、急に停車したかと思うと突如爆発したのだ。何とか脱出した所をこの黒い覆面を被った集団が襲ってきたのだ。ちなみに運転手は既に覆面を被って覆面集団に合流している。

「と、とりあえずあの人達の目的が何か聞かないと……」

「んー、でも明らかに刺客よねえ。聞く必要あるのかしら？」

「同感です。何も聞かずに倒すか逃げるかがいいでしょうね」

私達がそう言った瞬間に集団側から「え?! コイツらマジかよ!?! 空気読めよ!?!」とか聞こえてきたのはきつと気のせいだろう。

「で、でも、もしかしたら人違いかもしれないよお」

「人違いだとしても許す気はないわ。でも一応形式美という事で聞いておきましょうか。」

という事で聞くことにしたようだ。

「臯月クン、訊いてあげなさい」

……どうやら私が尋ねなければならぬようだ。

「はあ……お前達、私達に何の用だ？」

「お前に用はない。用があるのは霧夜エリカー人だ。」

集団の内の一人がすぐに答える。おそらくコイツが集団のリーダーだろう。心なしかホツとしているように見えるのは私の気のせいだろう。うん、きっとそうだ。

「私とその霧夜エリカだけど、何の用？これからパーティがあつて急いでるんだけど？」

「貴様にはここで死んでもらう」

予想通りのセリフが返ってきた。どうやら会場入りする前から護衛していたのは正解だったようだ。

「本来なら先程の爆発で終わりの筈だったのだがな。」

そう言って、覆面集団は銃器を構える。

「一応訊きますが、どうします？」

「遠慮なくヤツちゃって」

「了解。」

ここから始まるのは戦闘ではない。制圧だ。

「撃てーーーー!!」

次の瞬間、銃撃が始まった。

覆面集団全員からの銃撃。

普通ならどうしようも出来ないだろう。

しかし、相手は普通ではなかった。

「な、何だと!？」

銃弾は彼等に届く事はなかった。

なぜなら弾が届く前に鎖によって受け止められていたからだ。

男　スーツを着ているからおそらく男　の袖から何本もの鎖が伸びており、その鎖を縦横無尽に動かして自分と後ろの二人に当たる銃弾を全て受け止めているのだ。

鎖で無数の銃弾が全て受止められているのには驚きを禁じ得なかったが、それでも相手は動けないのだからこのまま続ければ勝てる。

そう思ったのも間違いだった。

男が何も無い所に向かって蹴りを放つと、突如として、覆面集団の内の一人在倒れたのだ。
倒れた者の身体には右胸から左腰にかけて刃物で切ったような切傷があった。

「な、何をした!？」

「いや、前に漫画であった技を試してみたのだが。思ったよりも使い勝手がいいな」

続けて男が二、三回脚を振ると、二、三人が斬られて倒れた。

「う、撃て!撃てー!ー!」

さらに激化する銃撃。しかしそれを悉く鎖で受け止め、隙あらばよくわからない攻撃で一人、また一人とやられていく。時々銃を盾にして防ごうとした者もいたが、その者は銃ごと切り捨てられた。

その最中、標的の霧夜工リ力はと言うと、

「どつという原理なのかな、アレ？」

「んー……カマイタチ、じゃ逆に自分の足が切れるだろうし……たぶん鋭い蹴りを、音速を超えない程度に素早く放って、その勢いで押された空気が鋭い刃物になって切れた、とかじゃない？まあ原理がわかってても私じゃ出来ないから意味ないわね」

秘書の女と危機感を持った様子もなく話をしていた。というか秘書の方まで余裕があるようにも見える。

「くそ……だったら、これならどうだ！！」

そう言って取り出したのはR・P・G。

いくら鎖で銃弾を止めたとしても爆発は止められまい。

そう思い、引き金を引いた。

そして爆発が起きる。

爆発が起き、煙が上がる。

「これなら……」

爆発の瞬間、あの男は動けずにいたのは確かだ。故にこれで終わりだった。

他の覆面連中もこれで終わりだと思い、攻撃を止めている。

後は煙が晴れてから、三人の生死を確認するだけだ。生き延びているのなら確実に止めを刺す。

その心構えで待機し、そして煙が晴れていく。

「　　ッ!?!?」

驚愕した。

爆煙が晴れるとそこには、女性を護る様に黄金に輝く男が無傷で立っていたのだ。

「ば…かな……」

あの爆発の中、掠り傷どころか砂埃一つ付いていないなどありえない。

護られている方も美人、護っている方も美形で様になっており、その風景は一枚の絵の様に思えた。

その光輝く姿はまるで

「天使……」

そついい残し、覆面をした男は、顎に衝撃を感じるとともに、意識を刈り取られ、ゆったりと倒れた。

「さて、残っているのはお前だけだ。」

アマテラスを発動させ、爆発のダメージをゼロに抑えた薫は、不可視の衝撃で覆面集団の意識を刈り取った。一人だけ残して。

不可視の衝撃の威力が低いといっても当てる場所によっては簡単に意識を刈り取れるのだ。

そして残した覆面の男を一人残したのには理由がある。

「早速吐いてもらおうか。誰に頼まれた？他に仲間はあるのか？」

それは情報を聞き出す為だ。

この後、また襲われるのも厄介であるし、黒幕がわかればそれでの騒動は終わる。

「い、言っているのか！」

当然覆面は拒む。こういう商売は信用が第一である。そういった情報を易々と教えるほど馬鹿ではないのだ。

しかし、薫は自信満々にこう言った。

「ああ、言っているよ。これからある事をすればね」

「え………？」

その時、薫は先程の天使と言われた者と同一人物とは思えない、悪

魔のような笑みを浮かべていた。

「しばらくお待ちください」

「というわけで、ソイツが襲撃の黒幕がですので……ええ、お願いします」

善意による自主的な協力によって情報を得た薫は、エリカ専用の護衛に連絡を取っている。雇われの身での仕事はここまでであり、白黒を付けるのは担当外である。

そこから少し離れている薫の雇い主達はちょっとした話をしている。

「ホント欲しいわね、あの子。」

「容姿だけじゃなくて能力もすごいもんね……泉月君がいたら私の仕事も楽になりそうだよ」

どうやら薫は霧夜エリカに真剣で狙われ始めたようだ。

「何、よっぴー、仕事そんなに大変？」

「大変だよー！あれを私一人で終わらせるのは結構疲れるよ」

「だったら、私が癒してあげるわね」

「きゃあ！？何するのエリー！？こ、こんな所で……！？」

「ん？こんな所じゃなかったらいいの？」

先程まで命の危機があつたのにもかかわらず、いきなり桃色空間を繰り広げようとしている二人をみて、薫は思わず溜め息を付いた。

「……ああ、嫌だな。こんな雇い主」

この後、会場では特に何も起こることもなく依頼は終了した。

ちなみに、パーティ会場で九鬼揚羽と霧夜エリカとの薫争奪戦（ただし色っぽい話はない）が静かに行われたのだが、それはまた別の話。

パーティ・タイム(後書き)

シェア小説『真剣で私に恋しなさい! Another Story
y Flight to freedom』に参加させていただきます
いていますのでそちらの方もよろしくお願いします。

妹登場（前書き）

今回は新キャラ登場です。まあ名前だけなら出てたんですけどね

妹登場

川原沿い

そこに薫を除く風間ファミリーの姿があった。

キャップが意味深に話し始める。

「今日集まってもらったのは他でもない」

「登校中なだけだろうが」

いきなり姉さんにツッコまれて話が途切れた。

まあ確かに登校中に偶然薫以外の全員が集まったただけであり、何かを決める為に集まったわけではない。ちなみに薫がいないのは迷子、ではなく仕事の都合で、今日は昼からの登校になるらしい。

「なんだよー、こういう時はそういうのがお約束だろ？で、何の話かっていうと……薫のことだ」

「？薫がどうしたんだ？」

「ああ、実はな……」

クリスは疑問を口にし、まゆっちは首をかしげていた。

昨日の内にキャップと少し計画を練っていた俺がそれについて説明しようとするど、

「ちょっと待て大和。そこから先はキャップである俺の役目だ！」

「わかったよ」

何やらキャップが言いたそうにしていたから、説明役を譲ることにした。

「ごほんっ、実はな」

キャップが満を持して発表しようとする、が……

「今度の22日の金曜は薫の誕生日なんだ」

「……ってモモ先輩!？」

それよりも先に姉さんが暴露した。

「へー、そうなんですか。」

「それはめでたいな！」

「ヒデーぜ!! ソレは俺が言おうと思ってたのに!!」

「しょーもない……」

「別にいいじゃない、アタシ達も知ってることだし。」

「細かい事は気にすんな」

「で、それがどうしたの？」

モロの言葉にキャップはもう一度咳払いをしてから言葉を続ける。

「いいか、もうすぐ薫の誕生日だ！つーわけで何かドーンと祝ってやろうと思ったわけだ！」

そのキャップの言葉に、俺があと一言付け加えた。

「という事で誕生パーティをやることにすることにする」

「バースディパーティか！自分も昔父様にしてもらったなあ」

誕生パーティという言葉にクリスが反応した。

「俺様、クリスの言葉でやたら大規模なパーティが思い浮かんだんだが」

「確かにクリスのお父さんだったらやってそうだよな。祝砲とか」

「というか今でもやりそうだな。」

その様子が目に浮かぶ……。何か戦闘機なんかも飛んでそうな……

「去年は友達に祝ってもらったから家でパーティは出来なかったんだ。だが父様も祝砲を上げて祝ってくれた」

「あ、やっぱしてたんだ」

「なら今回は私が祝砲を上げてやろうか？身体一つで出来るぞ」

「さすがお姉様！」

一瞬、コロニーレーザーが思い浮かんだのは俺だけじゃないはずだ。

「まあ、姉さんの祝砲云々は置いて、薫はそんな大々的なのは好きじゃないだろうから仲間内だけでやることにする」

「相手の事をちゃんと把握してるなんて流石大和だね。結婚して」

「まあな。だが断る」

「唐突すぎないか京？」

「丁度その日は金曜集会があるから、秘密基地とする予定だぜ」

「焼肉パーティにしようぜ！俺様肉が喰いたい！」

ガクトが自分の意見を言うが、それ自分本位の意見だろ…

「焼肉は基地に匂いがつくからやめといたほうがいいと思うけど？」

「匂いの事もあるが、それだと薫が振舞う側になりそうだから却下だ。」

オカン気質の薫だから、自分そっちのけですつと焼いてそうだからな。

「とりあえず食べ物はずでに出来上がってる物がいいだろうな。キヤップのバイトに期待だな」

「でも俺のバイトの余りだけじゃ足りねえだろ？」

「もっと豪華にしましょ！」

確かにキャップの差し入れだけではいつもの金曜集会のままだろう。

「それじゃ、他にも買ってくるとしてまゆっちに……まゆっち？」

「は、はい!？」

何故かずっと黙っていたまゆっちが気になってどうしたのか尋ねてみた。

「まゆっち、さっきから話してないけどどうした？」

「い、いえ、家族以外での誕生日会なんて初めてで、感動してました」

「今まで祝う友達も祝ってくれる友達もいなかったもんねー」

「まゆっち……」

か、可哀そうなまゆっち……!!思わず涙が零れそうになったのは俺だけではないはずだ。

「そ、それで何でしょうか？」

「まゆっちにも何か作ってもらおうかと思って。いいかな？」

「もちろん！頑張ります！」

「あとは各自でプレゼント買っとくぐらいか。」

そうして朝の会議(?)は続いていった。

放課後

学校にて薫は電話をしていた。相手は父親・皐月智晴。

『 ということで、22日に美沙がそちらに行きますので。と

「いつか今の調子だとすぐにでもそちらに行きそつですね」

「ははは、その光景が目には浮かびますね。……ところで」

薫の雰囲気は普段のそれから仕事時の物に変化する。

「前に頼んだ、“如月”という男について何かわかりましたか？」

「大変申し上げにくいんですが……」

父は一言断りを入れてから薫の質問に答える。

「“暦”に如月という人間はいません。そもそも如月家は既に滅亡して存在していません。」

「……成程。なら奴は“暦”とは無関係なのか、それとも“閏”の一員なのかどちらか、ということですね」

「“暦”の頭領である私からわからないとなるとそうなりますね。役に立ちましたか？」

「ええ。ありがとうございます」

あの動きを見る限り暦と無関係というわけではない。ならば如月は“閏”に間違いない。

「……本来ならあなたへの抹殺指令も何とかしたいのですが、アレは“暦”とは別の組織である“閏”に下された指令。いくら“暦”頭領といっても老中会には口出しできない。何とも情けないものです」

“曆”と“閏”の命令系統は違う。

“曆”のトップは頭領であるが、その上に曆の老中会が存在する。まあ言ってみれば老人達の集まりだ。その老中会が自在に動かすのが“閏”である。故に曆頭領が何を言った所で、権力的に上である老中会や、命令系統が違う“閏”に届く事はないのだ。

「気に病まないで下さい。敵対しないだけでもまだありがたいですから。」

『頑張ってくださいね。仕事の話はここまでにして…』

父は一息ついてから、あつ、と何かを思い出したように声を上げた。

『そういえば…奏とは会いました？』

「？何故奏の話に？」

『……知らないんですか？奏は』

「おい！薫！！あれはどういうことだ！？」

父の言葉を百代の大声が遮った。

「ん、モモちゃん？今電話中なんだが。」

「いいからこっち来い！」

百代は薫の首根っこを掴みながら引つ張っていく。

「ちょ！引つ張らないでくれ！父上、一旦切りますね」

『わかりました。ではまた』

そうして引つ張られてやってきたのはグラウンド。なにやら人が集まっけていて盛り上がっている。

「一体どうしたんだ？決闘でもしているのか？」

「お！来たか薫！」

そこにはキャップがいた。

「どうしたんだ？」

「薫、あの子とどういう関係だ？」

そう言っけて百代が指差すのは決闘を行っている二人のうちの一人だ。

「え………！？」

その一人を見た時、思わず驚きの声を上げてしまった。

決闘をしていたのは二人とも女子であった。

劣勢な方の女子は最近名を上げてきているというブルマの一年。学校の勢力とかには興味がなかったので名前はきちんと覚えていないが、確か武蔵小杉だったか？

そして、彼女の相手は、黒いロングヘヤーのスレンダーな女子。薫にとって見覚えのある、というか見知った女子だった。

「すげえ……あの武蔵小杉を相手にして余裕だぞ！」

「何者だ、あの子!？」

そんな声が周りから上がるように、武蔵は押されていた。自身はすでに息も上がっているのに対し、相手は未だ余裕があるように見える。

「く……このプレミアムな私がここまで押されてる……!？」

「そろそろ終わらせるわ。覚悟はいいかしら？」

「く!」

武蔵が相手に右の拳を放つ。スピードもそこそこあるし、威力も申し分ないだろう。

だが、相手はその武蔵の拳を片手で逸らし、空いている方の手で掌底を武蔵の顎にヒットさせた。

「……………!」

顎への衝撃により軽い脳震盪を起こした武蔵はそのまま倒れてしまった。

「そこまで!」

鉄心さんの一言によって決闘は終わった。

黒髪の少女は、この2ヶ月弱で1年を締めていた武蔵小杉を軽く倒したのだ。

その少女の名は

「勝者、皐月奏!」

皐月サツキ
奏カナデ

私の、義妹だった。

決闘が終わり、勝者の皐月奏は兄である薫の方に向かってきた。

「久しぶりですね。兄さん」

「奏…？何故ここに？」

純粋な疑問だった。何故川神学園の制服を着て決闘をしているのか、薫にはわからなかった。

「何故と言われても、ここの生徒なのだから不思議ではないでしょう？」

「え！？私は聞いていないぞ！」

「そうでしょうね。言ってもせんから」

「というか何故わざわざここに？奏はてっきり地元の女子校に行っているのかと思ってたんだが。」

「そ、それは……その……に、兄さんと……（うっよ！うっよ）」

「？」

奏の言葉がどんどん小さくなっていく。顔も若干赤くなっていく。

薫がどうしたのだろうと思っていると、奏が小さな声でこう言った。

「に、兄さんが心配だったんです……」

「え？」

「か、勘違いしないで下さい！私は……そう！兄さんが皇月家の品位を落としていないか心配だっただけです！ただでさえ没落した家なのにこれ以上品位を落とされては私が困りますから！」

今度は一気に大声で捲し立てられた。

「……まあこの二月弱見ていた中では大丈夫そうでしたけど。」

「そ、そうか」

「それに自分を高めるなら地元的女子校よりも川神学園の方がいいと思ったのでこちらに来ました。」

ちなみに寮暮らしです。と付け加える。

「まあ私としては教えて欲しかったな」

「ふふ、兄さんを驚かせようと思って。その様子だと成功したみたいですね」

こうして、兄妹は再び出会った。

しかし、脅威は去っていなかった。

「かゝおゝるゝ……お前にこんなカワイイ妹がいるなんて聞いてないぞ〜」

薫の背後から百代が襲いかかる。

「いや、言っていないから。というか、首が、絞まっている、から……」

百代は薫にチョークスリーパーをかけたまま奏に話しかけた。

「私は三年の川神百代だ。お前の名前は？」

「一年の皐月奏です、川神先輩。兄がいつもお世話になっています。百代先輩と呼んでも？」

「いいぞ。それにしてもお前カワイいな。抱いてやるうか？」

「いえ、結構です。そっちの趣味はないので」

「そうか……それにお前強いだろ？勝負しないか？柔道の寝技DE
？」

「結構です。百代先輩にはまだまだ敵いませんから」

「そっいわずに　なあ！」

そう言つて、百代は奏に右ストレートを放つた。

「　！！！」

奏は右ストレートを咄嗟に掌で受け止め、ソレと同時に自ら後方に跳んで攻撃の衝撃を緩和し、無事着地した。

「やっぱり強いな、お前」

「　　痛ッ……やはり私では勝負になりそうにないわね」

威力を殺しきれなかったのか、苦い顔をしている奏。まああれを受け止めて、かつ、その程度のダメージという時点で凄いことなのだが。

その光景を見て、「おおおお！！あの一年、今度はモモ先輩と戦うのか！？」「さすがにそれは無謀だろー！！」とギャラリーが再び盛り上がってくる。

「どうだ？真剣マツで戦ってみないか？」

「……申し訳ないですが、今は疲れてますし、遠慮させていただきます。それに武蔵さんのお見舞いにも行きたいので」

「そうか。残念だが仕方ない。……というと思ったか!」

「え　？」

次の瞬間、百代が奏をお姫様抱っこしようと後ろに回りこんで

「少し落ち着けモモちゃん」

「ぐえ!？」

薫に首根っこを引つ張られた。

「けほっ!けほっ!何するんだ!薫!」

「いや、それは私の台詞なんだが」

「に、兄さん……」

「奏、モモちゃんは私に任せてさっさと行くといい」

「あ、ありがとう。兄さん」

そういつて奏はその場から去っていった。

「さあ薫、私の邪魔をした罰は大きいぞ」

「それも私の台詞なのだが」

「こうして、グラウンドにちょっとした災害が起きたのだった。」

誕生パーティー（前書き）

久しぶりの更新で申し訳ありません。

どうかお楽しみ頂けると幸いです。

誕生パーティ

5月22日金曜

朝の登校時、風間ファミリーが全員揃った。

そして今日は薫の誕生日だ。

ということと秘密基地で誕生パーティをする予定だ。薫には秘密で。そのために準備が出来るまで薫を基地に近付けさせないために誰かが何かをする必要がある。

「薫、ちよつといい？」

「どうかしたのか？」

その役目を負ったのはワン子だった。

「えーっとね。今日の放課後、アタシの鍛錬を手伝って欲しいんだけど……」

「まあ構わないが…またどうして？」

「え、えーっとね……ちよつと鍛錬に付き合ってくれる人も欲しかったし……」

しどろもどろ言い訳をするワン子。それじゃ“自分は怪しい事をしています”と言ってるようなもんだぞ。

俺は咄嗟に京にアイコンタクトで何とかフォローするように指示す

る。

「いいんじゃない？今日金曜集会だし鍛錬終わった後、ワン子と一緒に来れば薫が迷う心配もないし」

「それもそうか」

ナイスフォローだ、京。だが、その後に俺を見てその功績をアピールするんじゃない。

「だが、その私が出歩けば迷うという認識はどつにかならないのか？」

「ならない」

「ならないわよ」

「なるわけないだろーが」

「なんねーよなー」

「ならねーだろ」

「ならないよねえ」

「わ、私は…その…」 「ヘーイ！寝言は寝て言えYOOー！」

「努力をすれば何とか、って何をするんだ大和！？」

「やめるクリス。無駄に希望を持たすな。あれはもうどつにもなら

ないレベルだ」

「それはいくらなんでも言い過ぎだろっ？」

一部を除いて満場一致だった。
クリス

いつも通りの登校風景だった。

そして放課後

俺は京と一緒に島津寮に戻ってきた。

京はまゆっちと一緒に料理を準備する為に、俺はその付き添いというか京が料理を劇物にしない為の見張りだ。

ちなみにキャップはバイト、ワン子は薫と一緒に川原で修行、クリスと姉さんはケーキを買いに、モロとガクトは秘密基地でパーティーの準備をしに行っている。

「ゲンさんはいないみたいだな。バイトかな？」

「さあ？どうだろ……」

食いつかない。興味なさそうだった。

「クッキーもないけどどうしたんだろ？」

「クッキーには秘密基地の方に行ってもらったよ。あの二人だけじゃ不安だったしね」

京の食いつき具合がさつきと違ってている。まあ仕方ないか。

「私と大和の結婚生活についてだったらもつと喰いつくよ？」

「心を読むんじゃない！？あとそんな話しないから」

そんな会話をしながら居間に入るといい匂いがしてきた。どうやらまゆっちは既に準備を始めているようだ。

「まゆっち、料理の調子は」

そう言いながら台所を覗くと

「そうそう、アナタ上手ね！。才能有るわ」

「い、いえ！そんな事は……」

「謙遜しないで素直に褒め言葉として受け取っておけよまゆっち。まあそんなところもまゆっちの魅力なんだぜー」

そこにはまゆっちの他にもう一人見知らぬ女性がいて、何故か二人でケーキを作ってた。というかその女性がまゆっちに指導している

ようだった。

見知らぬ女性の方を観察してみる。見た感じでは20代前半。大学生か？髪は肩に届くくらい黒髪で、体型はメリハリが付いていて、まあ何というかガクトが好きそうなお姉さん系の美人さんだった。

だが、そんな美人さんが何故ここにいるかがわからない。

「じー……」

ふと振り返ると京が俺のことをじーっと見ていた。

「……どうした京？」

「嫉妬の視線」

……とりあえずスルーすることにしよう。

「……あのー、まゆっち？」

「あ、大和さん、京さん、おかえりなさい」

「こんにちはー。お邪魔してるわよー、ってあれ？」

「？なんですか？」

美人さんが俺の顔を見てくる。俺の顔に何か付いてるのか？

「もしかして……アナタの名字って直江だったりする？」

「そつですけど…?」

何でこの人俺の事知ってるんだ?もしかしてどこかで会ったことがあるとか……?

「やっぱり!どことなく似てると思ったんだけどねー。名前何て言うの?」

「大和です。直江大和。ところであの……どちらさまで?」

「私?私は皐月美沙。アナタのお母さんの友達だったのよ」

「え!?母さんと友達!?」

という事はこの人も元暴走族だったりするの!?でもそれだと年代合わないだろうし、また別の知り合いか?……って、あれ?ちょっと待てよ?

「皐月?ということは薫のお姉さんとか…?」

「そんな、お姉さんだなんてねー」

何故か照れられた。

「大和さん、美沙さんは薫さんのお母様だそつですよ」

「ああ、そつか。薫の母親かー」

.....

.....え？

「「母親！？」」

京も驚いたようでハモってしまった。
いや確かに母さんと友達なら年代的にもおかしくはないかもしれな
いけど、若すぎないか！？

「そんなに驚かなくてもいいじゃないの」

「だってどう見たってまだ20代……」

「私これでも42よ」

「ええ！？」

「若い……!」

これで麗子さんと同い年だって!? 京も驚いてる。

「そう言ってもらえると嬉しいわ。アナタは名前何て言うの?」

「……椎名京……です」

京が多少距離を取りながらぼそぼそと名前を教える。

「京ちゃんか。で、京ちゃんは大和君の彼女?」

「前世でも将来的にも来世でも夫婦です」

「違います」

即答だった。

いや、確かに俺のツッコミもすぐにしたけどさ、さっきのおどおどしてたのはどこにいったんだ?

「え? 違うの? お似合いだからってつきりそうかと思っただけだな」
「」

「大和、この人すっごくいい人だよ!」

「そんな事で判断するな!」

「じゃあ京ちゃん。一緒に料理しない?」

「はい」

何と！煽てられたとはいえ京がこうも早く他人を受け入れるとは……

「松風、美沙さんってすごいですね……」

「ああ。あのガードの固エ京にいと簡単に受け入れられてやがる……パネエぜ……」

こうして美沙さんは京とまゆつちと一緒に料理を作り始めた。

その間、俺は何もすることがなかった事をここに明記しておこう。

持っていく料理を作り終え、荷物持ちとして頑張ろうと思っていた俺に美沙さんが話しかけてきた。

「とりあえず、このケーキも持っていくといいわ」

そういつて差し出されたのは店で売っていてもおかしくはない程の出来映えのチョコレートケーキだった。

「え？いいんですか？」

「いいわよ。元々薫の誕生日用に作ったケーキだし、由紀江ちゃんと京ちゃんの二人も手伝ってくれたしね」

「いやそれでも……」

「アナタたちぐらいの年齢だったら家族に祝ってもらうより友達に祝ってもらった方がいいでしょ？」

「まあ、そうかもしれないけど……」

「じゃ、決定ね。はい」

「ど、どうも……」

そういつて受け取る。

「それじゃ、いつてらっしや〜い」

俺たち三人は美沙さんに見送られながら島津寮を後にした。

「……ところで、何であの人島津寮にいたんだろ？」

「そついえは何でだろ……まゆっちは何か聞いている？」

「いえ……特に何も……」

「オラにもわかんねー」

……………結局謎だった。

「ふう……夕方の分は終了!!」

「お疲れ。これで水分補給しておけ」

そういつて薫はスポーツ飲料の入ったボトルを手渡す。

「ありがとー!ごくごく……」

「それじゃ、そろそろ基地に行くか?」

修行が終わってしまった今、ここにいる理由はないし、今日は金曜集会があるので薫の提案は当然のものだ。

「え!?え〜つと……」

しかし、ワン子にとって、まだ準備が整っているかわからないのに薫と共に基地に向かうのはマズイのだ。

しかし、ここに薫を留めて置く言い訳も思い浮かぶはずもなく、

ワン子が言い淀んでいるとワン子のケータイから着信音が鳴った。ケータイを見てみるとメールが着ていた。

それは大和からのメールだった。ワンスは文面を見てみると、そこには完結にこう書いてあった。

『準備完了！薫連れてきてくれ』

それを見たワンスの顔は先程の苦い顔からホッとしたような顔に変わり、

「うん！早く行きましょ！」

「？ああ。それじゃ行こうか」

そうして二人は川原を後にした。

色々と話しながら歩いていくうちに秘密基地のある廃ビルに到着して、薫は気になっていた事をワンスに尋ねる。

「それにしても今日は何かあるのか？」

「え！？ど、どうして！？」

「いや、なんとなくそんな気がしただけだが」

実際には登校時や先程のワンスの様子を見て感じたことだが、わざわざいう事でもないだろうと思いい、言わないでおいた。

「もう皆集まっているみたいだな。私達で最後だ」

そついいながら薫が扉を開けると

「薫、誕生日おめでとう!!」

という声と共に、『パーン!』と、クラッカーの破裂音が薫を出迎えた。

「え?」

当の薫は状況が掴めずによくわからない顔をしていた。

「皆、わざわざありがとう」

少しして状況が掴めたのか、薫は俺たちに礼を言ってきた。

「別に対した事じゃねーだろ？」

「コレくらい別に何でもねーぜ！」

「おいしい料理も食べれるしねー」

「そうか。ところで気になっている事があるのだが……」

「何だ？」

「ホールサイズのケーキがいくつもあるんだが、どうしたんだ？」

「ん？そういえばそうだな」

「それ僕も気になったんだけど……」

「俺様も気になってたぜ」

誕生日にケーキがあっても不思議ではない。ただその数が4もあつたのが不思議なのだ。

苺のショートケーキの他に、チーズケーキ、抹茶ケーキ、そしてチョコレートケーキと種類も豊富だった。

確かに味を楽しめるかもしれないが、余りかねないほどのケーキ群がそこにはあつた。

「それには理由があるんだ」

「それってどんな理由？」

姉さんが説明を始めた。

「実はな、私とクリでクマーンお勧めの店にケーキを買いに行ったんだが、少し意見が割れてな」

「?どんな感じで？」

「こういう時は苺のショートが定番だと私は思ってたんだが、クリが抹茶のケーキに異様に食いついてな……」

「自分はケーキが欧米文化のお菓子だと思っていたんだが、しかしまさか日本にも古来から独自のケーキがあったとは……」

「いや違うからね！抹茶のケーキって最近出来たものだからね！」

「というか個人的にはまず抹茶のケーキがホールサイズであるのに驚きなのだが」

「だから是非とも食べなくては！と思っただ」

「そうしてクリが駄々こねてるのを見ると他のケーキにも目がいつてな。どれも美味そうだったんだ」

「……それで？」

「そこで閃いた。食べたいのを全部買えばいいんじゃないか。って

な

「良くないよ!!こんなに食べきれないでしょ!?!せめて切り分けされたのになよ!」

「後悔はしている。反省はしてない」

「ダメだこの人!?!」

「言っておくがこれでも3つまで数絞ったんだぞ!3つぐらいなら絶対に食べ切れると思って!で、来てみれば何故か調理班の大和達がチョコケーキを持っていて+1だ」

「?何で大和達が?」

「いや、薫の母親がさ、誕生日会するなら丁度いいだろう、って言うてな」

「お料理も美沙さんと一緒に作りました」

「私も少し手伝った」

「母上が?」

「ということこれは美沙さんのケーキか」

「わーい!アタシ美沙さんの料理大好き!」

「あれ?姉さん達は薫の母親と知り合い?」

「とうにかまず誰の話？」

モロが疑問の声を上げる。確かに何も知らない人にとっては何のことかわからないからなあ。

「今日島津寮に帰ったら知らない女性がまゆつちと料理してたんだけど、その人の名前が皐月美沙っていうんだ」

「皐月っていうと……」

「ああ、薫の母親だ。元・川神院門下生で時々こっちに来たりしてるぞ」

「ちなみに私は母上に料理を習った。その腕は未だに超えられない」

え？マジで？美沙さん、薫よりも料理の腕は上なのか……

「美沙さんの料理ってすごくおいしいのよー」

「私も一緒に料理をさせてもらいましたがすごく勉強になりました」

「あれはパネエゼ……まゆつちの母親とタメ張るくらいパネエ……」

何気にまゆつちが自分の母親自慢してるけどスルーしておこう。

「へー美沙さんって薫の母ちゃんだったんだ」

「あれ？キャップは知ってるのか？」

意外だ。特に接点が見当たらないけど……

「何でキャップが薫の母ちゃんのこと知ってたんだ？」

「だってお袋にも結構会いに来てたしなあ。何でも高校時代の同級生らしいぜ」

「じゃあ何で俺様は知らねーんだ!？」

ちなみにガクトの母親である麗子さんとキャップのお母さんも同級生である。

「ガクトのお母さんとは友達じゃなかったとかじゃないの？」

「いや、麗子さんとは親友だって言ってたよ。今でもよく会ってる」

「なおさら、何で俺様は知らねーんだ!？」

「うっさい黙れ!」

「ぐはっ!?!」

あ、姉さんのパンチでガクトが沈んだ。

「とりあえず薫にプレゼント渡すぞー」

「おおー!?!」

沈んだガクトを放置したまま、場は進行していく。

大和のプレゼント

「俺からはこれだな。心理トリックの本」

「へえ……心理トリックか」

「これに書いてあるトリックとかも面白いし、色々と役に立ちそうだから読んでいて損はないぞ」

「ありがとう。じっくり読ましてもらうよ」

「トリックか……自分は好かないな」

「いや、今クリスの趣向は関係ないと思うんだけど……」

モロのプレゼント

「僕からはこれだね」

「これは…ゲームソフト？」

「クリーチャーハンター略してクリハン。薰ってたしかゲーム機は持ってたけどクリハンは持ってなかったでしょ？」

「ああ、クリハンは持ってなかった」

「僕達は持つてるしせつかく皆でできる環境があるんだからって」とで

「成程、ありがとう。また今度コツとか教えてもらおうよ」

京のプレゼント

「私からはこれだね」

「これは……本？」

「大和と被っちゃった。これも愛の為せる技だね」

「被っちゃダメでしょ!？」

「大丈夫だよ。大和のは心理トリックについての本だったけど私の推理小説だから」

「ありがとう。これも後で読ませてもらうよ」

「あとこれがその小説キャラの相関図」

「ネタバレになるからそれは遠慮しておこう」

「そう……残念」

「相関図？」

「京は自分で読んだ小説の登場人物の相関図を作るんだ」

「へえ……どんな感じなんだ？……？ここに書いてある肉棒管
理とはどういう関係だ？」

「「「「「ぶはっ！？」」「」」」」

ワンジのプレゼント

「アタシからはこれよー」

「ハンドグリップか」

「それでいつでもどこでも握力を鍛えられるわよー」

「いや、いつでもどこでも鍛えてるのワンジぐらいだからね」

「確かに。だが大事に使わせてもらっよ」

ガクトのプレゼント

「次は俺様だな！」

「いつの間に復活したの！？」

「俺様からはこれだ！」

「……バーベルだな。だがどう持って帰れと？いやそもそもどうやって持ってきた？」

「普通に持ってきたに決まってるんだろ？確かに重かったが俺様の筋肉にとってはラクショーだったぜ」

「……とりあえず秘密基地ひそかに置いておこう」

「持って帰らねーのかよ？」

「当たり前だろう！」

百代のプレゼント

「私のプレゼントはこれだー！ー！ー！」

「……モモちゃん、一応聞いておこう。それは何だ？」

「見ての通り、川神学園女子制服だ！お前なら似合つと思ってな！」

「……………(怒)」

「も、もう一つあるぞー！えーっ……………」

「……………(怒)」

「っっ……………！そ、そうだ！薫に私と一日デートする権利をやるっ！」

「……姉さん、もしかなくてもお金なかったんだな」

「う、うるさいな！金借りようにも借金の返済期日迫ってて誰からも借りれなかったんだ！悪いか!？」

「うん。悪いね」

「自業自得というか……」

「うう……さすがに私も悪かったと思ってるさ。だから金が入るまで待ってくれ！それがダメなら一日デート権で！」

「……まあモモちゃんからのプレゼントは保留ということだ」

クリスのプレゼント

「自分のはこれだ！」

「これは…DVD?」

「そうだ！『大和丸夢日記』のDVD！当然シリーズ全巻揃ってるぞ！」

「全巻って……よくそんなお金あったね……」

「そんなにあるんだったらクリに金借りに行けばよかったな……」

「以前、薫は時代劇の良さがわからないと言っていたからそれを知ってもらおうと思ったんだ」

「そういえばそんな事も言ったな……。じゃあ、時間が空いている時に見ていくよ」

「ああ！見たら一緒に大和丸について語り合おう！！」

まゆっちのプレゼント

「わ、私達からはこれです！誕生日会なんて初めてなのでどういっ物を用意すればよかったのかわかりませんでしたけど……」

「ありがたく受け取れよー」

「私達って……。ああ、松風カウントされるんだ……」

「これは……」

「北陸の海の幸です。母上から送ってもらいました」

「…ありがとう。ただ、一つだけ言わせてくれ」

「何ですか？」

「遠慮しねーで言ってくれー」

「これは誕生日プレゼントとしては向いていない」

「はあうー!?!?」

キャップのプレゼント

「俺のプレゼントは一味違っぜ。これだー!?!?!?!」

「……………何だこれは?」

「これはな、親父が発掘した遺跡で発見された謎の装飾品だ。ロマンが溢れる一品だろ!?!?」

「確かにロマンは溢れているかも知れないが、これをどうしろとい
うんだ…………?」

「身に付ける!何かおもしれー事が起きる気がするからな!」

「…………呪われそうな気がするから部屋に飾っておくことにするよ」

「賢明な判断だ。流石薫」

「…………いつ時のキャップの勘ってよく当たるからねえ…………」

「しかもキャップの言う面白い事って厄介な事になることも多いし
な」

「これで一応全員渡したな」

「よっしゃー！それじゃ、今日は無礼講だ！各々好きにしるい！」

「いつも無礼講みたいなものだけどね」

「いいじゃねーか。こういう時はこう言うのが決まりだろ？」

キャップの一言を切欠にいつものようにみんなが話し始める。

最初はいつもの金曜集会のように明日は何をするか、とかそういう話だったのだが……

「どうせ中学ではモテモテだったんだろ？」

「クソッ！とてつもなく妬ましいぜ……」

どう話が発展していったのか、今は何故か薫の中学時代での恋愛事情についての話になっていた。

ちなみにこういう話に興味がないキャップとワン子、さらにワン子に勝負を挑まれたクリスは食べるのに夢中であった。

「いや、私は特にモテてなかったぞ」

「嘘だ！！どうせ靴箱にラブレターとか山程入ってたんだろー！」

「こら松風！何言ってるんですか！」

……靴箱にラブレターって何か少し古い気がするのは俺の偏見だろ

うか？

「確かに中1の時はラブレターも少しだがもらったりしたが、中2になってからは全くなかったな。おそらく私のモテ期は中1で終わったのだろう」

「はは！ザマあー！！」

ガクトがとても嬉しそうな顔でそんな事を言う。

「本当にそうなのかなあ………？」

「実は入ってたけど誰かに捨てられてたとか？」

モロが疑問の声を上げ、それに京が推測を加えた。

「それは流石にないだろう」

「わからないよ。もし大和にラブレターが来てたら私は捨てる。ズタズタにしてから捨てる」

「ソレ怖いよ京……」

「京はそうかもしれないが、そんな人滅多にいるわけがないだろう」

「

「くしゅん！」

「大丈夫？ 皐月さん？」

「ええ、大丈夫よ、武蔵さん。誰かが噂でもしてるのかしら……？」

今、奏と小杉は二人で晩御飯を食べていた。

実はこの二人、仲良くなっていた。

決闘の後、奏が保健室に赴きそこで色々と話したら気があったようだ。

まあ、片やひたすら決闘を売りまくり、片やひたすら兄の動向を観察して、しかも共に競争意識が高くそれぞれが孤立しがちなS組所属の二人に友達らしい友達などいるわけもなかったので、仲良くなつて友達になつたのはある意味当然とも言える気がするが、名字で呼び合っている所をみるとまだ少し距離は離れているようだ。

ちなみに今回の食事までの流れを簡単に説明しておこう。

奏は、今日は薫の誕生日を祝おうと思っていた。しかし仲間内でパーティーをしていると母親から連絡を受けて落ち込んでいた。ちょうどその落ち込んでいる奏を見た武蔵が元気を出してもらおう為にご飯

に誘った、という流れであった。

「とりあえず、私の当面の目標はあなたを超えることね。というか、プレミアムな私を倒せるほどの実力を持ったのにどうして今まで無名だったのかしら？」

「時期を待ってたのよ。殆どの事において一番になるのに労力の少なくて済む方法はその一番を倒すこと。でも入学したての時じゃ一年の一番かなんてわからないでしょ？だからそれまではどれほどの実力者がいるのかをチェックしてたのよ。まあ他にする事もあったわけだし」

「他にする事って？」

「兄さんの周辺の事とか調べたり」

そう言うってから奏はしまった！と言うような顔をして黙ったが、武蔵は何か気付いたようだ。

「……はは〜ん、なるほど。プレミアムに閃いたわ。貴女、ブラコンね。それも極度の」

「ななな、何をいつてるのよ！そそ、そんなわけないじゃない！」

凶星だったようだ。

「もしかして、皇月先輩宛てのラブレターとか勝手に捨ててたとか？」

「……！」

一瞬息を呑んだ奏は顔を赤くしながら反論した。

「そ、そんな事するわけないじゃない！あ、貴女は私をどう見てるのよー！」

思い切り凶星だったようだ。

「……ま、まあいいわ。それじゃあ皐月先輩ってどんな人？私詳しくは知らなくて」

「兄さんのこと？兄さんはね」

こうして、二人の距離は縮まっていき、友情は築かれていく。

「くしゅん！」

「どうした薰？風邪か？」

「いや、大丈夫だ」

誰かが噂でもしているのか？

「それでも薰ってモテてるでしょ？」

「どうせフラれたこともないんだろ？羨ましいぜ」

「ガクトはフラレまくりだからね」

「うるせー！！」

「いや、私もフラれたことはあるぞ」

「真剣か！？いつ誰にフラれた！？」

「それは秘密だ。そこまで詳しく話すつもりはない」

それに今考えると、あの時の感情は恋というよりも単なる憧れのよ
うな物だったと思う。まあ恋というのがどんな物なのかわからない
が。

「ということとは誰かと付き合ったことではないってこと？」

「まあそうだな」

言っていて悲しくなってくるが、まあ事実だし仕方ない。

「……まさか薫に魍魎の宴に来る資格があったとはな。俺様夢にも思わなかったぜ」

「魍魎の宴？何だそれ？」

食べるのに集中していたキャップが疑問の声を上げる。

「キャップには無縁の物だと思うなあ……」

「それにキャップには資格がねえからな」

「何だとう！？俺だけ除け者にしてズルいぞ！！大和お！教えてくれ！！」

「いや、俺も何かは知らないぞ」

「何だとー！？そんな大和は軍師大和じゃないぞう！！」

「いや、軍師関係ないじゃん」

まあ確かに関係ない気もするが、情報収集不足という点では関係している気もするな。

「ちなみに俺には資格はあるのか？」

「大和にもないな」

「あっても悲しいだけなんだけどねえ……」

「だがよく考えたら薫の場合資格があるのか微妙だな……今度童帝様に意見を聞いてみるか」

……できれば誘われたくないな。

「それにしても恋人ね……」

「お？誰か候補でもいるのか？」

「いや全くいないが」

だが、興味がないわけではない。恋は人を変えろという。実際に変わっていった人がすぐそこで大和に引っ付いている。

もし恋人が出来れば、私も何か変わるのだろうか？

そんな疑問が頭に浮かんだ。が、そんな疑問はすぐに破棄した。

今はそんな事よりも、仲間が作ってくれたこの時間を楽しむことを優先しよう。

誕生パーティー（後書き）

ということですが今回は特に何も無い、ほのぼのとした感じの話でしたがどうでしたでしょうか？

とりあえず薫と奏の母親であり、薫を川神学園に勝手に入学させた美沙さんが再登場しました。まあ特に何かあるというわけではありませんが。

奏と小杉が仲良くなってるのはまあ文中であつた通りです。まだ名前で呼び合つていて距離は多少ありますが、次回登場時にはきつと下の名前で呼び合つほど仲がよくなっている予定です。

何か誤字脱字・意見などがあれば遠慮せずに感想を書き込んでください。

人生相談

川神院

「えいつ！やーっ！とーっ！」

いつもの如く、ワン子が素振りをしていた。

「ていやーっ！……ふっ……」

どうやら素振りがひと段落したようだ。そこへ一人の女性が話しかけた。

「やっほー、一子ちゃん」

「？あ！美沙さん！」

それは皐月美沙であった。

「今時間ある？」

「うん。ちょうど素振りも終わった所だしアタシは大丈夫！」

「よかったわー。あのね、薫から一子ちゃんが私に話を聞きたいって聞いたんだけど」

「え？何の話？」

「あれ？おかしいわね。何か相談に乗ってあげて欲しいって薫に言われたんだけどな……」

薫。話。相談。

そして思い出す。師範代候補だったにもかかわらず師範代にならなかった女性がいるという話を。

「もしかして美沙さんが？」

「何が？」

「ええつと……昔、師範代候補だったっていう人がいるって薫が言ってたけど……」

「ああ、それ多分私のことね。それでも私、師範代候補だったのよ」

場所を移し、二人並んで縁側に座る。

「んー、何から話せばいいのかな？とりあえず私が師範代を目指したきっかけでも話そうかな？少し長くなるけどいい？」

「うん！是非！」

美沙は一つ咳払いをしてから語り始めた。

「私は昔から川神院に通っててね。鉄じいとかその当時の師範代と
か見てるといつも人生を楽しく過ごしてる様に見えて、川神院の師
範代になれたらきつと楽しいんだろうなーって思った。だからそれ
を目指したの。理由はそんな単純なモノだったわ」

「じゃあどうして師範代にならなかったの？」

当然の疑問だ。師範代を目指していたにも関わらず、師範代になら
なかった。そこには何らかの理由があるはずだ。

しかし一子にはその理由が何なのかわからなかった。

「それはねー……」

美沙の口から出た答えは一子にとって予想外のモノだった。

「恋をしたからかな」

「こ、恋!?!」

「高校生の時にね、川神に旅行に来てたトモに、あ、今の旦那のこ
とね。彼に一目惚れしちゃってねー。今までそんな気持ちになつた
事なかったからどうしていいのかわからなくて、道案内として付い
ていって何とかアピールとかしてもトモは気付かなかったし、あの

朴念仁ときたら……！」

何かを思い出しているのか、美沙は悔しそうな顔をしながら拳を強く握り、わなわなと身を震わす。

「美沙さん……？」

「　　っと、ゴメンねー。危うく話が逸れる所だったわ。とりあえずその時には恋人までは行かなかったけど、それからしばらく連絡とか取り合ったりして何とか遠距離恋愛にまで発展してつたのよ。それで結婚とか師範代の試練の事とか考えるようになった時に一つの問題にぶつかったのよね」

「問題？」

恋が実り、さらに自身の夢を叶えようとしている時にどういう問題があるのだろうか？

「彼の家というか一族ってね、代々武術が受け継がれててね。その親戚がその武術に変にプライド持ってるらしくて、他流派の師範代レベルの地位を持つ人が嫁いだら面子とか色々と面倒があったのよ。それで私は選ばないといけなくなったの。師範代への道か、トモとの結婚か」

まあ私は結婚を取っただけどねー、と美沙は笑いながら軽く言う。

しかし、それは一子としては信じられない障害だった。

自分の実力不足で師範代になれずに夢が破れるのならまだしも、そんなくだらない理由で夢が潰えるなんて自分なら受け入れられない。

一子はそう強く思い、そして同時に驚いた。

そんな理由で夢が潰えたというのにそれを語る美沙の顔に全く苦悩の表情が見られないからだ。

「……………今まで師範代になるために努力してきたのに悩まなかったの？」

「んー？正直スゴク悩んだわよ。でももしもトモを諦めて師範代になつたらって考えたら、怖くなつたの。」

「怖く？」

「トモがいなくても私は幸せでいられるのかつてね。確かに師範代になるためにたくさん努力したわ。でも、よく考えたら師範代はあくまで手段であつて夢じゃないって事に気付いた、というか思い出したって言った方が正しいか。師範代になる事に拘つてたせいで視野が狭くなつてたのよ」

いつの間にか夢を叶えるための手段であつた師範代になる事が夢に変わっていた。

そしてその夢の根源を頭の奥底に封じ込めていた。

改めて考えてみると、師範代はあくまで手段に過ぎなかった事を美沙はその時思い出したのだ。

「師範代になることが手段で夢は別にあつた？それじゃその夢って……………」

「私の本当の夢はね……………」

幸せであり続けることだったの「

「？幸せであり続けること？」

思わず聞きかえす。

“ 幸せになること ” じゃなくて “ 幸せであり続けること ”

「別に昔私が不幸だった、ってわけじゃないわよ。自慢じゃないけど私は今まで自分が不幸だと感じたことはないの」

これちょっとした自慢ね。と一言挟んでから話を続ける。

「でもニュースとか本とか見てるとね、世の中には不幸って結構いっぱいだなーって思ったりするのよ。不幸について私はあんまり知らないけど、だからこそ不幸になるのは怖いと思ったの。人って知らないものには嫌悪感を抱くらしいしねー。それで幸せであり続けたいという夢を持ったわ」

それは人ならば当然のように抱く感情である。

誰だって不幸になりたくなどない。不幸か幸福かどちらかを選べといわれれば、人は間違いなく幸福を選ぶだろう。

しかし、そんな当たり前の感情が、彼女の夢、願いであった。

「その夢を具体的に叶えるために選んだのが川神院師範代だった。そしていつしか本当の夢を忘れてしまっていたの。それをその時に思い出した」

曖昧だった夢の根源に具体性を持たせた目標が川神院師範代。

時間が経つ毎に夢の根源にあったものを忘れるのは人としてはおかしいことではないだろう。

「それで、改めて幸せであり続けるにはどうすればいいのかって考えた時に、やっぱり私にはトモが必要なんだなーって思ったの。だから師範代の夢は諦めたわ」

「師範代に未練とかは…?」

「んー?今も私は幸せだし、あの時の選択は間違ってたわけでしょ?だから特に未練はないわ」

そう言つて微笑む美沙の顔が、一子にはとても輝いて見えた。

とても嘘を吐いてるようには見えなかった。

この言葉が心の底から出た言葉だと理解できた。

「あの、」

「んー？何？」

「美沙さんはアタシが師範代になれると思つ？」

それは、一子が一番知りたいことだった。

薫に師範代になるのは厳しいと言われた時に、自身の心の中に隠していた不安が出てきた。

『アタシは本当に師範代になれるの？』

そのことは一子自身が一番不安だったのだ。

そんな思いで尋ねた言葉に美沙はこう答えた。

「ちあ？」

「えっ！？」

思った以上に軽く、短い言葉だった。

一見投げやりにも見えるこの返答だが、美沙としては大真面目だった。

「師範代って才能もいるけど、その才能に対してどれだけ努力するかっていうのも関係してくるしねー。ルー君だって何年も掛かったわけだし一概になれないとは言えないのよ。ただ一子ちゃんはまだ若いから今が一番伸びる時期でしょうけど、今ならまだ師範代以外の道も探しやすいでしょうから鉄じいとかは諦めさせるつもりかもしれないわねー」

それは、遠回しに無理だと言ってるのだろうか？
少なくとも一子にはそうとも聞こえた。

「やっぱり、無理なのかな……」

「あくまでそういう可能性もあるって話よ。諦めたらそこで試合終了よ。なれるかどうかかわからないことからって挑戦しなかつたら師範代には絶対になれないわ。結局アナタの人生はアナタの物でしかないんだし、自分の思うようにやってみるのが一番よ。他人の言う事にいちいち反応してたら何も出来ないわけしねー」

「で、でも……」

「……ねえ一子ちゃん。私にはアナタが師範代になれるかなんてわからないし、無責任に“なれる”とも“無理だ”とも言う事は出来ないわ。でも、もし夢が破れても、師範代というモノに囚われないで。その時は視野を広げてみて、師範代になりたいと思った切欠を思い出して、その上でアナタが後悔しない道を選びなさい。……私から言えることはそれだけよ。もっと簡単に言えば、“勇往邁進”。その心を忘れないようにね」

「……」

“勇往邁進”

それは一子が好きな言葉だった。

“勇往邁進”……困難をものともせず、前に突き進む事……

一子はそれを心の中で反芻し、そして決心する。

「……決めたわ。アタシ、絶対に師範代の夢を諦めない！夢を叶えるために今まで以上に努力するわ！……」

「うん。頑張ってるね。応援してるわ」

結局、師範代になれるかどうかという悩みは解決しなかったが、一子は美沙の話聞いてなんとなく元気が出た。

後悔しない道を選ぶなら、アタシは絶対に諦めない。今はただ、前に向かって進むだけ！今までもそうやって進んできたんだからこれからもそうやって進んでいく！

“勇往邁進”

それが一子の選んだ道だった。

「美沙さん、話聞かせてくれてありがとう。ちょっと元気出たわ」

「役に立てたなら嬉しいわ。…あ！そうだ！いい事思い付いたわ。ちょっと耳貸して」

「？」

何かと思い、一子は美沙の口元に耳を近づけた。

「あのね……」

「

その提案は一子にとって、確かにいい事だった。

「今日は当たりが多かったな。流石クマちゃんだ」

そう独り言を呟きながら私は川神院に帰ってきた。

今日はクマちゃんとキャップとの三人で食べ歩きをしていた。サンドウィッチにケーキにたい焼き…etc. まあ要は色々食べてきたのだ。

今回は皆満足のいく結果だったので快く解散できた。ちなみに解散場所は川神院の門の前だった。どこまで駄目だと思われるのだろうか、私は……

そんな事を思いながら自分の部屋に戻ろうとしていると、前方にワンス子の姿が見えた。

ワンス子も私の姿を確認した。かと思えばすぐさま私に向かって走ってきた。

「薰！」

「うん？どうしたんだワンス子？」

ワンス子の様子からして何か急ぎの用があるのかと思い、尋ねてみる。するとワンス子は息を整えてからこう言った。

「アタシを弟子にして！」

その言葉は私にとっては予想外の物だった。

「……またどうして？」

「アタシ、強くなりたいの！この前ははぐらかされたけど、ちゃんと答えて！」

そういえば前にも言われた気もするが、あれは『鍛えて』であって『弟子入り』ではなかったような……

そんな事よりもワンス子の弟子入りをどうするかだが……

出来れば断りたい。私は人に教える程修めていないし、そもそも人

に教える資格が私にあるとは思えないからだ。

「私は川神院の門下生ではないから川神流の技は知らないぞ？」

「それは嘘！」

……確かに嘘だが何故嘘だとわかったんだ？川神流の技をワン子の前で使った覚えはないのだが……

「さつき美沙さんが言ってたけど、薰って美沙さんの使った技を見様見真似で覚えて使ったらしいじゃない！」

成程、弟子入り云々は母上の入れ知恵か……。母上は一体何を考え
てワン子に弟子入りを勧めたんだ？

「……確かにそうだが、それでも私が門下生ですらない事は事実だ。
それを批難されるかも」

「それでも……！」

ワン子の強い意思の籠った一言。

それによって私の言葉は止まってしまった。

そしてワン子が言葉を続ける。

「アタシは強くなりたい！師範代になれるくらいに！お姉様と肩を並べるくらいに！そのためには何でもする！誰かに批難されても、やれるだけの事はやっておきたいのよ！」

強い思いが籠った言葉だった。

ワン子の目を見る。その目は全く揺らぐことなく、強く私を見ていた。

何だか詰まらない理由で断ろうとしている自分が情けなく感じてしまった。

「……わかった。ただ、教えるといっても私は川神流を教えられるほど精通しているわけではないから、川神院のノルマとは別で組み手をするとか指導をするくらいしか出来ないがそれで構わないか？」

「……！うん！」

「ただ、指導は厳しく行くぞ。覚悟をしておくんだな」

「わ、わかったわ！」

こうして一子は薫の弟子になった。

これが将来、どんな結果を生み出すことになるのか。それはまだ、誰も知らない。

人生相談（後書き）

ワン子の強化フラグが建ちました

ということでもワン子の弟子入りのお話でした。

説教や相談といった、誰かを諭すシーンというのは書くのが難しいと改めて感じました。思うが俣に書いていって、何か支離滅裂になつてないか？とか読み返しては……というのを繰り返して結局ちゃんとした文章になっているのか不安なのですが、かまわず投稿させていただきました。

さて、今回のワン子の相談相手であり、薫の母である美沙さんですが、昔は師範代候補だったのです！この設定は登場当時から考えていた設定であり、ワン子の人生相談もやろうと思っていた話でした。ちなみに美沙さんは釈迦堂さんやルー師範代の兄弟子（この場合姉弟子？）にあたります。たぶん。

強さとしては秘密ということにしておきますが、もし、結婚ではなく師範代への夢を選んでいたら、ルー先生ではなく彼女が川神院総代候補になっていた可能性がある、と最近気づきました。まあこれはどうでもいい話ですがね。

ご意見・感想など、何かありましたら遠慮なく言ってください。

閨の構成員（前書き）

まじこいSの情報が公開されてから約一週間。

いまだテンションがあがりっぱなしです！妄想が広がります！

ということで比較的早い投稿です。……とある中立の方も書かない
となあ……

閨の構成員

“曆”と“閨”

その二つの上部に当たる集団がいた。

それが“老中会”と呼ばれる集まりである。

これは、かつて“曆”や“閨”で現役を引退した者達の中から選ばれ、強力なコネなどを使い二つの組織の運営をしながら、甘い汁を吸ったり、陰謀を巡らしたりする老人達の集まりである。

簡単に言えば曆一族のOB・OG会のようなものだ。

自身の保身しか考えないような輩も多く、組織内では密かに嫌われているのだが、“曆”の先人でもある彼等は組織内外である程度の権力を持っているのだ。

現役の者達にとっては認めたくない事実だが、知名度の低い“曆”に結構な依頼が来るのも彼等が代々築いてきたコネによるものも大きい。よって組織内では最高権力集団であるといつてもいいだろう。まあそうはいつても外ではそこそこの権力を持つ爺婆でしかないのだが。

そんな老人達の集まりである老中会だが、その本拠地には現役を退いた老人しかいない、というわけではない。

組織内での経理なども含めた様々な雑用は“曆”の一部の者達によって行われている。

そうして老中会に気に入られた者が、次代の老中会のメンバーに選ばれるという流れなのだ。

老中会に気に入られなければ、たとえ“曆”頭領だとしても老中会に入れられることはないのだ。

そうした者達に仕事を任せた結果、空いた時間を老人達はそれぞれ

コネを広げたり私利私欲を満たしたり、あるいは陰謀を張り巡らしたりしているわけである。

そんな次期老中会メンバー候補の中にとある一人の少女がいた。

「何やねんホンマにあのジジイ共め…、偉そうにしよって。誰がお前らの使うとるその金の管理やってると思ってるんねん。つーか絡繰費って何やねん？」

茶髪のロングヘヤーにメガネをかけた彼女は、パソコンの前に陣取り、子飼いの者としては考えられないような言葉を放つ。

彼女は霜月紗枝さえ。そのようには一切見えないのだが、老中会にいる霜月老の手の者である。

「職場間違ったかなあ……いや！この位置やったらもっと上も狙えるわけやしもう少しの辛抱や」

彼女としては甘い汁を啜れるなら啜りたいと思っているし、お偉方に能力が買われるなり気に入られるなりすれば、それも叶わない夢ではないとも思っている。現に今扱っている資金をバレない程度拝借し、株で自分の懐を暖めたりもしている。当然拝借した分は返しているが。

故に（上司達の前では）何の文句も言わず、地道に、しかし確実に成果を上げてきたのだ。

「よっし！やったるでー！ー！ー！ー！ー！」

紗枝は改めて決意し……

「異動命令じゃ。この度、お主の“閨”への異動が決まった」

「……………へ？」

……………その決意はすぐに無駄なものになってしまった。

先程の決意から十分ほど後に使いの者がやってきて、老中会の面々から話がある、という言伝を受け取った。

給金でも上げてくれるんかいな？とか期待していたのだが、それは一瞬で絶望へと変わってしまった。

「それに伴い、お主の姓も『霜月』より『神無月』へ変わることになる」

「な、何の冗談です？ウチがああ“閨”につて…」

「貴様なら実力的にも問題あるまい」

「いや、問題ありすぎるでしょう」

“閨”は単なる戦闘集団ではない。報酬や任務によっては殺しすら厭わない、汚れ仕事も行う危険集団なのだ。

それをこの翁どもは老中会の経理係である者に一任した。

これだけだとどう考えても問題があるように思える。むしろ問題しかない気がする。

が、そんな思考も無視されて話は続く。

「なお、これは単なる異動命令ではない」

「…は？まだなんかあるんですか？」

“閨”へ異動命令というだけでもいっぱいっぱいなのにどうしろというのだ。そう思ったのは仕方ないことだろう。

「お主には“閨”を見張って欲しいのだ」

「……見張る？なんでそないなことを…？」

「我々は“閨”の質が落ちたのではないかと危惧してある。それに今代の“閨”は性格に難の在る者ばかり。もしものことがあってからでは遅いのだ」

「故にもし“閨”が不穏な動きをした時、貴様は儂等に報告せよ」

「え？ちよつと待　　」

「これは、正式な辞令である。拒否できると思っなかれ」

「……………承りました」

不満はあったが、結局紗枝は逆らえずに了承するしかなかった。

その後、キリツとした顔で部屋から出た紗枝は、部屋から出た瞬間に頂垂れてしまった。

「ありえへん……なんでウチが汚れ役の戦闘集団“閨”に行かなあかんねん」

紗枝は思う。

…出世コースから外れたな。

川神院

今、川神院では変わった一戦が繰り広げられていた。
薫と一子の稽古である。

「……何だこの縛りプレイは？色んな意味で」

二人の稽古を見ていた百代も思わずそう呟く。

しかしそれは仕方ないことだろう。

一子の格好は動きやすい体育着でレプリカの薙刀を使用していた。
これは特に変わっていない。

対する薫は素手で闘っていた。まあこれも特に変わっていない。

ただ薫はハンデをつけて戦っているのだが、そのハンデが外見的に変わっているのである。

薫の顔には一枚の布が巻かれており、目隠しをした状態であった。

さらに薫の両手にもまた布が巻きついており、両手も封じられた状態であった。

視界が封じられ、両手すら封じられた状態で薫は一子と闘っていたのだ。

驚くべきはそんな状態の薫に一子は押されていた。

「何で…ッ！見えてないのに…ッ！避けれるのよ!？」

「視覚だけに頼る必要はない。視覚が封じられているなら他の感覚でそれを補えばいい話だ」

そう言いながら薫はまるで見えているかのように薙刀を紙一重で避けて蹴りを放つ。ワン子はそれを何とか薙刀の柄で防ぐ。

「ぐう……！せい!!」

咄嗟の防御だったせいかわりに衝撃を逃がしきれずに腕に痺れが走る。だが、ワン子はそれをも厭わず薙刀を振るう。

「え!？」

しかし薙刀を避けられた次の瞬間、薫の姿が消えた。

「こつちだ」

声のする方を見ると、薫は薙刀の刃の上に着地していた。

ただしワン子の手に掛かる負荷は殆ど変わらない状態で

「!?」

一瞬の動揺、それを見逃すほど薫は甘くなかった。

薫はワン子に薙刀から振るい落とされる前に薙刀から跳び、側頭部に蹴りを叩き込んだ。

「あぐ!」

それをまともに喰らったワン子は地面に倒れこんだ。

「私の勝ちだな」

そう薫が宣言すると、側頭部を蹴られたワン子はすぐさま身体を起こして抗議する。

「い、今何かおかしかったわ!薙刀の先に薫が乗ったのに全然重くなかったわよ!それに今の蹴りも何か変だった!」

「ああ、それは『韋駄天^{イタテン}』という曆の特殊走法だ。詳しい原理は言えないが、世の中にはそういう技もある」

「そ、走法?走ってないの?」

「説明してもいいが、二度手間になる可能性もあるから後ですよ。」

それでは10分程休憩したら組み手を始めるから覚悟しておくように。わかったな」

「あっ！もう一回！もう一回勝負」

「返事は“ハイ”か“YES”のどちらかだ」

「い、イエス！」

既に調教済みだった。

「女相手に頭蹴るとかドSだな」

そう言いながら縁側で対戦を見ていた百代が近付いてきた。

「人聞きが悪いな。私は女だからといって武道家を差別しないようにしているだけだよ」

「というか何でワン子と闘ってたんだ？私とは月一しか戦わないくせに」

「実はねお姉様、アタシ、薫に弟子入りしたの」

「何！？ホントか！？」

「ああ。どうしても強くなりたいらしい」

「そう、か……」

何か思う所があるのか、百代は少々俯きながらそつ口にする。

それを隠すかのように顔をあげ、先程から気になっていた事を尋ねてみた。

「じゃあ何であんな縛りプレイしてたんだ？色んな意味で」

「縛りプレイって……まあいいか。それは」

それは修行を始める前のこと。

「それでは今日から私が修行をつける。まずはどっいつ事をするのかを説明しておく」

「うん」

「ワン子には才能が足りない。故に努力をしてきた」

「でもまだまだ努力が足りないわ！」

「そうかもしれない。だが、ワン子に必要なのは努力だけではなく経験もだ」

「経験？」

「実戦は何よりの修行とも言つし、何より実戦での経験が勝利を引き寄せる事もある」

「ふんふん……」

「それに戦闘において初見の相手というのは既知の相手よりも戦いづらい。だからこそそういう時に動揺しないために慣れておく必要もある」

「それで？」

「当然、経験だけでなく今まで通り基礎をきちんとこなしていくのも必須だが、それは川神院の修行だけでも十分だから私が教える事は殆どないだろう」

弟子入りといっても一子は川神院の門下生であり、薫は居候とはいえあくまで部外者である。修行内容にまで口を出すつもりはないし、出したとしてもそこまで大幅に変更させることは出来ないだろう。

「これからワん子は可能ならば一日一回、最低でも週に一回私と戦ってもらおう。ただし私の戦闘方法は毎回変えていく」

「要は薫との勝負ね！わかったわ！」

「それとは別に組み手も出来るだけ毎日行っ。目算として最初はワん子と同等か一つ上の強さで組み手を行う。時間が経つ毎に強さを上げていく。その積もりでいるように」

「押忍っ！」

「　　ということ、まずは目が見えない上に腕が使えない相手と戦ってもらったわけだ」

「だからってハンデで腕と視界を封じるってやりすぎじゃないか？　ワンス子の意地とかプライドとかの問題もあるだろ？」

「実際に盲目で腕が使えなくても強い者はいるかもしれないだろう？　それに今回はワンス子のレベルに合わせて戦ったが、ワンス子は最初ハンデがあると油断していたようだからお灸を据えるという意味でもきつちりやった。それに側頭部への蹴りは威力を抑えたからそこまでのダメージはないよ」

「うん。よくわかんないけどあの蹴りそんなに痛くなかったわ」

ワンス子が蹴られた部分を撫でながらそう言う。確かに蹴られた後もすぐに起き上がった所を見ると、あまり衝撃がなかったのだろう。

「じゃあその蹴りはどうやったんだ？『韋駄天』だったか？動きに重さを感じなかったし」

「それは企業秘密……」

「教えてよ」

そついいながら百代は後ろから薫にのしかかる。

「……何故にのしかかるんだいモモちゃん？」

「いいから教えるよ〜」

「教えなさいよ〜」

ワン子まで一緒になって乗ってきた。

少しの沈黙の後、薫は息を吐き、説明を始めた。

「……一番近い言い方だと、アレは体重移動によるものだ」

「体重移動？それだけであんな動きは出来ないだろ？誤魔化すなよ」

体重移動とは簡単に言えば、拳に体重を乗せる、といった類のことだ。

それだけであんな事ができるのなら結構な人数があんな事を出来ることになってしまう。

少しの沈黙の後、薫が再び説明をする。

「……造語になってしまうがもつと正確に言うと、負荷重力移動法だ」

……

「は？ふかじゅりょくいどうほう？何だそれ？」

「自身に掛かっている重力の方向や比率を移動させる技だ。薙刀に乗った時は、下を向いている重力に対して半分ほど上向きに移動させたことよって重さを消した。側頭部への蹴りは、足に掛かって

いる重力を移動させて蹴りから重さを消した。ちなみにこの技を使えば擬似的に無重力状態になったり、壁や天井を歩いたりすることもできる。擬似無重力状態は余り使えないが」

百代は薫の今の説明を理解できたわけではないが、要するにあの技は自分に恒常的に掛かっている重力をゼロにしたり、半分にしたり出来る技ということはなんとなくわかった。わかったが、それが納得に繋がるとは限らない。

「そんな事出来るわけないだろ」

「私も最初は疑ったが、修行をしたら出来るようになったのだから出来るモノなんだよ。ワン子はわかったか？」

「????」

ワン子は混乱している。

「ワン子、わからなくても大丈夫だ。私もよくわかってない」

「よかったー、お姉様と一緒にだー」

「そこは喜ぶ所じゃないぞ、ワン子」

「というか無重力状態があまり使えないってというのはどういうことだ？結構使えそうな気がするんだが」

「メリットよりもデメリットの方が大きいんだよ。擬似的に無重力状態になっているといっても身体に掛かる重力自体は変わらないから、体が押し潰されるように負荷が掛かってくる。他にも周囲の気

「庄とかそういう要素も考えなければならぬからな」

「下手したら身体が弾けてしまう、と付け加えてから時計をしてみると、戦闘を終えてからちょうど10分たった所だった。」

「10分たったな。ワン子、そろそろ組み手を始めようか」

「あ！ホントだ！！じゃ、またねお姉様！」

「ああ」

そうして薫とワン子は修行に戻っていった。

残された百代は一人呟く。

「……………そろそろ、ワン子に伝えるべきなのかもな……………」

「ここか……」

異動命令がでてから数日後、紗枝はとある山奥にある武家屋敷に来ていた。

周りは木々で生い茂りながらも見た限り屋敷の敷地内はきちんと手入れをされているようだ。

この屋敷は“閨”が上層部より与えられている本拠地とも言える場所である。

今日ここでメンバーと顔合わせをして彼女は“神無月紗枝”として正式に閨のメンバーとなるのだ。

屋敷に入ろうとすると誰かに呼び止められた。

「どちら様？」

紗枝を呼び止めたのは竹箒で掃除をしていた毛先の跳ね返っている黒髪シヨートのメガネメイドだった。

「あつ、ウチは」

「お？誰だお前？」

自己紹介をしようとした時に、黒い服を着た黒髪の男が屋敷の中から出てきた。

その男の纏う雰囲気から、彼が“閨”のメンバーだという事を理解し、自己紹介をすることにした。

「ウチは霜月、やなかつた。神無月紗枝と言います。今日から“閨

”所属になりますんで、その挨拶に……”

「ああーお前が例の新入りか。俺はアキラ、霜月アキラだ。よろしくな。それと俺は敬語とかよくわからないからそっちの口調の方がいいぞ」

「ですね。というか基本的に閨に上下関係はありませんので普通に喋ってもらっていいですよ」

そんな言葉とともにもう一人屋敷の中から出てきたのは小学生くらいの身長の子供だった。

「それは良かったわ。霜月……ってことはアンタが養子に入りたい奴かいな」

「俺としては養子とかどうでもいいんだがなー。てかアキラって呼んでくれ。ファミリーネームって慣れてなくてな」

そう言いながらアキラはタバコを取り出し、火をつける。いや、ファミリーネームって……普通に名字って言えや。とか思いながらも紗枝は黙っておく。

そんなことよりも今はメンバーの確認が重要だからだ。と、思っていると、幼女が口を挟んできた。

「アキラさんは日本人じゃないですよ」

そんな考えを見透かしたように、幼女は衝撃の真実を言い放った。

「……嘘やん！？どう見たって日本人の顔やん!？」

「俺には日系の血が混じってるらしいからそう見えても仕方ない。元々の国籍はアメリカだ」

要は血筋的には東アジア系だけど生まれはアメリカということだった。

「……まあええとしよう。で、アンタの名前は？」

無理矢理納得したところで次は幼女の名前を尋ねる。

「弥生麻衣やよいまゐといいます。これでも貴女あなたの同僚になります」

これまた驚愕の答えが返ってきた。

「……嘘うそやる？どう見ても小学生……」

「これでも16です。義務教育期間は終わってます。」

「嘘うそやん！？そのなりでウチと同年！？」

「……失礼しれいですねあなた」

「あ…、すまんかった」

謝罪した所で今度はメガネメイドが自己紹介を始めた。

「私は葉月雫はづきしほ。同じく同僚だよ」

「え？アンタ、メイドさんやなかったんか？」

「雫は正式なメンバーだぞ。まあ、ここでの家事とかは雫が全部や
ってるけどな」

「だってそのメイド服……」

「これは麻衣が着てって言うから」

「ふふふ。似合ってますよ。思わず抱き締めて貰いたくなるほどに
……」

幼女こと麻衣はなにやら不穏な雰囲気醸し出しながらにやけてい
た。

「……どないしたんや?」

「……気をつけろよ。コイツ、正真正銘のレスだから」

「……え?」

思わず耳を疑った。

このロリっ娘がレスって……

「え?真剣ツメで?」

「ああ、真剣ツメで」

今日一番の衝撃だった。

「うるさいですね。そんな事言っていないで雫さんを見習って少しは

働いたらどうですか？クズのアキラさん？」

「何も働いてねえガキにクズなんて言われたかねえな」

「私は腐った老害に受注された絡繰を作らないといけないんで忙しいんですよ」

（絡繰費ってこのガキが使ったんかい。とんでもない額が割かれとったけど……）

……とりあえず老害というのは聞かなかったことにした。

「では私達の自己紹介はこれくらいにしておいて、まずは頭領にも挨拶しましょう。こちらへどうぞ」

そう言って、麻衣たちが屋敷の中へ入っていく。

「了解や」

そうして紗枝は屋敷に足を踏み入れた。

屋敷の広間に案内されて、下座で正座して頭領を待つこと30分……

「……30分待っても来うへんってどういうことや？」

紗枝は待ち惚けを喰らっていた。

「てかそもそも人数足りてへん気がするんやけど……」

閨の構成人数は12人。その内、十の神無月には紗枝が収まり五の皐月は空席というのを踏まえてもあと10人いるはずなのだが、ここにいるのは紗枝を入れて4人しかいなかった。

「まあ今日ここに来るのお前を入れて6人だけしなー」

「は？……てか正座してんのウチしかおらんやん!？」

紗枝が正座して待っている中、アキラは畳に寝そべり、雫は足を崩して座っていて、麻衣は雫の膝の上で抱きかかえられていた。

「俺としては、正座？なにそれおいしいの？って感じなんだが」

「だって足痺れるし」

「はあ〜……男なんて皆死ねばいいんですよ。女性だけの世界に行きたい……」

「アンタは急に何怖いこと言い出しとんねん!？」

妄想世界（じこ）から戻ってきた麻衣は紗枝に事情を説明する。

「皇月が空席なのは知ってますよね？来れない五人の理由としましては……卯月さんは任務中、水無月さん、文月さん、長月さん、師走さんの四名は任務に失敗して入院中です。」

「で、ここにはウチらいれて4人しかおらんように見るんやけど……」

「頭領の睦月さんとその従者の如月さんは遅刻です」

「なんで代表が遅刻してんねん！？てか遅刻しておらんねんやったらここにいる必要あつたんか!？」

「ねーよ」

「ないね」

「なかつたです」

「じゃあ何で早く言わんねん!!」

紗枝がそうツツコミを入れたその時

「遅れて悪かったわね。いえ、良かったのかしら？もう仲良くなってるじゃない」

そんな声が、広間に響き渡った。

「遅かったな姐御に旦那」

旦那と呼ばれた、顔に“不遅”と縦に書かれた仮面をつけて執事服を身に纏っている男は見るからに怪しかった。

しかしそれよりも紗枝の目が引かれたのはアキラが姐御と呼んだ、法衣を纏い紺色の長髪を棚引かせた女性だった。

その女性は腰に短刀を忍ばせ、瞳を模った首飾りをつけていた。が、そんな事よりも気になったのは彼女が纏う、その雰囲気だ。

「初めまして。側に控えてるのが私の従者でもある如月。そして私が“閨”の頭領の」

彼女が纏う雰囲気は、何よりも濃く、死や絶望といった負のイメージを喚起させられた。

彼女の名は

「睦月那美よ。よろしくね」

閨の構成員（後書き）

さて、今回は新キャラ続々？と出てきましたが、どうでしたでしょうか？薫クンの技もおかしなのが増えてきました。

“曆”の組織形態を書いてみたのですが、わかりやすく書けたのが不安ですね。まあ、老中会については『悪巧みしてる組織のお偉いさん。でも世界的に見ると虎の威を借る狐』と認識して頂ければ十分です。

ワンス子の修行についてですが、本文にも書いた通りワンス子には経験が圧倒的に足りないと思っていました。百代は試合の申し込みが色んな所（不良なり武道家なり）からきて実戦経験豊富ですが、ワンス子はただただ修行の日々。実戦があっても学生同士での決闘ぐらいしか実戦がありません。ということでああいう修行内容になりました。

決して修行漬けが悪いというわけではありませんが、それ+経験を積むことでさらなる成長を期待できると思うんですよ。

ちなみに、薫クンの不思議走法『韋駄天』の使用法例をいくつか疑似無重力状態。体重を誤魔化す。水の上に着地したり走ったり。空高く跳ぶ。強力な攻撃がヒットする直前に体重をなくして相手の攻撃の風圧で攻撃から離脱する。etc.etc.

……結構あるな。

ご意見・感想など何かありましたら遠慮なく申してください。

機嫌不機嫌（前書き）

もう一個の作品を更新しないとか思いながらもこっちを更新。

今回の話は短いだろうな……と思って書いていたらものすごい量になっちゃった。

あれ？おかしいな？これの半分くらいの長さになると思ったのに

……

機嫌不機嫌

“ 閨 ” 本拠地

「 何やこのずさんな資金繰りは！？色々と使いすぎやろ！？ 」

これは紗枝が閨の経理に手を付けたときの第一声だった。

「 俺の武器は消耗品だから多少金かかるのは仕方ねーだろ 」

「 私のも得物の問題だから仕方ないよ？ 」

「 私も絡繰開発費用にギアルゲー、エロゲー、格ゲー、それとRPGに狩りゲーと、色々と必要なものがありましたから仕方ないんですよ 」

それぞれ三者三様に言い訳を言っていく。

ちなみに頭領的那美とその従者の如月は用事があるらしく今ここにはいなかった。

去り際に那美が「大和丸夢日記を見ないと……」とか言っていたのは気のせいだろう。きつと。

「 まあ前の二人はしゃあない。そこまでの金額やないしな。……でもちよつと待とうかその百合幼女^{レスガキ}。資金の使い方明らかにおかしいやろ！？ 」

アキラと雫の使い道はきちんとしていたが、麻衣の言い分は明らかにおかしかった。

それを指摘された麻衣は観念したような顔を浮かべて自白する。

「確かに……絡繰開発資金は別に用意されているのに別の資金源からとってくるのはおかしいと私自身感じてました」

「それちゃう！いや、それもおかしいけど！それよりもあとのゲーマ類はなんやねん！？」

「え？何って必需品でしょう？だから経費で落としているわけですが」

何かおかしいんですか？と言って首を傾げる様子を見ると、どうやら真剣マキケンで言っているようだ。

「んなモン経費で落とすな！！自分の給金で支払えや！！というか他の奴のも見てもたら……ガンブラ経費で落とした奴誰や！？」

よく見てみれば、ガンブラやDVD、BDなど、全く関係ないものを経費で落としている馬鹿者が他にもいるようだ。

「オタ三人組だね」

「……オタ三人組？」

「水無月さん、文月さん、長月さんの三人のことです。ちなみにDVDやらBDとかもその三人ですよ」

つまり、恒常的にオタクグッズを経費で落としている愚か者が他に

も三人はいるということだ。

「……………ようこんなんやっつけていけてんなあ」

「まあ私が株で稼いでますから」

「は？株？」

「正直な話ですが、上から支給される資金だけじゃ絡繰開発には到底足りないんですよ。だから株の売買で増やして、絡繰開発の足りない分に充てています。まあその余剰分は私の懐に入れていますが」

「……………あれだけの予算があって足りへんって……………」

おそらく老中会で経理をしていた時に予算をちよるまかして小遣い稼ぎに株をしていた紗枝と比べても、扱っている金額の桁が違うのだろう。

それほどまでに掛かる絡繰開発について、今まで疑問に思っていた事を思い切って聞いてみた。

「……………なあ、そもそも絡繰開発って具体的に何作ってんの？」

そして、返ってきた答えは突拍子もないものだった。

「ロボットです」

「……………は？嘘やる？」

「……………まあ信じても信じなくても構いませんが……………それよりも先に伝えておかないといけない事があります」

「ん？なんや？」

麻衣の顔つきが少し変化したのを見て、紗枝はおそらく仕事の話であると当たりをつける。

「実は今とある任務を上層部から命じられていまして、それにあなたも参加してもらおうかと思っています」

「任務？内容にもよるけど……」

暦の暗部である閨の任務といえばやはり汚れ仕事。しかし、今までそんな事をしたことがない紗枝としては軽いモノから始めて欲しかったが、残念ながらその願いは届かなかった。

「端的に言えば暗殺です。ただし、標的の周りを巻き込まないように、との事ですが」

「暗殺！？そんなん専門外や！戦闘も嫌やのに何でいきなり殺しまでせなあかんねん！」

いきなりハードルが高すぎた。経理担当だった人間に何を期待しているのか、とも思ってしまった。

「ですよ。まあ今のところ殺れる目処すら立ってないのですが」

「え？閨でも殺せへんってどんな奴やねん？」

閨が最強と言うつもりはないが、閨の戦力でも殺せない相手がいるのは予想外だった。というより閨のメンバーが出来ないと公言する

ような任務を、いくらあの人をコキ使っただけでばっかりいる老人たちでも請け負うとは思えなかった。

そして、返ってきた答えも予想外のモノだった。

「名前は皐月 薫。所属は“暦”。暗殺依頼者は老中会です」

何故なら殺害対象は敵ではなく味方の中にいたのだから。しかも外部からの依頼ではなく老中会自らの依頼というのも予想外であった。

「は？何で“暦”の人間を老中会が殺すねん？問題あるけど戦力になるんやったら閏にでも入れとけばええのに……」

故に理由を尋ねてみたのだがそれに対する返答は、

「何でだろう？」

「さあ？知りません」

「考えてはみたが、偏屈爺どもの考えなんてわかんねーよ」

と、全てわからないというものだった。

「偏屈って……」

まあ、その言葉は流す事にした。

「で、話を戻しますが、あなたにも参加してもらおう任務は簡単ですよ」

「な、なんや？」

緊張して口の中に溜まった唾を飲み込む。

そして、麻衣から伝えられた任務とは

川原沿い

俺達はキャップ以外の9人で登校していた。
ちなみにキャップは昨日の昼に「急に味噌カツが喰いたくなった」
とか言って名古屋に行ってしまった。
まあキャップの放浪癖はよくあることなのでいいとして、今日はそれとは別に何やら少し様子が違っていた。

「ユーオーマイシンー!!」

「頑張れ、ワン子」

「むう………」

俺達の前方でタイヤを引き摺って走ってるワン子はいつも以上に張り切っており、薫はいつかののようにワン子の引き摺るタイヤの上に座っていて、その少し後ろにいる姉さんが何やら機嫌が悪そうに二人を見ている。

まあワン子が張り切ってるのはいつものことだし薫も時々タイヤの上に乗っているからいいとして、それを姉さんが不機嫌そうに見ているのが気になった。

「あの、何だかモモ先輩の機嫌が悪く見えませんか？」

「やっぱりそう見えるよねえ……ガクト聞いてみてよ」

「何で俺様なんだよ！俺様がいつたら間違はなく殴られるだろーが！」

「聞いたからって殴られるとは限らないだろ？」

「まあ結果的に殴られるとは思っけど」

「結局殴られるんじゃないかー！」

そんなやり取りを姉さんに聞こえないように（ここ重要！）俺達は話していた。

「機嫌が悪いようには見えないが……気になるなら本人に直接聞けばいいじゃないか」

そう言って空気の読めないクリスが姉さんに話しかけた。

「モモ先輩、何だか機嫌悪そうですがどうかしたのですか？」

「……そう見えるのか？」

そう言いながら、むすつとした顔で姉さんは俺達の方を見る。

「というか機嫌悪いよな？絶対」

「何かあったの？」

「……実はな、昨日こんな事があったんだ」

昨日の夜、私はちょっと暇つぶしに薫の部屋に行ったんだ。弟子入りの件について色々と聞きたかったしな。

「かーおー…」

『ん……あん！……ちよつと、痛いよ……』

「」

部屋の襖を開けようとする中から声が聞こえてきた。

「ここの声はワンス子の声……！声は薫の部屋から聞こえてくる。」

『悪い。少し強すぎたか。それではコレくらいならどうだ?』

『ンーき、気持ちイイわ、ア、ああ!』

「う、これは……!」

『はあ……はあ……はあ……』

『さて、準備はこれくらいでいいだろう』

『こ、これで、終わりじゃないの?』

『ここからが本番だ』

『お、大きい……こ、これを?』

『そうだ』

『ほ、本気?』

『本気』

『む、無理よ!そんなの』

『問答無用。行くぞ』

これ以上は色々とマズイ!妹(ワン子)の危機は私が救うぞ!

「薫!!!お前妹にナニしてるんだ!!!」

襖を一気に開け放ち、中に入る。するとそこには

「あ、お姉様」

布団の上でうつ伏せになったワン子と、その背中に鍼を持って乗っている薫の姿が。

「何って、マッサージと鍼治療だが」

「……は？」

薫の手には「え？それ何に使うの？」と言っくらいにデカイ鍼が握られていた。

「ワン子の筋肉が思いの外凝り固まっていたから、ほぐしていたんだ」

「痛かったけど気持ちよかったわ……」

「修行にも関わってくるしな。で、モモちゃんは私達が何をしていると思っただ？」

薫がニヤリと笑みを浮かべながらそう言う。

この顔は……どうやら確信犯のようだ。

そんな薫に対し、私はこう答えた。

「ナニをすと思うたに決まってるだろ！」

「そこは誤魔化す所じゃないのか!？」

「ねー、何の話してるの?何って何なの?」

ワン子は純粹だった。

「とりあえず、薫がかわしい事をしないように見張っておく事にする」

「いかがわしい?」

「少しは単語を覚えようなワン子」

「エロチカな事って意味だ」

「ぎゃーーーーー!エロがいるわ!」

「だとさ薫」

ふふふ……私を嵌めようとした仕返した。どうだ、薫!

「いかがわしい事はしない。エロというのは否定しないが」

「「エロは否定しないのか(しないの)!？」」「

予想外の返しだった。

「キャップじゃあるまいし人並みには性欲ぐらいある」

「おおっ……エロいわ」

「流石にガクトや大和には負けるさ」

「やっぱお前、実はエロいな。」

「……ということがあったんだ。ちなみに鍼治療は何の問題もなく終わったぞ。それでな……」

「ちょっと待って！そもそも弟子入りって何の話？」

「自分もそこが気になったんだが……」

皆が同じ疑問を抱いていると、姉さんは軽くこう言った。

「ワン子が薫に弟子入りしたんだよ」

「……………ええー！？」

ただその言葉は俺達にとっては軽いものではなかったが。

「それって川神院としてはいいの！？他流派の人に弟子入りって！？」

「別に全部の修行を薰がみるわけではないし、そもそも川神院の門下生だからといって川神流以外の技を使っちゃダメというわけではないしな。強さに繋がるならそれも認められるだろう」

次期川神院総代になる予定の姉さんがそういうのならそうなのだろうが、それなら何故機嫌が悪いのかわからない。ということでもう一度直接聞いてみる事にした。

「それで結局姉さんの機嫌が悪い理由は何なのさ？特に苛立つ場面はなかった気がするけど」

「わからん」

「わからんって……」

そんなきっぱり言われても……

「なーんか面白くないんだよなー」

うーん……これは姉さんが薫に気があるってことか？

でも恋愛感情からくる嫉妬というよりはまだお気に入りのおもちやを奪られたって感じの方が近いか？

「仕方ない。大和で遊ぶとするか」

「ちよ？！何でそこで俺なんだよ！？」

突然の展開に驚く俺。

駄菓子菓子！あ、間違えた。だがしかし！姉さんが襲い掛かってくる前に京がそれを阻止した。

「モモ先輩には悪いけど、大和で遊ぶのは私の役目ダツ！！」

「京！その理由では素直に喜べないが助かった！」

「なら京も一緒に大和で遊ぶか？」

「うん、遊ぶ」

「おおい！？まさかの裏切り！？」

……寝返るのも速かった。

「ちよっと！誰か助けてくれ！！」

俺は咄嗟に頼りになる仲間に助けを求めた。

「大和を助けた方がいいのか？」

「別に大丈夫だろ？いつものことだ」

「そうだね。まあなるようになるでしょ」

「もうそのまま既成事実作っちゃまいなＹＯー！」

「こら松風！そんな事言うんじゃないやありません！」

……頼りになる仲間はそう言いながら俺を放置していった。

「この薄情者――！！」

この後、俺のピンチを察知した薫が介入して、何とか俺はこの事態を無事に切り抜けることが出来た。

昼休み

私はワン子、クリス、京と一緒に教室で弁当を食べていた。ちなみにガクトとモロはヨンパチと一緒に、大和は人脈を広げる為に、それぞれ学食に行っている。

そして弁当を食べ終わる頃、ワン子が行動を起こした。

「もらったわ！」

クリスの食べていたいなり寿司の最後の一個を掠め取ったのだ。

「ああ！？自分の最後のINARIを！！なら自分も」

いなり寿司を盗られた仕返しにクリスも何かワン子の弁当から取るうとするが……

「まぐまぐ……」ちそうさまー！」

「ああ！？もう食べ終わってる！？」

盗られる前にワン子は自分の弁当を全て食べ終えていた

「ワン子の作戦勝ちだね」

「フフン、修行の成果よ」

いや、こんな所で修行の成果を出されても……
とりあえず叱っておこう。

「ワン子、急いでいるからといって口の中に詰め込みすぎるのは行儀が悪いからやめておけ」

「叱る所そこなんだ」

「……それと人の弁当を勝手に取ったらダメだろう」

「うっ！」「ゴメンなさい……」

どうやら反省したようだ。……別に京に言われたから叱る所を付け加えたのではない。

「むう……」

次は膨れているクリスの機嫌取りだな。

「クリス、取られたいなりの代わりに何かいるか？」

「いいのか？ならこの玉子焼きを貰おう」

私が弁当を差し出すと、クリスは出汁巻き玉子を取ろうとするが

「ちょっと待ったー！それアタシも欲しい！ということでもタマゴ焼きを賭けて勝負よクリー！」

……訂正、あまり反省してなかったようだ。

「ちょっと待て犬！この玉子焼きはお前に盗られた代わりに薫がくれるという物だぞ！何故それを賭けて戦わねばならないんだ！」

確かに今ここでクリスがワン子の提案を呑む理由がない。たとえ勝ったとしてもクリスは得しないのだから。

「あれ？もしかして負けるのが怖いのか？このままだとクリの特技は敵前逃亡ってことになるけど？」

「フッフ、少し躰が必要なようだな。いいだろう！その勝負受けて立つー！」

……クリスは単純だった。

「クリス。別に勝負する必要は……」

「止めるな京！自分はINARIの仇を討たねばならないんだ！」

「いや、いなりの仇って……」

「そうと決まれば早速勝負よ！まずは屋上まで競争よ！」

「あ！待て犬！廊下は走るな！」

そう言ってワン子は走って教室を出て行き、クリスはそれを止めようと走って追いかけていった。結局クリスも廊下を走っているが、まあ仕方ないか。

「……しょーもない。じゃあ私はちょっと大和探してくるね」

そう言って大和を探しに教室を出て行く京。前よりも部活に出るようになって少し社交的になったかと思っていたが、それでも大和とOVEは1ミリも変わらないようだ。

「ふう……」

一つ息を吐きながら、出汁巻き玉子も含めた弁当の残りを平らげる。多分昼休みが終わるまで二人は戻ってこないだろうし、少し苛立っていたからその憂さ晴らしの犠牲になってもらおう。

何故苛立っているかというのを説明すると、朝の登校時、モモちゃんとか京に襲われていた大和を助けたら、その大和は私にモモちゃんの相手を押し付けられてそのまま逃げていったのだ。

その時に色々となチネチと弄られたので、精神的に疲労し今も少々機嫌が悪かったりする。

恩を仇で返した大和への仕返しはどうするかと考えていると教室の入り口の方から声をかけられた。

「おい、薰ー！」

「うん？ ヨンパチか。どうかしたのか？」

声の主はヨンパチで、横にガクトとモロもいた。おそらく食堂から帰って来た所なのだろう。

「話はガクトから聞いたぜ」

「話？」

何の話かと思っていると、ガクトが簡単に説明を付け加えた。

「前に言ってた魍魎の宴の話だぜ」

魍魎の宴？……ああ、確か前にガクトたちが言っていたよくわからない、出来れば呼ばれなくなさそうな集まりか。

「だが俺による脳内審議により、お前には魍魎の宴参加の資格がないと判断された。よって残念だが諦めてくれ」

この発言からすると童帝とやらはヨンパチの事らしいな。

「私としてはそれでも別に構わないのだが」

「またまた、そんな事言ってお前も来たいんだろ。薫だつて男だもんな。だがそれは出来ないんだ。許せよ」

ヨンパチが少しも私の話を聞こうとしないのでまたイライラしてきた。

「私の話も……」

「まあ、薫は女みたいな容姿だからそこまで関係ないか」

「（プチンッ）」

何かが切れる音がした……

普段ならこの程度、グレーゾーンでセーフなのだろうが……

「……どうやら地雷踏んじやったみたいだよヨンパチ。いつもならこれくらいセーフなんだけど……」

そう言つてヨンパチから距離をとるモロ。

「…………へ？」

今は少し機嫌が悪い。よって……

「運が悪いとしか言えねえが、もう俺様にはどうすることも出来ない……安心しろ、骨は拾ってやるからな」

イイ笑顔をしながらヨンパチから距離をとるガクト。

「え！？ちよつ！ちよつと待っ

」

自分の置かれた事態に気付いたヨンパチが制止の声を上げるが……

「　　ヨンパチ、アウトだ」

私はそう言ってニッコリと笑顔を浮かべた。

「あ……………」

薫のその微笑を見た育郎は、恐怖を感じながらもあまりの美しさに無意識にカメラのシャッターを切り続けていた。その無邪気な微笑が悪魔のような微笑に変わり、薫の一撃を喰らうその時まで

昼を食堂で過ごし、ただでさえ広い人脈を更に広げた大和は教室に戻ろうとしていた。

「よし、今日も人脈が広がったぞ」

「そんな大和も素敵！結婚して！」

「お友達で。というかいつの間に隣に!？」

大和がいきなり現れた京にツツコミを入れながら教室に入ろうとする。

「めり込みパンチ!!!」

「ギャパアアアアアア!？」

という掛け声と悲鳴のすぐ後に何かの破壊音が聞こえてきた。

その後、隣のS組の方から「によわ~~~~~!？」という叫び声が聞こえた。

まあよくある騒ぎの一つだろうと思い、大和は教室に足を踏み入れる。

「何かあったのか？」

軽い気持ちで教室に入ると、そこで驚きの光景を目にした。

壁から下半身が生えていた。

「……………へ!？」

壁から下半身が生えているというより壁に上半身が埋まっていると言った方が正しいか

こちら側に残っていた手にカメラを持っていることから、それがヨンパチこと福本育郎であることが理解できた。

どうやら気を失っているようで手足は時々痙攣していた。それでもカメラを放さないのはさすがというべきか。

「どうしたの大和? ってうわ……………これはまた……………」

大和に続いて教室に入った京がソレを目撃する。

普段外では感情をそれほど表に出さない京もその光景には驚きを禁じ得なかったようだ。

(……よし、一回落ち着こう)

大和は一度冷静になって状況を分析する。

育郎の足元には拳を振りきった体勢の薫。

そこから少し離れた場所にガクトとモロ。

とりあえずガクトあたりに聞いてみることにした。

「ガクト、何があっただ？」

「ヨンパチは……犠牲になっただ」

岳人は何やら遠い目をしてそう答えた。

(いや、何があっただかわからないんだが)

今度は卓也に聞いてみた。

「モロ、何があっただ？」

「薫の機嫌がいつもより悪かったみたいだね」

卓也は苦笑いするしかなかった。

(とりあえず加害者はやっぱり薫みたいだな)

そしておそらく加害者である薫に話を聞いてみる。

「薰、何でこんな事に？」

「カツとしてやった。反省はしているが後悔はしていない」

「明らかに反省もしてないだろ、そのやり切った感溢れる爽やかな笑顔」

「漫画とかだったらキラキラって輝いているような顔だね」

……なお、壁に刺さった育郎は昼休み中に抜かれて保健室に送られた。

突き刺さっていたにも関わらず育郎の身体には何故かケガ一つなかった。顔に何故か足跡があったが。

ただ、気絶していた育郎がいい笑顔をしていたのは……気にしないでおう。

放課後

1 - Sの教室で皆が帰り支度をしている。奏と小杉もその例外ではなく、二人で話しながら帰り支度をしていた。

「そっいえば、プレミアムな私を倒して学園の一年を掌握した奏さ

んはこれからどうするつもり?」

「どうするって?」

「いやだから次は二年を制圧するとか」

それを聞いた奏は、はぁ、と一つ溜め息を吐いた。

「どうも小杉は勘違いしているみたいだけど、そもそも私は一年を掌握したつもりはないし、するつもりもないわ」

「え!?!?ど、どどういうこと!?!?」

「確かに暫定的なトップとして認識されているかもしれないけど、それはあくまで実力としてであって地位としてのトップではないわ。そもそも不良じゃあるまいし戦闘能力だけでトップには立てないでしょう?」

「ま、まあ確かに……」

奏の言葉に小杉が相槌を打つ。

「(言えない……実はそうやってプレミアムにトップに立とうと思っただなんて言えない……!)」

内心では凄く焦っていたが。

「私としては実力を競え合える相手が見つければそれでいいのよ。トップにいれば目標としての基準にされる。それはつまり私と競い合うという事に繋がるわけだしね。それに競い合うことによって周

りは私を認め始める。武力だけで掌握してもいつか崩れるわ」

それを聞いて小杉は何だか今までの自分の行動が少し恥ずかしくなった。

自身の実力に自信はあつたし、武蔵家の栄光を取り戻そうと躍起になつていたのもあるが、武力で掌握するという短絡的な方法を取つた上にそれが何よりも正しいことであると信じきつていたことである。

（ならただ武芸を磨くだけじゃなくて、人を惹きつけるプレミアムなカリスマも身につけないと！）

と小杉が前向きに考えていると奏から一言。

「それに私は矢面に立って大勢を指示するには向いてないのよ」

「へ？どういこと？」

「民衆や群集を引き連れる程のカリスマは持つてないと自覚しているし、私はそこまでのカリスマなんていらわないわ」

「いらないうて……どうしてよ？あるに越した事はないでしょ？」

「カリスマの種類の問題よ。大勢を惹きつけるカリスマを持つていなくても能力さえあれば何とでもできるわけだし、目立ちすぎるカリスマは上の人間からすれば邪魔でしかないわけだから芽が出る前に叩き潰されるわ」

まあ本物はそれすらも乗り越えるんでしょうけど、と付け加えて話

を続ける。

「そこまでのカリスマは私は持ってないけど、必要最低限のカリスマがあればあとは能力で補える。群集を惹きつけるカリスマを持つた人間を惹きつける何かを持つのがベストね。その人間に指示することです。その人に惹かれてる群集は思いのままに動かせるわけだし。私はそれを磨くために自分を磨くのよ」

「……やっぱり奏さんって強かなのね」

本音半分からかい半分で小杉は呟く。

「褒め言葉として受け取っておくわ」

そう返した奏の顔は、とても凛々しく魅力的であった。

その時、廊下からこんな話し声が聞こえてきた。

「あつ、そういえば。噂で聞いた話なんだけど、皐月先輩が弟子をとつたらしいわよ」

「え？ホント？」

「詳しい事は全然わからないけど、噂にはなってるわよ。何の弟子かすらわかってないけど」

その言葉に奏の動きが止まった。

「へえ、そうなんだ。奏さんは知ってたの？」

「弟子ですって……」

この様子だとどうやら知らなかったらしい。

「不覚……！この私がそれを知らないなんて……！！」

……本当に悔しそうだった。

「ちょっと悔しがり過ぎじゃ……」

「しっ！少し静かに」

……奏はさらに会話を聞き取るうとしていた。

「何か聞いた話によれば、ちょっとあっち方面の弟子らしいよ」

「あっちって？」

「なんかエロチカな修行をしてるらしいわ。うえっへっへー」

「いや、どこのエロ親父よアンタ……」

その話し声は遠のいていったが、奏にとってその内容がよほど絶望的だったのか、地に膝をついてさらに手まで付けていた。

まさしくorzの状態である。先程感じた凜々しさは今では微塵も

感じなかった。

「あ、あの……奏さん？」

小杉が落ち込んでいる奏を慰めようとする。
しかしその時、奏がボツリと呟いた。

「……確かめてくるわ」

「へ？何を？」

そう質問している間に奏はゆらりと立ち上がった。表情は見えない。
いや、見たくない。

表情は見えないが、何かオーラのようなものが奏の周囲を揺らめいているように小杉は幻視した。
何が言いたいのかといえば、

今の奏は怖かった。

具体的に言えば、怒りの矛先を向けられたら問答無用で殺されると
思ってしまうくらいに怖かった。

「兄さんに弟子入りの件について詳しく！」

そう言い残して奏は教室を出て行った。どうやら怒りの矛先は薫に
向いたようだ。

残された小杉に出来ること、それは唯一つだった。

「（逃げてー！臯月先輩プレミアムに逃げてー！）」

小杉はそう言うしかなかった。心の中で、だが。

一方その頃、薫はというと……

1-C前の廊下で何故か由紀江と話をしていた。

まあ何故薫がここに来たかと言えば、単に道に迷ったからなのだが。

「　　ということと今日勇気を出して大和田さんに話しかけよう
と思ったんですが、何やら機嫌が悪そうだったので……」

「成程、諦めたということだな」

「それは違うぜー！まゆっちは逃げたんじゃねー！後ろに向かって
全力で前進しただけだー！」

「私は別に逃げたとは言っていないだが」

「はあうー!？」

「し、しまった！まゆっちのフォローをしようとしてオラが墓穴を
掘っちまった!？」

「……はあ」

相変わらず友達を作れていない由紀江の反応に薫が溜め息を吐いていると、薫の事を呼ぶ声が聞こえてきた。

「兄さん！」

その声の主は奏だった。

奏はどこか不機嫌そうに薫の方に向かってくる。走ってこないのは優等生としての意地か。

「か、奏？どうしたんだ？」

「噂で弟子をとったと聞きましたがそれは一体……ってあらっ？」

「あ、あの……、ここここんにちは！」

「……兄さん、こちらの方は？」

奏に由紀江を紹介しようとした時、薫はある事を閃いた。

（奏とまゆつちが友達になればいいのでは？）

奏にとってはこちらでの友達を増え、由紀江にとっては友達が増えたというだけでなく風間ファミリー以外の友達が出来たという自信に繋がる。

それは名案のように思えた。

という事で『善は急げ』という言葉通り、薫はさっそく実行に移

す事にした。

「ああ、紹介するよ。こっちは一年の黛 由紀江、私の友人だ」

「ま、黛といます！」

「気軽にまゆつちって呼んでやってくれー。ちなみにオラ松風。よろしく〜」

そう言つて由紀江はニコツと笑つた。

(ツ！？こ、怖い…！腹話術はまだいいとしても顔がとても怖い！)

……逆に悪印象を与えてしまったようだ。

まあ松風の存在を初見で許容している奏もある意味凄いのではないだろうか？

「で、こっちが私の妹の奏だ」

「は、はい！」

「二人とも同じ一年同士だし、仲良くしたらどうだ？」

「え、えええ！？私なんかでいいんですか！？」

「落ち着けまゆつちー！オラに任せるー！というか必要以上に自分を蔑むなっつて前に言われただろー！」

「そ、そうでした……で、では私ととと友達にッ!!」

「ちょ、ちょっと待ってください!……少し整理する時間をください」

一言断りを入れてから奏は考える。

(兄さんの友人ということだから悪い人ではないのよね。……でもそれだったらあの怖い笑顔はなんなの?)

そんな事を考えながら奏は由紀江の方を見てみると、由紀江は心配そうな表情でこちらを見ていた。……馬のストラップを手に乗せながら。

「あ、あの、皐月さん?」

「どうしたー? 悩みがあるならオラが訊くぜ?」

(……この腹話術、見るだけなら怖いけど内容を聞くと悪い人ではないって感じがするわね。……一々考えるだけ無駄かしらね)

「……整理がついたわ。これからよろしくね、黛さん。あと私のことは奏でいいわ。皐月さんじゃ兄さんとややこしいでしょうし」

「は、はい! わかりました、奏さん!」

「やったなまゆっちー! オラ感動で涙が溢れてきたぜ!」

(………それにしても腹話術に気を取られたけど、この子凄く強いんじゃない……?)

「ああ〜……初めての友達です〜」

「いや、私達をカウントしてくれ」

(……“ 凄い ” っていうのは気のせいね、きっと)

友達が出来た位で泣き出しそうな由紀江の様子をみて、そう思い直す奏であった。

「で、奏は私に何か用でもあったのか？」

「あっ！そうです！兄さん弟子をとったって」

奏は本来の目的を思い出し、多少不機嫌になりながらも噂の真相を薫本人に聞き出し始めたのだった。

「あれ？私もしかして早速ハブられてませんか松風？」

「大丈夫だまゆっち。これはハブられてんじゃなくて、ただ単にオラ達がいる事を忘れられてるだけだー」

「それもっとダメじゃないですか!？」

機嫌不機嫌（後書き）

今回のお話を簡潔にまとめると

- ・ “ 閨 ” の暗躍。
 - ・ ファミリーへの弟子入り報告。
 - ・ 魍魎の宴の資格について。
 - ・ 奏とまゆつちが友達になる。
- の四つをくつつけただけなんです、思った以上に量が膨れ上がって驚きました。

今回はマルさんが転入してくる話になるといいな

おまけ

「ところで黛さん。あなた、兄さんの事はどう思っているのかしら？」

「は、はい？」

「な、何やら顔が怖いぜ奏っち」

転入生

閨の構成員になった少女、紗枝。

汚れ仕事はまだ慣れていない彼女にさっそく閨の先輩である百合幼レスガ女キこと弥生麻衣から初任務を与えられた。

そして数日後、紗枝を含めた麻衣、雫、アキラの“閨”のメンバー四人はその任務の為、ある場所を訪れていた。

その場所とは

「よく来たのお…儂がこの川神学園の学長、川神鉄心じゃ」

「で、俺がお前達の担任になる宇佐美巨人だ。よろしくな」

川神学園学長室であった。

(いや、なんでやねん……)

話は任務通達の時まで遡る

「川神学園への転入！？なんでやねん!？」

麻衣から任務内容を聞いてからの第一声がこれだった。

「敵情視察のためです。標的がその学園に通っているのです。ちなみに転入するのは貴女と私と雫さんの三人です」

「いやそんなことしたらまずないか？相手に“閏”やってバレたらどないすんねん？」

「バレてもこちらから手を出さなければ大丈夫でしょう。むしろ標的的日常に入り込むわけですから無闇にこつちを攻撃するわけには出来なくなります」

今までの戦闘（とっていいのか疑問なレベルの戦い）からすると標的である臯月薫は自身を狙ってきた刺客を人気のない所で倒して自分の周囲にそれを知られないようにしている。

なら例えこちらが“閏”だとバレたとしても、こちらから仕掛けない限りは向こうも仕掛けてこないと推測できる。

「でも一気に三人も転入してきたら怪しまれるぞ？それにクラス分かれたら連絡取りにくくなるやろ？」

「怪しまれるでしょうが、別に怪しまれても問題はありません。それにクラスが分かれないうちにS組への転入を希望しますし」

「……S組って何や？」

「川神学園における特別進学クラスですね。学力テストで学年50位以内であれば入れます」

「50位以内、って……それキツない？」

「無理ですか？」

「……試験の問題とか生徒の学力がどれくらいのレベルかにもよるけど、まあいけるとちゃう？」

まあ色々との老人達の機嫌をとるために必要な事から必要じゃない事まで頭に入れてきたので、そこまで厳しいことではないと判断してそう答えた。

「なら後で問題と学生の成績を見せますので」

「というか何でウチにその役目が回ってきたん？」

言うては何だが、新参者に任せていい仕事なのだろうか？むしろこいうのは下っ端の役目なのではないだろうか？と色々と疑問に思いながら尋ねてみた。

「ホントは私達3人がS組に入る予定だったんだけど」

「予想以上に発案者であるアキラさんの学力が酷くてですね」

そついいながら麻衣はアキラを軽く睨む。

「学力なんて生きていくのに必要ねーだろ。言葉が通じて金持って得物を使いこなせれば十分に生きていける。あとは適度な刺激があれば文句はない」

「いや学力も結構必要やと思うんやけど……」

「ということでのクズの代わりに紗枝さんに頑張ってもらおうと思います」

「まあいきなり殺しとかよりはまだマシやし頑張ってみるわ………
…ん？ちよつとええか？」

なんですか？と麻衣が了承の返事をする。

「そもそも敵情視察ってする必要あるんか？結局は殺してまうんやろ？」

普段の学生生活を観察した所でわかるのは人間性と行動パターンくらいだ。

人間性はどうでもいい事だろうし、行動パターンは学校に入るよりも部外者として四六時中監視なり何なり下っ端にさせる方がまだマシなはずだ。

「……先程も言いましたが、私達は何故上のご老人達が“暦”の臯月薫に暗殺命令が下したのかわかっていません。調べてみましたが特に“暦”の害になっているわけでもありませんしね。だからこそ調べるのですよ」

「……それは“老中会”の手足である“閏”にはいらん思考やろ」
そうですね、と麻衣は紗枝の言葉を認めた後に、しかし、と付け加えてこう宣言した。

「私達は“暦”の老人達の手足などではありませんから」

……という流れで今、川神学園の転入当日に至るのであった。

(……このついでにフツー学園長室やなくて職員室にいくもんやないんか?)

とか紗枝が思いながらも、それぞれ自己紹介をしていく。

「神崎かんだき……よろしく」

「小鳥遊たかなし麻衣です。よろしくお願いします」

「柊ひよひめ紗枝です。よろしく」

女子陣は当然全員学校指定の白い制服を着ている。学生なのだから制服を着るのは当然である。

ちなみに苗字が違うのは標的に自分達が暦一族であるとばれないようにするためである。

「一応、保護者のアキラ・Nノアール・ホークアイだ」

アキラは学生ではないので黒いスーツに黒いYシャツ、黒いネクタイと、黒尻くめの服装に身を包んでいる。

ちなみに「転入初日とはいえ保護者がついてくるとは過保護だな、おい」とか宇佐美は思っているが、アキラが来た理由は単に「暇だったから」である。

そんなアキラがタバコに火をつけようとする。

「ちよいと待つんじゃ」

が、鉄心は目にも留まらぬ速さでアキラの啜えたタバコを掠め取った。

「あ？何だよ？」

「悪いが学園内は禁煙じゃ。喫煙するなら外で吸ってもらえるかのお？」

「げっ。……タバコ吸いたいから俺帰るわ」

そう言つてアキラは部屋から出ようとする。お前は一体何しにきたのだと言いたくなる。

そんな保護者の姿を見送りながら教師二人は雑談を交わす。

「それにしても転入生が一気に三人、しかも全員S組とはねえ……」

「いやいや宇佐美先生。S組への転入生はあともう一人いるんじゃない」

「は？」

そしてちょうどアキラが扉に手を伸ばす前に扉が開いた。

外から誰かが入ってきたのだ。

「失礼します」

入ってきた人物は軍服に身を包む、眼帯をつけた赤髪の女性、マルギツテであった。

そして、入ってきたマルギツテと出て行くこととするアキラの視線が交錯した。

「ん？『獵犬』じゃねーか。久しぶりだな。中東以来か？」

「『鷹の目』！？何故貴様がここにいる！？」

マルギツテは驚きと警戒の入りまじった表情を浮かべるが、それを気にする事もなくアキラは言葉を続ける。

「そっちは軍の任務か？大変だなあ」

「別に褒められるような事ではありません。それよりも私の質問に

「答えなさい」

「何だっていいだろ？別に。つーかそこどけ。俺が帰れねーだろがよ」

扉を挟んで口論を開始する二人。

そんな二人のやり取りを見ていた雫がポツリと一言。

「ねえ、アキラが女の人と話してるよ。しかも美人さん」

「気になる所そこなん!？」

「むむ、手が早いと言うか何というか……羨ましい」

「羨ましいって……あれどうみてもいがみ合ってるやん」

「大体、ノアールって何ですか？フランス語じゃないですか。英語圏の人間じゃなかったのかって話ですよ。てか『アキラ』っていうのも絶対偽名ですよ」

「いや、そんななんどうでもええやん」

紗枝は、この幼女ガキの思考回路はどないなっとなねんやろ?とか考えたがやめた。考えるだけ無駄だと感じたからだ。

「で、あれはどちらさん？」

「あれは確か…『猟犬』マルギツテ・エーベルバッハさんですね」

「あれが『猟犬』ねえ……てか何でアキラは『猟犬』と知り合いなん？」

「アキラさんは元々傭兵ですし、おそらく戦場で会ったんでしょう」

「傭兵！？マジかい!？」

「戦場では『鷹の目』って呼ばれてたらしいよ」

「……もう考えんの嫌になってきた……」

そんな会話をしている間に、二人の口論もどうやら納まってきたようだ。

「……てことだ。俺はお前のところのお嬢さんには手を出すつもりはねえよ」

「そうですか……では通りなさい。許可します」

「何で通るのにお前の許可がいるんだよ…それじゃ、またな」

そう言って、アキラは学園長室から出て行った。

それと入れ違いに入ってきたマルギツテは、鉄心に挨拶をする。

「マルギツテ・エーベルバッハ、本日付けでこの学園の生徒として

着任します。よろしく下さい」

「うむ、では学園内での行動についてはある程度の説明を」

……どうやら職員室ではなく学園長室に集まったのには軍人であるマルギツテが入る事が関係していたようだ。

鉄心とマルギツテが話をしている間、担任である宇佐美が苦笑いをしながらぼやいた。

「おいおい……軍人に元傭兵の関係者って、うちの転入生は濃いのが多いなあ……」

「元傭兵のアキラさんは転入しません」

「それ抜きでも十分濃いだろうが。おじさんとしてはさらに疲れそうで悲しいぜ……」

そう呟きながら、哀愁漂う宇佐美が溜め息をつく。

そんなに問題児が多いんか？と思いつつも、これからこのオッサンが担任になるわけやし少しくらい慰めてやろうか、と紗枝は言葉をかける

「まあなんや……頑張り」

「お前もその原因の一人だよ」

訂正、人の好意を受け取らんアホの事など知った事か

「ちょっといいか？クリスマス」

「ん？何だ？」

昼を食べ終わってから、今日噂で聞いた気になる事をクリスマスに尋ねてみることにした。

「今日S組にマルギッテが転入してきたらしいんだが……」

「マルさんが!？」

「マルチーズが!？」

「いや、マルギッテだから」

この様子からすると、どうやらクリスマスもマルギッテがいつ来るのか知らなかったようだ。

「それで他に誰か軍から来るっていう話は聞いてるか？」

「……?自分が聞いた話だと軍から転入してくるのはマルさんだけらしいが、それがどうした？」

「実はS組の転入生は4人いるらしい」

「4人？多すぎじゃない？」

転入生が4人と言うだけでも疑問を抱くのになそれが全員同じクラスに所属する、というのもまたおかしいことであった。

まあS組は成績がよければ希望出来るので一つのクラスに纏められたのも納得できるが。

「俺もそう思った。だから他の三人も軍関係者かと思ってたんだが、違うみたいだな」

もし他の転入生もクリス関係の軍人ならクリスから話を聞いておこうと思っただけ、軍関係者ではないみたいだ。

「念の為に他の三人の情報を集めるか」

人脈を広げる為、というのもあるが、危険人物かどうか見定めておく必要があるしな。

「そういえばさっき薫がS組に行ってた」

「え？何で？」

「薫は葵冬馬のグループと仲がいいからね」

これは好都合だ。S組は選民思考をした連中が多いから話を聞きづらいし、それ以前に教室にも入り辛い。

「それじゃ、薫を名目に俺も行ってくるかな？」

「あ、自分もマルさんに会いに行くぞ！」

「アタシも行くわ！マルに前回の続きを挑むのよ！」

「でもS組には九鬼がいるかも」

「あ……あううう」

ワン子が頭を抱えて悩みだした。ワン子は九鬼から猛烈なラブコールを受けているが、ワン子曰く「嫌いじゃないけどなんだか苦手」なのだそうだ。

「ワン子の世話は私に任せておいて、大和は気兼ねなく情報を集めてて。このやり取りって何か子持ちの夫婦っぽい？……キャツ？」

「もう無理だ。別れよう」

「ちょっとした妄想にも容赦ないリアリズムが……」

「マルさん！久しぶりだ〜！」

「お嬢様！元気になりましたか？」

S組に入ると、こちらに視線が集まってきた。Sの連中が俺たちを好ましく思っていないのはいつものことだし、今回はクリスとマルギツテの再会シーンに目が向いているというのもあるだろう。まあそれは予想の範囲内だ。

ただ、予想外だったのは、ダウンしている井上に薫が声をかけているというよくわからない風景がそこにはあったことだ。

「……………何があつたんだ……………？」

「おや、大和君じゃないですか。私に会いに来てくれたんですか？」
疑問に思っていると、葵が話しかけてきた。コイツはSでも俺たちに対して友好的な奴だから不思議ではない。

「いや違うから。というか井上の奴どうしたんだ？」

「実は転入生の一人にやられましたね。まあ準ならすぐにも回復するでしょう。薫君もフォローに回ってますしね」

そう言っているが榊原が井上に頭をペチペチ叩いたりして追い討ちをかけているのは大丈夫なのだろうか？薫もそれを止めようともし

てないんだが……

「で、その転入生は？聞いた話だと転入生は全員女子らしいじゃないか」

「流石大和君ですね。その通りですよ。転入生の一人であるマルギツテさんはそこにいますが……大和君は彼女の事は知っているようですね？」

「まあ一応な」

「では彼女のことは省略しましょう。マルギツテさん以外の方は三人で食堂に行ったようでここにはいませんね」

転入生が三人で……という事はその三人は元々知り合い、もしくは友達だったのだろう。示し合わせたように同じ日に同じ学校の同じクラスに転入してきたみたいだな。もしかしたら何かしらの目的があつてここに来たのかも知れないが……推測するにもまだ情報が足りないな。

「どんな奴らなんだ？」

「皆さん素敵な女性ばかりでしたよ」

「いや、そうじゃなくて……」

「ああ、もちろん素敵と言う意味では大和君も負けてはいませんが」

「わざとやっってるだろ!？」

こっちの知りたいことがどんな情報かわかっているくせにどうでもいい事ばかり言ってくる葵。

「本心ではあるのですが、まあ今は置いておきましょう」

「ずっと置いといてくれ」

「つれないですね」

「とりあえず、井上を倒した奴ってどんな奴なんだ？」

葵の言葉に反応してたら話が進まない。という事で無視する事にした。

井上がどれほどの實力を持っているかは知らないが、単なる女子にやられる程非力ではないだろう。という事はある程度實力を持っている奴だと考えるべきか……？

「準の言葉を借りるなら、彼女は悪魔だそうです」

「悪魔ねえ……」

「ただし、頭に小が付きますが」

頭に小が付く悪魔？それって……

「……小悪魔？」

「大変だぞ冬馬！準が変な世界に目醒めそうだ！！」

「変な世界？」

倒れている井上を診ていた薫の言葉にそちらを向く。

井上が何かを話そうとしていた。何か俺の知りたいことなのかもしれないので耳を澄ませて一言一句聞き逃さないように気を張る。

気のせいか、S組全体がこの発言に注目しているかのように静かになつた。

そして、井上が目撃の言葉を発した。

「……幼女からなら言葉責めも有りか……」

時間が、止まった。

この時間を再び動かしたのはKYの称号を持つクリスの一言であっ

た。

「へ、変態だー！ー！ー！？」

その言葉にクラス中が共感したのは言うまでもない。

「この変態めーッ」

「ぐふうッ！？」

あ、榊原の蹴りが腹にめり込んで井上は痙攣してる。

その一撃でクラス全体は何事もなかったかのように動き始める。無論俺もである。

「……………一体何されたんだ？」

「実はですね……………」

葵の説明によると、昼休みが始まって他の転入生二人と一緒に食堂に行こうとしていた見た目口リな転入生に井上が「お供します！」と言ったのだが、その返答が「キモイです今すぐ死んでくださいこの社会のクソムシ」という拒絶の言葉だったそうで井上の心にクリティカルヒットで一発KOだったらしい。

「名前は小鳥遊麻衣。身長は低く髪型はツインテールと可愛い女性でしたが、彼女は男性を嫌っており女性好きなようです。ちなみにですが、本人曰く彼女に戦闘能力はないそうです」

女好きの幼女って……しかも結構な毒舌家っぽいぞ。

「……で、他の二人は」

「一人が神崎雫さん。メガネをかけていて髪型は黒のショートヘア。身長は160cm前後でしょうか。性格としては無口ですが人見知りということではなさそうです。彼女も可愛い方でしたよ。あと、実力の程はわかりませんが、何故か竹箒を持っていましたね」

「た、竹箒？」

何故に竹箒？というかそれは校則に引つ掛からないのか？

「あとねー、ツッコミ役が増えたのー」

いつの間にかこちらに来ていた榊原が俺にそう告げた。てかツッコミ役が増えた？

「ユキの言っているツッコミ役というのは柊紗枝さんのことですね。こちらにもメガネをかけていました髪形は茶髪のロング。身長は神崎さんと同じぐらいですね。一番の特徴としては口調が関西弁。あとこれはあくまで私の勘なのですが、考え方は私や大和君に近いのかもしれません」

俺や葵と考え方が近い？と言うことは策士タイプの人間か？でもまだ勘の段階だしそう決め付けるのは早計か……

結局、実際に自分の目で確かめる必要がありそうだが、今度にもヒゲ先生にも聞くとするか。

「……………やっと……………帰って来たぜー！」

風間翔一はようやく川神駅に帰って来た。

今回の旅はいつも以上に突発的だったせいか、帰りの分の路銀が足りなくなったのだ。

このままでは帰れないが、かといって貯金は将来への出資であるので下ろしたくない。

それにこんな事はよくあるのでヒッチハイクで帰ろうと試みたのだがいつものようにうまく行かず、結局殆どの行程を徒歩で移動したのだ。

金がなく、ヒッチハイクもうまくいかず、旅先で仲良くなった人の家に泊めてもらいながら、少しずつ足を進めてきた。

そうしてやっと川神に帰って来たのだった。

そんな翔一を見ている男が一人いた。

「……アイツでいいか」

そう呟くとその男は翔一に近付いていく。

「さーて、腹も減ってきたし何か食うかな？でも金ねーしなー」

「よう、そのバンドナしたお前。ちょっといいか？」

「ん？誰だアンタ？」

翔一が声をした方を見ると、そこにはタバコを啜えた黒いスーツの男が立っていた。

「ここら辺でメシ喰いたいんだけどさ、どこか美味しい店知らないか？」

その男は朝、川神学園の学園長室にいたアキラ・N・ホークアイであった。

「さっきの発言からして地元民だろ、お前？だったらどこの店の料理が美味しいとか知ってるだろ？」

「そうだけど……んー、そうだなー」

翔一は考える。川神のメシ処は熊谷とよく散策しているのでどこが美味しいかという事は知っているのだ。

「そういえば美味いうどんの屋台があるってクマちゃんが言ったな」

「んじゃ、そこまで案内してくれ」

「ええー！？なんでそこまでしないとイケないんだよー！？俺だつて腹減つてんだぜー？」

「じゃあそこで一緒に食べばいいだろ？」

確かにアキラの言う通りではあるが、翔一には重大な問題があった。

「いや俺金ねーから食べねーんだって」

そう、先程もいったが金がないのだ。ここまで帰ってくるのにも苦労したのだ。外で食うほどの余裕などない。

「案内してくれるんなら奢るぜ？」

「わかったぜ！俺について来い！」

すぐさま意見を方向転換し、歩き始める翔一。空腹と金欠というダブルパンチを食らっていた翔一にとっては奢りという言葉は強かった。

こうして二人は屋台に向かい、そこでうどんを啜っていた。

「へえー。てことはお前名古屋から歩いて帰って来たのか？」

「まあ全部歩いたってわけじゃねーんだけど、ほとんど徒歩だったぜ。いつもならヒッチハイクとかもつとうまくいくんだけどなあ

「

「てか学校はどうしたんだ？お前ぐらいの齡だったら学校行ってん
だろ？」

「思い立ったら吉日、善は急げっていうだろ？だから学校サボって
名古屋に行ってきた」

「普通はやらねーだろ？」

「気紛れな風、それが俺だ。風は誰にも止めれんねーぜ！」

「ハハハ！やっぱり人生楽しまなきゃ損だよなー」

「お！やっぱり気が合うじゃん！俺は風間翔一ってんだけど、アン
タの名前は？」

「俺？アキラだ。アキラ・N・ホークアイ。まあアキラって呼んで
くれ」

「あれ？日本人じゃねーの？」

「半分はな。日本に来たのは結構最近だったりする」

「じゃあ日本に来る前はどこにいたんだ？」

「んー……どこだったかな？転々と移動してたからな。中東でドン
パチやったりドイツでドンパチやったりアメリカでドンパチやった
り」

ドンパチばかりであった。

普通ならここで多少引くのだろうが、翔一は普通ではなかった。

「面白そうじゃねーか！話聞かせてくれよ！」

「ああいぜ。それじゃ、まずは」

そうして昔話を始めようとした時

「引ったくりよー！ー！ー！ー！」

「何！？」

「ん？」

「誰か捕まえてー！！！」

声の方向を見ると一人の女性から鞆をひったくったと思われる男がバイクで逃走している所であった。

「ったく……ゆっくりメシも食えねーのかよ」

「俺がちよつくら捕まえてくるぜ！」

そう言って翔一は走り出す。

「まあ少し待てよ翔一。お前も死因が誤射なんてゴメンだろ？」
が、アキラの言葉に止められた。

「？何言ってるん」

翔一が振り向くと、アキラの手にはどこか見覚えのあるような黒い鉄の塊が握られており、その発射口は翔一の方を向いていた。

黒光りするその鉄の塊は、拳銃であった。

「動くなよ」

アキラは笑みを浮かべながらそう告げ、そして次の瞬間

夕食の時間、島津寮に新たな住人、ではないが、準住人が追加された。

「……何でここに住んでねー奴が当たり前のようにここでメシ食ってんだよ？」

「確かに不思議だな。何故マルギツテがここで晩御飯を？」

そう、2 Sに転入してきたマルギツテである。

マルギツテはあたかも当然のようにクリスの隣の席に座って食事を食べていた。

「その男も薫も不思議に思わなくてもいい。特に気にする事ではない」

「いや気になるだろう。なあゲンさん」

「オメーもだよー!!」

……あと何故か薫も晩飯に同伴していた。

「マルちゃんは時々クリスちゃんの部屋に泊まりにくる事になったからね」

「仲良くしてもいい。よろしくなさい。あとマルちゃんと呼ぶのはやめなさい。マルギツテでいい」

「了解だよ、マルギツテちゃん」

寮生以外にメシを食わせてもいいんだろうか？とゲンさんではないが少し疑問に思う。
ということ少し上機嫌な麗子さんに尋ねてみた。

「いいんですか？寮生以外の人に夕飯作るのって？」

「別に構いやしないよ」

「で、本音は？」

「いや、いい金づるが来たモンだよ」

「どうやら裏取引があつた模様……」

「ただいまー！」

そんな大人の裏が見えた所で玄関の方から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

そしてその声の主はすぐさま居間に顔をだした。

「あーハラヘッタ。麗子さん俺の分も用意してくれー」

「あいよ。ちよつと待つてな」

やはりいきなり名古屋へ旅してたキャップだった。

「やっと帰って来たのかキャップ。やけに遅かったけど何かあったのか？」

「おう！あ、これお土産な」

そう言つて皆に渡した物はウナギパイ。

「……何故にウナギパイ？」

「キャップ、名古屋に行つてたんじゃないのか？」

「いや、途中で金なくなつてさー。ヒッチハイクで帰ろうと思つたんだけどいつもみてーにうまくいかなくてな。名古屋で買ったお土産途中で食つちまつた」

それはまたキャップにしては何とも不運な……いや、泊めてもらう家があつた時点で不運と言えるのか？

そもそもいつもならヒッチハイクがうまくいくという時点でおかしいんだがなあ。

ちなみにこのウナギパイは静岡辺りで泊めてくれた人に貰つた物らしい。

「で、今日の昼にやっと帰つて来たんだよ」

「今日の昼？それにしては遅かつたね」

「実はな、今日面白い人と会ったんだよ」

「面白い人？」

そして、キャップは語り始めた

翔一は動けなかった。

拳銃を突きつけられているという現実離れた事実が、翔一から動くという思考を奪っていた。

翔一にとっては途轍もなく長い時間、拳銃を突きつけられていたが、実際にその時間はモノの一瞬であった。

そして、引き金が引かれた。

パストップパストップ、という何かを押し殺したような小さな音が拳銃から鳴ると同時に弾丸が発射され、翔一の横を通り、その後ろを走っていた逃走中の引ったくりが乗っていたバイクのタイヤを見事に撃ち抜いた。

音が鳴らなかったのはサイレンサーが付いていたからのようだ。

銃口が下を向くまで翔一は動く事が出来なかった。

そして銃口が下がってから開口一番に口から出た言葉は、「カッコイイ!」という贅辞でも「何で俺に向けたんだよ!？」という文句でもなく、

「え?それ本物?」

という少し間の抜けたセリフであった。

「ああ、本物だぜ。あつ、おっさん、会計頼む」

「ん?あいよ」

懐に拳銃をしまいながら、アキラは屋台の店主に声をかけ会計を済ませる。そして屋台の店主は発砲に気付いていなかったのか、いつも通りに営業を続けている。

日常の中に銃という、見なくても違和感を覚えてしまう程の異物が紛れ込んでいるにも関わらず、翔一以外ソレを違和感として感じていないようだった。

まるで、アキラの手に銃があるのが自然であるとも言つように。

「これで足は止めたぜ。あとは任せた」

「お、おう！任されたぜ！」

そう声をかけられて、やっといつもの自分の調子を取り戻した翔一は引ったくり確保の為に今度こそ走り出す。

そして引ったくりはパンクしたバイクを乗り捨てて慌てて自分の足で逃げ出したが、翔一の方が速いのですぐにでも捕まるだろう。

そんなすぐにも終わりそうな追いかけてこを眺めながらタバコに火をつけ一服。

「……それじゃ、俺は警察来る前に逃げるか。仕事もしないとな」

口から紫煙を吐き出しながらアキラは翔一とは逆方向に歩き出した。

「　　ってことがあつたんだよ！」

若干興奮気味だが、語り終わったキャップ。

「銃を持った黒スーツの男？怪しすぎだろ」

「その発砲があつたのが昼で今は既に夜なんだが、キャップ何をしていたんだ？」

その事件があつたのが昼過ぎで今は夜。その間は何をしていたのかよくわからない。

「引つたくりとおつ捕まえた後、被害者の人に礼を言われたんだけどさー。その後、警察にタイヤに穴開けた銃弾について取り調べさせられた」

「何でキャップが？撃つたのはその黒スーツの人でしょ？」

確かにその男が逃げたとしても目撃情報とかで事情を聞いたらすぐ

に解放されると思うんだけど……

「何か発砲する瞬間を見た奴が俺しかいなかったらいいんだよ。屋台のおっちゃんも見てなかったらしくてさー」

「で、その黒スーツの男のことは言ったのか？」

「悩んだんだが、教えといた。でも証拠不十分とかで俺が疑われたんだぜ！クツソー！」

つまり疑われたせいでこの時間まで拘束されたってことが。

これはさすがにキャップもその男に怒ってるみたいだな。その時の事を思い出したようにわなわな震えてるし。

「今度会ったら絶対に拳銃見せてもらうからなー！！」

「そっちかよ！！」

キャップは純粹だった。

「飯の準備が出来たよー。というかさっさと食べなアンタら」

キャップの分の晩飯を持ってきた麗子さんの一声によって、中断していた食事が再開された。

何かマルギツテが「まさか『鷹の目』……」とか呟いていたが、まあ今は晩飯が冷める前に食べる事を優先しよう。

転入生（後書き）

やっと作中で6月に入り、マルギツテ、そして閨の面々の転入まで
きました。

…………… 体育祭どうしよう

閨の転入は当初から考えてました。伏線（と呼べるかどうかかわからないモノ）も結構前にあったのですよ、多分。

ちなみに、アキラの銃に誰も騒がなかったのはただ単に誰も気付かなかっただけです。変な力が働いているとかはありませんので。

そして気付く。あれ？今回薫視点がないぞ？

感想・ご意見などがありましたら遠慮なくご指摘ください。

六月の新たな日常

朝の登校中、川神学園では半袖の制服を着た生徒達がそれぞれ自分の靴箱に向かっていく。そう、『半袖の制服』である。

川神学園では今日から衣替えで、冬服から夏服へと制服が変化しているのだ。

多数の男子は女子の夏服姿を、多数の女子は気になる男子の夏服姿を見てテンションを上げたりしていた。

「夏服かぁ……いいもんだな」

そしてその中には、自他共に認めるロリコン、井上準も含まれていた。

「おお？ 準がフツの夏服に反応してるー」

「珍しいですね。準が若い女性以外に反応するなんて」

共に登校する小雪や冬馬にも少し驚かされている。それほど準が幼女以外に反応するのは珍しいことなのだ。

「いやだつてさ……」

そう言いながら準がS組の扉を開ける。するとそこには……

「ウチ季節感ねーんだもん！！ 幼女じゃなくても夏服で季節感感じるくらいいいじゃねーかー！！」

学校であるにも関わらず、着物に軍服にメイド服と、夏服どころか制服すら着ていない生徒が多数いたのだった。

「騒ぐでないわハゲ！ 此方がどのような格好で来ようがお前には関係ないであろうが」

「だがハゲの言う通り、こつも服装に季節感がないのは嘆かわしいな」

そう言うのは九鬼英雄。確かに言動は正しいのだが、制服ではなくいつものスーツを着ている彼が言っても説得力は余りない。

「いやアンタが言うてもなあ」

「何か言ったかああん？」

「な、何でもないわ。いやーさすが英雄はええ事言うわー」

小太刀を抜いて脅してきたあずみに屈した紗枝。なんだかどこかで見覚えのある光景であった。どうやらS組でのツッコミ役は腹黒メイドとの相性が決まって悪いようだ。

「フハハハハ！当然だ！我は英雄であるからな！」

「流石です英雄様アアア！！」

「ちよつと質問、いい？」

英雄が高笑いをする中、雫がその高笑いを中断させた。その事であずみが睨んでくるが雫はそんなもの気にする様子はなかった。

「何だ庶民よ？ 今我は気分が良い。尋ねる事を許す」

「メイド服に夏服ってないの？」

「……どうでもええ質問やな」

「いえ、これは重要な質問ですよ！」

「お前は何急に張り切り出しとんねんっ！！」

「うむ、あずみよ。庶民の疑問を解消してやるといい」

「了解しました！端的に言えばメイドに夏服はありません！夏だろ
うと冬だろうと自分よりも主のために尽くすのがメイドとしてのあ
るべき姿だからです」

「なら軍服にはあるんですか！？」

その流れから少々興奮気味で麻衣がマルギツテに尋ねる。急に話
が自分に回ってきたことに驚きを見せず、マルギツテは淡々と答え
る。

「ありません。この服装が任務に適しているから問題もありません」

「そうですか……じゃあ抱き締めてもらっていいですか？」

「断ります」

「唐突すぎるじゃろ！？」

「じゃあ不死川さんでもいいです……」

「“じゃあ”って何なのじゃ!?” “でもいい”とはどういうことじゃ!?” 此方に抱き締められるのは次善案なのか!? 嫌々なのか!?”

「嫌々ではないです。不死川さんは可愛い女の子ですから。でも抱き締めてもらうには胸が……」

「お前にだけは言われたくないのじゃー!?!」

半泣きの状態で地団駄を踏む心。

「ふふ……不死川さんのあんな姿も可愛いですね。準もそう思いませんか?」

「……………」

「準?」

「ああ……すまねえ、若。俺の小悪魔の夏服姿を目に焼き付けてた」

「小鳥遊さんのですか」

「ああ……癒されるぜ……………」

その準が癒されるといふ今の小鳥遊の姿は机に倒れこんでいる状態なのだが……

「女の子分が……足りないです……」

「急にどないしたんやこの百合幼女？」

「どつやらS組の夏服女子率の少なさにテンションが下がっているみたいですね」

「まあ制服指定の学校で制服着てへん奴がいること自体がおかしいねんけどな」

「僕、夏服だよー」

その言葉に麻衣はすぐさま起き上がり、小雪に飛びつくこととする。

「ああ！もうこのS組のオアシスは小雪さんしかいないんですねー
！！」

「そう言いながら飛びつくなや！！」

だがしかし、小雪は飛びついてきた麻衣を横に避けた。

「ざーんねん！抱き締めてあげないよーだ」

「ガーンっ！？……神は死にました」

まさかの小雪の行動に麻衣は絶望の淵に立たされたかのようにシ
ョックを受けていた。

「何勝手に神様殺してんねん！？」

「大丈夫、そんな麻衣を私は応援してる」

凵は麻衣の頭を撫でてやる。

「はふー……癒されます」

そう言いながら凵に抱きつく麻衣。

「その癒されてる小鳥遊さんの姿をみて俺は癒されるぜ……」

その麻衣の姿を見ながら慈愛の目で見つめる凵。

「何やこの光景は……」

「あはははー」

紗枝が呆れるのも無理はないだろう。と、ここで冬馬が思い出したように凵に訊いてみた。

「F組の委員長さんは見に行かなくてもいいのですか？」

「　　ッ！！！？？　　確かに見に行かなければいけない……！
だが……この光景も見なければ……！！クソ、俺は一体どうすれば
いいんだ！？」

「うん、死ねばええと思うよ」

心の底から出た言葉だった。

その委員長がいるF組では……

「ワン子ちゃん、ちゃんと歴史の宿題やってきましたか？」

「宿題？そんなのあったっけ？」

「昨日ちゃんと修行終わりに言っただろう……」

「あつたよ。確か鎌倉時代の文化について纏めるっていう」

「げ！？忘れてた……」

ワン子が歴史の宿題を忘れていたことが発覚していた。

「ていうかカマクラなんて授業でやった？」

「綾小路先生は宿題に平安時代以外の、授業でやっていない部分を出すからな」

「というか俺様ワン子が授業内容覚えてたことにビックリなんだが」

「だって歴史の授業なのにカマクラが出てくるっておかしいじゃない。カマクラ時代って年中雪が降ってカマクラ作ってた時代？」

「なんでそうなるの！？ 普通地名の方にいくでしょ！？」

「これは思った以上に重症……」

「……？（雪と鎌倉に何の関係があるんだ……？今度マルさんに訊いてみよう）」

「重症だとわかってても宿題を忘れた事実は変わらないのだが」

「そうだった！ ど、どうしよう……委員長見せて！」

「ダメですよ！ 宿題は自分の力でやらないといけないんですよ！ それに昨日もワン子ちゃん、忘れてたじゃないですか。お姉さんが何度も見せると思ったら大間違いです！」

「そんな～……薫～、見せて～」

委員長に断られたので薫に頼んでみる。仮にも師匠なので弟子が困った時には助けてくれるはず！

「却下だ」

「そんなっ!?!」

しかしすぐさま断られた。

「昨日修行終わった後にちゃんと言ったのに忘れるワン子が悪い」

「あうう～……や、大和～」

師匠にも断られたワン子は涙目で大和に助けを求める。そんなワン子を見て大和は少し悩んだのち、

「……まあいいだろう。ただし俺が代わりの課題を出すからな」

「うっ！？ そんな」

「ここは知らなきゃ恥って言うてもいいくらいの常識だ」

「わ、わかったわよう……」

「まあ、少しわかりやすくしてやるから」

落ち込んだワン子の頭を撫でながら大和は宿題を渡す。

「ありがとー大和！　すぐに写すわね」

何だかんだ言ってワン子を甘やかしてしまうのは悪い癖だと大和自身もわかってはいるのだがやめられない。

「大和、少しワン子を甘やかし過ぎじゃないか？」

「確かにそうかもしれんが、厳しくやりすぎてもワン子のためにならないだろ？」

「しかし」

薫と大和のワン子の教育論争を始めたのを傍から見ていたスグルが一言。

「……何かあの会話聞いてると夫婦の会話に聞こえるのは俺だけか？」

「俺様にも聞こえるぜ。大和が娘に甘い父親で薫が教育熱心な母親で、ワン子がおバカな娘つてとこだな」

「その母親ポジションは私のモノだッ！！」

「うおおッ！？ ナチュラルに男の会話に入ってくるなよ京！」

「娘つて事はそういう行為をしてるわけで……ヤベエ！ 起つてきた！！」

「真剣^{マツ}でか！？ ヨンパチ薫でもイけるのか！？」

「嘘でしょ！？ 薫男だよ！？」

「俺自身驚いてるんだが、外見だけだったら女に見えるしそこから辺は脳内補完で何とでもなるッ！！」

「男の娘という奴だな。二次元ならアリだが……」

そう二人が口にした瞬間、

「 どうやら愉快的オブジェになりたいようだな」

と、威圧するような低い声が聞こえるとともに二人の頭が背後から掴まれた。

「げえっ!? ちょっと待ってくれ! せめてトイレに行つてから……!」

「ちょっと待て!! 何故俺まで……!?!」

「あ、間違えた。こつちだった」

「って俺様かよ!?!」

……

2 Fの教室に担任の梅子が入ってくる。

「では出席を取るぞ。……む? 福本と島津はどうした?」

「二人は愉快的なオブジェになりました」

「何を言っている? ……まあいい。では次に連絡事項を……」

昼休み

S組の教室からゲラゲラと大きな笑い声が聞こえてくる。

「アンタがメイドやってるっていうのは聞いてたけど実際に見てみると……ブフウ！ 真剣^{マジ}で受ける……！」

「……テメエ、いくらなんでも笑いすぎだろ」

その笑い声の主は現在“閨”に所属している元傭兵『鷹の目』とアキラ・N・ホークアイ、彼の笑いの原因は現在九鬼家のメイドである元傭兵『女王蜂』こと忍足あずみであった。

「いやいや、笑うなって言われても無理な話だろ？ ハハハハ」

「どうやら死にてえようだな……ああ!？」

「ワリイワリイ。でも似合ってるぜ『女王蜂』。アンタにとってメイドってのは案外天職なんじゃねーの？」

「じゃあ今すぐ笑いを止めるや。今ならかつての仲間のよしみで殺すのはやめてやるよ」

「いやそれとこれとは話が別だろギャハハハハ！」

「よし殺すッ!……」

そう決意したあずみは小太刀を抜き、

「フハハハハ！！ 王の帰還だ！！ 出迎えるがいいぞ庶民達よ！！」

「おかえりなさいませ！ 英雄様——！！」

すぐさま戻して猫を被った。

「しかも猫被ってる姿とか……クハハハハハハ！ 真剣^{マジ}で受けるぜ

……！」

「ん？ その見慣れぬ庶民よ、何か面白い事でもあったのか？」

ゲラゲラと笑うアキラに英雄が尋ねる。

「いやいや、アンタみたいな人にとっては面白くもないことが個人的にツボに入ったただけだから特に気にしなくていいぜ」

「そうか。ならば良し！ 精々逞しく生きるが良いわー！」

「流石です 英雄様！（アキラテメエ、あとで殺すッ！）」

そんな三人の様子を心が心底嫌そうな顔をしながら見ていた。

「何なのじゃあの品のない笑い声は？ 高貴な此方がここにいらつうのにな」

「確かにうるさいよね」

「場所を考えろ」

いや、心以外にも一部を除いてS組の生徒は不快なモノを見るよ
うな目で見ていた。まあ、その一部の生徒も物珍しいモノを見るよ
うな目で見ていたが。

その物珍しいモノを見る目で見ていた生徒の一人である準が疑問
を口にする。

「なあ、あの兄さんとメイドってどういう関係なんだ？ そもそも
あの兄さんは誰なんだ？」

「僕知らな〜い。トーマは知ってる?」

「私も知りませんね」

「じゃあ心は……聞かなくてもいいや〜」

「良くないわ! 此方にも聞けなのじゃ!」

「じゃあ知ってんのか?」

「知らぬ」

胸を張ってそう言い切った。

「……聞いても聞かんでも同じじゃねーか」

S組の大体の主要人物に聞いても誰も知らない。という事はもしかするとこの前転校してきた三人に関係しているのでは?と考えた冬馬は、机をくっ付けて一緒に弁当を食べていた雫たちに尋ねてみる事にした。

「神崎さん達は彼の事を知ってますか?」

「うん、アキラだよ」

「いや、そのアキラさんはどついつ関係なんだつー話なんだが?」

「一応私達の保護者ポジションですよ」

「という事は小鳥遊さんの親父ポジションッ！!?」

「によわ!? きゅ、急にテンションを上げるでないわハゲ!!」

麻衣の保護者ポジションという言葉聞いてテンションが一気に上がった準。それに驚いた心を責める事など出来ないだろう。

「これはもしや、俺に外堀を埋めて置けという天からの啓示か!？」

「そんなわけないでしょうこのハゲ。大人しく地べたを這い蹲って
いてください」

「ぐはぁッ!?!」

つづこんのいちげき!

じゅんに364のダメージ!

じゅんはちからつきた

「……辛辣やなあ」

「男に優しくするほど私は人間できてないんですよ」

「で、結局あの二人はどーゆー関係なの？」

「さあ? ウチは知らんなあ。二人は知ってんの？」

「知らない」

「知る必要もないですね」

三人とも知らないようだ。

「おいおい、一応お前らの保護者なんだから？ 少しは知っとけよ。

……あ、小鳥遊さんは別ですよ」

「こやつ、媚売つとるぞ……」

「てか復活すんの早ッ!？」

復活してすぐに媚を売っている準に驚いていると、マルギツテが口を開いた。

「あの二人はかつて同じ部隊に所属していた傭兵仲間です」

「つーことは何か？ あの腹黒メイドも元は傭兵ってことかよ」

「貴女達の保護者も元傭兵なのですか？」

「みたいやなあ……」

「いやいや他人事じゃねーだろ」

「ほう。貴様、あずみの昔の同僚か？」

「まあそつだなー。一応『鷹の目』って呼ばれてた事があるぜー」

「彼は後方からの遠距離狙撃に定評がありました。他はともかく狙撃の腕なら私よりも上かと」

「ほう。あずみにそこまで言わせるとはな。王たる我がその名を覚えておいてやるう。名乗るがいい」

「それはありがたいね。俺はアキラだ。何かあった時はよろしくしてくれ」

「それには及びませんので安心してください」

「フハハハハ！ 九鬼従者部隊には優秀な人材がいるからわざわざ外部の人間に頼む事も少なかるう！ 落ち込むでないぞアキラとやら！」

「英雄、少しいいですか？」

「ん？ どうした我が友トーマよ？」

冬馬に呼ばれて英雄がそちらへ向かったので、あずみは被っていた猫を脱いだ。

「……猫被りする必要あんのか？」

「英雄様の前で地なんて出せるかよ」

「……そういえばステイシーもメイドにジョブチェンジしたって風の噂で聞いたんだがマジか？ アンタがメイドやってるっていうのよりも信じられねーんだけど」

「マジだ。テメエと同じようにメイドになったあたいを笑いにきたみてえだが、厄介なジジイに目を付けられて無理矢理入れられた」

「何っー間抜け。今度会ったら盛大に笑ってやるか」

「ああ、やってやれ。それでテメエもヒュームのジジイに見つかって執事として扱かれるや」

「はあ？ 俺に執事なんて無理に決まってるだろ。主のために特進クラスに入れるぐらいにならねーとダメなんだろ、九鬼従者部隊ってのは？ 俺は自由気ままに生きていくんだよ」

「だったら笑うんじゃねーよ」

「あ、それそろ俺はお暇させてもらっせ。また来るぜ」

「もう来んじゃねーぞ」

「……そこは嘘でも合わせろよ」

……この後、アキラが頻繁にS組に来るようになることをまだ誰も知らなかった……

放課後

「まさかこの私がプレミアムに騙されるとは思ってたわ……」

1 Sの教室にて小杉は怒りに震えていた。

「……どうしたの小杉？ 騙されるって何の話よ？」

「とぼけないで！ 貴女、前に私に『一年を掌握したつもりはないし、するつもりもない』って言ったわよね？」

「言ったけどそれがどうしたのよ？」

「だったらあの取り巻きは一体何なのよ!？」

「取り巻き？」

「あれを取り巻きと呼ばずになんと呼ぶのよ!？」

そう言って小杉が教室の扉を指差した。そこにいたのは……

「奏様！ 是非私もお側に!！」

「どうかお姉様と呼ばせて下さい!！」

「あっ！ 奏様と目が合ったわ!！」

「違うわよ！ 目が合ったのは私よ!！」

「奏様！　どうか私を罵って下さい！」

「奏様〜！」

「奏様の隣にいる人って確か……」

「そうよ。奏様の側にいつもいる武蔵小杉さん」

「いいなあ……羨ましい」

「はッ！？　あの位置に行くには相当な能力が必要と見た！」

「奏様のサポートをする為には高い能力がいるんだろっなあ」

川神学園の一年女子の集団であった。彼女たちの視線の先には当然の如く奏の姿があった。

「何なのこのお嬢様学校チックな追っかけは！？　しかも何故か私がプレミアムに貴女の従者的ポジションになってるんだけど！？」

「そんな事言われても私にはどうしようも出来ないわ。私が自分で集めたわけじゃないし」

「じゃあ何でプレミアムに人気があるのよ？」

「思い当たる節がないわね……」

何故奏の人氣がここまで上がっているのか？　簡単に言えばこの川神にて奏が多数の女子を助けてきたからだ。

例えば、学園内で男子に絡まれていた女子を助け、駅前で男に絡まれていた女子を助け、学校で猿に絡まれていた女子を助け、e t c . e t c というように男に絡まれていた数々の女生徒を救ってきた。

また川神百代のようなファンサービスという名の娘漁りを行うわけでもなく、「今度から気をつけなさい」と一言だけ残して去っていき、慕ってきた者を邪険に扱うこともなく、という百代とはまた違った奏のカッコよさにコロッとイってしまう女子が多いようだ。

……ちなみに奏の取り巻きは一年女子に留まっていることをここに記しておく。

「でも取り巻きなんか出来てもそういうのには慣れてないからどうすればいいのかしら？」

「慣れてる人の方がプレミアムに少ないと思うわよ。取り巻きなんてモモ先輩くらいしかないでしょうし」

「でも川神学園には美男美女がたくさんいるじゃない。それなのにファンクラブ的なものが少ないのは何でかしら？」

「そもそも学校でファンクラブとか普通ないんじゃないの？」

「きっとモモ先輩に一極集中しているんですよ。あ、私は奏様一筋ですよ？」

「そう、ありがとう。でも私そっちの趣味はないのよね」

「それでもいいんです！ 私は奏様についていけるだけでいいんですから！」

「……………」

ナチュラルに会話に入ってきたファンからのナチュラルな告白をさらりと断る奏。

「でも水面下では何らかの集まりがあってもおかしくないわよね……」

「ま、まあ気付かれないように集まってるのかもしれないわね」

「あ、あの、奏様！ 調理実習でクッキーを焼いたのでどうか食べてくださいー！」

「ありがとうございます。ありがたく頂くわ」

「は、はい！ ありがとうございます奏様ー！」

「……………！！！」

ナチュラルに会話に入ってきたファンからの差し入れを何不自然なく受け取る奏。

そのどう見ても手馴れているようにしか見えない、奏の自称・慣れていない様子に小杉の苛立ちが爆発した。

「そのどこが慣れてないのよ！？ プレミアムに慣れすぎでしょー！！ そのプレミアムなポジションに私が納まるはずだったのにー！！！」

「……………それだけはないと思うわ」

「~~~~！ 今のはプレミアムに頭にきたわ！ 絶対に貴女を見返してやるんだからー！」

……何だかんだで仲のいい二人であった。

そんな言い合いを二人がしている頃、教室の外では……

「松風……友達の奏さんを訪ねてみようと思ったたら凄い人気っぷりですよ」

「こりややべえぜ、まゆっち。レベルが違いすぎる。流石のオラも予想外なんだぜー」

「で、ではここは戦略的撤退を……」

「そりやダメだ！ここで逃げたらせつかく友達になった奏っちとの距離が友達から顔見知りレベルまで落ちちまうぜー！」

「で、ではどうするべきなのでしょう……？」

「決まってるだろ！ここは勇気だして逝くしかねーだろーが……！」

「あの、松風？行くの漢字が間違っている気がするんですが……？」

という会話（傍から見れば独り言）がなされていた事に教室内の二人は気付かなかった。

六月の新たな日常（後書き）

紗枝 は S組ツッコミ役 になった

奏 は スキル【カリスマ】 を 手に入れていた

というお話でした。……内容が薄い

最近、薫よりも妹の奏の方がでてる気がする……今回もほとんど出番なかったし……

ご意見・感想・誤字報告などがありましたらどうぞ遠慮なく申し付けください。

梅の実勝負（前書き）

今回は原作にもあつた梅の実勝負＋です

梅の実勝負

黒く、ドロリとしたモノが杯の底から湧き出てくる

コレを零してはいけない

その思いによって、杯に蓋をする

しかしそれでもソレは増え続ける

少しずつ、少しずつ、しかし、確実に貯まっていく

ソレは、まだ杯から溢れる事はない。溢れるにはまだ

遠い

大丈夫、まだまだ余裕がある

6月のある晴れた休日のこと……

「やつほー！ 遊びに来たわよー」

「暇だから弟を弄りに来たぞー」

「いや、大和弄るのはやめてやりなよ」

今日は川神姉妹と薫が島津寮に遊びに来た。しかし三人よりも先にとある人物が訪ねてきていた。

「ほう、珍しい客人だ」

クリスの姉的存在、マルギツテである。

「アタシ達割りと来るし新顔なのはそつちでしょ？」

「お嬢様が心配なんだ、私は」

「過保護すぎるのはどうかと思うがな、マルー」

そう言いながらマルギツテに纏わりつこうとする姉さん。

「女性に見境なくちよっかいを出す癖は直した方がいいと思うが」

それを薫はやんわりと止める。

「薫の言う通りです。無闇に手を出すのはやめた方がいい。それとマルと呼ぶのはやめなさい。学年は百代の方が上ですが、年齢は私の方が上なんだ」

それに便乗するようにマルギツテも言葉を発する。……これは多分、慣れていないことへの照れ隠しのモノが含まれてると見た。

「仕方ない……まゆまゆとイチヤイチヤしてくるか……」

そう言っただけでターゲットをまゆつちに姉さんは変更したので、俺は姉さんに一つの事実を教えることにした。

「あ、まゆつちなら友達と遊びにいったよ」

「何……だと……!?!?」

その驚きが、自分の目論見が果たせない事になのか、それともまゆつちに遊びに行くような友達が出来ていたことになのか、気になるんだけど……

「仕方ない……薫をイジって遊ぶか」

「うわっ何をやるやめ」

「おお？今日は人が多いねえ。……そっだ、アンタ達これ手伝っておくれよ」

そこへ麗子さんが大量の梅の実を持ってやってきた。

「梅のカリカリ漬けを作ろうと思ってね」

「いいねー、梅雨の季節って感じた」

「この水でアク抜きした梅の実をだね、一個ずつ布巾でよく拭いて、竹串でぐりっと梅の軸を取り除く」

そっいいながら麗子さんは実践してみせる。

「これをやってもらいたいんだ」

「意外と手間が掛かるものなんだな」

「でもカリカリ漬けは美味しいよ」

「じゅるり……何だか唾が出てきたわ」

ワン子が唾を呑み込むと、早速梅の下処理に挑戦する。

「えーっと、布巾で拭いて、竹串で取る」

ワン子が手際よく軸を取り除く。

「おっ、ワン子ちゃん巧いじゃないか」

「そうかなー？アタシやれば出来るなー」

「そっだな。ワン子は出来る子だ。よしよし」

「わふー……」

「だがこれで調子に乗ったら駄目だぞ」

「う、うん。わかってるわよう……」

……ワン子の奴、もう薫に躰けられているなあ。

「ほれ、アンタもやってみな」

「いいでしょう」

そんな事を思っていると麗子さんに薦められたマルギツテも同じく作業をする。

「うん、マルギツテも巧いねえ」

「な、中々やるじゃない。でもアタシの方が速かったわ」

「何を言っている。私の方が速かったに決まっているだろう」

「アタシよ!」

「私だ!」

「なら勝負よ!」

「いいでしょう。『獵犬』の名は伊達ではない事を思い知らせて上げましょう」

「梅の下処理で証明されても……」

「ならどういつ勝負をするんだ？」

「そうね……この大量にある梅の実を二つに分けて、先に終わった方が勝ちでどう？」

「いいだろう」

「じゃあ不十分な出来のが来たらリテイクするからね」

ということでワン子とマルギツテの梅の下処理対決が決定した。

「あつ、全部アタシ達でやっちゃうことになっちゃったけどいい？」

「どーぞどーぞ。むしろ手間省ける」

そうして梅の実を二つに分けて、二人はそれぞれ定位置に立つ。

「梅の実で勝負ってどうなんだ……？」

「集中力とスピード、それに精密さの勝負だ。以外といい勝負になるじゃないか？」

「スピードとかはワン子が有利だと思うけど」

「マルさんもスピードは相当だぞ。それに集中力と精密さも凄いだ」

そんな話を俺達がしていると薫がワン子に近付いていつて何かを

伝えようとしていた。

「ワン子、少しアドバイスだ」

「ん？なにになに？」

「これも素振りと同じような要領でやればいい」

「……！ わかったわ！ ……ところで、要領って何？」

「わかってないじゃないか！？」

……ワン子は愛すべき馬鹿だった。

「ゴホンっ………では、川神一子対マルギッテ・エーベルバッハの梅の実対決を始める」

「……一つ咳をしてから薫がそう宣言する。どつやら審判的な立場なよ
うだ。」

「位置について………よーい………始めっ！！」

薫の合図により、二人が梅の下処理を始めた。

「とりゃー！ 拭いて、取り除く！」

「単純作業は慣れている！」

両者ともに凄まじいスピードだ。

「おお、どっちもなかなか早いじゃないか」

「うん、仕上がりも綺麗なもんだねえ」

そして作業も正確なようだ。

「それにしても二人とも熱心だねえ。嬉しい限りさ」

今のところはワン子の方が早く処理をしていた。

「……チツ！野ウサギと思えばやるな！もっと急がねばならんか、
電撃戦のように！」

マルギツテがスピードを上げれば、

「負けない！」

「！？野ウサギも速度を増しただと！？」

ワン子もさらにスピードを上げる。今はワン子が優勢だった。

そのまま勝負が進むのかと思っているとマルギツテの様子が少し変わった。

「……例え遊戯でも負けは許されない。ならば、解放するしかない」

そう言ってマルギツテは眼帯を外した。

「眼帯を外した？ 一体なんで……？」

「マルさんは眼帯をすることで自身の実力を常日頃から抑えているんだ」

「何その設定!?!」

「だが確かにマルギッテのポテンシャルが上がったぞ」

「私も実際に闘ったことがあるが、地力が上がっていた。おそらく自己暗示のようなものだろうな」

「いやいや、自己暗示でそこまで上がるのか……?」

「私に本気を出させるとは……貴女を野ウサギから一人の戦士と認めましょう。戦士・一子」

「梅で認めちゃうんだ……」

梅の勝負で認められるとは……実際に見てる人間としてはわかるんだが、言葉だけ聞くとなんか軽く見られそうだな。

「速いな。京は見えるか?」

「何とか見えるかな……」

「クリはどうだ?」

「……恥ずかしながら、きちんとは見えないな……あ、今二つ同時に処理した」

「正解だ」

……ちなみに俺には全く見えなかつたりする。

「速過ぎてチエックが追いつかないよ！」

「なら私も手伝います」

「ホントかい？ 助かるよ」

麗子さんも手が追いつかなくなったのか、審判である薫もチエックに回る。……ってチエックする側も早い！？

そうこうしている内に勝負も終わりに近付こうとしていた。そして今の戦況としては

「ラストスパート！！」

「バカな！？この私が本気を出しているというのに、あと梅の実一個分が埋まらない！？」

本気を出したマルギツテを相手にしても、梅一つ分くらいの差をつけてまだワン子が優勢であった。

そしてワン子が最後の梅を置き

「まだよ！！」

「え！？」

少し前に処理を終えて置いた梅をもう一度手にとりもう一度処理

しなおした。

「これでッー!!」

「最後だアッ!!」

その結果、二人は同時に最後の梅を置いた。

「どっち!？」 「どっちだ!？」

「見た感じだと同時だね」

「この場合はリテイクが多かった方の負けでいいか？」

「構いません。精密作業において私にミスはありません」

「アタシもいわ。今回はミスしてないっていう自信があるもの」

「というか何で最後処理し直したんだ？ あれがなかったら確実に勝ってたかもしれないだろ？」

「えっとね、あの一個だけイメージ通りに処理できなかったの」

「イメージ？ そういえばさっき勝負が始まる前にも薫が言っていたみたいけど、どどういう事だ？」

「えっとね 「

それは、薫に師事してからすぐの事だったわ。

アタシはいつものように薙刀の素振り（川神院のメニュー＋）
をしてたんだけど……

「ワン子、素振りなんだが……」

「なに？もつと数を増やすの？」

「いや、逆に減らす」

「え！？何でよ！？」

当然アタシは抗議しようとしたわ。だって増やすならともかく減らすしても強くななんてなれないでしょ？

でも薫はアタシから文句が来ると思ってたのか、すぐに別の指示を出してきたの。

「数を減らす代わりにもつと丁寧に振っていけ」

「丁寧に？どついついこと？」

「今みたいにかむしゃらに振るのではなく、一振り一振りをもっと大事に振っていけ」

???

「……どゆこと？」

普通だったら溜め息を吐かれてもおかしくないかもしれないけど、薫はそんな事はせずに丁寧にアタシに説明をしていく。

「がむしゃらに振るだけならそれは単なる筋トレにしかならない。薙刀を振るう毎に『どつという軌道で振るか』『どつという意図や目的で振るか』というのを考えて素振りをするといい」

「うーん？よくわからないわ」

「それではまず、薙刀の軌跡をイメージするんだ。そしてそこをなぞるように振るえばいい」

「軌跡をイメージ？」

「そうだ。最初はゆっくりでもいいからなぞればいい。そこから少しずつスピードを上げていく。イメージ通りの動きを身体に覚えさせるんだ」

「それって何の意味があるの？」

「自分の思い通りの動きをすることは意外と難しいことだ。例えば自分よりも格上の相手をまぐれの一撃で倒す、という話は少なくとも

ないけれど、それは実力者であればあるほどそんなまぐれは起きない。川神院の師範代クラスならゼロと言ってもいい。

だからこそ常日頃からあらゆる状況を想定していざという時にすぐさま対応できるようにイメージしておく。イメージした通りに体を動かせれば突発的な動きでも些細なミスもなくなる」

「へえ〜」

「……わかりやすく言うと、ワン子が今まで様々な相手と戦ってきただろう？ その時に『次に相手はどう動くか』とか『どう攻撃したらいいのか』とか考えるだろう？」

「うん」

「その考えを実際に行動に移す際に、少しでもずれただけでイメージ通りに事が進まなくなる場合もある。相手の動きを予測していても自分の思うように動ききれなければそれを防ぐことも難しくなる」

「うん……？」

「……例えば」

「

「　　ってことよ！」

「そこを端折るなよ!？」

「ちゃんと覚えてなかったんだね……」

「そこからが大事な所だろうに」

「まあワン子だし仕方ないさ」

しかし、教えた側にとっては仕方ないで済む問題ではない。現に薫は少し怒ってる雰囲気でワン子を叱るうとしてるし……

「ワ〜ン〜子〜?」

「うづうっ!?!?、ゴメンなさい〜」

「……まあいいんだがな」

「いいのかよ!？」

「いいんだ……って大和とツツコミが被った。これは『もうお前ら結婚しちやえ』っていう天からの啓示……?」

「たぶん『京からの告白を断れ』という啓示だな」

「……で、それが梅の実勝負に何の関係があるのかわからないのだ

が……？」

「要はこれもイメージだ。イメージ通りに身体を動かせば最良の結果が付いてくる。それにイメージ通りに身体を動かせるというのがどういう事なのか、実際にわかってもらうためにそうアドバイスさせてもらった」

「アドバイスって言えるのか……？」

「でも確かに……」

そう呟いてワン子は自分の手を見ていた。そこまで感覚が違っていたのだろうか？

「というか勝敗はどうなったの？」

京が審判をしていた麗子さんに尋ねる。というか薫もいつの間にか手伝いに戻ってるだ！？

「……二人とも完璧だね。リテイクなし」

「つまりこの勝負は……？」

「引き分けだな」

「ええー！？」

「……チッ」

ワン子とマルギッテ、両名ともにとても悔しがっていた。

「二人ともそんなに悔しがらなくてもいいだろ？」

「あの一個をミスしてなかったら勝ってたのに……！」

「勝てもせずに負けなかった事に満足するなど愚者のすることです」

ワン子の言い分はわかるが、マルギツテはそういう考え方なのか……まあ、常に上を目指しているってことか。

「それに勝負が引き分けでも、スピードでは本気を出した私よりも戦士・一子の方が若干ですが勝っていた。それは変えようのない事実です。是非ともいつかりベンジマッチをしたいところです」

「なら次は私と闘わないか？勝負方法はもちろん武器アリの死合いだ」

ここで姉さんがノリノリで提案してきた。今まで黙ってたと思ったらマルギツテにケンカを吹っ掛けるタイミングを計ってたのか。

「……それは魅力的な提案だ。が、先程の勝負で腕の毛細血管が破裂している。今はこの負傷の治癒に専念したい」

「そこまでして勝ちたかったのか？ たかが梅の実勝負で？」

「私に敗北の二文字は似合いませんので。それに勝負の程度に関わらず勝つという事が重要なのだ。負けが続けば負け癖がつく」

「ならそのケガが治ったら……」

「残念ですが百代と戦う事は軍から禁じられています」

「……チツ」

「それにしても引き分けか」

「てっきりワン子が凡ミスして負けると思ってたけど」

「何ソレ！？ ちょっと失礼じゃない？」

こんな感じで二人の名勝負の名残が残っていたのだが……

「ただいまー！！何か追われてるおっさんを病院まで送ったら、スツゲーうまそうな肉を大量に貰っちゃったぜ！！……って何この雰囲気？」

キャップの登場によって跡形もなく霧散したのだった。

その日の夜、マルギツテはクリスの部屋にいた。どうやら今日はここに泊まっていくようだ。

「マルさんと一緒に寝るのは久しぶりだな」

「そうですね。それに私は日本の『フトン』という寝具で寝るのは初めてですので少し楽しみでした」

クリスとマルギツテは布団で横になる。

「そうだ。マルさん、明日少し自分に稽古を付けてくれないか？」

「稽古ですか？ それは構いませんが、どうかしたのですか？」

「実は……犬が薫に弟子入りしたんだ」

「犬というと……戦士・一子のことですね」

「ああ。それでこの前、ふと犬の実力が上がってることに気付いたんだ。この短期間で動きが鋭くなって、このままだと私は犬に勝てなくなるかもしれないと思うほどだった」

「確かに戦士・一子の成長速度には目を見張るものがありました。が……成程、薫に弟子入りですか……」

ここでクリスはふと気になっていた事をマルギッテに訊いてみる事にした。

「なあマルさん。マルさんと薫ってどんな関係なんだ？」

「関係、ですか？」

「どんな風に知り合ったのか気になって。マルさんや父様は知り合っていたのに自分は全く知らなかったから」

「そうですね……薫との関係を一言で表すのは少々難しいですね。

何せ薫との出会いは

「

そうしてマルギッテは語り始めた

あれは一年程前のとある任務のことでした。

この任務はとても重要だったので、とある事情から人数を裂

くことが出来ず、仕方なく幾つかの外部組織に依頼することになったのです。その内の一つに薫はいました。

「中将殿から日本人にも傭兵を依頼したとのことでしたが、貴方ですか？」

「正確には傭兵ではなく護衛ですが。フランク・フリードリヒ中将より依頼を受けた“暦”の皐月薫です。貴女は？」

日本人であるのにも関わらず流暢にドイツ語を話すのを見て、私は感心しました。

「私はマルギッテ・エーベルバッハ、階級は小尉です。覚えなさい」

「マルギッテですね。了解しました」

「それにしても傭兵、ではなく護衛でしたね。それが女性だとは思いませんでした」

「……………女性？」

「ええ。てつきり護衛には男が来ると思っていましたが、実力に問題な

その時、『ブチンッ!』という音が聞こえたかと思うと、

「私は男だあッ!」

「!？」

気付いた時には、相手に殴り飛ばされていたのです。

「ぐはっ！！」

「あ、しまった」

殴り飛ばされた私の頭の中では、

この私が見えなかっただど？

「だど？
欧州最強と言われたこの私が、こつも簡単に一撃をくらった
だど？」

認められない。認めてはいけない！

そんな思考が私の中で流れ、そして気付けば薫に攻撃を仕掛けて
いました。

「H a s e n J a g g d ! ! !」

「！？ ……だがイラッときたのはこちらも同じなのだが」

「」

「」

「 という流れで、結局中将殿が来るまで戦闘をしましまして」

「へえ……で、どっちが勝ったんだ？」

「一応引き分けで終わっていますが、おそらくあのままやり合っていたら私の負けだったでしょう」

「それほどに薫は強いのか……」

「あの時、私も薫も双方が共に激昂してしまったのが悪いのですが、ある意味それで良かったのかも知れません」

「？ 何故だ？」

「その後のコミュニケーションが円滑に進みましたから。任務時もバディーとしては動きやすかったですし、その後、一部の外部組織が裏切りまして、その制圧時にも力を貸してもらいました」

「へえ、どんな任務だったんだ？」

「それは……機密事項なのでお嬢様とはいえ言えません」

「そうか……」

しょんぼりしてしまったクリスを見て、思わず言ってしまったいそうになるマルギッテだったが、何とか堪える。任務の内容が『友達と旅行に行くクリスの護衛』だったとは口が裂けても言ってはいけないのだ。

「それに超えるべき壁を見つけたのも僥倖と言えるでしょう。」

「壁？」

「あの領域に薫が到達できて、この私が到達できないハズがないでしょう。」

「……！！そうだな！マルさんなら絶対に超えられるさ！」

「当然です」

「でもマルさんだけその領域に行くのはズルイ気がするぞ。だから自分もその領域に立ってみせる！先にどっちが薫を超えるか、勝負だマルさん！」

「……！！」

この言葉にマルギッテはクリスの成長を感じた。一ヶ月という長いような短いような期間でここまで成長するとは嬉しい誤算であった。

（中将殿、お嬢様がこの国に来たことは間違いではなかったようです……）

「いいでしょう。例えお嬢様が相手だとしても負けません！」

「自分だって負けないからな！」

そんな、姉妹団欒のお話。

おまけ

「ま、松風、クリスマスさんの部屋から何やら大声が聞こえるんですが」

「まあ久しぶりの姉妹団欒の時間かもしれないけどさー、もう少し時間を考えてほしいよねー。うるさくてオラ寝れねーよ」

「松風、そんな事言っってはダメですよ」

「だって事実だしなー。決してオラたちの出番がここしかなかった腹いせなんかじゃないんだぜー」

梅の実勝負（後書き）

ということではワン子対マルギッテの対決は引き分け。 + の部分は薫とマルギッテの出会いについてでした。

梅の実勝負とはいえ、薫に師事したからといってワン子がそう簡単にマルギッテに勝てるとは思えなかったので引き分けという中途半端な結果にさせて頂きました。

薫がワン子に言ってたイメージ云々は簡潔に言えば「常に自分の最高の動きができるようにする」ためのものです。無駄な動きを削ぎ落とすという意味では『顎』修得のためにやってた修行に近いかと思えます。

ワン子の説明が途中で端折られたのは、自分がその説明を巧く書くことができなかったから、トカジャナイデスヨ？ホントデスヨ？まあどちらにしる想定した攻撃を正確無比に繰り出すことは才能の足りないワン子にとっては必須のスキルだと思えます。

ご意見・感想・誤字報告などがあれば遠慮せずにお知らせください。

…… 友達が出来て出番が減ってしまったまゆっち…… 当初はあの場にいる予定だったんですが、セリフが一つしかなかったということではなかったことにされたという裏事情があったりなかったり……

ドイツ対決（前書き）

更新が大いに遅れて申し訳ないです。

ダーツ対決

「そこのお前！ 廊下を走るな！ 危ないだろう！」

昼休みにクリスが廊下を歩いていると、廊下を走る女子が一人を発見した。

正義感の強いクリスはいつも通り、迷わずその行為を注意する。

「ええ、そんな固い事言つなや……こちらら急いでんねんで？」

「急いでいるのはわかるが、だからといって走るんじゃない」

その女子はS組に転入してきた柊紗枝であった。

「……（確かコイツ、日本を勘違いしとる外国人やったか？ しかもやたら純粹らしいし……）」

紗枝はちよつとしたイタズラを思いつき、内心悪い笑みを浮かべた。

「どうした？ 黙り込んで」

「いやいや、もしかしてアンタ知らんのかと思ってな。日本では昼休みは廊下走つてもええんやで？」

「何だと！？ ……いや、騙されんぞ。それに似た話を大和にされたことがあるからな」

「（チツ！ もう経験済みかい……でもまだや！）……そうなん？ その大和という奴の話ってどんなんや？」

「それはだな……」

クリスは大和にされた話を紗枝に教えた。すると紗枝はわざとらしく大きな溜め息を吐いた。

「やれやれ……その話、一概に嘘やとは言えへんで？」

「何っ！？ どういうことだ!？」

「それはやな……そういえばアンタ、名前何ていうん？」

「……？ クリステイアーネだ。お前は？」

「柎紗枝や。紗枝でええで。でやな、クリステイアーネ」

「自分もクリスでいい」

「よしクリス、実はな……」

そうして紗枝は身振り手振りも加えてクリスに嘘を教えていき……

「さすがだなー日本」

「（チヨロいな）」

純粋なクリスは紗枝の嘘を信じてしまった。

「まあそういう事やから昼休みは走っててもあんまり怒りなや〜」

「ああ、すまなかった」

「別にええねん。知らんかった事はしゃーないしな。ほななクリスマス
そうしてクリスマスに嘘を吐いた紗枝はそのまま走り去っていった。」

2 S

「 てなことがあったんや」

そして放課後、紗枝はその話を仲間内でしていた。

「そんなクリスマスさんもまたアリです」

「アンタ女やったら何でもええんかい……」

「何でもいいというわけではないですよ。いくら私でも『自称・女』
とか『男の娘』とか『オカマ』とかは無理です」

「それ殆んど女ちゃうやん」

「麻衣の嗜好はどうでもいいけど、そのクリスってバカなのかな？」

「まあバカというより純粹ってことやる。そろそろその子の軍師さんから嘘やっつてバラされてる頃かなー？」

雫の言葉に「どうでもいいで済まされた!？」とショックを受けている麻衣を無視して紗枝は答える。

「その子、聞いた性格上絶対怒って文句言いに来るよ?」

「まあそこら辺は考えてるわ」

「ふーん。じゃ、いいや。……む、こつちの方から何かを感じる……」

「え? 雫ってそういうキャラやった?」

そう言っつてフラフラと雫が教室から出て行ったかと思えば、廊下の方から誰かが全力疾走をしているような音が聞こえてきた。

「
柊紗枝エエエエツ!!」

その叫びと共にS組のドアが盛大な音を立てて開かれた。開けた人物はやはりというかクリスマスであった。

「さっきはよくも騙したなああああ!!」

どうやらクリスがあの話が嘘だと知り文句を言いに来たようだ。

しかしここはS組の教室。ここにいるのは紗枝達だけではない。確かに英雄やあずみ、冬馬、準、小雪などのSの主要人物が九鬼財閥の仕事で既におらず、マルギツテも軍務でない。とは言っても、

他にも生徒はいるのだ。例えば……

「全く、これじゃからFの連中は嫌なのじゃ」

不死川家の令嬢である不死川心がその一人であった。

「少しは礼儀というモノを知ら……」「おいおい、クリスマスやないか。廊下は走ったらアカンのとちゃうんか？」

「柊よ。今は此方が話しておるのにそれを遮るとはい……」「~~~~
~~~~」 煩いつ！ いいから大人しくその場に止まれ！！」

「おいクリス、お前も此方の話を聞い……」「止まれ言われても、もう止まってるんやけどな。……で、何の話や？」

「此方が有り難い話をしてやるから黙って……」「とぼけるな！！  
廊下で自分の事を騙しただろう！！」

「いい加減に……」「え？ 騙したって何の話や？」

「此方の話……」「日本では昼休みの間、廊下を走ってもいいと言う話だ！」

「聞いて……」「え？ 嘘やん？ ウチのいた地方ではそれが伝統っちゅーか習慣やったで？」

「おい……」「何？ 地方？」

「も……」「昼休みが始まるとともに大半の生徒が廊下を走り食堂へ向かっていくのは時報みたいなもんやったんやけど……おっかしいな

）。関西と関東じゃ違うんかなあ？」

「……………」

「……そうなのか？」

紗枝の言葉にクリスマスは地方での慣習の違いで納得しそうになるが……

「そんなわけですよ。もしあってもそれは悪習ですね」

「あ、ちょ、おま!？」

麻衣に嘘だとバラされた。

「……………」

「……おい、どういうことだ？」

「……………」

「……まあ今度から廊下走んの控えるようにするから堪忍してくれや」

その紗枝の言葉に、

「ゆ……………」

「許せるか……………」

ついにクリスマスの怒りが爆発した。

「此方を無視するでないわー!!」

ついでに涙目になっている心の怒りも爆発した。

「……何故不死川は怒っているんだ？」

「無視されて涙目な不死川さんもアリですね……」

「もう良い！ 此方はもう帰るのじゃー!!」

この瞬間、クリスは涙目で教室から去っていく心に気を取られ、場の流れに切れ目が生じた。

そのタイミングを紗枝は見逃さず、ある提案をする。

「許せへんのやったら、決闘でもしてみるか？」

「何……?」

「せっかくこの学校に在籍してるんやから一回ぐらい決闘してみたいと思うてな。まあ、かといってこんなしょーもないこと<sup>マシ</sup>で真剣で戦闘するのも何やし……」

「……しょうもない事ではないし、自分は戦闘でも構わないが？」

そう言いながら、不穏な闘気を体から放出し、熱心に体の柔軟を始めるクリス。この様子を見て、ここで『たたかう』コマンドを選ぶ

人はそういないだろう。

「ウチが構うつちゅーねん。てな訳で、ここは平和的にダーツで勝負するつちゅーのはどうや？」

「……それでも自分は別に構わないが、ダーツの準備はどうするんだ？ 流石に今ここにはないだろう？」

どう見ても『別に構わない』なんて事はない様子のクリスだが、ここは学校でありダーツの設備などないはずなので敢えてそう聞いてみた。

「おや？ こんな所にダーツの的が」

そう言つて麻衣が鞆の中からダーツの的を取り出す。

「おや？ こんな所にダーツの矢が」

そう言つて紗枝がポケットの中からダーツの矢を取り出す。

「明らかに確信犯ではないか！」

「これでダーツの準備は出来るな。で、ゲームの種類はやっぱり……」

「ま、待て！ 自分はまだやるとは言っていない！」

相手のペースのまま事が進んでいくのを見て、思わずクリスが止めに入るが……

「言ったやん。『それでも自分は別に構わない』って」

「む、それはだな……」

「それとも何か？ 騎士様は自分の言った事も守れへんのか？」

「騎士に二言はない！ いいだろう！ 受けて立つ！」

「それじゃあゲームの種類はゼロワンの501でええな？」

「構わない」

ということで結局決闘内容はダーツに決定した。

2 F

「それじゃ、私は部活行ってくるわ」

「おう、頑張れよ」

放課後になり、京も部活に向かうべく教室を出て行った。

最近京が部活に顔を出す回数が目に見えて増えていた。京の社交性が上がる事はいいことだし、それを京から率先してやろうとしているのは俺としても嬉しい。

「（ククク……：そうして大和は孤独を愛する私が周りと繋がりを持つとうと頑張る姿を見て、感心して惚れ易くなる……：計画通り！）」

「……とか思ってるんだろっな？」

まあ惚れ易くなる云々はともかく、感心してるのは間違いではないし、別にいいか。

「最近京のヤツ部活に出るようになったよな」

「どっという心境の変化だろうっね」

「んー？ やっぱり大和絡み？……：そういえばクリは？」

「そういえばいないな。どこいった？」

「クリスならHRが終わると同時に廊下を走って行ったが？」

「あのクリスが？」

あの真面目なクリスが廊下を走るとは……

……もしかして『昼休みに廊下を』っていう嘘をクリスに教えた

Sの転入生の柎、だっけ？ ソイツに文句言いに行ったのか？

「そんじゃ、俺もバイト行ってくるわ」

キャップがそう言って席から立ち上がる。

「今日はどこのバイト？ 川神書店？」

「そうそう。今からだと走らねーと間に合わねーんだよ」

「何故そんな際どい時間にシフトを？」

「この間に合うか間に合わないかのギリギリ感が、俺を熱くさせるんだよ」

「はあ……走らないと間に合わないのはわかるが、せめて廊下はばれない様に走るんだぞキャップ」

「あたぼつよ！」

「そこなの！？ そこは『そんなギリギリにシフト入れるな』とか『廊下は走るな』とかじゃないの！？」

「……………廊下を走るなという注意はクリスがすると思ったからしなかつただけだ」

「じゃあその間は何さ！？ とうかさっきクリスもう出て行ったって言ってたよね！？」

薫はどこかズレてる気がするなあ。あとモロのツッコミはいつも通

り冴えてるな。

「つーわけでじゃーな！」

そう言い残し、キャップは風のように去っていった。

「じゃ、俺たちも帰るか」

「だな」

ということとで満場一致で帰ろうとしたら、廊下から慌しい声が聞こえてきた。

「F組のクリスとS組の転入生が決闘するらしいぞ！」

「……………何だって？」

「決闘とはまた物騒な……………」

「とりあえず行ってみようぜ」

という事で俺達、というかまだ帰っていなかったF組の皆も含めて決闘を見に行く事になった。

その決闘場所というのは隣のS組の教室だったので移動にはさほど時間は掛かっていないのだが既に始まっているようだった。

「決闘って戦闘なのかな？」

「そうじゃねえみてーだな。教師が立会人にいねーんだし」

「見た感じ、どうやらダーツ対決みたいだな」

俺達の視線の先にはダーツの矢を的に向けて投げようとしているクリスの姿があった。

その隣にはクリスが文句を言いに行ったであろう柊紗枝がいることから決闘の相手は彼女なのだろう。

「ていつ！ ってあれ？ 巧く刺さらなかったぞ？」

「一応言っとくけどダーツに細工はしてへんで？ 刺さらなかったのは単にアンタの腕の問題や」

「むう……………これ、刺さらなかったら点にはならないのか？」

「ならん」

「えー、いいじゃないか」

「最低限のルール守らなゲームはオモロないやろ？」

「…………む、確かにそうだな。なら得点にはしなくていい」

「……あの様子から見るにクリスが劣勢っぽいな」

「クリスのダーツの実力は知らないが、変に力を入れすぎているように見えるな」

「たぶん柎に対して怒ってたからだろうな」

ダーツの矢は変に力を入れすぎると的に刺さらずに弾き返されてしまう時がある。

おそらく決闘の種目を決めたのはクリスじゃないだろう。もしかして相手はそれも踏まえてのダーツという種目にしたのか？

「そついえばダーツのための道具はどつから持ってきたんだ？ 学校にはねーだろ？」

「たまたま持ってたんじゃないの？」

「可能性はあるな」

「ないでしょ！ もしそうならそれもう確信犯でしょ！」

まあそんな事を喋りながら俺たちは決闘を観戦していた。

「これでウチの勝ちだな」

「ま、負けた……」

結果、クリスが負けた。

クリスの命中率はそれほど悪くはなかった。時々力みすぎて刺さらない時はあったが、確実に点を減らしていった。

が、パツと見た感じだと、柊の実力はクリスよりも一段くらい上の實力のようにも見えたし、負けは仕方ないか。

後は、いちいちダブルイン（最初の一投は必ずダブルに入れなければならぬルール）やダブルアウト（最後の一投は必ずダブルに入らなければならないというルール）という、別に今はしなくてもいい公式ルールに則っていた。

ここから相手はプライドの高く自分の實力に自信を持っている、言ってみればS組らしい人間だと推測できる。が……

（何か引つ掛かるな……）

「じゃ、ウチらはこれで帰るぞ」

「ちよーつと待ったー！ーっ！ー！」

「んっ」

帰ろうとする柊たちを引き止めたのはワン子だった。

「クリを倒すなんて中々やるじゃない。次はアタシが相手してあげるわ！えーっ……関西！ー！」

「ちょ！？ 関西つてウチの事か！？ あだ名安直過ぎやる！」

「じゃあ名乗りなさい！ ちなみにアタシは川神一子よ！」

「……柊紗枝や。ほなもう一回ダーツで勝負するか？」

「望む所よ！」

「待て犬！ 自分の失態は自分で何とかする！ ダーツでもう一度勝負するのは自分だ！」

「何よ！ クリは一回負けたじゃない！ だから次はアタシの番よ！ それにクリが勝てなかった相手にアタシが勝ったらアタシの方がクリより上つて事になるわよね」

「そんな事あるか！！ 犬が自分に勝てるとは思えんな！」

「何よ！ だったらどっちが勝負するかを、勝負する！？」

「いいだろう、受けて立つ！！」

そうして今度はワン子VSクリスのダーツ対決が始まった。

「……しょーもな」

「ですね。あの二人は放って置いて帰りませんか？ ちょっとやる事があるんでさっさと帰りたいんですよ」

「そやなー。帰るか……って事は？」

「……見当たりませんか。まあ靴箱までの道のりで見つかるでしょう」

そう言つて、S組の二人は帰つていった。

「……いたらキャップも敵討ちを挑んでたんだろーな」

「いや、もしかしたら『女に仇討ち挑むのって何かカッコ悪くね?』とか言つかもしれないぞ」

「いやいや、あのキャップがそんな事気にするか?」

「子供はそういう性別には変に拘るから結構気にするのではないかな?」

「確かにキャップはガキだけだなー……」

ガクトと薫は何やら変な論争を始めていた。

「……ねえ大和。もし大和があつて女子と戦つたら勝てる?」

「そうだな……。柊はダブルインにダブルアウト、公式でのルールにわざわざ則つてたことから、自分の腕に自信のあるプライドの高い人間だと予想できる。もしそうなら俺でも勝てる見込みはあるかな」

俺もダーツにはそこそこ自信があるし、相手の油断に付け込めればまだ何とかなるかもしれない。

「そうなんだ。さすが大和だね」

「ただ、そうじゃないとしたら強敵だろうな」

「え？ それってどういうこと？」

「もしかしたら、それが次の勝負のための布石だったのかもしれないってことだよ。俺や他の誰かがクリスの敵討ちをしようとした時に、油断を誘う為の布石だった可能性がある」

実際、クリスの命中率が上がると、相手の柊の得点率も、若干ではあるが上がっていた。

それにもしかしたら

「……もしそうなら、柊紗枝という女は思ってた以上に面倒な相手だぞ……」

クリスとワン子のダーツ対決を始める中、俺はそう考えていた。

「……って思ってたくれたら万々歳やねえ」

「？ 何で？ そういつのは油断してもらった方がいいんじゃないの？」

帰り道、合流した雫を交えて話をする。

「そら敵対してるんやったら油断してもらた方がええやろうな。でも敵になるとは限らんわけやし、向こうさんにウチがギブ& amp ; テイクする価値がある相手やと思っってもらいたいんや。一目置かれる存在になれば変に足元見られることも少なくなるわけやしな」

「交渉においては、格下と思われるよりも同等の相手だと思われる方がいいわけですね」

「これで繋がりがあると得やって思ってもらえれば、向こうから接触してくるやろうしな。確かあの直江つちゅう男は人脈を広げんに熱心らしいしな」

「その思惑を見破られてる可能性は？」

「そら十分にあるわ。けど見破った所で結果は変わらんやろ？」

「……ま、確かにそうですね」

もし、大和が紗枝の思惑に気付かなかったとしよう。それならば利用価値がある相手だと判断して何らかのアクションを起こしてくるだろう。

もし、大和が紗枝の思惑に気付いたとしよう。それならばギブ& amp ; テイクする価値がある相手だと判断してやはり接触しようとする。

してくるだろう。

どちらにしても、紗枝の希望通り、直江大和は柊紗枝に接触して  
ることになる。

「……とまあ、男の話はこの辺にしておいて、そういえば雲さんは  
さっきまで何してたんですか？」

「木彫りの馬とお話してた」

「……アンタそんな電波なキャラやったか？」

## ダーツ対決（後書き）

今回の話で書いたダーツに関する知識はH×Hで読んだ物を元に書いていますので、間違っている点があるかもしれませんのでご注意ください。

あと原作でクリスがダーツの時に家族に甘やかされてたつていう話があったと思ってたんですが、原作やり直してみてもそんなシーンが見つからなかったんですが、キャップでのカジノの時以外にダーツの話って出てきてましたっけ？おそらく別のゲームに出てきた話とごっちゃになったんだと思うのですが……

そういえば、大和視点で書くのが楽なのは何故だろう？

……あと薫の出番が少なくなってしまふのは何故だろう……

## 出会いと発見(前書き)

うまく膨らませられなかった話を纏めてみればものすごい文字数になっ  
てましたw

## 出会いと発見

とあるどこかの一室。外からの光も入らない暗闇の中、懐中電灯のわずかな光がその部屋の中にいる者達を浮かび上がらせる。

その中の一人が、静かな、しかしはっきりとした声で宣言した。

「ではこれより、標的『臯月薫』に関する報告会を始める。報告をしてくれ」

「今まで観察をしてきたけどいまいちだね」

「だろうな。で、成果は？」

「これです」

集まっていた内の一人が鞆から封筒を取り出し、机の上においた。  
その時

「……………」  
「……………」

声と共に扉が開かれ日の光が部屋の中に注ぎこまれる。どうやらこの部屋が暗かったのは夜だからではなく意図的に光を遮断していたからのようだ。

「　　ッ！？何者だ！？」

中にいた者達からは逆光で侵入者の姿が見えない。影から複数人いる事がわかるがそれ以外はわからない。

「問答無用！」

「ちょ！？　　ちよつと待　　！？」

制止の声をかけるが、侵入者達はその言葉を聞くこともなく突撃していった。

「　　」  
「いねで良し、と」

「いや良しじゃなくて、プレミアムに取り巻きに何させてるのよ？」

奏と小杉がいるのは川神学園にある一つの空き教室。先程まで何らかの密談が行われていて、冒頭で奏が彼女のファン達に命じて突撃させた教室である。

「邪魔な虫を取り払ってるのよ」

「邪魔な虫って何よ？」

「非公式のファンクラブよ」

「貴女の？」

「違うわよ。私じゃなくて兄さんの」

「泉月先輩の？」

「川神学園は全体的にレベルが高いからなのか、何故か前と比べてファンクラブとか少ないから油断してたんだけど、水面下でこういうのがあるのを見つけたから潰したのよ」

「ええー………というかその口ぶりだと前の学校でもあったってこと？」

ちなみに川神学園においてファンクラブが少ないのはレベルが高いからだけでなく、とあるイベントによりその必要がなくなっているからである。キーワードは『童帝』『魍魎の宴』『チチカ力湖はドシャ降り』。

「こつこつ集まりには隠し撮りの写真とかあるからこつこつのは処理しないと」

そう言つて奏は自身の持つている封筒に目を向ける。

封筒は先程そのファンクラブから没収したものであり、その中身は薫の隠し撮り写真である。その封筒の中にさらに没収したSDカードを入れておいた。

「処理つて……」

小杉の目には奏が写真やSDカードの入った封筒を処分しているようにはどうしても見えない。

どうしても自分の懐に封筒を入れているようにしか見えなかった。

「……何か言いたそうね」

「……ラブレターといい、こつこつのもしかして中学の時からやってるの？」

「……」

……そのようだった。

「……いつか貴女、プレミアムにストーカーとして訴えられるわよ」

「きよ、兄妹なんだからこのくらい訴えられないわよ……!」

多少の自覚はあったようだ。

「たとえ訴えられなくてもそういうストーカー行為を控えとかない  
といつかプレミアムに嫌われるわよ」

「……………ッ!？」

小杉のその一言で、奏はまるで電流を浴びたかのように驚いてい  
た。

「え？ プレミアムに気付いてなかったの？」

そんな奏の様子に小杉が呆れていると、

「あ、奏さんですよね？」

廊下を数少ない（おそらく）友達と歩いていた黛由紀江に声をか  
けられた

「え〜っと……………プレミアムに誰？」

「1 C 黛由紀江。私の友達よ」

「と、友達……………！何ていい響きなんでしょう」

「オラの目にも涙が溢れてくるぜー」

由紀江は涙を流しながら木彫りの馬と話をしている。それは慣れ  
れば大丈夫なのだろうが、慣れない内は傍から見ていると不気味以  
外のモノではない。

「……………えっと……………プレミアムにどう対応すればいいのかしら？」

「聞かないで。私もまだよくわかってないのよ」

「えーっと、黛さん？ 私にも紹介してもらえないかな？」

由紀江の対応に二人が困っていると、由紀江と共にいた（おそらく）友達である女子が彼女に話しかけた。

「あっ！はい！えーっとですね、こちらは私のとと友達の、臯月奏さんです。」

「1 Sの臯月奏よ」

「は、はい。私、黛さんと同じクラスの大和田伊予って言います。よろしくお願いします。」

「こちらこそよろしくね。で、知ってるかもしれないけどこっちが武蔵小杉よ」

「よよろしくお願いしますー！」

「よろしくなんだぜー」

「……なんかその馬の腹話術のせいで敬われてるのかそうじゃないのかプレミアムにわからないわ……とにかく私の事はプレミアムに敬いなさいー！」

「別に小杉の事は敬わなくていいわよ」

「ちよ！？貴女ねえ……！」

「それにしても二人ともSクラスの人なんだよね……」

ふと伊予がそう呟く。

選抜クラスであるSクラスの生徒は、実力があるのは確かだが他のクラスの生徒を見下しているような態度や言動を当然のようにするので、一般クラスの生徒からすれば話をするのにある程度抵抗感が生じてしまう。

今の伊予の呟きはそうした抵抗感から思わず出たものだが、それを気にすることなく小杉は肯定する。

「そうよ。それに私は1 Sのクラス委員長でもあるの。そしてプレミアムな武蔵家の私はこの川神学園を制圧する。そのためにまずは一年を手中に収めるべく今は動いているわ」

「まあその過程で私に負けたわけだけど」

「うぐう……！」

「それよりも二人は今から帰るところかしら？」

精神的ダメージを小杉に与えた後に何事もなかったかのように二人に尋ねる姿の様子を見て、「ああ慣れてるんだな」と伊予は思い、少しだけ抵抗感が薄まり親近感が沸いたのは秘密である。

「はい。途中で大和田さんお勧めのクレープ屋さんに寄ろうって話になりました」

「お勧めっていつでも私もまだ行ったことないんだけどね。その

クレープがそれはもう絶品らしいの。だったら一度は食べておかないと！って思っつて。良かったらお二人も一緒に行きませんか？」

少し抵抗感が緩んだ伊予が二人を誘っつてみる。伊予自身、スクラス云々よりも奏と小杉に興味が湧いたというのも理由としてはあるのだから。

「そう？ならお言葉に甘えて私も一緒に行かしてもらっつわ。小杉はどうする？」

「私はプレミアムに空いてるわよ」

「それじゃ、皆で行きましょっつか」

「友達との放課後に初めての買い食い……少し緊張してます……」

「大げさだな〜薫さんは」

「仕方ねーさ。まゆっち友達いなくて今までそんな事したことなかつたもんな〜」

「それは……何と言えはいいのか……」

「……プレミアムに不憫だわ」

松風による暴露で一同は可哀想な子を見る目で由紀江を見てしまっつ。が、舞い上がっつている由紀江はそれに気付いていない。

「でもこれからは私達と一緒に色々と遊ぼっつね」

「は、はい！」

「怖っ！？ 顔がプレミアムに怖くなってるわ！？」

「友達100人までの道は険しそうね……」

「はあう！？」

川神学園一年生は至って平穩(?)な青春を送っているようだ。

風が吹き、それによって女子のスカートがめくれた。

「シャッターチャンスは逃がさねえ！！」

その一瞬をヨンパチこと福本育郎は難なくカメラに収める。まさに神速といってもいいだろう。

「よしよし、これなら今度の宴も盛り上がるな。……ん？ あれは確か……」

向こうに一人の女子が歩いてくるのが見えた。その女子は柊紗枝。先日S組に転入してきた内の一人だ。

「Sの転入生つてレベル高えよなー。……是非ともアイツらのパンチラ写真は撮っておきたいな」

その育郎の純粹な（欲望から来る）願いが天に届いたのか、再び突風が吹き荒れる。

「シャッターチャンス！！」

紗枝のスカートが捲れ上がると同時にシャッターを切る。まさに神速のインパルスである。

「ッ！？ この、猿！！」

「戦略的撤退！！」

育郎は急いで踵を返して逃走を開始する。

途中、『バキヤッ』という妙な音が聞こえたり、途中紗枝と同じS組の転入生二人とすれ違ったりしたが、そこを気にする暇はなく足を動かし続け、育郎は何とか逃げ切ったのであった。

「ハアハアハア……やったぜ！ さーてっと、じゃあ戦利品の確認を……」

周りに誰もいない事を確認し、先程撮ったパンチラ写真の確認をしようとするが……

「つてうぎゃー！ー！？ カメラに何か刺さってるう！？」

育郎の持つカメラのレンズに深々と鉛筆が刺さっていて、鉛筆の先端が裏側にある液晶画面にまで貫通していた。

「高校で鉛筆使うヤツって珍しいよなー……つて、鉛筆う！？ 鉛筆ってカメラに刺さるほど硬かったか！？ まさかさっきの妙な音ってカメラの破壊音だったのかよ！？ くっそー！ ……だがまあSDカードは無事なら……」

カメラが壊れた事は悲しいが、育郎のカメラはデジカメであり、SDカードが無事なら今まで取った写真は無事なのだ。

不幸中の幸いではあるが、鉛筆が刺さっている場所とSDカードを収納している場所は離れているのでカードは無事なはずだ。無事なはずなのだが……

「……ッ！？ な、ない！？ SDカードがない？！」

収納場所を見てもSDカードの影も形も見当たらないのだ。先程までは確かにあったのだ。現に撮影直前、その前に撮った画像の確認をしていたので間違いはない。

「一体どういうことだ……！？」

校舎に育郎の声が響き渡った。

「 全く……これだから男は嫌いなんですよ」

一方その頃、雫とともに紗枝と合流した麻衣は育郎が走り去っていった方向を見てそう吐き捨てていた。

「何で撮られてへんアンタが文句言つとんねん。まあカメラ壊したウチが言う事やないけど……。てかあれデジカメやからカード何かしといた方が良かったなあ」

盗撮の被害者である紗枝は手の中で鉛筆を転がしている。その鉛筆は育郎のカメラに刺さっているものと同じものであった。

「大丈夫。盗つておいた」

そして竹箒とは別に雫の手にはSDカードがあった。

「はあ！？ アンタいつの間にか盗つたんや！？」

「さつきすれ違った時に」

「手癖悪いなあ……」

「さすが雫さんですね」

「だから何でアンタが威張んねん」

「でもこれどうしようか？」

このSDカードの中にはおそらくだが確実に女子のパンチラなどの盗撮写真が記録されているのだろう。それを持っていけば下手をすれば犯罪者のレッテルを張られてしまう事にも繋がる。

まあこのSDカード自体盗み取った物であるからバレればどちらにしても窃盗の罪に問われてしまうのだが。

「それなら私が責任を持って処理させてもらいま」

「今すぐ破壊やな」

麻衣が言い切る前に紗枝はSDカードを受け取り、すぐさま踏み潰した。

「ああー！ー！？ 何やってるんですか！？ 勿体ない！ー！」

「勿体ないって何や！ てか自分下心見え見えやねん！ー！」

「売ればお金になったかもしれないよ」

「あんなモン売ろう思ってもちゃんと信用できるルートで売らんかったらすぐに足ついてサツのお世話になってしまっうで？ そないな危険な橋渡れるかいな」

「ああ……せつかくのお楽しみが……」

あまりのショックに麻衣は崩れ落ち、廊下に手を付いた。まさにOrz状態である。

「……とりあえずコイツに渡さんでよかったわ」

「それには同意」

「栗さんまで!?!」

なお、この事件(?)により魍魎の宴の為の写真が足りなくなり、育郎が普段以上に張り切つてシャッターを切る事になることになるのだが、それはまた別の話……

川原で薫と一子が手合わせをしていた。

今回は対マルギツテ戦を想定し、薫はトンファーを使っていた。リーチの差を考えれば薙刀を振るう一子が有利なのだが、現在一子は押されていた。

「相手の間合いに持ち込ませるな。かといって無理に距離を取ろうとするな。その隙を突かれたら元も子もないからな」

「わかってる、わよ!」

薫の攻撃を捌きながら隙を見て一歩で自身の間合いまで距離を取り、薙刀を振るう。

その一撃は回転させたトンファーで受け流され、さらにそのまま薙刀の柄をトンファーと腕の間に挟みこまれ、固定された。

「え!?!」

動かそうとしてもガツチリと固定されており、中々動かない。それでも力を入れて拘束から抜け出そうとしていると、

「トンファーキック!」

「あつ!?!」

そこに想定外の蹴りが薙刀に放たれ、一子の手から弾き飛ばされた。

そして一子の意識が飛んでいった薙刀の方へ向いている隙を突いて腹部に蹴りを入れられる。

「ぐふっ!?!」

「武器がなくなっても戦意を捨てるな!素手でも戦えるだろう!」

「ゴホツ……わ、わかってるわよ!」

蹴りによるダメージは少ない。おそらくまだ戦えるように威力を加減されたのだろう。

「とうりゃあッ！ 蠍撃ちイッ！！」

掛け声とともに一子は蠍撃ちを放つ。それを薫はトンファーで難なく受け止めた。

「少し踏み込みが甘いな。それでは蠍撃ちとしての威力が十全とは言えない。それに技を出すタイミングも駄目だ。得物がなくなつて焦りすぎだな」

そしてすぐさま足払いで体勢を崩され、地面に叩きつけられて目の前にはトンファーの切っ先が

「　　っ!？」

一子の顔に当たる直前で寸止めされていた。完全に詰みの状態であった。

「　　今回はこれくらいにしておこう」

「ハア……ハア……ハア……あ、ありがとうございましたー！」

薫の終了の言葉と共に一子が倒れたまま一礼し、そのまま大の字で寝そべる。

「武器を持っているからといって武器しか使わないとは思わないように。あとトンファーは間合いを変えられる武器でもあるからその辺りも注意しておく事。いいな？」

「お、オッス！ それにしてもお腹空いたわ」

「確かにそうだな。……晩御飯までは時間があるし何か食べに行くか？」

「行く！」

その一言で倒れていた一子は飛び上がるように起き上がった。

というところで私達はラーメン川富家に来ていた。

「ワン子は何を頼むんだ？」

「うーんとね……アタシはこのチャレンジメニューにするわ！豚骨ラーメン7玉分を20分で完食したら五千円！お腹も膨れてお金も貰える、イツセキニチョーってヤツね」

「そんなに食べれるのかワン子？」

「これくらい楽勝だわ。薫は何にするの？」

「そうだな……餃子一人前だけにしておこう」

「え？ それだけで足りるの？」

「帰った後川神院で晩御飯があるからこれくらいで十分だろう。むしろワン子はそんなに食べて大丈夫なのか？」

「大丈夫よ！ だって鍛えてるもの！」

「それは関係ないと思うんだが……」

そんな話をしていると新たに客がやってきたようだ。

「ここだ」

「タダメシゴチだぜ！」

その内の一人の声に聞き覚えがあり見てみると客のうちの一人はキャップであった。もう一人は黒尽くめの服装をした男でキャップと仲が良いようだが私は知らない人物だった。ただどこか見たような気も……

「あれ？ キャップじゃない」

「おっ、ワン子に薰じゃねーか。二人だけでメシ食ってるなんて珍しいな」

そう言いながら当然のように私達と相席するキャップ達。

「翔一、知り合いか？」

「おう！俺の仲間達だ」

「キャップ、そっちの人は？」

「俺？ アキラだけど」

「いや、名前だけを言われても……」

「前に拳銃ぶつ放したヤツと会ったって話したろ？ 偶然近くで会って奢ってくれるっていうから着いてきた」

そんな理由でそんな人に着いて行っているのか？

「知らない人に着いてっちゃダメなのよ！ 大和が言ってたわ！」

「甘いぜ！ 前に一回会って知らない人じゃなくなってるからセーフだ！」

「はっ！？ 言われてみれば……」

「何を意味のわからない討論をしているんだ……」

……意味の分からない討論はともかく、初めて会う人ともすぐに仲良くなれるというのはキャップの長所でもあるだろうし、まあよしよししよう。

「あ、俺ラーメンで油多めの麺柔らかか目味濃い目でトッピング全部乗せで！」

「俺はチャレンジメニュー一人前」

「あれ？ アナタもチャレンジメニュー？」

「と言うとお前も？」

その瞬間、ワン子とアキラとやらの間で火花が散ったように見えた。

「アタシの方が早く食べれるわ」

「いや、俺の方が早いね」

「だったら勝負する？」

「いいね。だったら負けたほうが勝った方に飲み物奢るってのでどうだ？」

「乗ったわ！」

「仲良くなるのが早いな」

まだ互いの自己紹介もまともにしていないというのに……

そんな事を考えながら二人の言い争い、というか小競り合いを見ている間に全員分の料理が到着した。

「あつついわねー……フーフー」

「ワン子相変わらず悠長に喰うな」

「それで間に合うのか？」

「これくらい余裕だつてばー」

「とりあえず自己紹介しておくか。俺はアキラ・N・ホークアイ。まあアキラでいいぜ」

「あれ？外人さん？でも名前とか顔とかは日本人っぽいわよね……？」

「何でもハーフらしいぜ。ここに来る前は世界を転々としてたんだ」と

「……どこかで見覚えがあると思ったが、もしかしてSの転入生の保護者か？」

見覚えがあると思ったら、Sの教室に入り浸っているという男が。冬馬や準、あずみさんから話を聞いた事があったので思い出せた。……まああずみさんの話というよりも愚痴だったが。

「そうだぜ。まあ形だけだがな。それより次はそつちの番だぜ？」

麵を豪快に啜りながら自己紹介を促してくるのでそれに応えることにする。

「アタシは川神一子よ。よろしくね」

「私は皐月薫だ。私達はキャップとは幼馴染なんだ」

「一子に薰だな。よろしく頼むわ」

「で、俺がコイツらを含めた10人からなる風間ファミリーのリーダーってわけだ」

「ふーん。ま、そこはどうでもいいや」

「よくねえよ!! 重要だろ!?! なあワン子!!」

「ガツガツツ!ズリユズリユ!!」

ワン子は既に無心になって豪快に食べ続けている。

「聞けよ!」

「もう本腰入れて食べ始めているから聞こえてないな、これは」

普段なら食べている時でも話は聞くのだが、今回は勝負でもあるから仕方ない。

「んじゃ、俺も負けられないように気合入れて食うかな」

「頼むぜ!。チャレンジ失敗したら俺金払えねーからな」

「払えないって……」

「俺は一銭も持って来てないからな。これ常識だぜ」

「安心しろ。俺も持ってきてないからな。この五千円が今の全財産になる」

「それで安心しろと言われても無理だろう。というかそれでよく奢ると言えたな」

「ま、その場のノリでな。あとは詫びと口止め料にも丁度いいかと」

「詫びと口止め料？ 何の話？」

無心になって食べていたワン子が話に食いついた。

「引ったくりの足止めのために銃ブツ放したんだがそれで翔一に迷惑かけたみたいだな。これが詫び。で、この国じゃ銃持ってたら捕まるんだろ？という事で賄賂代わりに奢ってやろうと思ったんだよ。これが口止め料な」

「だったらそれよりも俺銃見てえんだけど！」

「マジで？なら奢りはナシってことで」

「それとこれとは話が別だぜ！」

「じくっ、じくっ、じくっ」

そうこうしている内にワン子が丼を傾けて汁を飲み干そうとしていた。

「ぶはーっ！ 完・食ー！」

「18分17秒だな」

「おお、さすがワン子！時間内に食い終わったみてーだな。あとはアキラだけだぜ」

「え？ もう食い終わってんだけど？」

「なん……だと……？」

アキラの丼を見てみると中は空で、きちんと汁も飲み干されていた。

「いつの間に……」

「記録的には18分ジャストってトコだ」

「アタシが負けた……？」

早食い勝負はワン子の負けだった。

「つーわけでビール追加で」

「ちょ！？そこでお酒頼むの!？」

「飲み物は飲み物だ」

「大人気ないな本当に……」

「容赦ねーな」

「勝負なんだから仕方ねー」

「というか年齢的には大丈夫なのか？」

「この国での飲酒は確か20歳からだろ？だったらNo problemだ」

「あ、今の発音外人っぽいな」

確かにそうだが、どうでも良かった。

「あ、アタシも追加で野菜頼もつかしら」

「ワン子、まだ食べるのか」

「油っぽいもの食べたから野菜もバランスよく食べないとね」

「よく食えんな。俺はもう食えねえよ」

「ワン子、大食いならアキラに勝てるぜ」

「だったら大食いで勝負よ！」

「ぜってーヤダ」

そんな感じで楽しい時間は過ぎていった。

それは、由紀江が大和の部屋を訪ねた時の第一声だった。

「あの、薫さんの好みってどんな人なんでしょうか？」

「……薫の好み？それって……」

「あ、あのですね！友達に薫さんが気になっていている人がいて、その子のために聞いておこうと思ひまして……」

「友達思いのまゆっちなんだぜー」

（これは……もしかしてまゆっち、薫に惚れたのか？）

実際には由紀江は友達の奏の為を思つて聞いているのだが、この言い方といいドモリ具合といい、そう邪推されても仕方ないだろう。

「うーん……でも薫の好みなんてわからないなあ……」

男同士でそういう話がないというわけではないが、考えてみると薫の好みについては余り聞いた覚えがなかった。

「でも髪の毛の長い子が好きなのかな？」

「それは真剣マキケンですか？」

「た、多分……」

(アイツの持つてる秘蔵本とかDVDは大抵が長髪だった気がするし……)

「あとは近親相姦とかその辺りは身体が受け付けないみたいだよ」

押入れの戸が開き、中から京が現れた。

「京！？いつの間に!？」

「ひ・み・つ。大和がヤドカりに挨拶する前とだけ言っておこう」

大和がヤドカりに挨拶したのは学校が終わって帰ってきてからすぐの事。つまり……

「それって俺が帰ってくる前から隠れてたって事じゃねーか!!  
つか理由がなんとなくわかるのが嫌だが何で押入れに入ってたんだよ」

「大和が帰ってきて一人きりで寂しいだろう時間にベストなタイミングで私が大和とイチャイチャするために決まってるでしょ?」

「じゅあ何でこのタイミングで出てきたんですか？」

「まゆつちと二人きりで大和が野獣にならない可能性もないから」

「ならねーよ！」

「それはもちろんわかってるよ？それでも心配になるのが恋する乙女心なの。私を安心させるためにも付き合おう」

「友達同士で我慢してください。というか何で薫の趣味趣向なんて知っているんだ？」

「もしかしてヤキモチ？だったら結婚だ！」

「断じて違う！だからお友達で」

「いけず……。それはね秘密基地にある姉物とか妹物とかの近親相姦物に薫が全く手をつけてないから」

「ッ！？」

「え、ええええええええええ！？ 秘密基地にそんな物が……！？」

由紀江がもの凄く驚いているが、大和も内心動揺していた。

（何故京が秘密基地にエログッズがある事を知っている！？ とうか何故使用状況まで知ってるんだ！？）

「秘密基地事情なら私以上に詳しい人はいないと自負してる」

「それ今の話と関係あるのか？」

「ちなみに大和が珍しく持ってきてた妹物は私が回収しといた」

「…… H A H A H A、俺が妹物を持ち込んだなんて……何を言ってるんだ京？」

「大丈夫。妹物以外のヤツも大和が持ってきてたのとか大和が気に入ったのとかを時々回収してるから大和の趣味趣向は把握済みだよ（はーと）」

「なん……だと……!？」

（道理で俺の持っていたのが幾つか無くなってたのか……ガクトかモロのどっちかだと思ってたが……）

「借りたヤツは返すよ、私の体で。もう十分に予習はしたから大丈夫！」

「大丈夫じゃねーよ！」

大和と京がいつものやり取りをしている最中、由紀江はというと

……

「あうあう……なにやらとんでもない事を聞いてしまった気がします……」

「オラ全然気付かなかったよー。つーか一体どこにあるんだろーねー」

顔を真っ赤にしながら松風と二人（一人？）話していた。  
その様子を見て二人はアイコンタクトを取る。

「……（まゆっち今度一人で基地行った時多分探すね）」

「……（俺もそう思う）」

そして温かい目で由紀江の事を見つめてみた。

「……あれ？ 何でお二人ともそんな温かい目で私を見ているんですか？」

「目と目で通じ合うなんてどこの熟年夫婦だよって話だよね」

「夫婦……なんて好い響きなんだ！結婚しよう大和！」

「だが断る！というか何で今日はいつも以上に迫って来るんだ！？」

「私と違う女と同じ部屋で二人きりになった大和への嫉妬心シエラシーが私を熱くさせるの！」

「あの〜どうやら私はお邪魔なようですよ松風。どうしましょう？」

「ここは戦略的撤退だな！。矛先がこっちに向く前にさっさとお暇しよっぜー」

「ということ失礼します！」

「ちょ、まゆっち逃げるな！せめてこの状況を何とかしてからに

「まゆっちのお膳立てもあることだし、ここは愛を深めよう！」

二人の声を背にしつつ、部屋から出た由紀江は一つ溜め息を吐いて、小声で松風と会議を開く。

「(奏さんのためにと思い、思い切って聞いてみましたが、これは……)」

「(事實は時に人を傷付けるものなんだってオラ再認識したぜ)」

「(これは言えない……！ 薫さんは身内を恋愛対象として見れないなんて事は……！)」

「(仕方ねえよ。言ったら奏っちは確実に傷つくだろーし、こういう気遣い出来るトコがまゆっちの良い所なんだぜ)」

しかし由紀江は思い至らなかった。

中学時代、薫宛てのラブレターを秘密裏に処分して、小杉にストーカー(仮)認定まで受けた奏が、薫の嗜好を知らない事があるだろうか？

由紀江の話にも普段通りの振る舞いを見せている。知りたい事なら突っかかってきてもおかしくはないのにも関わらずだ。

その証拠と言えるかはわからないが、実際、奏の今の髪型はロン

グヘヤーである。

もしかしたら奏は奏なりに少しでも女として見られようと頑張っているのかもしれない。

「あ、危なかった……」

まゆつちが部屋から出て行った後、何とか京から貞操を守り切り、追い出す事に成功して、ホッと一息吐く。

「それにしてもまゆつちが薫をねえ……」

まあ薫はまゆつちの世話を結構見てたからおかしくはないか。まゆつちに妹を紹介して友達同士になったらいいし。

ただ、本人に自覚はないけど、薫はそこそこモテる。そこがまゆつちにとってどう影響が出てくるか……

「……そういえば薫って前に振られたことがあるって言ってたよな？」

容姿端麗文武両道一家に一台の薫を振る女ってどんな奴だ？ というかあの薫が好きになる女ってどんな人だろう？ と

そんな事を考えていると、

「邪魔するぞ」

と、薫に窓の方から声をかけられた。あれ？いつから居たんだ？

「今、窓から入ってきたんだ」

心を読まれた。いや、表情に出てたんだな、きつと。そうだ、そうに違いない。

「で、どうしたんだ？」

「ワン子の修行でかくれんぼ中なんだ。ということどこに潜伏する事にした」

「修行とは思えない内容だな」

「範囲は川神市内だ」

「広すぎないかそれ？」

「幾つか条件を出したから、その条件から絞っていけば島津寮か学校かのどちらかに行き着くはずだ」

「ワン子が頭を使うとは思えないんだが……」

「その時は勘でここを当てればいい」

「いいのかそれで？」

「いいんだよ。頭を使うにしても直感を信じるにしてもそういう行為に慣れさせておく。どういつ時に頭を使うか、直感を信じるか、という取捨選択が出来るようになるれば、それはワン子の武器になるはずだ」

「そんなもんか」

「そんな物さ」

そこで会話が途切れた。別に気まずい空気が流れるわけでもないし、放つといっても勝手に話題は浮かんでくる。

しかし俺はここで、さっき思い出して気になっていた事を聞いてみる事にした。こういうのは本人に聞くのが一番手っ取り早い。

「あ、そういえば聞きたい事があつたんだけどさ」

「何だ？」

「前にフラれたことがあるって言ってただろ？その相手ってどんな人なのかと思つてな」

「……それを聞くか。フラれた相手の事を話すのは少々恥ずかしいモノがあるのだが」

「いいじゃん昔の話なんだしさ。皆に知られたくないなら黙つておくし」

ここで嫌がるようなら諦める。知りたいとは言つても薫が嫌がる

のを無理矢理聞きだす程のことでもないしな。

「……………まあいいか。どんな人と言われても……………大和も知っている人だぞ？」

「へ？知ってるって…………？」

俺の知らない人だろうと思ってたからどんな人物像なのかを知りたかったのだが、まさか俺も知ってる人だとは…………

「……………思い浮かばない。……………誰だ？」

思い浮かばないので答えを聞いてみる。

すると、納得は出来るが驚きを禁じ得ない相手の名前が飛び出してきた。

「モモちゃんだよ」

……………

「ええっ！？姉さんに!？」

「確か預けられていた川神院から実家の方に帰る直前に告白したな」

「し、知らなかった……」

薫が実家に帰った時は確か小学校卒業辺りだったからその頃に……ん？

「ちよつと待て。あのフラれたっていう話って中学時代の話じゃないのか？」

「私は『昔』としか言っていないが」

……言われて見れば確かに“昔”としか言っていないが……

「まあ、今思えばあの時私がモモちゃんに抱いていたのは、恋などではなく憧れだったんだが」

「憧れ？」

「そう、憧れ。憧れを思春期特有の感情で恋だと勘違いしていたのだと思う」

今も一応思春期だろ、とツツコミたくなつたが、我慢した。

「じゃあ今は姉さんのことを好きだとは思っていないのか？」

「……どうだろう？もちろん好きは好きだがこれが恋愛感情なのか



黒いナニかが杯の底から湧き出てくる

ソレが湧き出る速度は徐々にではあるが上がっている

少しずつ、少しずつ、ソレは貯まり続けている

以前と比べ、目に見えて増え続けている

だけど杯から零れるまで、まだ余裕はある

大丈夫。まだ、大丈夫……

## 出会いと発見（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。

今回の話を簡単に纏めると……

- ・一年生組の動向
  - ・閨とヨンパチ
  - ・ラーメン屋
  - ・薫の好み
  - ・薫の告白事情
- の五項目から成っていました。

心配されている方もいられるかもしれませんが念のために言っておきますが、一番最初の奏の取り巻きに襲撃されたのは閨の面々とは違いますのでご安心をw

ご意見・批判などがありましたら、遠慮なく感想の方にお書きください。

## カードファイト

どこかの山奥に一軒の家があった。

昔ながらの日本家屋という雰囲気醸し出しているこの家の一室で二人の男が向かい合っていた。

「お主たちは何を遊び呆けておるんじゃ」

一人はどこか貫禄のある和服を着た老人。暦老中会の一人で世間的にもそれなりの権力を持つ霜月老。

「んなこと言われてもなあ……」

もう一人は胡坐をかいて座る服装が黒尽くめの若者。閨の一人であつて戦場にて“鷹の目”と恐れられた狙撃手であるアキラ。

「さつさと彼奴を消せ。儂等からの任務だけがお主たちの存在意義なのじゃぞ」

「それなんだがな、わからない点があつてな。何でアイツを殺すんだ？ アイツって同じ組織の人間だろ？ だったらうまく利用した方がいいんじゃないか？」

アキラが疑問を投げ掛ける。同じ組織の、形式的には部下にも当たらない事もない者を何故わざわざ消そうとするのかが理解できなかった。

故に本人に直接聞こうと思ったのだが、

「フン、何も知らん若造が。彼奴はこの“暦”にはいかん存在じゃ。故に消す」

返ってきた答えは決して明瞭とは言えない内容のみ。

「だから何でだよって話だろーが。大体」

「言い方が悪かったようじゃな。彼奴は“暦の一族”にとって禁忌の存在なのじゃよ」

「ハア？ どういう事だよ？」

「これ以上はお主たちが知る必要はない。さっさと消してい」

それ以上口を開こうとしない翁を見て、アキラはこの事についてこれ以上追求しても無駄だと悟る。

「……まあそれはまだいいが、それ以上に条件がきつ過ぎんだよ。周りの被害なく消すって無理だぜ？」

「それを何とかするのがお主ら“閏”の仕事じゃ」

問題を直視せず、質問にも答えず、ただやれの一点張り。

(こりゃガキのワガママと変わんねーな、おい)

内心そんな事を思いながらアキラは大きく溜め息を吐く。相手に対する不満を隠す気などないようだ。

「マジダリイ……」

「何か言ったか？」

「いーえ、何でも」

訝しげな目でアキラを睨む霜月老。その視線に対してアキラはどこ吹く風な様子で対応していた。

「……まあいい。で、“聞”の連中に怪しい動きはあったか？」

「特にねーな」

「ならば良い。これからも監視しておけ」

「はいはいわかりましたよ、クライアセント 依頼人殿」

そう言い残してアキラは部屋から出て行った。

そしてアキラが去った後、残された翁はぼつりと一言呟いた。

「……あ奴ももう潮時かのう」

## 川神学園

ここ最近、学園内で頻繁に争いが起こっている気がする。まあ、決闘にまで行った物は少ないのだが。

特にF組とS組の両クラス間での小競り合いの数は群を抜いている。

例えば、先のクリスVS柊のダーツ対決（Sの勝ち）に始まり、ワン子&amp;クリスVS不死川嬢&amp;小雪の400メートルリレー対決（Fの勝ち）、ヨンパチVS小鳥遊の賭場での賭けポーカー対決（引き分け）、などなど数えるのが面倒になるくらいあった。学園内を含めなければ島津寮でやったワン子VSマルギツテの梅の実対決もあったしな……

……ちなみに最後に上げたヨンパチと小鳥遊の勝負での種目は実はポーカーではないという噂を聞いたので大和に興味本位で尋ねてみれば、真相はなんとというか、女子のある“物”の色当て対決というしょーもない勝負内容だったので何か聞いて損した気分になった。

だがそんなイザコザがある風景も日常になりつつある。柊がクリスをイジってケンカの一步手前になるのはもう日常の風景になって

しまっているし……

こういうイザコザが日常的に起こっていることに悩むべきか、まだ平和的な方法で起こってることに安堵すべきか……

このままだとFとSの間で大きな戦いが起こりそうな気がした。まだ火種の段階だが用心しておくに越したことはない。

そして今もまた、比較的平和な方法でイザコザが起こっていた。

「ファイナルターン」

「何だと!？」

スグルとS組の小鳥遊によるカードバトル。何故この二人が戦っているのかはよくわからないが、その戦いは終わりを迎えようとしていた。

「淫魔サキュバスを召喚! サキュバスの効果で貴方のフィールドにいる不死身の戦士ジークフリートをターン私の支配下に移動します。さらに戦女神ヴァルキリーの効果発動! 支配下に置いたジークフリートを生贄に捧げ、戦女神ヴァルキリーの攻撃力は+1000。ヴァルキリーで攻撃! これで私の勝ちですね」

「バカな!?!? この俺が……!?!?」

スグルVS小鳥遊によるカードバトルが決着したようだ。

「まさかスグルがゲームで負けるなんて……」

「クソ……！ まさか三次元女子などに負けるとは！」

「結構危なかったです。今回は引きの運が勝敗を分けましたね。まあ男にしては中々楽しめました」

「ほほほ、流石はSクラスじゃ。たかが札遊びとはいえ、単なる庶民では選民には勝てんという事が証明されたようじゃな」

見物していた不死川嬢がそう高々と言い放つ。ちなみに今回不死川嬢は何もしていない。

「リベンジなら嫌々受け付けますよ。まあ相手が女子なら喜んで受けますが」

受け付けても嫌々なのか……

「……モロ！ 俺の仇を取ってくれ！！ お前なら取れる！」

「ええ！？ 何で僕なのさ！？」

「一度直に戦ったからわかるが、お前のデッキと奴のデッキは相性がいい……はずだ」

「それ絶対嘘でしょ！！」

モロとスグルが口論しているのを見て不死川嬢があからさまに嫌な顔をして口を開く。

「リベンジするのなら早くするのじゃ。此方らはそこまで暇ではないのじゃぞっ」

「まあ昼休みも限られてますしね。……それにしても関係ないのに自分の事のように威張る不死川さんも可愛いですね……」

「少し待て！ もう少してモ口を説得出来るんだ！」

「いや無理だよ！ 僕じゃ勝てないって！」

二人の意見はいつまで経っても平行線で話が進まず、いつまでも口論を続ける二人にうんざりしたのか、不死川嬢がイライラした口調でこう言った。

「ええい！ ならば誰が小鳥遊の相手をするか、此方が決めてやるう！」

「いいですよ。出来れば女子をお願いしますね」

「おい！勝手に話を進めるなこの三次元女ども！！」

スグルが色々と抗議の声を上げるが、聞き入れる様子はない。というか小鳥遊の発言がさつきからおかしい気がするのは私だけなのか？

「そうじゃの……Fクラスにおいて、Sクラスの相手足る文武共に優れた者、といえ……皇月辺りが適役じゃな」

「……え？」

何故そこで私の名前が出てくるのか全くわからなかった。そもそもカードゲームに武は全く関係ないだろうに……

「という事でリベンジの相手は皐月さんに限ります」

「ちょっと待て！ 何故そうなる！ 皐月は今全く関係ないだろうが！！」

「だって不死川さんが決めた事ですし……」

「だから何でその女の決めた事に従う必要があるんだよ！！」

「女の子の言う事はある程度聞いた方が好感度が上がりやすいのはわかるでしょ？ 二次元でもそうですし」

「それは、確かにそういう面があることは否定出来ん……」

「そこで納得しちゃうの!？」

「だが！ ただ相手の言う事を何でも聞けば好感度が上がるという考えは浅はか過ぎるぞ！ それは次元を隔てた嫁達に対する侮辱ではないか！！」

「確かに先程の理論が全てに通用するわけではないですが、そういう態度を取っておいた方が後々いい雰囲気になる女の子もいるはずです。そのあたりまで否定するわけではないですよね？」

「いつの間にか論点ズレてるよ！」

「一体こ奴らは何を話しておるのじゃ……」

何故対戦相手云々の話で好感度云々の議論になるのだろうか……

「……仕方ない。臯月よ！俺の代わりにあの三次元幼女を叩きのめしてくれ！」

「……  
という事で何故か私がスグルの仇を討つ話になってきているのだが……」

「いや、私はそのカードを持っていないのだが」

「私はそのカードを持っていなかった。まあルールは先程の戦いを見てなんとなくは理解したのだが。」

「ええ！？　じゃあそもそも勝負にならないじゃないか！？」

「……いや、それは好都合だ」

「え？それってどういう……？」

「スグルがそう呟くとモロの疑問に答えることなく小鳥遊に問いかける。」

「という事でリベンジは挑むが、当の本人が初心者だ。少々時間を貰うがいいな？」

「此方はかまわんぞ。いくら時間をかけた所でFではSには勝てん、という証明にも繋がるわけじゃなしな」

「不死川さんがいいなら私もいいです」

小鳥遊……いくらなんでも従順すぎないか……？

「ならばいつどこで勝負する？」

「時間を空け過ぎるのもなんですし、今日の放課後、この教室で、  
というのはどうですか？」

「いいだろう！」

「……あの、私の意見は……？」

私の些細な呟きも無視され、決闘の話は決まっていた。

そしてあの二人が自分の教室に戻っていったから、私はスグルと  
モロからこのカードゲームについて色々と教えてもらっていた。

「ルールなどは今教えた通りだ。分からない所はあるか？」

「いや、問題ない」

「なら早速実践だ。デッキはモロのを使え」

「はい、これ僕のデッキ。バランスタイプだから薫に合ってるかも  
ね」

「ああ、ありがとう」

モロから渡されたデッキの中身を確認する。

「初心者が奴に勝てるとは思わんが、ビギナーズラックというものもある。相手が油断している内に一気に倒してしまえ！………と言いたい所だが、それだけでは奴には勝てん」

「ならやはりモロが戦った方がいいのでは？」

「でも相手は薫を指名してきたわけだしね」

「故に今から放課後までの間に俺とモロが鍛え上げてやる！ ユニットの特性やスキルの効果的な発動方法など、みっちり叩き込んでやるっ！」

「何……だと……！？」

「僕も教えるの！？」

「ククク……既に自分のスタイルが決まっているのならそこからの指導は難しいが、お前は言ってみれば白紙の状態だ。何色にも染まる。俺の技術全てを貴様に叩き込んでやるっ………」

こうして、私は短期間集中トレーニング（ただしカードゲームの）を受けることになった。

川神駅で黒尽くめの男、アキラがだらだらと歩いていた。

「はあ……爺さんと話してたらこんな時間になっちまった。時間を無駄にした気分だぜ……」

アキラはそう呟くと、溜め息を吐いた。霜月老との話が有意義なものとは言えなかったことが相当気に障っているのだろう。

「……ここもそろそろ潮時か……？」

その時、アキラの懐から銃声が鳴り響いた。

「ん？ メールか？」

……いや、正確には携帯の着信音に設定していた銃声音だったよ。うだ。ディスプレイを見ると新着メールが一通。

「姐御からか？ 珍しいな。何かあったのか？」

メールの中身を見てみると……

『少し伝えるべき事があったのを忘れていたわ。卯月からの伝言よ。』  
『こちらの任務を終えたのでそちらに加わる』との事。半月ぐらい前にそう言っていたから正確にはもう既に加わっているはずなのだけれど、伝えるのが遅れて悪かったかしら？ いえ、それでもちゃんと伝えたわけだし、良いのかしらね？ とりあえず私はちゃんと伝えたわよ』

.....

「伝えんの遅えだろソレ!？」  
思わず叫んでしまったアキラに周囲の人達が一瞬反応したが、すぐさま何事もなかったように動き出す。

そんな周囲の状況などどうでもいいのか、アキラは再び大きな溜め息を吐いた。

「……ま、いいか。つか卯月の奴どこにいるんだ？」

この伝言が半月前にあったという事は既に卯月が川神市に来ていてもおかしくない。しかし、向こうから接触してきた様子もない。

「……それこそどうでもいいか。というか卯月ってどんな奴だったかなー？」

前に何度か会った事があったはずだがいまいち思い出せない。筋

骨隆々の黒光りしたオツサンだったか、いや妙齡の美女だったか、それともランドセル背負ったガキだった気もする。アキラには卯月の外見が思い浮かばなかった。

「……ま、それもどうでもいいか。それより暇潰しに行くか」

どうでもいいで済ましていい事ではないのだが、アキラは考える事をやめた。すぐに思い出せない事は時間をかけても思い出せないのだから仕方ない。

そして、暇潰しの為に放課後の川神学園に向かったのだが……

「私のターン！ スタンド&amp;ドロロー！  
運命の騎士を召喚！ さらにナイトの効果によつて運命の神官をデッキから特殊召喚！ ビショップの効果『戦場の祈り』によつて、次の私のターンまでの間、自陣ユニットの攻撃力、防御力を1000ずつアップさせる！ そしてナイトで攻撃！」

「守護女神アイギスでガードします！」

「運命の歩兵の効果発動！ 『連撃』によつてナイトの攻撃がさら

に+1500！ これによりナイトの攻撃が守護女神アイギスの防  
御を突破し攻撃が通る！」

「くっ……まさか男が私とここまでやり合えるとは……！！！」

「男が”じゃなくて“初心者が”じゃないの？」

「ですがそれもここまでです！！ 私のターン！ スタンド&am  
p・ドロー！ 戦女神ヴァルキリーを召喚！」

「……何この面白そうな状況？」

2 Sの教室に見知った人間が誰もいなかったので隣の2 Fの  
教室に来てみたのだが、何やら大層な盛り上がりを見せていた。

「うおおおお！！ 燃えてきたぜ！ ……ってアキラじゃん！」

「よう翔一。で、これ何やってんの？」

「決闘だよ！ ってアキラって学園の決闘システム知ってたっけ？」

「一応説明受けたから知ってるぜ。ということはあのクソガキと薫  
が決闘か……」

翔一と話をしながらアキラは周囲を見渡す。すると見知ったメガネ女子（紗枝）がSのハゲ（準）と見知らぬ男子生徒（卓也）と話をしている姿が見えた。

「見える……！ 二人の決闘者としてのオーラによって具現化されたユニットキャラたちのビジョンが……！」

「見えるわけないでしょ！？ 何言ってるの！？」

「ハゲがボケるなんて珍し……くもないか。まあウチにも見えるんやけど……」

「嘘でしょ！？ 柊さんにも見えてるの！？」

「いやいや、たまにはウチもボケ入れとかんとな。このご時勢ボケとツッコミどっちも出来んかったら大変やで〜？」

「いやいや、何が大変なのかわからないからね！」

「へー、モロが仲間以外の女子と普通に喋ってるのって珍しいな。ツッコミ同士で気が合ったとかか？」

「何か楽しそうだな……俺も入れれば良かったか？」

「ん？ 入るって何の話だ？」

「何でもねえよ……って決着ついたみたいだぜ」

アキラの言う通り、戦いの決着が着いたようだった。

「危なかった……何とか勝てたか……」

「まさか……男に私が負けるとは……」

「いや男は関係ないでしょ！？ 普通初心者に負けたって落ち込む所じゃないの!？」

カードバトルの結果は、薫の勝利であった。

「初心者だと聞いて油断しました。まさかここまでの腕前とは予想外すぎです」

「それでも俺達の勝ちは揺るがんど。油断に付け入るのも作戦の内だからな」

「ということですそろそろ私は帰るがいいか？」

「ああ、今回は悪かったな。助かった」

「待って」

今まで麻衣の横で黙って勝負を見ていた雫が薫を引き止めると、自分のワッペンを叩き付けた。

「麻衣の仇は私が取る」

「いや、私には戦う理由はないのだが……」

「決闘の報酬、あなたが勝ったら私は一日メイド姿で登校する」

その言葉にギャラリーが驚き、テンションが最高潮になる。

「なんだってー！？」

「栗さん！？ 真剣マキで言っているんですか！？」

ざわざわ、とギャラリーが騒ぎ出す。そんな中で薫はというと、

「……いや、私にはそういった趣味はないのだが……」

そう言いながら後頭部を搔いていた。

「まあいいだろう。受けて立つ！」

が、その目はヤル気に満ち満ちており、そう宣言すると自分のワッペンを栗のワッペンに力一杯重ね合わせ、

「思いつきりそんな趣味があるじゃないか！！」

「ぐはっ！？」

いつの間にか現れた百代に思いつきり後頭部を殴られた。

「……モモちゃん？ 何故ここにいるんだ……？」

「そんな事はどうでもいい！ それより私に断りなく女の子を侍ら

そうなどと許されると思ったか!！」

「怒るトコそこなの!?!」

後頭部へのダメージで突っ込めない薫に代わって思わず卓也が突っ込みを入れたが、百代は気にする事はなかった。

「だが、薫が勝てばあのメガネっ娘のメイド姿が撮れるわけだよな。ゼッテェ勝てよ薫!」

女子のメイド姿がカメラに収められるかもという事でテンションが上がる育郎。

しかしそこで雫がこう言った。

「……何を勘違いしてるの? まだ私の話は終わってないよ」

「ひょ?」

「私が勝ったら」

「  
あなたには一日女の格好で過してもらおう」

「……え？」

その雫の一言でギャラリーのテンションが天元突破した。

「薫の女装姿だとおおお！？ ちよつとトイレ行ってくるー！！」

育郎がそう叫び、教室からダッシュで飛び出し、

「本格的な男の娘ということだな。……二次元でないのが惜しいが……」

スグルが静かな口調でそう考察し、

「薫が女装したら……大和を盗られるッ!？」

京は将来の伴侶（仮）が寝取られる可能性に行き着き、

「何でそんな結論になったの!？」

卓也はそれにツツコミを入れ、

「クリス、顔赤く……」

「な、なっていない!!赤くなんてなっていないぞ!!」

クリスは京の発言からそっち方面の想像をして顔を赤らめ、

「さあーっ!!カードバトル第二戦!今度は我等が2 F薫と

2 Sメガネ女子の対決だ!どっちに賭けるよ!!」

「薫に3000!」「雫に5000や!」

翔一は盛り上がってきた場に乗じて賭けを始め、

「コラー!賭け事はダメですよー!」

真与は賭け事を始める翔一を嗜めようとして聞き入れてもらえず、

「ああ……注意を促す委員長も可愛い……ハアハア」

準はそんな真与の様子を見て興奮し、

「ハアハアハアうるさいぞハゲ！」

「ぐふうっ!？」

百代はそんなハゲに制裁を加え、

「女装が似合っても男ならNGです」

「私はどちらでも構いませんがね」

麻衣と冬馬はそれぞれの意見を口にした。

「いや、ちょっと待……」

異様な盛り上がりを見せる教室に薫は決闘を受けるのを考え直した  
い旨を伝えようとするが……

「いや、待てへん。アンタはもう受けて立ってもうたから拒否は  
出来へん。そうやる？」

「うむ。一度成立した決闘は取り消す事は出来んからの」

「鉄心さん!？ いつの間に!？」

それを紗枝に遮られ、学長である鉄心のお墨付きを頂いてしまった。

「じゃ、早速デュエル開始するよ」

「……………こ、この勝負、負けられない!!」

こうして、決戦が始まった

## カードファイト（後書き）

ということでは薫の運命はどうなるのか！？ 次回に続かない？

なお、この話で行われていたカードゲームは、自分の知っているカードゲームを色々混ぜてテキストに作り上げたもので、『これルールとかどうなってんだ？』とかの疑問には一切お答えできません。自分もそこまで考えてないのでそういった質問などで自分を虐めるのはご遠慮ください。

## 変装

黒いナニかが杯の底から溢れ出てくる

ソレは今や杯から溢れ出ようとする程まで量を増やしていた

が襲つ

零れそうな程満たされているのに、途轍もないほどの渴き

溢れているのに渴いていく。そんな矛盾に違和感を抱くが、  
どうでもいい

ひとまずナニかを零れさせないように、渴きを充たそう

大丈夫。 ナニかを捨てる／渴きを充たす 方法は無数に  
在るのだから

島津寮

「 州にて新たなミステリーサークルが発見されました。今回  
発見されたミステリーサークルは山を幾つも切り開かれた大規模な  
ものであり、その影響で野生の熊が食糧を求めて人里に  
」

「物騒だなー」

「そつだね大和、結婚しよ」

「断る」

朝のニュースを見ながら、俺たち島津寮の面々はいつものように  
朝食を食べていた。

「そついえば日本でも何年か前に人里に熊が何回もやってきたとい  
うニュースがありましたよね」

「味を覚えたのか何度も民家に侵入したっていうヤツか」

「少女と遊んだりもしてたらしいな」

「調子に乗りすぎだろその熊」

「熊か……（新しいクマのぬいぐるみが欲しいなあ〜）」

「あれって結局どうなったんだっけ？ ゲンさん知ってる？」

「俺に聞くんじゃないよボケ。……確か最終的に駆除されたはずだ」

嫌がる素振りを見せながらもちゃんと答えてくれるゲンさん。

「まあ駆除されるのは仕方ないですよね」

「まあオラみたいに優秀なら駆除なんかされねーけどな。……ところでクリ吉とクマ吉ってちよつと似てね？」

「知るかボケ。単なる一文字違いだろーが」

「そんなことより俺はミステリーサークルの方が興味あるぜ！」

キャップがキュウリのお新香を口に入れながら話題を熊からミステリーサークルに変えた。

「そういえば最近ニュースでもよくやってますよね。世界中に同じようなミステリーサークルが現れたとか」

「イタズラにしては手が込んでるよね」

「世界規模のイタズラとかパネエよな。オラでも出来ねえよ」

「いや、松風は単なるストラップだろう……」

「単なるイタズラだとまだいいんだがな。そのミステリーサークルが見つかる前に決まって地震が起こるらしい」

「え？そうなの？」

「各国がその地震とミステリーサークルの因果関係について躍起になって調べてるらしい。今のところは地震によって崩れた箇所がミステリーサークルみたいに見えるっていうのが一番有力みたいだ」

「へえ、さすがゲンさん物知りだなー」

「もしかして俺たちに教える為に調べてくれたの？」

「んなわけあるか。単にテレビ見てたらそついう話もやってただけだボケ」

『 このような現象は世界各国で起こっており、今現在、各国が調査を』

確かに言っていた。

「スツゲー面白そうじゃねーか！！ ちょっと行って」

「無理に決まってるだろーが！」

「第一海外まで行く金もないだろ」

「そうだった……」

「それに出席日数もヤバイだろ」

「言われて見れば……だがそんなもの俺は気にしないぜ！」

「少しは気にしろ！学校を無断で休むなど自分が許さん」

「諦めるキャップ」

「はあ、仕方ねえなあ………日本でも発見されねーかなー、ミス  
テリーサークル」

「ないだろ。さすがに」

「あんたら、さっさと食べないと遅刻するよ」

麗子さんのその言葉に、俺たちは皆急いで残ったご飯をかき込んだ。  
だ。

俺達は通学途中にガクト、モロ、姉さんと合流し、多馬川の川原を歩く。ちなみにゲンさんは先に出て行ってしまった。

そんな中、姉さんの機嫌がもの凄くよかった。どれくらいかといえは……

「楽しみだなー　そうは思わないか弟よ」

「ご機嫌だね姉さん」

というようにセリフの中に音符がついていてもおかしくないぐらいに機嫌が良かった。今にもスキップしそう、というか、してるぐらいだ。

何故こんなにも機嫌がいいのかというと、理由は明白である。何せ今日はアレの日だからな。

そのアレとは……

「ああ、薫の女装姿が見れるんだぞ。楽しみだなー」

そう、あの薫が、女装するのだ！ あの薫がだ！

「あれ？ モモ先輩も見たんじゃねーの？」

「楽しみは後に取っておくものだろ？ ということで私は見てない」

さて、ここで何故薫が女装する事になったかというのを凄く簡単に説明しようと思う。

以前、薫がS組の神崎とカードゲームで勝負した際に交わした賭けがあつたのを覚えているだろうか。

端的に言えば、薫はそれに負けたのだ。

小鳥遊に勝ったからといってやはり薫は初心者。ビギナーズラックはそうは続かなかつたという事だ。

そしてその女装、正確に言えば『一日女の格好をする』という罰ゲームは、話し合い（神崎と薫の、ではなくギャラリーや学長など希望と学園側の事情についてであり、薫は口を挟む暇はなかつたのだが）によつて『一日女物の制服で学校に通う』という物になった。

フツの学校ならこんな事許容されないんだろうけど、一日とはいえ男に女物の制服での登校許可を出す川神学園はやはり普通ではないという事を再確認させられた。

……ちなみに後で小鳥遊に聞いてみれば「雫さんは私よりも強い

ですよ、カードゲーム」と、俺に対して嫌そうな顔をしながらもそう教えてくれた。……そんなに男が嫌いなのか……

「一人だったら薫が逃げるかもしれないぞ。そこら辺は大丈夫なのか？」

「逃げなくても道に迷うかもしれないぞ？」

「大丈夫だ。問題ない。ワン子を置いてきたから問題なく連れてきてくれるだろう」

「……気のせいかな？ 今大丈夫じゃないフラグが建ったような気がしたんだけど？」

「気のせいだろ」

そんな話をしながら多馬大橋に差し掛かろうとした辺りで後ろからワン子の声が聞こえてきた。

「みんなー！おはよー！」

「お、ワン子。おはよ……う……」

いつも通り、体操服にブルマという格好のワン子の隣には夏服を着たどこか見覚えのある美人が立っていた。

絹のように滑らかな紺色の長髪は、白のリボンで止められてポニーテールに纏められており、彼女が歩く度に揺れる束ねられた髪は魅力的と言える。

胸は適度に膨らんでおり、姉さんや京に比べると小さいが、ウエストは引き締まっており、俺と同じか少し高いぐらいある背の高さも後押しして理想的なスレンダーボディと言っても過言ではないだろう。

そしてミニスカートから突き出されているスラツとした長く白い生脚は適度に鍛え上げられ、瑞々しく健康美を備えたスラツとした美脚には思わず目を惹かれてしまう。

「……………えつと……………?」

どこかで見た覚えがあるのだが、何か違う気がする。大体こんな美人にあつたら忘れられないと思うんだが……………というかまさか……………

「おおー！ そうしていると真剣<sup>マツ</sup>で女みたいだな、薫」

……………薫?

「冗談はやめてくれ……………。皆が変な目で見てくるし、やはり女の格好をした変な奴と思われているのだろう」

「いや皆見惚れてたんだと思うけど……………」

京が突っ込むが薫はその意見を聞き入れないようだ。というか美人すぎないか?

「それにしても女子はよくこんなものを履けるな。凄まじく違和感を感じるのだが」

そう言いながら少し頬を赤く染め、ミニスカートの裾を引つ張る薫のその仕草に少しドキツとしてしまったのは仕方ない事だろう。だから俺を睨むんじゃない京！

「化粧とかはしていないようだが、服と髪型だけでこうも印象が変わるとは……」

「オラも驚きだぜえ……これじゃ女に間違われても仕方ねえよな」

「確かに、これだと初見で薫さんの性別を当てられる人は少ないでしょうね」

「薫が女だったら俺様間違いなく告つてたぜ」

「下はどうなってんだ？女物の下着履いてんのか？」

「……禁則事項だ」

……どうやら触れてはいけない問題のようだ。

「体育あったらブルマ履いてたのか？」

「どうだろう？ まあ今日の授業で体育はないから関係ないよ」

それは残念だ……ん？何故俺は残念がっているんだ？

「その制服はどうしたの？ 学長から貰ったとか？」

「制服は私のを貸してやった。身長的には問題ないハズだからな」

確かに姉さんと薫の身長はほぼ同じだったはずだ。

「まあ胸の部分がブカブカだったが」

そうは言つが、薫の胸辺りに違和感はないように思える。

「じゃあその胸の部分はどうなってるんだ？」

「そこも禁則事項だ」

どうやらそこも触れてはいけないことらしい。

「というか何でポニーテール？」

「ワン子にお揃いにしようと言われていつも髪を纏めている布でやってみた」

「で、普段お姉さんの着ている制服を着てみてどんな気分だ？ 言ってみる。ん？」

姉さんの質問を聞いて俺に戦慄が走った。

もし言わなければ姉さんの鉄拳制裁が、言ったとしても「興奮した」とか言ったら周囲の人間に引かれて尚且つ姉さんの鉄拳制裁が、そして「別に」なんて言ったら姉さんの鉄拳制裁が下るのだろう。どう答えても姉さんの鉄拳制裁が下るとは、何と云うドSな質問なんだ……

そんな問い掛けに薫の回答はといえば……

「少し興奮した。が、よく考えれば普段のスキンシップで密着する事もあるから今ではそこまで意識はしていないな」

「そこ正直に言うの!？」

「勇者だ……あいつは勇者だッ!」

「パネエ!! 薫の奴、流石のオラでも誤魔化す所だっぺーのに!」

その薫の返答に姉さんは満足したのかしていないのか、二回ほど深く頷き、笑みを浮かべながらこう宣言した。

「じゃあとりあえず……愛でるか!」

「え? うわ何をするやめ」

……今日も平和だった。

通学途中から学校に着くまで薫は注目の的だった。いや、正確には教室に着いた今でも注目されていた。

その具体的な声をピックアップしてみよう。

「おい……スゲー美人がいるぞ」

「あんな人ウチの学校にいたか？」

「綺麗……憧れる……」

「え？あれ皐月君！？うっそー！！」

「凄い美人さんですねー……お姉さんビックリしました」

「男が女子用の制服着ただけでこうも女の差がなくなるとは、いかに現実の女共のレベルが低いかかわかる」

「俺ちよつと用事思い出したぜ！ トイレ行って来る！」

……以上のように高評価を受けていた。

その高評価を受けていた当の本人はというと……

「今日の四限の科学は急遽体育に変更となるそうだ」

「何故だーーーーーッ!?」

HRでの梅先生からの授業変更の連絡に思わず叫んでしまっほど追い込まれていた。

「こら臯月！ いきなり大声で叫ぶな！」

「ぐはっ！？」

大声を上げた薫に梅先生の鞭が唸りを上げた。

「さすが鬼小島……女装中の薫相手でも容赦ないぜ」

これは流石に同情を禁じ得ないな……

「でも実際何で科学がなくなったのかな？」

「ああ、何でも理科の仲村先生が倒れたらしい」

「また？ あの先生よく倒れるよね」

まあ今は倒れた仲村よりも体育の授業で薫がブルマを履くという事のほうが重要なので気にしないで置こう。

「では次は注意事項だ。先日、親不孝通りで傷害事件が数件起こったそうさ。幸い被害者に命の危険はないそうだが、犯人はまだ捕まっていないので余りあの辺りには近付かないように。……被害者はクスリを販売していた者だから同情はできんが……」

「薬？ 薬を販売していて何故同情できないなどという言葉が出てくるんだ？」

梅先生の言った“クスリ”という言葉にクリスは少し疑問を覚えたようだ。

「梅先生の言ってる“クスリ”っていうのは簡単に言えば麻薬のことだよ」

「麻薬だと？」

「確か『ユートピア』とかいう合法ドラッグだ。合法と言っても一般人が売買して良い物じゃないし中毒性もあるからな。もしかすると他にも売人がいるかもしれないから、あの通りには出来るだけ近付かないようにしておこう」

「……そのような物をばら撒く不届き者を放置しておいてもいいのか！？」

梅先生に気付かれぬように小声で叫ぶという高等技術を使って俺に抗議してくるクリスマス。正義の心に火がついたようだが……

「……まあ、今回は放置してても大丈夫だろ」

「何故そう言い切れる？」

「今回被害者になった売人を捕まえた事で警察が本格的に動き始めて残りの売人も捕まえるだろうさ。警察が動くんなら下手に動かない方がいい。餅は餅屋に、てことさ」

「そうか……」

もちろんその売人の黒幕にまで警察の手が届くかどうかは疑問だが、それを言うとクリスマスが深入りしかねないので黙っておく。

「では次は今月末にある体育祭の話だ」

「今年は確か普通の体育祭だったな」

川神学園の体育祭は、普通の体育祭の他に水上体育祭、球技体育祭があつて年によつてどれになるかが変わるのだ。

そして今年は通常の体育祭だった。

「軍の割り振りが出たぞ。F組は青龍軍、S組は白虎軍だ。見事に敵同士だな」

体育祭はくじによつて玄武、朱雀、青龍、白虎の四つの軍に分かれて戦うことになる。簡単に言えば赤組青組だな。

「S組は敵か……いいねえ、腕がなるぜ！」

Fクラスの宿敵であるS組が敵となり、クラス全体のやる気が上がっていく。が、

「それに合わせてS組から決闘の申し込みがきたぞ。川神戦役でサシウマ勝負がしたいとな」

「川神戦役!？」

梅先生のその一言によつて、教室中がざわめき始めた。

「川神戦役とはあれだろう? 自分と大和が箱根でやった……」

「ああ。あれが人単位の戦いからクラス単位の戦いになった感じだ。

ただ他に重要なルールが一つ加わる」

「重要なルール？」

「川神戦役は勝利する事によってその場で相手クラスから指名した人を一人もらえる決まりなんだ。つまり強制クラス替え」

「何だと？ シビアなルールの戦いなんだな……」

それが理由で普段は好戦的なF組も簡単に肯けないのだ。

が、それでも退かない人間はいる。

「俺はやるぜ！相当キツソーだが面白え。大勝負だ」

「アタシも是非ともS組と勝負したいわ！」

「俺も賛成だ。そして勝つ！」

「いつになくやる気だなヨンパチ」

「そりゃそうだろう？ いいか。勝てばS組の美女を持ってこれるんだぜ。ここは当然榊原小雪狙いだ！ 不死川はうるさいからイラン！」

「確かに。……あの子が勝手がわからずマゴマゴする。そこに手を差し伸べる俺様。生まれる物は……愛！」

「キンモー」

「そんなキモさが許されるのは中学生までよねー。ここはトーマ君でしょ。……この馬鹿男子に嫌気が差して黄昏れるトーマ君。そこに手を差し伸べるアタシ……向こうから熱烈な告白……！」

「発言が同レベルだという事に気付けよ！」

この後、男子と女子でどっちを指名するか揉め掛けたが、ワンジの「二人共呼べばいいじゃない。簡単簡単」という一言で解決し、川神戦役を受けることにした。というか負ける可能性を考慮しないとカ流石だなこのクラス……

「薫は誰を指名したい？」

「……そんなことより今日という日が早く終わって欲しい……」

それでも薫のテンションは低かった。

そしてその四限目が始まる前の休み時間、俺達はグラウンドに来ていた。

大半の生徒が着替え終わっていたが、肝心の薫はまだ来ていなかった。

「薫のブルマ姿か……」

そう呟きながらヨンパチは自身のカメラのレンズを入念に磨いていた。

「カメラのレンズ拭きながら言っていると不気味だぞヨンパチ」

「いや、実はここだけの話、薫の写真って男にも需要あんだよ」

「え？ 真剣マジで？」

「薰って外見だけじゃフツーに女にも見えるからな。妄想をフルに使えば何とかなるんだよ」

『何とかなるらしい』という伝聞ではなく『何とかなる』という断定の発言から推測するにヨンパチは……いや、考えないでおう。』

それにしても変なことを聞いてしまった……

「何をしているんだ？」

そしてやってきた薫の姿を見て、F組男子一同（一部除く）の一言

「ジャージ……だと……!？」

薫はブルマを履いておらず、ジャージ姿で現れたのだ。

盲点だった。

確かにジャージは男女兼用だが、期待していた分落胆も大きい……あれ？ 俺は何を期待してたんだ？

「ブルマじゃねえのかよ!？」

「当たり前だ!！」

男子からブーイングの嵐が巻き起こる。

「そこはフツーはブルマ履くだろ!？ 流れるに!！」

「そんな流れはなかったしあっても履かん！ そもそも男のブルマ姿など、誰が得だと言っただ!！」

「後ろから撮れば問題の部分は見えねえから大丈夫だ!！ 使える!！」

【ジャーマンスープレックス!】 ヨンパチは地面に埋まった

「ブルマには神秘の力が宿ってるんだぜ？ さあ、今からでも遅くねえから履いてこいって」

【ジャーマンスープレックスツッ!】 ガクトは地面に埋まった

「……他に何か言いたい奴はいるか……?」

「サア、早く行カナイト授業ニ遅レルゾー」

「ソウダネー」

思わず片言になってしまった俺達は決して悪くないはずだ。

薫は不機嫌なまま一人グラウンドの集合場所に向かっていく。

「……うーん……」

そんな薫の姿をみて何故かキャップが唸っていた。

「どうしたキャップ?」

「いや……何か違和感を感じただけ……」

違和感?

「薰ってあんなに過激だったっけ?」

「過激っていうと?」

「女扱いした相手にキレるってのはあったけど、それでもここまで暴れてたかなーって思ってたさ」

「……結構暴れてたと思うぞ?」

めり込みパンチとか愉快的なオブジェとか……

「んー、でも薰って暴れるモモ先輩を押さえつける役だったじゃん。イラついて暴れるってモモ先輩みたいなじゃね？」

……確かに言われて見れば……

「ほう……私の事をそう思ってたのか、キャップ？」

「げっ！？ モモ先輩いつの間に!？」

本当に気付かない間に俺達の背後に姉さんが立っていた。

「とりあえずイラついたからお前の言う通り暴れてみるかなー？」

「……大和、あとは任せた！」

「あはは、待てー、こいつー」

キャップが猛スピードで逃げ出して、それをより速いスピードで姉さんが追いかけていった。

「……口に出さなくてよかった……」

「それって私への愛の言葉？ だったら口に出して欲しいな」

「断じて違うから。というかお前もいつの間に来たんだよ？」

そんなやり取りをした後、俺達は集合場所へ向かった。

……地面に突き刺さった二人を放置して……

「放置していつていいのアレ!？」

……モロの主張ムシもあり、この後ちゃんと突き刺さった二人の事をル  
ー先生に報告して保健室に連れて行ってもらったのでご安心を。

体育の授業が何事もなく終わり、昼休みになった。

「わぁー！ホントに薰が僕と同じ服着てるー」

「ふふふ、凄くお似合いですよ」

「確かに似合ってたなー」

「嬉しくないぞ……」

昼飯を食べ終えた頃、S組から葵冬馬ら仲良し三人組がやってきた。

「F組に何しに来たんだ？ 葵？」

「やあ大和君。それは当然、愛しの貴方に会いに」

「冗談はいららないぞ」

「冗談ではないのですが……、と前置きを入れて葵は再び口を開く。

「薫君の女装姿を見に来たんですよ。さぞ似合っているだろうと思  
いましてね」

「まあ本人にとっちゃ、罰ゲーム以外の何物でもないだろうがな」

「そこまで言っつて、ふと疑問が出てきた。」

「そういえば罰ゲームの提案者でもある神崎は？」

罰ゲームの提案は神崎からしてきたのだから見に来てもおかしくないというか、逆に来ないとおかしい気がするのだが、今日は一度も見ていない。

「彼女なら他の二人と一緒に食堂に行きましたよ」

「あれ？ 薫の女装姿を見に来ないのか？」

「ああ、本人曰く『別に興味ない』らしい」

「興味ない？　なら何で女装なんて罰ゲームを……？」

「どつやら小鳥遊さんの女尊男卑的な性癖を少しでもどうにかしたかったらしいんだが、小鳥遊さん曰く『男の娘にも興味ないです』って言うて見向きもしないからどうでも良くなったらしい」

「つまり薫の女装は特に意味はなかったってことか……」

思わず同情で涙が出そうになった。

そんな薫の方を見てみると、何やら榊原と何か話していた。

「薫ー、何でリボンつけてるの？」

「ワン子にお揃いにしようって言われたからだ。あとコレはリボンじゃなくていつも髪を縛っている布だからな」

「ふーん……」

そして何を思ったのかわからないが、榊原は薫の後ろに回り込み、

「それ！」

という掛け声とともに薫の髪を括っていた布を引っ張った。

それによって布が解かれ、一つに纏め上げられていたポニーテールがファサアと広がった。

一つに纏められ後頭部辺りまで上げられていた髪は重力に従って落ちていき、毛先がふわりと舞う。

「これで僕とお揃いだ」

「……髪の色とかは違うのだが、まあいいか。とりあえずその布は返してくれ」

「え〜？」

「いいから返すんだ」

「はい」

「ポニーテールの薫君も良かったですが、ロングヘヤーの薫君も良いモノですね」

「……まあ、確かにな」

「まあ俺の射程範囲外なんだがな。あと10年早ければあるいは……」

葵の言葉に同意する俺。井上の言動は放置しておいた。

「ならばツインテールにしてみないか？」

「いやいやここは三つ編みというのもアリかと」

「サイドポニーも捨てがたいわね」

「後ろでお団子を作りましょう」

「……え？ 一体何の話をしているんだ？」

……この後、薫は一部女子によって髪型を弄られて昼休みを終える事になるのだった。

ちなみにどの髪形も似合っていた事をここに記しておく。

## 放課後

長かった学校が終わり、女装中である薫は一刻も早く着替える為か、すぐさま帰っていった。……道に迷わなければいいが……。

他のみんなもそれぞれ用事があつたようで、先に帰ったり部活に顔を出しに行ったりしているが、俺は少し用事があつたので学校に残っていた。

「今日も少し人脈を増やせたな」

そんな事を呟きながら廊下を歩いていると、角の向こうからヨンパチの声が聞こえてきた。

「色々問題はあつたが、まあ中々撮れたな」

角から顔を出すと、ヨンパチは一人で自身のデジカメの液晶画面を見ていた。おそらく今日撮った写真戦果を確かめているのだろう。

とりあえず話しかけようとしたのだが……

「薫の写真って変に需要あるんだよなあ……次の廻廻の」

ヨンパチが独り言を言い切る前に、見覚えのある一人の女子が現れて一瞬でヨンパチの意識を飛ばした。

気を失い倒れたヨンパチからデジカメを取り上げ、それを操作し、SDカードと別のものと入れ替え、再び操作、そしてSDカードを元に戻し、さらに操作。

おそらくアレは自分のSDカードに写真をコピーし、さらにヨンパチのSDカードの写真を添削していたんだろう。

これは俺が覗いていた事がバレたらまずい……！とりあえずここは一度退こう。

そう思い元来た道に戻ろうとした時、学園に備え付けてある消火器に足をぶつけてしまった。

「ッ！？」

その音に反応したのか、作業を終えたその一年女子は黒の長髪を棚引かせてこちらを見た。

彼女に睨まれた俺は蛇に睨まれた蛙のように身動きがとれなくなっていた。それほどのプレッシャーだった。

「……見ましたね？」

「い、いや見てない。俺は何も見てないぞ」

「今、私と会話をしている時点で言い逃れは出来ませんよ」

「マズイ……このままじゃ殺られる……！何とか誤魔化さないと……！」

「あつ！俺これからタンポポの上に刺身を乗せるバイトが……」

「バレバレの言い訳な上に言動すらおかしくなっていますよ？直江先輩？」

即効でバレた。

「だ、大丈夫！ 薫には絶対言わないから」

俺の言葉、正確には“薫”という単語を聞いた瞬間、さらに彼女の雰囲気が変わった。……もしかして地雷踏んだ？

「……こうなれば我が家に伝わる秘伝の記憶消去術を用いるしかないですね……」

「記憶消去術……！？ そこはかたなく不安だが、ちなみにどんな……？」

「簡単ですよ。記憶を失うまで頭部を殴り続けるんです」

「それってエンド・オブ・アー……！？」

……

……

……

「はっ！？ 俺は一体……？」

気がつけば俺は保健室のベッドの上にいる。

「大丈夫ですか、直江先輩？」

ベッドの横には見覚えのある一年生女子がいた。確か彼女は……

「あ、ああ……えっと、君は確か薫の……」

「はい。妹の奏です」

そつだ。薫の妹の皐月奏だ。

「とうか何で俺は保健室に……？ 何か凄く頭も痛いし……」

「……覚えていないんですか？」

「え？ 何が？」

「いえ、私が見つけた時廊下で倒れていたんですよ。それで保健室まで運んだんです」

「そうなの？」

「ええ。ですからどうしてあんな場所で倒れていたのか尋ねようと思っていたんですが……」

「そうか……わざわざ運んでくれてありがとう」

「いえ。では私はこれで失礼しますね」

そう言い残し、妹さんは保健室から出て行った。

「……何か違和感があるんだけど……？」

周囲を見渡してみると、隣のベッドにヨンパチが寝ていたり、保健室の先生がいなかったりしたが、頭が異様に痛い以外は特におかしな点はなかった。

「……まあいいか」

そう呟くと、俺は再びベッドに横になった。

おまけ

「大和！！」

「み、京？ どうしたんだ？」

「大和が他の女に保健室に連れ込まれたと聞いて！！」

「誰だそんな情報流したのは！？」

「こうなったらもう私と既成事実を！」

「何故そうなるのか意味がわからん！！」

その後、大和の貞操がどうなったかは本人のみ知る

「とりあえず出ていけ！！」

「ああん、大和のいけずう！」

## 変装（後書き）

と言うことで薰女装回でしたw 女装も変装だとモロが主張してたのでタイトルは間違ってたはず……まあ、巧く書けたかはわかりませんが、楽しんでもらえたらなら御の字です。

誤字脱字・意見などがありましたら遠慮なく感想にお書きください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4163n/>

---

真剣で私に恋しなさい！～暦の五月～

2011年10月9日21時41分発行